
杜人記 - ゆるゆる土着神 -

オーヘム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杜人記 - ゆるゆる土着神 -

【Nコード】

N1309M

【作者名】

オーヘム

【あらすじ】

気が付いたら21世紀日本からタイムスリップ(?)して原始時代になっていた男。
なんやかんやで人生をまっとうするも残された村の皆が心配で未練たらたら。

「幽霊になっても皆を手助けできるかなあ……」そんなお話です。

はじまり……靈魂となるまで

男は初めのうちは何かの冗談だと思っていた。

気がつくと見た目原始時代真っ盛りだったからだ。

歴史の資料でしか見たことがない藁束でこしらえられた住居。

畑とも言えないような畑のある、海と山に挟まれた小さな集落だ。

男は、10数人規模の小さな集落にポツンと置き去りにされていた。

21世紀の日本で生まれ、何不自由なく、大学に学び、ソコソコの会社で働き、妻は無く童貞ではあったものの、趣味のダーツだったり日曜大工だったりと充実した生活を送っていた者が、突然まさに自給自足の極みであった時代へと送り込まれたのだから当人の混乱は推し量るまでもなかった。

何故この場にいるのか理解できずとも現実にあるのだから仕方が無い。

飢えや嵐、種々の疾病など命の危険が常に付き纏う時代は過酷であった。

それでも男は逞しく適応し、妻を娶り、一生を終えた。

狩りの腕前はからつきしではあったが、男には男なりに皆を救う為に生きた。

日曜大工で培った知識から高床式の食糧庫を造って物持ちを良くし、土器だって誰よりも上手く創る事ができた。

病気対策として糞尿は決まった所に捨てさせるようにし、海水から塩を作って生理電解水もどきを作り下痢などの回復剤とした。

他の男衆が狩りに出掛け無防備な村を獣避けの柵や鳴子で守るなど裏方として奮戦した。

そういつた功績が長老に認められ長の娘と契った。

そうして認められて以来、倫理観の薄い時代だったからか、集落の女全員とも契り、子を為した。

もっとも、それぞれが誰の子かは分からなかったが生まれた子は全員の子である。

村は徐々に賑わいを増していったのだ。

現代では考えられないほどプリミティブな生きる行為は男にとって素晴らしい人生をもたらしたのだった。

もつと彼らを守りたい。

永く幸せでいて欲しい。

現代知識を持つ自分がいるのならば仲間の子孫を助けることができるのに……。

そう皆の幸せを祈りながら死んだ。

おそらく40年以上は生きてただろう。

この時代からするとかなりの長寿である。

男の遺体は男の指示通りに火葬され灰となり空へ溶けていった。

物語はここからようやく始まる。

死んだはずの男は、精神だけの存在となって生きていたのだ。

後の世に杜人綿津見神と呼ばれる土着神が誕生した瞬間であった。
もりひとのわたつみ

まもり……幽霊は眠らない

どこか現実感を失いながら、私は呟いた。

(これは、一般的に幽霊と言われる状態なのだろうか?)

私は今ふわふわと宙空を漂いながら、自宅であった長の家、その低い屋根の上から私の子供達を見下ろしている。

広場の中心に組まれた櫓は私の身体だったものを灰にして尚、燃え盛っていた。

6

眼下には孫や曾孫に玄孫まで勢ぞろいで、

私がかつて友人を弔った時のように手を合わせ、祈っている。

じっ、と炎の前に座り、祈ってくれている。

皆が皆、私の死を悼んでくれているのは嬉しくもあり、

その反面これから皆を助けられない事を申し訳なくも思う。

原始時代にタイムスリップなんて不思議な現象もあったわけで。

こういう風に幽霊になるなど予想だにできなかったけれど意外に自然と受け入れられたが……

やっぱり未練だなあ……。

どうにも成仏なぞ出来そうにない心境だ。

ここは私の村で、私を受け入れてくれた村で、私の子供達の村なのだ。

どうして離れることが出来ようか、いや出来るはずなどない。

えいやと気合を入れると屋根から飛び降りてみる。

身体がまるでガスになったような不安定さに四苦八苦しながらそつと降り立ち、

葬儀を取り仕切っている我が息子を抱きしめた。

私に似つかぬ立派な体躯の我が息子に、立派な長として頑張ってくれよ、と最後の激励。

「……………?!」

すると、急に息子が飛び跳ねるように立ち上がったので驚いた。

「父、父よッ！　ここにいいのかッ!？」

息子のその声を聞いて私は酷く安堵した。

ああ、私はまだこの子達に何かをしてやれるのだ。居てあげる事ができるのだ。

私のそんな感慨を吹き飛ばして、あっという間に葬儀は宴に変わり

始める。

「皆、皆、父は生きてるぞ！」

精一杯に張り上げた声は号令となって村を動かす。

見る見る内に楽しげな歌があちこち聞こえだし、踊り始めた。

……なんともはや、現代日本から此処へ来て色々体験したが、気が付けばかつてないお祭り騒ぎである。

私は幽霊になった様だが、村人達にはぼんやりと存在を感じとれるらしい。

次々と私に近付いては挨拶と踊りをプレゼントしてくれている。

……とはいえど幽霊だけあって姿は見えないし『そこに居る気がする』程度のようだ。

目線が合わなかったりズレた方向に手を振ったりと、やはり霊と人の壁は厚そうである。

現代に生きていた頃はまったく感じ取れた事などなかったのが普通、

むしろ科学万能な時代にオカルトなどありえないと思っていたが……こうして幽霊になってみるとどうやら原始の時代は霊的感受性の高い人が多いみたいだ。

ずっと昔に狩りが上手い人にこつを聞いた覚えがある。

森が教えてくれた、森の声に従った、などと言っていたのを思い出した。

秀囲気だとか気配だとか見えないモノへの畏敬はこの時代を生き抜く術の一つなのだ。

幽霊になるまで信じてなかったけれども。

普段は近寄らず恐れながら避けるものらしいのだが、それが私ならば話は別で、動かなくなった者（死んだ者）が還ってきたのが実にめでたいと村を上げてのお祝いと相成ったわけだ。

まあ、死を恐れなくても良くなった、というのは精神的に大きいのだろう。

飢えで死ぬ事は少なくなったが、病気や狩りの失敗など容易に人は死ぬるのを私は知っている。

哲学も何も無いが、死ぬ事が『終わり』だと本能的な部分で分かっているのか、

死に対する恐怖は時代を問わず存在しているのだ。

それを克服した身内がいるとなれば、自分達もそうに違いないと思うもの。

さらに、年寄りが見守ってくれている安堵感と言おうか。

私の自慢であり誇りだが、私は様々な形で村を守ってきた。

出来ない事も多かったけれども、知恵を絞り、道具を作って皆に広め、生活を豊かにしていった。

そういう実績を持つ者が死んだ後も味方してくれる喜びと安心。それがこのお祭り騒ぎだと思つと嬉しくてしょうがない。

自分の人生を完全肯定されたのと同義だから。

「おお、父も嬉しいか！」

惜しむらくは言葉を交わせない点か。

こちらが干渉できるのは存在と簡単な喜怒哀楽を伝える程度なのが残念である。

……ま、あまり贅沢は言えないな。

こうしてるだけでも埒外の事、本来ありえぬありがたいものだとして受け止めよう。

祭り(?)が終わって日も沈んだが一向に眠くならない。

村の皆は基本的に太陽が没したら後は寝るだけである。

暗くて何もできないし、薪などの燃料を消費するのも勿体無いからだ。

代わりに朝は日の出より早いだけだ。

何十年も続いた生活リズムが崩れると流石に少しは動揺するものなのだなと頷く。

同時に幽霊には睡眠など必要ないということを発見した。

やる事も無いし、散歩するのも良いだろうと静かになった村を散策

する。

肉体が無いにもかかわらず奇妙な感覚としての五感があるようで、慣れ親しんだ村の匂いは私の心を落ち着かせた。

正確な指標がないので体感であるが五分、十分と小さな村を歩いてまわりながら

幽霊に何ができるのかを実験してみる。

物理的に存在していないのは息子達の抱擁に応えられなかったので分かっていたのだが、

それでも試したいものが一つあった。

私は村を囲う柵の前に立つ。

……やはり幽霊としては壁抜けくらいできないとな。

齢60を越えても男は少年の遊び心を忘れない。

男は死ぬまで少年でいたいものだ……まあ、私は既に死んでいるのだけれど。

伸ばした手は認識どおり柵に阻まれる。

それは地面に立っているのと同じく人間であった頃と変わらない。

しかし、だ。

祭りの時、子供達に抱きつくことは出来なかった。この事実との差は何であるのか。

つまりは自分が死人であり『存在していない』と意識しているかどうかだろう。

いわゆる思い込みの差、精神の持ちようこそが幽霊にとって重要だ

と思われる。

試しに瞳を閉じて視覚を遮断し、適当な方向へ歩いてみる。

当然どこかで家や柵といった障害物にぶつかるはずであるが……そんな衝撃はこない。

さて、どうなったのやらと後ろを振り返れば

『ぶつかっているはず』の物をすり抜けた結果だけが残っている。

訓練次第で壁抜けできそうな手応えがあった。

予想通りに『壁』だと認識しないと『壁』足りえないわけだ。

逆説的に言えば、触れるのだと当たり前前に思い込めたなら子供達と触れ合えるかもしれない。

幽霊に寿命があるのか分からないが、可能なら今年の農作業を手伝えるようになりたいな。

そんな事を村の入り口付近で考えていると、視界の端で何かがゆっくりとこちらを窺っていた。

あれは……山犬か！

今日の宴は皆で羽目を外して飲み食いをしていく。

幾らかの食べ残しだとか残飯の類を狙って山から降りてきたのだらう。

私の生前より備えてある鳴子や柵で近づきにくくしてはいるものの完璧には防げない。

一際大きな1頭に従うように列を組み……全部で5頭もいる。狼と犬の区別が付かないので一緒に一緒に山犬と呼んでいるが、

こういつた群れを作るのは狼だったか？

どちらにせよ危険だ。

私が生きている時も、数年に何人かのペースで殺されたりしている。なんとか彼らを追い払うか、村人を逃がさなければいけないのだが

……

声を出せども村人には届きはしない。

幽霊となったばかりの私にはたったそれだけの行為も許されてはいないのだ。

祭り騒ぎに大はしゃぎした村人が全員熟睡しているであろう事も向かい風。

物色する歩みの先には家がある。

私の村の、私の大切な子供達が居るのだ。

やらせるものか。

頭がカツと熱くなったのを感じると後は早かった。

私は生前ではとても出せないだろう勇氣を振り絞り彼らのボスの前に立っていた。

ここは通らせない。

ここを通らば呪ってやる。

山に帰れ。

ただそれだけを考えながら感情を漲らせる。

すると山犬の群れはこちらに気付いたのかピタリと目の前で足を止め、唸りながら威嚇してきた。

……が、しばらく睨みあいを続けると諦めたのか踵を返し山へと帰っていく。

途端、体中から力が抜けて私は座り込んだ。

恐怖と安堵が混ざり合った複雑な気分にとつと疲労感が込み上げて、立っていられなかった。

幽霊でも疲れるのだな、と何処か他人事に考えながら先ほどの危機を振り返る。

危ない賭けだった。

しかも危ないのが自分ではなく子供達の命なのが怖かった。

野生動物は雰囲気、気配に敏感だ。

それはいつ襲われるか分からない野生を生き抜く為に必要な技能だから。

姿の見えない敵意剥き出しの存在を警戒してくれるのかどうか。上手くいく保障も何も無かったのだが、ほんとにどうして。

村を守れてよかった。

この一言に尽きる。

夜は幽霊の時間。

当面の夜警をとりあえず自分の居場所にしよう。

こうして、私は幽霊になっても皆の為にできる数少ない仕事の一つを見つけた。

まもり……幽霊は眠らない(後書き)

人間(一般人)が勝てる動物はおよそ体重30kg以下の動物
まで。

中型犬が複数匹いたら素手では殺されると思います。

いやし……訃報と成長

初めての祭りから3ヶ月が過ぎた。

あの時とはまるきり反対に、女達の悲痛な泣き声が聞こえる。

……訃報だ。

基本的にこの村は農業を中心とし、補助的に山での狩猟や貝などの収集漁業、

そして月に1、2回ほど大型害獣駆除を兼ねての大規模な山狩りを行っている。

山狩りは大変危険であるから皆で注意しあったり

準備をきちんとやってから行なうのが常なのだけでも

ここ最近、軽い怪我人がでるだけだったのお祭り騒ぎで気が緩んでいたのだろう。

猪の成獣を数頭狩ればそれで良かったのに山犬の群れに不用意に仕掛けた者がいたらしい。

結果、男衆の1人が殺され、1人が重症の酷い有様だ。

複数の山犬の群れに囲まれてどうしようもなく、逃げるしかなかった。

逃走途中で咬まれたり斜面で転倒するなど、付いていった男の殆どが怪我を負っている。

そして、仲間の遺体は返ってこない。

失った事への悲しみが村を覆っている。

この時代は常に死が近いのだ。

手当てを受けている重傷者も、素人目に見ておそらく長くはない。

両足の太ももから脛脛にかけて浅くない裂傷が数本走っている。

左脇下にも噛み後があり、太い血管を傷付けたか出血が止まらないのだ。

血止めのヨモギ、オトギリソウやカタバミもここまで傷が深いと…。

息子達が私にどうにかならないか尋ねてくる。

私は、無理だと伝えることしかできなかった。

民間療法程度の医学でどうしようもない。

私は医者では無いのだ。

日が落ちようとする頃、男は息を引き取った。

まだ若い男だった。

長である息子が私を呼ぶ。

死者を私と同じ、見守る者にして欲しいのだ、と。

しかし、残念ながら私は偶発的に発生した幽霊だ。

自分がどうしてそうなったのかも分からないのに他人をどうこうで
きるはずもない。

今の私にできるのは死を悼む事しかなかった……。

そっと、亡骸を抱きしめる。

……！

すると、ぼんやりと灯る光球が遺体より浮かび上がった。

これが何なのかを私が理解するより先に、温かな塊は私を見つけれ
と胸に飛び込む。

奇妙な感覚であったが、言葉に換えて一番語弊のないよう説明する
なら、

私の中に溶けて混ざったようだった。

村人達には遺体から何か見えないものが私（の気配）に吸収された
ように見えたらしい。

周囲から感謝や、これから見守ってくれなどといった激励が残され
た遺体に向かって掛けられる。

死に対して随分と前向きであるのは私の存在があるからか。

そこに僅かな危険を感じたものの、私の中へ入ってきた若者の魂を
考えるのが先だろう。

これが私にどういう作用を齎すのか、今は分からない。

けれども、彼の死が悲しみだけではなくったことは喜んで良い
のだろうか。

私が魂を取り込んでから一週間が経った。

村人は今日も各々の仕事に精を出している。

そこには悲しみも何も無く、皆がそうせねば死んでいくだけだからだ。

複数の群れがあることが分かったので対策に鳴子を増やす者、柵や溝を整備する者がいる。

また、今回捨ててきてしまった分の槍を作り直している者もいる。そして怪我人の治療を行うに当たって大量に消費した薬を集める者も必要となる。

私は、私の後を継いで薬師となった娘と、孫、曾孫と共に野草を採りに森に入った。

私が付いていれば少々の獣の群であっても退散させる事ができる（と思う）。

ゆえに女衆だけでも森の探索ができるのであるが、反面、村の警護が疎かになるのが問題だ。

しかし、冒さねばならぬ危険である。

この村を陰ながら支えているのはこの拙い医療だ。

私が覚えているのは田舎で祖母に教えてもらった知識だけであるが、それでも咳止め、止血、解熱、痛み止め、整腸と一通りは揃っている。

もつとも、それがどれほど効果があるのか正確には分からないのが玉に瑕なのだが……。

採りすぎないように気をつけ、オトギリソウの密集地を後にする。他にも気になったものがあつたが時間を掛け過ぎてはいけない。

怪我をしていた男達には今日は武器を携帯しながら村だけで仕事するようにしてあるが、

何があるか分からない。早く済ませて帰らなければ。

それに森は非常に危険である。

私が付いていても数で押されれば守りきることは叶わないだろう。女を怪我させるのは駄目なのだ。

これは別にフェミニストだから等という温い理由ではない。

人口を増やし村の規模を維持するには子を生む女性が必須だからである。

ただでさえ出産後に死亡する確率が高い上に乳幼児の死亡率も高い。衛生観念も何も無い原始の時代において女性は非常に重要な要素なのだ。

その逸る気持ち伝わったのか、娘が日々の燻製で皺枯れた声で言った。

「父様、気を静められますよう。」

あてられた風が逆巻いております」

ふと、その言葉に周囲を見回すと確かに風が生まれていた。

……物理的な干渉力が生まれている？

後に、若者の魂によって私の魂が成長したのだと知った。

いやし……訃報と成長（後書き）

医療云々はなんちゃって考察なのであまり深く考えないでください。

野草は意外と効果があったりします。

文化的、技術的な穴とか大量にあります。

いちねん……春に実らせ

そろそろ、私が死んで1年が経とうとしている。

正確な日付は正直な所数えていないのだが、花咲き乱れる季節の到来は毎年変わらない。

幽霊となつてから実に様々な事があつたなと、しみじみと振り返る

……と、同時に春はこれから1年の食生活を豊かにする為の大事なステップ。

ここでサボると秋に、そして冬に村が滅びかねないので気を引き締める。

稗だか粟だか良く分からないが穀物の植え付けもそろそろ始まる。遙か未来のように整然と並べるのではなく種をばら撒いて育てるのだがそれでも立派な農業だ。

実をつける瓜に似た植物もこの時期から栽培を始める。

正直かなり不味いのだが食えるのなら育てるべきなのだ。

早くトマトやキュウリがこの地域まで伝播して欲しいと元現代人として思う。

不可能なのは理解しているが……。

ごぼつつばい野菜もあるにはあるのだが、あれは本当に木の根っこに近い。

というか、今はまだ野菜と草木の区別も碌にないので、食べ応えが

あるというだけで

栽培するかどうかが決まっていたりする。あとは腹持ちや日持ちの問題。

木の根つこでも塩水につけたりなんだかんだで味をつければ食えな
くないのだ。

大豆もどきがあるのは助かっている。

栄養価も高く、乾燥させればかなり日持ちし、それなりに収穫量も
ある。

これらを畑でローテーションさせ、土が枯れないようしてきた。

農業知識どころか語彙も揃っていない（日本語が成立していない？）
ので

村人に理解させるのは厳しく、毎年何故そうするのかを教育するが
結局は理解されず直接指示を出してくれと請われ、全てを指揮する
ことになる。

去年はそういった作業をしている途中で体調を崩し、死んでしまっ
たのだ。

……今思い返しても老骨には中々にハードだった。

代わって息子や親友の孫などに代行させたが去年はどこに何を植え
ていたのかの

情報を記憶しておらず、悲惨な事になってしまったのである。

豆は良かったものの瓜とごぼうが生育不良で駄目になったのだ。

その時、もちろん私は木の杭に印を刻んで後々分かるようにしてい

たのだが、
私の火葬時に一緒に燃やしてしまったというオチが付いた。

……まったく、あのアホ息子共め。

しかし、肉体から解放された今では30代頃の全盛期の感覚で動けるので存分に指示ができる。

そう、私が指示できるのだ。

去年の山狩りで2人の死者を出した。
内1人を村で弔ったがその時に私は彼の魂を吸収した。

初めは何の事だか分からなかったが、霊体の強度(?)が上がった
ようなのだ。

声も聞こえず、姿が見えないのは以前のままだが、
移動する時に僅かに風が動くようになった。

つまり幽霊のままでも物体に干渉できるようになったのだ。

原理も何も全く理解できないオカルトな話だが、

どうやら魂を摂取することで霊としての格が上がっているのではないか？

と結論付ける事にした。

とはいえど、積極的に魂を奪うのは気が引けるので

捕獲して生きたまま村へ運ばれてきた猪や鹿などの魂を頂いているうちに

徐々に大きな力を振るえるまで至った。

風を集中させてカマイタチを発生させる事が可能になり、意識すれば木の幹に一筋の傷を刻めるようになったのだ。

私にとってこれは凄くありがたい成長結果だ。

今回の植え付けはコレで地面や木の杭に図や絵を刻んで指示をする。去年の冬は幸いにも餓死者は出なかったものの、小さな子供達には厳しかっただろう。

こんな厳しい時代だとしても、あまり貧しい暮らしはさせたくない。みるみるヤル気が満ちてくるのを感じる。

靈魂自体が精神的な存在だからか、こういう風にテンションを上げると

カマイタチの制御も安定し、楽になるのだ。

ついでに、集中する必要の薄いただの風であっても色々な需要がある。
土に打ち込んで耕すのを手伝ったり、木の実を落したりと使い道は多い。
鳥獣害を防ぐ威嚇攻撃にもなるので益々自分の仕事が増えていく。

それを嬉しいと思いつつながら、

こうして、ゆっくりと春は流れていく。

トコトコと若い娘が近づいてきた。

先ほどまで指示していた畑の耕しが終わったのだろう。

この娘の独特な舌つ足らずの口調で指示を求めてきた。

「おこたおたおた、おれいおれいおれいおれい」

……私、なにやら変な名称をつけられました。

いちねん……春に実らせ（後書き）

農業部分は色々とゆるゆる設定。

ごぼうは海外の人からするとただの木の根っこ見えるらしい。

かみさま……偉大なる生命

どうやら『モリト』とは私の事らしい。

生前はなんだかんだで村の代表として長オサを務めていたので
長オサとしか呼ばれてなかったし、息子に長の地位を譲ってからは
大長オオサとか大爺オオジジなど呼ばれていた。

今度の植え付け作業が終わったら息子は長を下の世代に渡す事が決
まったそうぞ
そうなれば今度は息子が大長、大爺と呼ばれることになる。

今まではそれで良かったけれども私の存在はそれらと根本から違っ
たので
名前を決めようじゃないかと昨晚決めたそうぞ
私はその時区画をどう分けようかを考えるために外をぶらついてい
たから気が付かなかった、と。

ふむ、『モリ』が守るの意味の言葉なので、守る人の意で『モリト』
なのか。

漢字があるか分からないが当てるとしたら『守人』になるのだろう。

名前に負けないように皆を守れる存在になりたいものだ。

さて、力を手に入れてから仕事が増えるばかりで身体が足りない。

恒常的な村の警護、試行錯誤が続いている漁の技術指導、
時間を掛ければ伐採可能になったので森から建材確保もやっておきたい。

山にちよつとした林道を作るのも重要である。

人の匂いが常になるとなれば動物達も道を空けてくれる。
これは山菜やキノコなどの山の恵みを頂きにいく時の危険を減らせる。

隣の村までの道の整備だつて山犬の襲撃が怖くない私単体なら
時間は掛かるけれども成し遂げる事ができるのだ。
これは村の発展に対して必要だろう。

水不足や氾濫を考えた河川の整備だつて今までは不可能だつたが
時間さえ与えてくれるのなら有る程度はこなせなくもない。
農業の規模を広げるにはここの着手は必要か……。

中々に悩ましいものである。

警備に関しては自分より格の高い霊が襲い掛かってこないかぎり大丈夫だろう。

……そう、霊である。

何を馬鹿な、と私も始めは思っていたが……

この世には居るのだ。

私と同じような霊は存在するのだ。

何より私が存在すること自体が証明になっていることに、私は間抜けにも遭遇するまで気が付かなかった。

あれは村人の補助をしようと山狩りについていった時のことだ。

狩りの腕がからつきし駄目だった私は山狩りに参加したことはない。だから初めて山の奥深くまで足を踏み入れたのだ。

八百万の神々でも言おうか、感覚にピンツと引っかかる。勘に頼り歩を進めていくとそれは姿を現した。

前方に聳える広葉樹。

直径で4mはあろうかという立派な樹木から感じる圧倒的な存在感。

天を衝く逞しい幹からは空を覆わんと数多の枝が美しい緑で装飾されていた。

そして、10年、100年、1000年と、気が遠くなるほどに時間を重ねた生物が放つ靈気。

それは草木の範疇から逸脱したこの山そのものだと思つた。

あれは、あの大樹は、間違いなく『王』だった。

恐る恐る近づいた私を感知するや、
垂れ流しであつた気配が収束して私を包みこみ、放さない

急な出来事に肉体を捨ててから初めて怯え、恐怖した。

しかし、大樹は襲おうというのでも、逃がそうとするでもない。
王からすれば『見たことのない顔だな、お前は誰だ?』と尋ねるだけの行為。
私は自分が特別だと図に乗っていたのを自覚し恥じた。

大樹の前にはただの羽虫でしかなかったのだ。

幸いにも大樹はその見た目の雄大さに違わぬ寛大な心の持ち主のよう
うで、

私が新たに山に入るのを祝福してくれただけだった。

神と呼ぶべき存在がいるならば、あれほど神秘と生命に溢れた存在以外にありえない。

もし、大樹が自分以外の霊を排斥しようという気性の持ち主なら、軽く枝葉を揺らす程度の労力で私の魂は握り潰されていただろう。

私はただ、偉大なモノに出逢い、在る事を許された事実には伏した。

あのような規格外な霊格を持つものはそうそう居ないであろうが、逆説的に私程度の幽霊なぞ掃いて捨てるほど居るのかもしれない。

原始とは、あらゆる存在が産声を上げ、生きる力に満ちた時代なのだから。

場合によってはあの大樹へ庇護を求めるのも考えなくてはならないかもしれない。

最低でも友好的であれば、何かあった時に逃げ込めるか……？

私は村の警護をこなしながら、今日も思索に耽っていく。

かみさま……偉大なる生命（後書き）

主人公とは別の霊が登場。正確には霊格を伴った生物ですが、おそらく古代日本ではこういう偉大なるモノを崇め、神としていたのだでしょう。

最初辺りの名付けに関する語学考察は適当です。

『モリ』が守るの古語だとかは適当なので流してください。

初期話で言語が成り立ってないと言ってるくせに1、2話で父とか逆巻くとか喋ってますがそういうニュアンス的な訳だったことにゆるゆる言語学。

あつまり……村から国へ

もう、10年になるのか……。

今年も夏がやってきた。

眩しい太陽に雨露を弾いた紫陽花が輝いているのを見て、私は一昔前を懐かしむ。

少しずつ力をつけた私の影響力は、個人範囲から初期の村程度の範囲まで存在を大きくし、瞬間的であるが周囲を切り開く様なカマイタチや、猛烈な突風を吹かせる事も可能となった。より土木工事を行うに十分な能力に育ってきている。

意思疎通も感情だけから簡単な思考を伝えられるに至った。おかげで毎日が警備に工事に指導に大忙しだ。

振り返ると、街道の整備は殆ど手を付けられなかったが、まだ安定した舟は作れないものの漁の技術指導は上手くいき、蔓や木の皮から作った投網漁が形になりそうである。

ここからは獲る為の努力や経験を重ねていくことで農業と含め安定した食生活を送れるだろう。

10年で山から海にかけて細長い形状の村を海側を主にして発展させていった。

獣の害を減らすのと、即物的にそこそこの食料源になる漁業の目処がある程度たつたからである。

が、その方向で行く事を決めた大きな要因は山にある。

偉大なる大樹、山の王、畏れ多くも名前を付けさせていただいた王樹様。^{ジュ}
^{オウ}

その存在が今以上の山村側の発展を躊躇させた。

私は比較的早い段階で接触を持ち、怯えながら陳情し、王樹様への参拝道を整備した。

これは私のほか、長だけが王樹様へお目通りする事が許されているが、

途中にドングリヤキノコが収集できるシイヤカシの木の密生地があるため

秋には女衆をつれての採集に行きやすくなって良かった。

王樹様としては火の気配が嫌いなくらいで、人間の活動を黙認している。

木の実等を森から持ち出すのはむしろ歓迎している様でもっと持っていけと実りを深くしてくれる。

おそらく鳥や獣と同じく遠くへ森が広がるのだと思っっているみたいであるが……

実際は村が豊かになるほど山の開拓が進む恐れがあり、

おそらく王樹様の怒りを買った時、私は消滅し、山の恵みは失われ、川が枯れるだろう。

私が調べた結果、王樹様の干渉できる領域は近隣の村まで及んでいたのだ。

流石は山の王である。

……これは慎重に長と話し合うべき事柄だ。

私も10年で随分と力をつけたがまだまだ赤子同然の扱いだ。

大人と子供の殺し合いなら万が一が発生しえても、大人と赤子では可能性さえ生まれまい。

山の王樹様へは触れるべからず、と。

こうして精力的に働いたおかげか、村民は常時80名を超える村となった。

食料供給源の多様化と塩漬けと燻製による魚や肉の保存技術、各種薬草を使った初期医療と汚物処理による伝染病予防が大きい。

豊かになり嬉しい反面、近隣の村々から妬まれ、たびたび略奪に遭いそうになるのが新たな頭痛の種である。

私を含め、村民が一丸となって対応しているが怪我人も、死者も出る。

村々の統廃合がこの小さな戦争によって行われ、ようやく国の概念が出来ていくと考えられる。

私が効率良く力を得るにはわざと戦争を起こしていくのが効果的ではあるが、死者を能動的に増やすのは前世からの倫理観に基づいて許されない事だと思う。

たとえ力を得る事が未来において助けになるのだとしても、越えてはならない一線だろう。

……まったく、奪う努力よりも実らせる努力をして欲しいものだけれど、

このあたりから狩猟民族ではなく農耕民族に切り替わっていくのだろう。

さっそく、戦う力の乏しい村の長が、こちらへの臣従を申し出てきている。

集落ならまだしも、国として安定するならば農業でないと安定した食糧確保の点でまずい。

まあ、現段階の原始農業で安定的などとはお笑い種だけでも、それでもだ。

戦える私の村が安全を保障し、周囲に食糧を担保してもらおう形に移行すべきか。

あまり気乗りしないが統率する為の身分制度を定めた方が良いのかもしれない。

今まであった各村の長と村人の関係を我が村と臣従した村の關係に

置き換えた形に。

価値観や生活レベルの差を簡単に埋めれるほど彼等の理解力は高くは無い。

はじめは、あくまでも『そういうものだ』の暗記による文化の押し付けしかできない。

何故、それをそうして、という部分に関しては最初の世代で詰められないだろう。

教育を行う為の教育が必要になるレベルで、つまり現状では不可能なのだ。

言葉だつて細かく違っているし。

最低限、臣従させた村は下の存在であり、上の存在である我が村の言う事を聞く、として

こうこう、こうやりなさいと技術を強制し、覚え込ませ、生活を安定させなければならぬ。

一度身内として受け入れた以上は早期に不安を取り除いてあげたい。どこかに頼らねば村の存続が危ないと思ったからこそ彼等は私の村を頼ったのだ。

その期待には応えてやりたいし、それ以上に豊かにしてあげたい。

そこに身分を持ち込んで安定させるのは自由や平等を甘受してきた元現代人からすると

非常に抵抗がある案だが、将来的にこれ以外で村を外敵から守れそうないのが現実。

協調やコントロールの取れない自分勝手な集団では村は滅んでしまっただろう。

存在が大きくなり、楽になると思った途端に飛躍的に守る範囲が大きくなっていく。

私1人ではカバーできなくなっていく村の姿に嬉しさと寂しさを感じる。

親離れ、そして子離れの気持ちとはこういうものだろう。

それでも私はこの村の親であると自認しているし、

これからもこの村を見守り続けていこうと考えている。

どうか、私の、私達の子供が、幸せでありますように。

あつまり……村から国へ（後書き）

王樹様は規格外の神霊。

年月を重ねることに森で巡る命の循環からほんの少しずつ力を分けてもらう事で霊格を得た。

彼は主人公と同じく自分の所属するもの（森）の安定を望んでいくだけです。

主人公の力がせめて五分くらいには届かないと山を完全に押さえることは不可能でしょう。

あらそい……其は守人の国

人が増えれば争いも増える。

……分かつていた事だった。

どうしても避けられぬ血と屍を生み出すもの。

競争と鬭争は、人の性^{さが}だ。

私の村も幾つもの村を呑み込んだ。

呑み込んでくれと頼まれた。

私の村は小さすぎて鬭えないから、と。

ちょうどそういった過渡期に来ているのだろう。

各々がそれぞれのやり方で豊かになるための方法として、

自由に使える土地、自由に使える奴隷を得る略奪によって国を作る時期に。

閉塞しはじめた世界を広げるために、皆が皆、幸せになるために、

もつと巨大な領域を持つて大規模な農業振興を行おうと、土地を奪い合う。

人同士の闘争の時代が始まったのだ。

そして……。

もう、私の生前を知る者が誰一人として居なくなつた頃。

私の村は『モリトの国』と呼ばれるようになった。
偉大なる祖先の霊、モリトが守る国だと。

近隣の大小の国々よりも技術に長け、漁業など高度な産業も高効率化してきた。
農業も他種多様な作物の栽培を行っており、食糧が安定して供給できる。
簡単ながら医術もあり、死亡率も僅かながら低いし、モリトの加護で治安も良い。

そんな場所を誰が欲しないでいられるだろうか。

山と海に挟まれたU字型の地形は天然の砦となり、外敵の侵入を阻んでいる。

無論、山を通れる道も多いが、森は危険が溢れており攻めるに難い。

それでも、此処に希望を求め、略奪者は現われる。

私はこの村、いや、この国を守るために彼等を殺した。

殺して、魂を奪い、強くなり、

また殺して、魂を奪い、強くなる。

次第に慣れてしまった自分が少しだけ悲しかった。

村人が、モリト様、モリト様、と称えてくる。

その名が、そのまま国の名となった。

結果として、私という反則によって、この国は僅かな兵士だけを武力としたまま

余力を農業や漁業といった分野に注力し発展することができたのだ。

冷たい考えだったが、

私のちっぽけな両手にはこの国を維持するだけでいっぱいだった。自分の庇護下にある人間だけを幸せにするだけでいっぱいなのだ。

私の国は恵まれている。

土地も、人も。

モラルも比較的高く、物々交換のレートなどで少々揉める程度で、国内に置いて略奪が横行するなどしていない。

戦という混乱を抱えた時代だが、それでも飢えも少なく、豊かな生活を遅れている。

さらに国内の統制もそれなりに上手くいっている。

私の村出身の、何らかの技能を修得した者達は特権階級として、何人かの人を配下に持つようになっていくが、それほど驕る事もなく、技術の伝達に努めている。いずれ腐敗し、虐待などの温床になってしまっただろうが今の国内は安定している。

各長の寄り合い、長老会においては既に穀物などの賄賂が横行しはじめていくが、私利私欲であっても最終的に国が富むように動いているので今は見逃している。

財の溜め込みが可能になると段々と露骨になっていくのだろう。

そのあたりの舵取りを上手くやりつつ最大多数の幸福を創っていくたい。

既に私の村は面影を無くし、広がりを見せたため別の姿へと変貌してしまっただが、やはり作り上げたモノや、この土地への愛着は変わらない。

これからも見守っていくのだと私は決意を新たにしたい。

……山犬が私の側へ駆け寄る。

私は強くなった。

こうして山犬を従えるまでになっている。

この山犬はかつて私と対峙したモノの魂魄だ。

誇り高き獣の魂は、王樹に与えられる安寧の眠りにつく事なく、死して尚、孤高に森を疾駆していた。

霊格が完全に彼を上回るまでに何度となく闘ったものだ。

今ではこうして共に国を守る相棒である。

使える手、使える目が増えた事は、相変わらず忙しい毎日ありがたい。

ん、なになに、この荒れた海に舟を漕ぎ出す馬鹿がいるのか。

私は伝えてくれた山犬に礼を言ってから飛び立つ。

こうした馬鹿がでるくらいの平和を、ずっと保ちたいものだと祈りながら。

現場につくと私は波に翻弄される男を竜巻で波打ち際まで吹き飛ばし、舟を突風で陸まで上げた。

こういった操作も手馴れたものだ。

追加で忠告の意味も込めて1分程竜巻を海上で荒れ狂わせてみる。

海に生きる者で、海を恐れない者は、いずれ海で死ぬ。怖さを知らない海の男は海の男足り得ないのだ。

そう告げて私は去った。

言った後で我ながら偉そうだなとちよっぴり照れたが、海に出る勇気を持つ人材は貴重なのである。

無駄に死なないでいただきたい。

あらそい……其は守人の国（後書き）

主人公とご都合主義な天然要塞的地形の組み合わせでモリトの国は規模の割りに中身が発展しています。とはいえど少々です。ちよつと沖に出れる程度の小舟を使った漁業が行えるレベル。

杜人閑話……現代語訳『海の男』

昔、海辺の村に1人の血気盛んな若者がいた。

とても喧嘩が強く、腕力も勇気も大人と同じだった。

若者の父親は代々漁師をしていた。

父親は村一番の漁師で、ひとたび海に出ればいつも大漁。

漁に出て怪我をしたことも舟を壊したこともない。

村人の誰もが若者の父親を褒め、慕った。

口々に、海の男はこうあるべしと。

けれども、若者は父が嫌いで喧嘩ばかりしていた。

ある日、いつもより風が吹き、波が少しだけ高かった。

父親は漁を取り止め、若者にも漁を止めるように言った。

けれども、若者にはまだ漁ができるように見えていた。

「この小さな波を恐れて漁に出ない父が、真に海の男であろうはずがない。

私はもっと大きな波であろうと恐れることはない。

私こそ真の海の男だ。」

父親は答える。

「お前はまだ海を知らない」

そついつて父親は家に帰った。

若者はいつもより少し高い波を押さえ漁を成功させた。

「見ろ、私の勇気が波に勝ったのだ」

誇らしく胸を張る若者に父親は言った。

「お前はまた海を知らない」

父親の言葉に若者は意固地になった。

あんな波から逃げる父から海を知らぬと言われて引き下がれなかった。

次の日、昨日よりも少し風が強く、波も昨日より少し高かった。

父親は今日も漁を取り止め、若者にも漁を止めるように言った。

「私はどんな波であろうと恐れることはない」

若者は昨日より少し高い波を押さえ漁を成功させた。

しかし、父親の言葉は昨日と同じ。

「お前はまた海を知らない」

次の日も、前の日より少しだけ風も波も強かった。

それでも若者は挑み、成功させていく。

その次の日も、前の日より少しだけ風も波も強かった。

そのまた次の日も。

そのまた次の、次の日も。

いつしか波は荒れ狂う大蛇のようになっていた。

それでも若者は海に出てしまった。

毎日少しずつ高くなる波のせいで、

自分が乗りこなせる境界を見誤ったのだ。

さしもの若者も、これには勝てず、翻弄されるばかり。

若者は初めて海に恐怖した。

父の言う事を聞いておけば良かったと後悔しても遅かった。

身体は海へ投げ出され、木の葉のように回り続ける。

「神様、私が愚かでした」

父の言葉の意味を若者は理解した。

自分の分ぶを知り、退く事も勇氣なのだ。

退かぬ勇氣だけではいずれこうして死ぬ。

己を知って初めて海を知る事ができる。

若者は己を恥じた。

すると突然、渦が竜巻となって天を突き、若者を岸まで吹き戻したのだ。

「どうだ人間。海は怖かったか」

竜巻の中から海の神が現われ、今までの波は全て自分が起こしたのだ、と言った。

恐怖を知らぬ人間が勇気を語る愚かさを、叩きのめすために。

それは海の神の優しさでもあった。

「はい、私は今日、生まれて初めて海を知りました」

若者は素直な気持ちで答えた。

海の神は満足すると海を鎮めた。

海の神は言った。

海に生きる者が海を恐れぬならば、いずれ海で死ぬだろう。

怖さを知らない海の男は海の男ではない。

若者はその夜、父親に今までの事を詫びた。

父親は一言こつこつだけだった。

くあゝ、古典って何でこんな眠くなるんだろうな」

青年は大きく欠伸をしながら長机に体重を預けた。

「ちょっと揺らさないでよ！」

あと、こっちはまだ終わってないんだから静かにして」

斜め前には辞書と睨めっこをしながら唸っている女学生。

怒らせると怖いので、そつと身体を起こし、先ほど訳した文書に間違いが無いかな添削する。

『杜人神話』もりひとのかみがたり 雉草子之巻』きじのそつし

その中にある綿津見説話の1エピソード『海の男』を訳すのが今回の課題。

「ううゝ、なんで人間文化学部って古典文学の勉強してんのよ。意味がわからない。私中学の頃から古典だけは苦手だったのに、何でまたわざわざこうして辞書まで引いて頑張ってるんだろっ」

「藤井教授に一目惚れしたとか言い出したのお前じゃん、頑張れよ。歴史資料を読むのに古典文学ぐらいは読めるようになってことだろ。」

だいたいあの教授、民俗学の権威でもあるし、説明会でも風習や風俗を中心に詳しくやってるって言うってたしな。

「これぐらい予想してこいぜ……」

恨めし気に睨んでくる彼女をちょっと可愛いと思った。

「なんでアンタの方が格段に早いのも、文章量は変わらないはずでしょ?！」

ああももっつ、そっちを選んどけば良かったわ」

「いや、くじ運だけはいいんだよ俺。

こないだNHKで人形劇やってて話を大筋で知ってたから楽しかったわ」

「ずるいっ！ ていうか、いつまで教育TV見てんのよアンタは！」

「馬鹿やろう、NHK教育は割とクオリティ高いんだぞ」

2人の学生の言い争いはいつまでも続いていく。
これは、とある大学の、日常風景。

杜人閑話……現代語訳『海の男』（後書き）

今回はいつにも増して読みにくいはず。

高校の頃の古文を訳してできた雰囲気ので書いています。

とある大学で、藤井教授と彼の講義を受ける学生達が

文書、杜人神話から過去の出来事を読み取っていきます。

しかし杜人綿津見が実際に体験した事とは違う記述です。

それは時代が流れるにつれ、誇張や創作が挟まっていくから。

その食い違いや、解釈をお楽しみください。

あさぢえ……文字とシンボル

人間は単体では実に脆弱な部類に入る生物だが、その真価は群体における社会性の確立や多様性を活かした種自体の成長にあると、私は思う。

私自身が成長してきたことで、問題をフォローできる範囲も増えていたが、ここに至り私の知覚領域が伸び悩みを見せたことで一気に本質が見えてきた。

もはや私1人の強権によって押さえ込むには無理が来ているのだ。

こうなれば単体の私では集団には勝てない。掬った掌から水が零れ落ちていくのと同様に、抗えない数が存在する。

ならば集団を産んだ人間自身の手で『人の意思』という名の化け物を御してもらわねばならない。

統率者に求められるには決断力やカリスマなどの希少な気質。だが、同様に被統率者にも求められてしかるべき能力がある。

彼等はただ怯える羊であつてはいけないのだ。

羊飼いの命令を受け取る事の出来る『知』を備えた羊でなければな

らない。

こうして人から離れた視点で眺めてみると、なるほど、国とは肥大化した人間に似ている。

いくら頭が優秀であっても、手足が動かず腐り落ちれば死に至る。

かねてより思考をダイレクトで伝えることのできる私が直接走り回って意思の統一を行ってきたが、国を運営してゆく人間だけの手で国内統制が可能となるのが望ましい。

私が今まで手が回らぬからと後回しにした事によって更に手が足りなくなったのだ。

この失敗を踏まえ、手を増やす事をこそ、優先せねばならない。

それは『知』の共有計画。

まず必要となるのは意思伝達手段を現状から一歩進めること。

すなわち『文字記号』の普及だ。

……などと意気込んでいた私の見通しの甘さを呪いたい。

現代日本の文字文化が如何に凄いかを身をもって知る事になった。問題点が山ほど出てきて、文字と呼べるものを出現させる下地すらないのだ。

まず、集落レベルで微妙に単語の読みが違っている場合がある。

私の村だけであつたなら、農業指揮の際に矢印や絵記号を用いていたので

素直に話も聞かし、理解するだけならば比較的簡単に済んでくれたのだが……………。

『守る』の単語でモリ、モル、最遠地の集落ではコル、など

活用による変化と思えなくもないものからまったくの別物まである。こうした違いが微妙に連絡の齟齬を生んでしまったりするので。

そこに文字を投入すると多様化した読み方を生み出し複雑化しかない。

普及の壁となる上に今後の問題になってしまうのは間違いない。

解消するには一つの国として広く深く混ざっていくことで何とかなりそうだが

商業の概念がまだ薄い閉鎖的な村関係から交流は少なく、かなりの年月を必要とするだろう。

そして、記憶媒体が石版や地面しかないので教育が進まない。

使用機会が無いのも刷り込み学習が発生せず効率が悪い。
いざという時に忘れて読めないなどの問題も出るに違いない。

私もさすがに紙の作り方までは知らない。

繊維質な木を細かく砕いて煮る・・・？

その程度の知識で紙が出来たら奇跡も良い所だろう。

現時点で文字は覚えても使い道が少ない、上手く使えない。
なんとも悲しい結果で終わった。

とはいえど、文字文化がいずれやってくるのに備え、
国を表す絵記号について各地域の長に石版を渡す。

王樹様の領域である山を表した三角形の中に、
山犬の牙を模した短い湾曲線を左右対称に一本ずつ書いたもの。

『モリトの国』のシンボルマークとでも言おうか。
共同体意識を持ってもらう為に作った国の印。

ここから各部族のシンボルなどを作ってもらい、
国から褒章を与える時は必ずそのシンボルと共に称えてやる。

そうして己が部族を表す絵記号に誇りを持ってもらうと共に、親し
んでもらう。

文字文化の下地として『記号に意味を感じる』第一歩はここからだ
ろう。

その日が来るまでは結局、私が走り回る日々が繰り返されるのだ。

私は風となって国を巡る。

苦楽を共にする、山犬の背に乗って。

あさぢえ……文字とシンボル（後書き）

国を押さえきれない 国民で処理して 文字があれば楽になる？
文字普及を頑張る 失敗し国印の様なもので明日への布石を置く
に留まる

実際、文字開発の前に問題になるのは記憶媒体の壁だと思います。
あっても使う機会が少ない、使い辛いのであれば普及しません。
文字がどういう効果をもたらすのか知っているのは主人公だけ
すから。

杜人閑話……藤井教授講義『古の大国』

「はい、では今日の講義を始めます」

「え、先週は『杜人神語』もりひとのかみがたりの代表的なエピソードを幾つか現代語訳してもらいました。

突然、古文を訳せと言われ、君達は何故これに触れたのかも判らなかつたと思います。

実はこの『杜人神語』は近畿地方南部において非常に貴重な歴史的、文化的資料であり、君達も名前だけは知っているだろう『古事記』や『日本書紀』に比するものなんです」

「え、杜人神語はある土着神を中心にした説話集です。

土着神というは、簡単に言えばその土地に昔からいる神様だと思ってください。

有名所だと、長野の諏訪大社なんかは御左口様ミシヤクジと呼ばれる土着信仰があります。

諏訪大社の祭っている神は別なんですがそれは……っと話がズレましたね」

「それで、その土着神は『杜人綿津見神』もりひとのわたつみと云います。

君達に馴染みのある言い方だと、和歌山合神祭くわしんまつりで祭られている神

様です。

あれは冬季オリンピックと同じ年に毎回テレビでニュースに取り上げられていますからね。

実は私も毎回参加しているんですよ。いやあ、神渡り神輿は幻想的で良い」

「この神様が人間と、どの様に関わったのかが書かれているのが杜人神語です」

「現在『雉草子』^{きじのそうし}、『鶉草子』^{つぐみのそうし}の二巻が知られています。

杜人神社に原本があり、天皇の宝物を治める正倉院、紀伊徳川家でその写しが発見されました。

平安時代の前期に書かれたのが『雉草子』で、『鶉草子』は平安後期以降ですね」

「っと、そういえば、神様についてですが、実在したのではないかと言われています。

おっと、別に宗教の勧誘とかじゃありませんから、そんな風に引かなくても……」

「古事記、日本書紀などにも神様が沢山でできますが、

これら日本神話の神様はその土地を支配していた豪族であると考えられています。

つまり、日本神話は大和政権を築くに至った征伐の記録でもあるのです」

「杜人綿津見神はその中でもかなり特殊な書かれ方をしています。古事記の記述では神武東征、今の奈良へ大和の軍勢を進めた際に最大の壁となつています。」

「今まで通り道の荒ぶる神、つまり豪族達は全て臣従させる事ができたのですが」

「なんとつ、杜人綿津見神だけは最後まで引き分けであったと記述されているんですよ」

「古事記、日本書紀は時の天皇が己や部下の系譜を明らかにするために作られています。」

「つまり中央政府に都合の良い歴史を創作したりして書いている可能性が高いのです」

「その中であっても、」

「汚点になりかねない引き分けの事実を記述していることから、実際は手痛い敗北を受けたんじゃないかと想像ができます」

「このことから、大和に匹敵する巨大な国家が存在したのでは、と私を含めた日本中の民俗学者、歴史学者はその痕跡を探していたりするんですよ」

「そして杜人神語は中央ではなく、杜人綿津見神が治めていた国側の視点で」

「つまり神武東征によって攻撃を受けた側の記述なわけです」

「一方だけでなく、違う視点から眺める事で歴史の真実により近づく事ができる」

「この事から杜人神語は歴史や風俗の大きな手掛かりとなるんです」

「ほら、想像してください。

歴史の影にあった古の大国……

そこには素晴らしい浪漫を感じませんか？」

「実はその証拠となるのか今学会で議論されている物があります」

「え、この三角形の中にちょんちょんと線を入れたこのマークなんです、

これ、杜人綿津見神のシンボルマークです。

三角が山を表し、この線が眷属の山犬の牙を指しているとされています」

「先日、私も参加した古墳の遺跡の発掘作業中に、このマーク付きの石版が出土しました。

実はこの地域の古墳からもマークの刻まれた石版が出土しています。

これはつまり杜人綿津見神の支配領域の広さを表しているといえるでしょう」

「支配下にある部族が全て所持しているマーク……ここから何か想像できませんか？」

「……そう、そうです！」

「このマークは国旗に相当するのではないかと学会が熱くなっているわけです」

「……ん〜、っと、ああ、今日はもう時間がないか……。」

今日はここまでにしておきますが、次回から杜人神語を通して古墳時代から平安に掛けての風俗などに触れていきたいと思います」

「興味がある人は研究室まで来てください。
好きなだけ語ってあげます」

「それでは、本日の講義はここまで」

杜人閑話……藤井教授講義『古の大国』（後書き）

あのマークは現代においてどうなったのか。

正規順でお読みの方は、お祭りについて何の事かと思いますが、後で触れますのでそちらまで到達したあと、もう一度この話を読んで頂くと良く判ると思います。

杜人神語について。

ゆるゆる独自設定塗れなので成立年代とか深く触れないでください
い（汗）

藤井教授は実在の人物ではありません。

なお、この物語に三只眼卍迦羅は出ません。

いなさく……青銅の闘争に似た香り

……来た。

ついに、待ち望んでいたものが来た！

待ちに待った、稲作、『米』の栽培開始である。

元日本人としてこれに代わるモノは醤油や味噌くらいなものだろう。それほどに私の心は喜びに打ち震えていた。

稲は生育が難しく、稗や粟よりも弱い植物であるが収穫量についてはそれを容易に上回るだけのものを備えている。さらに、未だ整備が仕切れておらず水利の荒い川や沼に面した土地を水田として作物栽培に回せるようになるのは、大きいと言えない国土を有効活用できる良い施策だ。

とある事情で周辺に戦争の気配が漂っていることに合わせ、移民や流民が流れてきているのを捌く事業発生は実にタイミングが良かった。

この機会に河川整備も行おう。

国はますます栄え、豊かになるだろう。

初めての稲作に着手して3ヶ月が経った。

区画整備も含め、栽培は難航しているものの、おそらく上手くいくだろう。

念を入れて、王樹様から力を込めていただいたのだ。

王樹様も同じ植物仲間祝福を与えるのを嬉しく思われたのか、快く引き受けてくださった。

生命の循環から進化した王樹様の能力は生命力強化や植物成長などが主なものであるそうだ。

あの千年樹の力を持つ稲ならば、今年の収穫は勿論のこと、次代の成長も約束されたものだろう。

…… 本当に王樹様の力は計り知れない。

以前、日照りによる干ばつで村が危なかった時に相談に行ったら、翌日には少ないながらも雨が降ってきた、というエピソードもある。

それ以来、欠かさずの参拝が日課に組み込まれた。

地鎮の大神に崇られたら滅びしかないのだ。

さて、最近になると山に守られていた領土を越えた外の村や国とも友好や同盟を結ぶまでモリトの国は影響力を拡大し続けている。

惜しむらくはこの土地が日本のどの場所なのかが分からない点だった。

ちなみに私が初めから日本だろうと考えた理由は、

集落が日本人的な黒髪黒目の黄色人種だけで構成されていた事。ハッキリとした四季があり植生が見たことがあるものばかりだった事。

台風などの定期的な災害や、体感地震が年に1、2回ほど頻発している事。

夏の大三角やオリオン座など僅かにある星座知識で北半球が確定していた事。

などである。

弥生式の国が生まれた今の段階で稲作が伝わった事からおそらく日本で確定なのだろう。

何故、位置を知らねばならないのか。

同時期に発生しているかの邪馬台国、これから日本の中央で生まれるであろう大和王朝などの、

敵対的行動を取ってくる可能性が高い巨大勢力との距離をなんとかでも知らなければ不味いからだ。

日本史のミステリーなど今となってはどうでも良かった。

歴史が変わろうとも、私は私の国を守りたいと思っている。

何しろ邪馬台国は巫女が治めていたと記述が残っている以上、王樹様クラスかはともかく、何らかの神霊を確実に従えていると考えられる。

大和王朝に至っては日本神話最大神の天照大御神アマテラスオホミカミの末裔。

直系の血筋かどうかや、神が本当にいるのかの真偽はさておいても、後にそう祀られるに足る強大な力を有する存在が居たからこそ各種文献に名が残っているのだ。

村をモリトの国に組み込んでいく段階で数体の祖霊を配下に置くことができているもの、それは各種征伐を行っているであろう向こう側にもありえてしかるべきだ。

……戦の気配は年々高まってきている。

私は西の村から持ち込まれた青銅の剣を見つめた。

稲作の伝播と時期を同じくして、青銅器も日本に伝わったのだ。金属器の発展は、これまでより高い殺傷性や耐久性をもつ武器の作製に繋がる。

大陸から渡来人の流入が早かった北九州付近では既に青銅器の生産に扱ぎ付けているか……。

青銅器が鉄器に取って変わられるのは驚くほど早かったはずだ。こちらが青銅製の武器を作る頃には鉄製の武具を作られているだろう。

打ち合いで勝てない武器との戦いを民に強いる事になるかもしれない。

より強い武器の存在が闘争の匂いを強く感じさせた。

距離、時間、と私だけではどうしようも無い問題が降りかかる。

できる事といえば相変わらず警備、整備、指導。

少しでも国を富ませ、豊かな生活への道筋をつけてやる事くらいだ。

きたるかつて無い戦乱の予感に、私はその先の幸せな未来を祈っていた。

いなさく……青銅の闘争に似た香り（後書き）

渡来文化の最前線であるならば現代知識と合わせて技術チートができたでしょうが

現在地不明のモリトの国はそこまでいけません。

各地に残る戦神いくさのみの伝承は古代日本の各種征伐が元になった話が多いとか。

大神の系譜たる大和の影。

もりひと……語られぬ神の話

歴史は時代の勝者が創ってゆく。

敗者が如何な戦いぶりを見せたとして温情なくば記されもせず、
記されたとして打ち破った勝者の引き立て役と消えてゆく。

私は倭の東征軍と戦う前に敗北した。
そう、今から100年も昔の話だ。

……事は固まり始めた勢力圏の外縁部にある同盟国の近くに
所属不明の人間が大量に集まっていると山犬から報告を受けてから。
すべてはそこから始まった。

移民か、軍隊か。

判断が付きかねた私は、もしもの為にと祖霊と山犬を守りに送った。
再び帰ってきた報告は、悲惨極まりないものであったが……。

初めての接触はすぐさま戦闘へと発展し、祖霊達が我先にと襲い掛かったが、炎熱を纏い金色に輝く巨大な鳥カラスの神霊に散り散り追われ、例外なく喰われた。

霊的な守りを失ったその国は強固な鉄剣を揃えた兵士によって滅ぼされた。

イワレビコと名乗る敵の頭はその鳥に守られている。

追撃を振り切って這う這うの体で逃げ切った山犬からそう報告を受けた時、

私は確実な敗北の訪れに溜め息しかなかった。

なるほど、八咫鳥ヤタカラスとは大物が出てきたものだ。

私はさほど日本神話には詳しくなかったが、八咫鳥の簡単な云われくらいは知っている。

神の先触れ。

勝利の導き手。

太陽の力を宿す者。

神武東征の折、倭の軍勢を先導し荒ぶる神々を治めたとされる神鳥。揃えられた鉄剣は建御雷神タケミカスチに譲られた太刀の話だろうか。

何にせよ、私の意地や我侭で民を巻き込む訳には行くまい。

私の靈力は精々が山犬より少し高い程度。

これほど手痛く山犬が負けたのなら勝ちな目などなかった。

すぐさま臣従を伝えるべく赴いたのだが……、

イワレビコは突然私に八咫鳥をけしかけたのだ。

土地を治めていた神や靈の地位を奪い取り支配を磐石にしようと思われた凶行。

足を潰され、腕を千切られ、目を焼かれ……。

消滅を覚悟したその時、間一髪で私は山犬に啜えられ、

王樹様の下で回復の為に永い眠りへつくことになってしまった。

目が覚めたのは、戦いに敗れてから50年後。

王樹様と山犬から顛末を聞いた時にはもう、全てが終わっていたのだ。

倭の軍勢はその規模を維持する為の略奪が必要で、走り続けなければ壊滅しかねない状況ゆえに食糧の略奪と各部族の虐殺が行われ、多数の村が滅んだ。

勢いは止まらず、モリトの国の深部まで侵し、地獄絵図だったそう
だ。

その間、山犬は出切る限りモリトの血筋を王樹様の御許へ避難させていた。

倭の軍勢はモリトの国を治める神を服従させるのが目的。

私はどうやら弱すぎた為に勢力の大きい『モリト』本人だとは思われなかったようで、

絶大な力を持つ王樹様がモリトと間違われ、荒ぶる神 対 荒ぶる神の戦争が始まった。

己を熱心に信仰していた配下を殺されかけた王樹様は、普段の温厚さが嘘のように烈火の如く怒り、八咫烏に引けをとらなかつたという。

大地そのものと化した王樹様を八咫烏は負かす事ができず、王樹様もまた、天を自在に舞う八咫烏を負かす事ができなかった。

これに慌てたイワレビコは矛をおさめ和睦を願い出、モリトは従うが強行な支配は受け付けぬ、と纏まったのだ。

こうして実質モリトの国は滅びを迎え、倭へ併合された。

ここで終われば良かったのだが、悪いことは続く。

神々の戦いは王樹様に深い傷跡を残していった。

溢れる生命と神秘を全力で振り絞る行為に樹木の身体が耐え切れなかったのだ。

後、十年もすれば枯れ落ちるだろう、と。

いつもと変わらぬ優しい雰囲気私に伝える姿に涙した。

気まぐれに雨を降らしてやったあの日から欠かさずお前は感謝を述べた。

理由があるとすればそれだろう。

……いつもと、変わらぬ優しさに、私は涙したのだ。

己を慕ってくれたというだけで、同格以上の神鳥に挑みまでして。

王樹様はただ熱心に礼を尽くしたただけの人間の霊に、命を掛けてまで報いてくださった。

貴方の高潔な魂に何をして上げられるだろうか。

私がそう尋ねると王樹様は静かに命を溢れさせた。

失われるモノを受け継いで欲しい。

そうして王樹様と私が混ざりあっていた。

それから更に50年が経ち今に至る。

私に叛意は無く、私が従うのならと周囲の国や村も大和に恭順を示し、戦乱は終わった。

そして、神に比する力を受け継いだ私は、再びモリトの民を豊かにするために働いている。

昔よりもずっと強くなった霊力は畑を作るも港を作るも自由自在だ。鉄器による農業器具の発達や建築技術の発展も始まり、新たな時代が始まった。

誰もここが敗者の国、滅び去った国だとは思わない。

私は、山の奥深くに建立させた社へと向かう。

私は守るべき者も守れぬ情けない守人^{モリト}であった。
そんな私よりも遙かに偉大な『モリト』を祀る為の神社。

杜^{モリ}の王であり、ただ人の私に代わり、民を守ってくださった王樹様。

杜人^{モリト}を祀る神社に、感謝を込めて頭を垂れる。

私はこの祈りをこれからも欠かさず続けていくだろう。

もりひと……語られぬ神の話（後書き）

モリトの国、滅びる。

王樹様が代わりに守人として戦い凌ぐも無理がたたり、主人公に力を託し消える。

託されたものは高潔さ。

ふっこう……雉鳴きて平穩訪る

戦争は終わったが、私は最も倭ヤマトを梃子摺らせた神という事になっている。

祀られている杜人モリト（＝王樹様）と部下であった守人モリト（＝私）が混同されていた結果そうってしまった。

戦争が終わって早々、監視の為に送られてきた雉鳴女キジナキメという女性の神霊が

そついう勘違いをしてしまったのが問題であるらしい。

私もまさかあの王樹様と間違われるなど欠片にも思わなかったので勘違いは進行し、

中央の命令によって『モリト』の名を変えるよう言われた時も私の改名だと思っていた。

倭のイワレビコは切り札の八咫鳥と互角以上に戦う王樹様を随分と畏れているようで、

名を変え、信仰が王樹様に向かないよう封じ続けたいと。

これに従えば、史書において中央が使わした神の一柱としてやる、と。

雉鳴女の話聞くに、私が深く臣従している事が周辺地域の安定に

必要なように
従わねば再び矛を交え民を殺す事になるだろう、などと軽く脅迫してきた。

元々が中央の仲間だ、等と書かれるのは不快だったので、後の世に間違いを正す事を約束に改名に従った。

私は王樹様を祀る者、社の人として名を『社人』と改めた。

辛気臭い戦後処理も終わり、失われた時間を補うように急速に復興が続く。

鉄器文化は木材加工技術を飛躍的に上げた。
より大型の舟の作成も可能となり、漁業は再び発展の時を迎えている。

少々コストが高いが、鉄製の農具も作製して農業の効率化も図れるだろう。

幸いにも山犬のおかげでモリトの血筋は残り、
高度な技術を持つ者として国の再興を大いに担ってくれていた。
私の民はきつとこれから大丈夫だ。

今日も私はいつものように山犬の背に乗り、ぐるりと国を観察し、杜人神社へと帰った。

あまりに遅くなると監視役の雉鳴女が良い顔をしないのである。

彼女はいつもピリピリした攻撃的な気配を隠そうとはしない。

私は言ってみれば敵国の王に当たるのだからしょうがない話ではあるのだが……。

山を登り、木々を掻き分け御社が見えてくると幾つもの気配がある事に気が付く。

漁民達が網を抱え境内で祈りを捧げていた。

それを前に雉鳴女が困ったような表情でこちらを見ている。

私は何事かと尋ねると、漁が上手く行くようにお問い合わせののだと言う。

舟で沖に出るのは死の危険が付きまとう。

大漁祈願よりは安全祈願のようだった。

……そのために、わざわざ山奥の緑深い神社まで来てくれた。

胸にありがたい気持ちが入み上げて来て
一も二もなくすぐさま私は応えた。

漁港に御社を築いてもらえれば、波の荒れる日はすぐに鎮めてあげる。

私の言葉を聞くや否や、彼等はすぐさま飛び出し山を降りていった。
きつと2、3日の内に簡単な御社が拵えられるのだろう。

分社を作るのは確かに考えていなかった。
交番や派出所のように要所へ置いておくのと便利だろうか……。

思索に耽る私に雉鳴女が疑問の声を上げる。

いつになく鋭い視線はただの詰問でないと告げていた。
私も、真剣に答える。

「貴方は山の神ではなかったのか」

私は、山の神であったとは思っていません。

「貴方は海の神であるのか」

時と場合によればそうする事も出てくるでしょう。

「山犬に乗る神が海も治めると？」

民を守るため、治めては駄目なのですか？

私は相手の言い分にちよつと悩んでしまった。

神様は意外と『何とかの神』のように専門が多い。

複数を兼ねる神も多いのだが、この聞かれ方はおそらく、

『中央が海を治める神霊を遣わすからお前は大人しく山だけ治めて
いる』

の意味で言っているに違いない。

思わぬ所で叛意と取られかねない発言をしてしまったか！

そう内心で慌てる私だったが、雉鳴女は優しく微笑んだ。

「私はどうにも貴方の事を見誤っていたようです」

「倭では荒ぶる野蛮な神であると伝えられておりました」

「真実は杜人の神は慈悲満つる賢神であつたと」

鳴女の字に賭けて、誤りを正す事を誓いましょう。

……と、本来、私のお目付け役で上役でもある彼女が私に頭を下げた。

私は間抜けにも驚きのあまり立ち尽くしていただけだった。

それから、月が一回り満ち欠けを繰り返した後、雉鳴女は中央へと帰っていった。

あの質問の日から彼女は監視役にも関わらず私の仕事を良く補佐してくれた。

鳴女とは伝令を主に行う神霊の一族で、多種多様な経験から凡そ何でもできるらしい。

また手伝いに来てくれないかな、と私は凧いだ海に呟いた。

ふっこう……雉鳴きて平穩訪る（後書き）

中央の裁定による戦後処理。

新キャラで監視官の雉鳴女が登場。

日本書紀ではお使いに行つて胸を矢で射抜かれる悲劇な子。

ユーザーページの活動報告にて杜人記の裏話を書いていたりしますので、

興味ありましたら覗いてやってください。

藤井教授の講義は面白い。

正直、楽そうだったからという理由で人間文化学部を選んだが、正解だった。

今では考古学、民俗学をもっと学んで行きたいとも思っている。暗記ばっかの日本史が大嫌いだった、この俺が、だ。

なんで面白いのか、は実に簡単な話だった。

ちょっとしたピースから考える力を試すような問題。

先生は考えがあっているあっていないで評価するのではない。そこにどうして至るのか、その考え方を評価してくれる。

自分で想像する行為が面白くないわけがないだろう。

急に歴史が面白く感じる。

今日は何をやるのか。

「はい、では今日の講義を始めます」

教授はいつも通りに挨拶をするとプリントを配った。

「え、今日はですね、またも私の趣味です」

プリントには鳥や狼、いくつかのマークが描かれている。教授の趣味、それは杜人綿津見神に関連したあれやこれやだ。その部分だけ偏執的に取り扱っていると思う。

「先日は杜人神語の雉草子、その『杜人説話』から『山海問答』を勉強しました。」

杜人綿津見神が人間臭い言い分で雉鳴女に屁理屈をこねるシーンです、憶えてますね？」

当然、ちゃんとノートも取っている。

確か乱暴に要約すると、『山の神か、海の神か』と問われて

『どっちであるとか関係なく私は私が守りたいものを守る』

『山で困っている者がいれば助ける、それは海だろつと変わらない』

『誰かを助けるのに、そこが山だ海だと言いつつ道理は無い』

……と、かなり男前な返しをするシーンだったはずだ。

統治者の器の大きさや、性格を窺える場面。

古事記では荒ぶる神としか記述されていないが、日本書紀の方では『気性穏やかにして賢く、情に篤い』と評されており、『山海問答』

と一致する。

これは最後に雉鳴女が蛮神との伝えを訂正すると誓ったのが功を奏したのだろうか。

その辺りを空想したりするのが楽しい講義だった。

「そこで、雉鳴女は山犬に跨る神の姿を見て山の神だと勘違いしたわけです。

実際に八咫鳥と戦ったとされるのは地元で神樹の山と呼ばれていて、

杜人綿津見神の家とも言える本殿のすぐ近くですから雉鳴女もそう思ったのでしょう。

これに関しては紛らわしいので弁護できますが、後に彼女は色々とそのつかしい間違いを

……と、はははっ、少々脱線してしまいました」

杜人神語はこういう部分に引き込まれる。

記述されている神々の妙なコミカルさも魅力だと思う。

更に、どこか遠い話なはずの歴史がすぐ側に実際に残っているのが大きい。

不思議な親近感があって知りたい欲求が湧き出てくる。

「話を戻しまして、その杜人綿津見神、実に沢山の偶像、象徴を持

っています。

今回はそれらに関係の深い動物や道具なんかを紹介したいと思います」

まずは山犬だろう。

杜人神社の写真を見せてもらったが、狛犬ではなく山犬が境内を見張っている。

しかも、狛犬と違って2頭1セットではなく単体で御社の右手側から今にも飛び掛りそうな低い姿勢で睨みつけているのだ。

これは海沿いにある綿津見の御社でも同様に山犬である。

「はい、では最初は山犬からですね。

この山犬はニホンオオカミだったのではないかとも言われています。

杜人神語でも杜人綿津見神に最も古くから仕えている眷族だと触れられており、

鶉草子では杜人綿津見神が自らの半身に等しいとまで述べているんですよ」

教授の視線から次に何を言うのかが読めた。

「この記述から考えられることはないかな？」

ほら来た。

何度もこの手の質問を受けている俺にはすでに一つの答えがあった。

山犬を飼育していた、のは当然として

集落単位で犬を使った狩猟も行われていたのかもしれない。

……半身とまで褒めているそれは、杜人綿津見神の統治の助けになつていた証？

一週間前の授業で定期的な山狩りを行なつていたと習ったのも合わせると、

熊や他の山犬、狼グループによる被害を軽減したりとかしていたのかな。

それは山を開拓し、村や国を大きくする大きな切り札だったのかも。猟師達は犬使いであつた……とか面白そうだ。

「お、やるね坂本君、過去の授業も踏まえていて教える側としてはこの上なく嬉しい。

さらに殆ど現在の定説に近いね、うん、やるじゃないか」

褒められると照れる。

「実際に、近くの遺跡に残された壁画などにも犬の絵が残されているんです。

しかも人と共に並んでいる絵が半分以上を占めていたりするんですよ。

弥生時代の遺跡からも見つかっていてね、古来から人と犬の関わりが深かったのが判る」

そんな古代から人と犬の関係は続いているのか。

ふと実家のチャッピーを思い出した。

犬を飼っている身からすると、犬は家族だ。

大好きな神様ってだけでなんか笑えるな。

この楽しい講義はまだまだ続いていく……。

杜人閑話……学生Sの歴史想像『山海問答』『山犬』（後書き）

また1人、歴史好きが生まれるのだった……。

日本史の授業中とかに妄想を走らせたりしませんでしたか。

他の象徴とかについてはこの閑話のpart2を作るかも。

わたつみ……神霊への信仰とは

大和の大王がオオキミ日本の近畿以西をほぼ掌握し、日本の覇者となつてしばらく。

今度は朝鮮に向け、兵を動かすのだとツゲミノナキメ鷓鴣女から聞いた。

鷓鴣女はキジノナキメ鷓鴣女の親戚筋で、仕事が忙しく杜人ツゲミノナキメの地に行けぬ鷓鴣女の代わりに

来年の出兵に対する援助協力の申し出を伝えにきたそうだ。

その容姿は親戚だけあって良く似ており、
鷓鴣女を一回り幼くし、目元を優しげに緩めれば鷓鴣女である。

元より私に断るといふ選択肢は存在しない。

彼等の統治はまだ各地の豪族などに投げっぱなしの部分が多く、
上からどうしろ、ああしろ、だの押し付けたりはしてこない。
まあ、正しくは未だに押し付けられるだけの支配体制を築き上げて
いないだけなのだろうが……。

なので、こういった急な物入り以外に不満に思う事も少ない上に、
『参加』ではなく『援助』と譲歩してくれさえしている。

ならば甲斐甲斐しく尽くすのも悪くはない。

彼等が上手く日本を纏められるのならば私の民も快く生きていけるだろう。

私から言えることは「我が民を巻き込まずに戦争してくれ」くらいか。

食糧物資に加え、薬草などの医療関連物資も融通する事を約束し、朝廷より遠路遙々この地まで来てくれた鶯鳴女をもてなす事にした。

海を望む場所に建てられた分社へと、山犬に跨り山を降りる。

山犬は彼女を乗せる事を渋ったが、お願いすると乗せてくれた。

この情景にふと懐かしさを覚え、私は鶯鳴女を思い出した。

鶯鳴女の時は初めの頃に強烈な敵意を持っていたから乗せるのを嫌がったが、

打ち解けてからは同じように、渋りはするものの背中を許していた。

不意に笑った私を鶯鳴女は首をかしげ怪訝な顔で見たが、

それもまた、山犬に許され珍しい笑顔を見せた鶯鳴女を思い出させた。

彼女は忙しいとの事だったが、今は何をしているのだろうか。

あの有能さならば何処へ行こうにも引つ張りだこに決まっている。

ようやく見えてきた海を望む小高い丘の真ん中、防風林の松に囲まれたそれは

地元の漁師達に『ワタツミさんの御社』^{オヤシロ}と呼ばれている。

ワタツミと付いているが私の分社であり、正確には杜人^{モリヒト}の御社である。

「ワタ」とは海を指し、「ミ」は神霊を意味する。

大和から文字や口語文化の流入で生まれた、流行言葉で言う海の神の意だそうだ。

もちろん、彼等は私の名を『杜人^{モリヒト}』であると知っているが、親しみを込めて私の事を、モリヒトさん、ワタツミさん、と呼ぶ。

これは彼等の仲良くなりたいたいという気持ちの表れであり、不快に感じる事はない。

民に畏れられる神の形もあるうが、私は民と共にある神でありたいと考えてるからだ。

社の入り口でこの話をする^と鶉鳴女は呆れ顔で、

自らの信仰を分けかねない愚行ですよ、と忠告してくれた。

もはや限界ギリギリまで成長した私の靈魂はこれ以上の力を付ける

事が難しい。

しかし、霊とは精神や想念に強く影響を受けるもので、誰かの想いや強い願いによって強さを上下する。

長きに渡り信仰を受けたモノは霊で非ずとも霊を宿す事もある。

私のケースも、モリヒトとワタツミが別存在であると間違っただけで広まったならば

分割された信仰によって弱体し、最悪の場合には思いから産まれてきたワタツミに吞まれる危険も無きにしも非ずといったところだ。

当然、そのリスクは承知ではある。

しかし、民を守りたいと願う私から生まれ、民を守る事を第一としなければ発生できないワタツミならば、手を取り合えないなどという事態が起こりえないだろう。

神が2人になれば、この地の山も海も、もっと豊かになれるだろうし。

社から夕陽に赤く染まる海岸を眺めながら、私がそう締め括ると鶯鳴女は見事な呆れ顔から一転、今度はクスクスと小さく笑い出した。

そして、彼女も私と同じように海岸を眺める。

「雉鳴女が貴方を好いた理由が分かりました」

潮風が優しく吹いている。

最後の一言によって、

私は不思議な気恥ずかしさを感じながら彼女をもてなす事となった。

わたつみ……神霊への信仰とは（後書き）

日本の八百万之神、九十九神、付喪神の生まれ方。

長きに渡り想いを込められたモノが霊を宿す、非常にロマンチックな考え。

今回登場の鶯鳴女は完全な創作です。

たわむれ……神遊びは如何にしてなるか

娯楽の少ないこの時代、

『神遊び』は民と神の繋がりを強める意味も含めて
領民全員がその日を楽しみに待っている。

民が太鼓を鳴らし喜びを踊り、私も美しい紅葉を風に舞わせて彩りを加える。

神と人が一体となるそれを『神遊び』あるいは『祭り』と呼ぶ。

以前から山では『杜人モリヒトさんの神遊び』と名付け、秋の収穫を祝い、私も人と混じりながら食を供して来年の豊作を祈願している。

海辺に御社を建ててからは春先の漁開きと合わせて
安全祈願の『綿津見ワタツミさんの神遊び』も追加された。
その年一番に取れた魚を皆で分かち、海への感謝を新たにするのだ。

これらのお祭りは民を慰撫するに絶大な効果を発揮しているが、
思わぬ問題が噴出する事となった。

どうにも昔から原因不明で山の民と海の民の仲があまりよろしくな
かったのだが、

漁民の神遊びが開かれるようになって数年経つと、更に悪化し始めたのである。

どうやら海の民に神遊びが開かれず、疎外感を感じていたのが問題らしい。

杜人の神は山の者だけを優遇している、と思われていたのだ。

確かに農地開拓など私が直接的に手を貸せる部分が多い農業に比べ、漁業に関しては技術開発といった見えにくい部分以外は漁師自身の腕次第な所が多いため親密に協力を取ってはいなかったと振り返り反省した。

そして海の民へ綿津見の神遊びが執り行われ始めたが、今度は山の民が面白くない。

特別だと思っていた自分の場所に人が増えるのを良くは思わなかった。

こうして対立が進み、下手すると喧嘩ではすまなくなるかもしれない事態まできた。

この事を山と海を治める各々の長達に詫び、己の不徳であったと頭を下げた。

杜人も綿津見も、どちらも私、同じモノである。

信仰が分かれた結果、神が2人になろうと構いはしなかったが、そのために民が争いを始めるのならば諫めねばならない。

私はそれぞれが同じ根に則していると示すために

『杜人綿津見神』と再び名を改めた。

そして、山の顔、海の顔が合わさるよう新たな神遊び、

『合神あわせがみの祭り』を開く事を決めた。

合神の祭りは、その地域の山の民と海の民が集まり、互いに収穫物や生産物を持ち寄って豊かさを祝おうというものだ。

これは最後の収穫が終わり、本格的な冬が始まる直前に行く事とし山は穀物や乾燥果実を醸した酒を、海は脂の乗った魚や旨味の濃い乾物を持ち寄り

それぞれがその土地で頂いた全てに感謝をして一日を共に過ごすのだ。

信仰地域が広く、一日では全てをカバーできないため、東から西へ3日間、私が行脚することになる。

日課の王樹様への祈りの為、本殿に戻り続けるのを思うとハードスケジュールに怯みそうになるが、民の為なら骨を折るべきだろう。

この神事は他とは違う特別さを感じさせる為に4年毎に執り行うと定めた。

第一回の合神の祭り。

まだまだ完全に融和できたとは言えないが、かつてない規模の神遊びは
女子供も含め、参加者全員が一つとなって豊かさを喜び、仲間意識
を高める事ができた。

期待していた通りの効果が出た事に私は安堵し、

難しい問題を解決できた達成感に包まれながら祭りを楽しんでいた。

夜明けには東から西へ、神が渡るのを見送る山も海も混ざり合った
人の列が組まれ

私は山犬の背に跨って民の導くまま次の祭りへ、次の祭りへ、と運
ばれていく……。

合神の祭りは非常に楽しめたものの、

私と山犬は祭りの後で疲労困憊とだらけていた。

毎年やると言っていたら後悔しただろうな、と山犬に思わず零すほ
ど疲れたのだ。

夜半に気付かれぬよう本殿と往復するのは
如何に靈の身体とはいえ堪えるものだった。

第二回の合神の祭り。

祭りの為に作っていた！……と渾身の出来の酒や、この上ない絶品の干物など、
お互いが私への奉納品を競い始めていた。
争うというよりは高め合う好敵手の様相。

私に喜んで貰う為の切磋琢磨なので互いを褒めてやり、
この年の合神祭も非常に満足できた。

酒の席で去年を思い出し、移動が大変だったなと1人ごちたの間か
れていたのか、
地域間の移動は、山犬様も疲れるだろう、と共に神輿に担がれて移
動する事になった。

第三回。

この日のために、4年かけて……な奉納品が多数。
食品加工の技術的な進歩が色んな場所に窺えるのでちょっと複雑な
気持ちになった。

お祭りで発展するとは思っても見なかったから。

そして、移動に使った簡易的な神輿が山の民によって立派な神輿と
なっていた。

質素でありながら貧相とは思わせない静かな調和……。

渡来文化の影響からか、装飾などに大陸の空気を感じる。

大したものだと山の民を褒めたら、

海の民がちよっと可哀想になるくらい落ち込み、あまりに気の毒だったので、

次回は海の民が神輿を作るようお願いしてみた。

第四回。

中央の富裕層が祭りの盛大さを聞きつけ見物に来ていた。人や物の流れが大きくなるため余所者の商人も足を運んでいる。

奉納合戦は苛烈の一途を辿っていた。

その品質に、朝廷への貢物として頂けないかと他国から使者がくるほどだ。

海の民の神輿は荒々しさを感じさせる男らしい神輿だった。

建築技術を学ぶために山の民に弟子入りした者が作り上げたらしい。山の民が作った調和を感じさせる神輿と好対称で、以後は交互に使う事とした。

日本人には、やっぱり祭りが必要だな。

目に映る全ての民が笑顔で飲み食いをする姿に、私も笑顔になっていた。

この暖かな気持ちを胸に、今年も私達は冬を迎える。

たわむれ……神遊びは如何にしてなるか（後書き）

お祭りが好きです。あの独特の空気が大好きです。

地元の寂れた神社も祭りの日だけは神社そのものが楽しげに見えます。

神と人と、本来は対等になりえないものが対等に関係できる日ですから……。

杜人閑話……現代失恋紀行文『寂れた神社の鶯さん』

男には、ふと、旅に出たくなる時がある。

……失恋という情けない理由なのだが。

土日合わせて5日ほどの休みを取れたので、私はあの場所を訪ねてみる事とした。

3年前、恋人と一緒に巡った淡い夢、和歌山合神祭。

遠いからという理由で当時は杜人神社までは行かず、麓の綿津見神社しか見ていなかった。

なのでブラリと思い出を巡りながら今度はそこまで足を伸ばしてみようと思う。

今では気を使う相手もない。

微妙に交通の便に難があるので人に気を遣わなくてすむ。

一人の気楽さというのは存外悪くないものだ。

傷心旅行なんてものでなければ。

少し切なくなつた。

最初の一日で思い出の辛さから宿に引籠もりそうになる。
失恋の思い出巡りは致命傷にしかならないと知った。

本当は四日目の予定だが明日は杜人神社へ向かう事にする。

……翌朝。

50分に一度のバスに揺られて、県道を北上していく。
整備の行き届いた林だというのが車窓からでも分かった。

この辺りは林業が未だに盛んだ。

質が良く、高級な国産檜材の産地としてブランド化しているんだか。

ちよっと前にTVでやっていたな、と思い出した。

『芸は難波なみので大工は杜人モリト』なんて言葉もあるらしい。

難波は地名だが、杜人はこの神様の名前、モリヒトが訛ってモリトになったらしい。

大工が腕を競い始めたのが神輿作りだったのを由来とした言葉なんだそうだ。

私が見た神渡り神輿は山神輿やまみこしであったが、あれは確かに見事であった。

今の神輿は戦後の、最も苦しい時期に作られたものらしいが何処にも粗末さなどない。

装飾は最低限の飾り彫りだけ、青森のねぶたなどと比べると初めは地味にも思えたが

男達が担ぎ上げ、宵闇に松明の灯り道を行く姿はまさに神を運ぶに相応しい神々しさだった。

宮大工の修行の地としても有名なのも頷ける話だ。

しばらくバスに揺られているとようやく目的地に着いた。

正確には目的地の手前なのだが。

バスの駐車場からは鳥居に続いて木々に覆われた参道が見える。

この先が杜人神社か。

緑のトンネルは意外と長かった。

登り道なのもあってそう感じたのだろう。

数メートルごとに石段が積まれていてそれなりに登った。

思わず額を拭った手で、じっとりと汗を掻いているのに気が付く。けれども、不思議と不快には思わなかった。

信じてはいなかったが、これが森林浴効果なのか。

妙に頭はスッキリするし、

木陰特有の湿気混じりな冷たい空気が気持ちいい。

近頃運動不足だったのが解消されただけかもしれないが、
こういう幸せな思い込みは人生を楽しくしてくれる、と信じている。

そして頭でゴチャゴチャ考えてしまうこの癖は、間違いなく人生をつまらなくしている。

彼女に振られた理由も「理屈っぽい」だったし。

ようやく見えてきた最後の石段。

登りきり、鳥居をくぐって最初に感じたのは失望だった。

苔むした石畳の先に、こじんまりとした神社。

合神祭は全国有数のお祭り……だったと思う。

その担い手がこんな寂れた神社だとは、微妙に拍子抜けする。

……祭りの経済効果が大きかったから地元企業の為に続けてるだけなのかね。

往々にして期待し過ぎるとがっかりするものだ。

残念だがこれもそうだった一例に当てはまってしまっただけ。

そんなものだろう。

こっちが本社と聞いたが分社である綿津見神社の方が規模が大きい

のではなかるうか。
周りの草木の生え具合をみると最低限の掃除以外は放置されているように思える。

まあ、良く言えば自然に溶け込んでいるように見える、と。
そんな事を考えながら私はデジカメのファインダーに全景を捉えた。

手水舎で濡らしたハンカチで汗を拭う。
冷たさありがたい。

とりあえず神社に来たのだ。
ならば参らねば。

境内を進むと何やら視線を感じ、足を止める。
横を振り向くと私は思わず身構えてしまった。

……狼！？

そう反応したのも仕方ないと言えるほど、その石像は生きています。うだった。

低く地に伏して睨み上げ、歯を剥き出しに唸り声すら聞こえる気がする。

なんという迫力だろう。

これが本社の山犬像か。

近づいて深く観察してみる。

逆立った毛並みまで細やかに掘り込まれている。

風雨に晒されていたと思えないほどに雨で削れた跡や溶けた跡が殆ど無い。

分社にあった像と同じポーズではあるが、あちらは随分と丸く感じた。

その部分の差なのだろうか。

しかし、苔や砂汚れは確かに台座にこびり付いている。

この像だけが新しいというわけではない。

本社の像が後から作られたなんてはずは無いだろう。

その不思議さに首を傾げながら山犬の頭を撫でようと手を伸ばす。

途端……、反射的に手を引いていた。

何故だろう、間違いなく『咬まれた』と思った。

これは石像で、動く筈のない物体で、それなのに……。

まじまじと自分の手を見る。

何の変哲もない、少し汗を掻いただけの、自分の手。

こうして無事な事がおかしいとさえ思うほど鮮明な白昼夢？

「あまり、その子に触れない方がいいですよ」

背中からの声にハツとなって振り向くと、

白と褐色の巫女装束に身を包んだ女性がくすくすと笑っている。

「ごんには」

続けて挨拶してきた女性になんとか答える事ができた。

この神社の巫女、だろうか。

巫女服と言えば紅白のイメージがあった為か白と茶では地味に見える。

山の緑には奇妙なほど馴染んで見えたが……。

唐突な人物の登場に少し思考が乱れたが、

私は先ほどの言葉が気になって仕方が無かった。

……『触れない方がいい』？

「はい、触るなどというわけでは無いのですけど

山犬は杜人様と鳴女以外に触れられるのを嫌がるんです」

嫌がるとは、まるでこの石像が生きているような口ぶりだ。

たしか山犬は杜人神の第一の眷属。

嫌われたりしたら神社のご利益がなくなったりするのだろうか。

神社なのだ、そういうジंकスの類は守るべきだろう。

杜人様がここの祭神である杜人綿津見神なのは知っているが、
『ナキメ』とは一体何なのだろう。

「ああ、巫女だと思ってくださって結構ですよ」

字は鳥の鳴き声の『鳴く』に『女』と書くらしい。

神様に声を届け、また神様の声を皆に届ける鳥の女の意味らしい。

なるほど『巫女＝鳴女』という事か。

この神社特有の仕来りか何かからくる名称の違いのようなものだろうか。

名を聞くと「私は鶯つぐみです、鶯つぐみの鳴女」そう答えた。

鶯さんと、今日は居ないらしい神主さんの2人でこの神社の管理を行なっているそうだ。

確かにこんな山奥で、小さい御社とはいえたった2人ならこの有様も頷ける。

聞けば、立地の悪さもあつてかなり昔から分社の綿津見神社の方がメインで

こっちは本当に神様の帰る場所というだけらしい。

神様の帰る場所、という例えが微妙に分からなかったの
仕事場と家みたいなものかと聞くと「そんな感じですよ」とのことだ
った。

私はお参りを済ませた後、
神社に上がらせてもらいお茶を頂いていた。

……凄くおいしい。
心が落ち着く。

日本人はもつとお茶を飲むべきだと思う。

私はどうせもう二度と会う事はないのだからと、
今回の旅の理由を鷓さんにポツリポツリと話した。

恋人に振られた事、その事への愚痴や恨み言も全部。

彼女は親身になって私の話を聞いてくれた。
ささくれた心が癒されるのを感じる。

同僚の慰めよりもやはり可愛い女の子に慰めてもらうほうが良いに
決まっている。

話し終え、スッキリしてそう言っていると鷓さんは心底可笑しそうに笑っ
た。

「うふふっ、私が女の子ですか、ふふっ」

何か変だったろうかと尋ねると「私は貴方より年上ですよ」と返さ
れた。

……正直そうは見えなかった。

私は童顔だとはいえ26歳、それはないでしょうと年を教えても彼女はまだ可笑しそうにコロコロ笑っている。

鷗さんは年を多く見積もっても20台半ばにしか見えない。

下手すれば高校生と言って通じる気もする。

何歳なんだろう？

少女の様に笑う彼女はミステリアスな魅力を感じさせた。

……恋人とか、いるんだろうか？

私は残りの日程を全てこの神社に通う事に費やしてしまった。

この旅行で知った事は、3つ。

- ・ 別れても思い出は辛く刺す事。
- ・ 鷗さんは一人身だという事。
- ・ 私の恋がまた始まった事。

きっと私は世界中の誰よりも合神祭の日を待ち望んでいる。

杜人閑話……現代失恋紀行文『寂れた神社の鶯さん』（後書き）

これから巫女さんに恋をしたおにいさんのドタバタラブコメディ
ーが……

非常に残念ながら始まりません。……誰か続き書いて（おい

現代の杜人神社の様子です。

寂れてますが実際に神事をやってたりするのは綿津見神社の方
です。

一応こっちにもお参りできるけど殆ど分社でお願いシステム。
神社としてそんな在り方で良いのか疑問ですが、
祭神本人が良いと言ってるから良いのです、多分。

うらぎり……仏の理と去りゆく雉

渡来人から様々が文化が流れてくると同時に、大陸伝来の宗教が西国の民衆の間で広がりつつある。

すなわち、仏教。

新たな『概念』の流入は元より日本の各地を治めてきた百鬼神霊の悉くを激怒させ、

その余波は九州より遠く離れた私にまで影響を及ぼしている。

妖怪化生は善も悪も内包し、畏れを持って力と成す。

曖昧や混沌とは我々神霊の類の本質に近くもある。

善のみを良きとする信仰で力を得た人間の反抗は、陽だけを求め、陰の存在を許そうとしなかった。霊的存在が駆逐されかねない事態となっている。

それに拍車を掛けているのは今代の大王であるらしい。

大陸の王から関心を買った為に日本での信仰を後押ししたいそうだ。

久方ぶりに杜人神社に現れた雉鳴女から中央の状勢をこうして耳にしたとて、

私は行動を起こす気にはなれなかった。

歴史を知っている身からすれば、仏教は日本の統一に一役買うし、神仏習合は沢山の文化的遺物を失わせたものの多様性や寛容に富んだ宗教観の育成に繋がるのだ。

結果として、民の為になるのではないか……？

その考えが私を絡め取ってしまったている。

政治を行う朝廷の官吏の中でも仏教派と神道派で割れており、仏教派は大陸の進んだ技術と文化で豊かな国を創る為の足掛りとすべきだとし、

神道派はここまで治められたのは国津神のおかげであり彼等を蔑ろにすべきでない、

……と対立を深めている。

鳴女の一族は大和朝廷に付く神霊の中で古参に当たるものの、伝令や雑事を主に行う能力は秀でていて霊力が弱く、権力者の間を飛び回る姿から相手方の間諜ではないかと疑われ、風当たりも酷いらしい。

今回、私を訪ねたのは数多ある土着神の中でも

八咫鳥ヤタを操る倭の軍勢と互角以上に戦い、屈服させることが叶わなかった神に

神道派勢力の復権へ協力をお願いしにきたわけである。

……彼女には大変世話になった。

なんとか恩に報いてやりたいが、どうしても協力できぬ理由が幾つかあった。

一つは戦力として。

王樹様から受け継いだ力と積み上げた信仰を持っても
いまだに倭大戦時の王樹様からすれば半分程度の戦闘力しかない。
天照大神といった主要神は大王側、つまり仏教許容派であろうから
使いである八咫鳥にすら勝てぬ私では勝ち目が無い。

そして、次の理由が致命的だ。

二つ目に、王樹様の力による行動領域の制限。

受け継いだのは単なる霊力だけではなく性質に近い部分も継承しているのだ。

ゆえに農作物に祝福を与えたり、水利を操るなどが可能となっているが、

大地に根を張る大樹の性質により、信仰を得られる地域に縛られてもいる。

守る事に特化しているため中央まで出向いて攻勢に出られない。

最後に、民に降りかかる被害。

勝敗の如何に関わらず、民に負担を強いる事となる。

私は私が神たらんとする為に神として振舞っているわけではない。その気持ちを忘れた私はただの害悪と成り果ててしまっただろう。民を守る責任が私にはある。やぶれかぶれにもなれない身だ。

全ての理由を話し、私は雉鳴女に、

積極的な協力はできない、と伝えた。

彼女はしばし瞳を閉じ、

それから震える咽喉で口を開く。

凜と澄んで良く通る声は、この時ばかりはか弱い少女のそれだった。

「……貴方が、『私心』を持たぬ神であると忘れていた無礼、お許

してください」

努めて涙を零さぬよう、気を張り詰めているのが表情から窺える。

私は、『通るかもしれない』だけの歴史を免罪符に、彼女の期待を裏切った。

自惚れでなければ、私と彼女は互いに信頼し、互いに尊敬し、良きパートナーとして気の置けない、良好な関係を結んでいたのに。

私は彼女の心を裏切ったのだ。

罪悪感が心に染みをつくってゆく……。

「そのような顔をなさらずともよいのです」

「卑怯にも情に訴えた私は、貴方の高潔さを利用しようとした」

「私は、私が許せません」

失礼します、と硬い声で会釈し背を向けた彼女を引き止めたくて
とっさに声を上げていた。

これからどうするのですか、と。

「東国の御左口様ミシヤグシに協力を要請しに行きます」

私は山犬と共に彼女を見送った。

初めて会った時とは異なる余所余所しさを感じさせる彼女の背に、
何かあれば一族を匿うくらいはしてやれる、と告げるにとどまった。

彼女はこちらを振り返らなかったが、足が止まった。

……記憶にある中で最も永い一秒。

彼女は再び歩き出す。

私は去ってゆく雉鳴女に二度と会えなくなるような、
そんな悪い予感がしていた。

うらざり……仏の理と去りゆく雉（後書き）

仏教は菩薩だとかが直接表に出てくるものではありません。

その偶像に対する信仰が僧侶へ与えられ、力を行使する形。

仏達の本体というか本拠地はインドとかですから。

広まった教えに対する集団の意思が信仰と同じ力として代行者の僧侶に譲渡されるわけです。集合知の力。

雉鳴女ですが、どうしてこうなったのか。

彼女は主人公ならきつと力になってくれると思い、やってきました。民の声を聞き、滅多に願いを断らず協力する優しさから

仲が良い自分をお願いすれば聞き入れてくれるはず……と心の片隅で思ってしまった。

常日頃、己の領民が豊かになるようにと私を殺すように行動してきた主人公との考えのズレに気付いた彼女は、知らず主人公を侮辱し裏切ろうとしていた事を気に病み、生真面目な性格ゆえに自分が憎い状態になっております。

心理描写が下手なので、こんな感じになっている……としてください。

しんかく……森羅万象ミシャゲジ様の畏れ

日本は数多の神霊、八百万の神々が息づく土地。

その数え切れぬ神の中でも、飛び抜けた存在がある。

もっとも有名な所で天照大神が上げられるだろう。

太陽の権現と分かりやすく信仰されているのも強みか。
私では相手にもならぬ気がする。

しかし、もっとも恐ろしいのは御左ミシャゲジ口様で間違いない。

得体の知れない、不可解から生まれる畏れを信仰の源とし
誰も捉えきる事は叶わず、断ち切る事のできない原始の顕現。

自然への畏れに潜む、崇りの力。

それは岩も樹木も関係なく、蛇や鼯などの小動物に至るまで
人に神秘や畏れ抱かせた森羅万象全てに発生しうる『現象に近い』
神なのだ。

むしろ自然がソレであると言っても良い。

そういう意味では王樹様ですら御左口信仰の端末の一部であったかもしれない。

一つ一つは微細かつ矮小な霊に過ぎない。

群体であり単体でもある、顕れるが姿はない、影に潜む神。

有象無象の極小な八百万の霊は『御左口』の名において信仰を得る。それはすなわち御左口様そのものが信仰を受けると同義であり、日本そのものが御左口様の領地と言えなくもないのだ。

人間霊上がりの私は存在を理解した瞬間から思わず様付けにしていた。

天照大神が陽の極限ならば、

御左口様は陰の極限であろう。

神武東征の折、御左口様はまったく動かなかった。

何故ならば御左口という現象を滅ぼすには人間と神霊、畏れを抱き信仰を生み出す全てを滅ぼさねばならぬからだ。

本拠であろうとも眷属は末端でしかなく、潰されようと痛みは感じない。

些か五月蠅いと少々の祟りを引き起こしただけで、

いつものように肅々と影たる存在でいたのだ。

誰がどの土地をどのように治めようと、御左口には変わりはない。

それをもって朝廷は支配していると喧伝していたが、愚かな事だ。

猛虎の眼前に腕を差し出しているのと同じで、

たまたま見逃されているだけにすぎないのだから。

雉鳴女は、御左口様の元へ行くと言っていた。

御左口様に動かなくてはならない積極的な理由は無い。

仏教が広がるのが国津神が冷遇されようが、関係ないからだ。

しかし、万が一、もしも僅かな信仰の減少に対し崇るとするなら……
日本最古、日本最大、日本最強の凶つ神となり大厄災を引き起こす
だろう。

果たして朝廷だけに留まるだろうか。

もし、私の国にも崇りが及ぶようであるならば、
私が御左口様を鎮める事も覚悟せねばなるまい。

雉鳴女に国津神を見捨てたと罵られようが軽蔑されようが阻止せね
ばならないのだ。

発生するリスクを避ける最善手……、

今すぐに山犬を放ち、彼女を殺し、後続の伝令も悉く殺してしまえば。

そうすれば御左口様は動かぬだろう、と。

私は私の中で自然に生まれ出でた冷たさを感じていた。

……だが、私はそれを実行できなかった。

あの日の震える声が思い出される。

彼女に対する罪悪感が、彼女を見逃したのだと、私は思った。

雉鳴女には死んでもらいたくはない。

その気持ちだけは確かだった。

私は、民を守るためにどうすればよいだろうか。

私は東の空を仰いだ。

私の心は『交渉の失敗』と『彼女の無事』という、複雑な願いで揺れていた。

しんかく……森羅万象ミシヤゲジ様の畏れ（後書き）

邪神みたいに描写して見えますが、そんな意図はないです。
自然の力に対する原始的な信仰がミシヤゲジ。

わざわざい……祟りとその顛末

ミシヤケジ
御左口様、動かず……。

正確には、協力の姿勢を見せたものの群体の弱点である行動の鈍さで
仏教推進派の政治的攻勢を急ぎ食い止めなければならぬ『今』を
防げなかった。
意思の統一に時間を掛けすぎたのだ。

すでに仏閣の建立計画が国家主導で複数動き出しており、
これは国津神の協力を得る為、中央を疎かにした神道派の完全な出
遅れ。

焦りが神道派を包んでいった。

……それが悲劇を引き起こす。

突如、大規模な飢饉、疫病が東から西まで覆った。

原因は中小の神霊。

焦りや不安から暴発し、祟り神に堕ちて猛威を振るい始めた。
それは己を信仰してくれる人間をも巻き込んで死を撒き散らす。

それに呼応してか御左口様が最悪のタイミングで動く。

黒蛇、黒鳥、黒獣。

呪いが形を成し日本を駆け巡る。

神が、真に崇るとはこういう事なのか。

作物は碌に育たず、天は荒れ、地は腐り落ちていく。

この世の地獄。

水鏡に落された墨汁に似て、澱みは伝播していき、
民草は恐怖から祟り神へ畏怖を捧げるではなく遠ざかり

新たな救いの『概念』、仏教に逃げ込み始めたのだ。

当然、私の信仰領域にも影響は大きく、多くの祖霊を呑み込み混乱を生んだ

保存食の備蓄も虫害や呪詛に侵されまともな状況ではなかった。

こうなると、必死に微少な地霊に至るまで全てを宥め、鎮め続けるしかない。

御左口信仰の力は伊達ではなかった。

誇張でも何でもなく、本当に日本を覆って余りある力の集合体。

知っていたはずなのにそれでもまだ甘く見ていた。

人知及ばぬどころか神知すら見通せないほどに、それは圧倒的だ。

幸いにも御左口様の力は海にはそれほど及ばぬようで、

新米の海神として食糧供給の元を絶たせぬよう沿岸部の集落は完全に守りきった。

私と共に呪いを弾く事のできた山犬は食糧を運んだり

流入してくる祟り神を祓う為、息つく暇もないほど走り回る羽目となっただが、

他国と比べれば格段に死者は少ないだろう。

それでも、少なくない犠牲だった。

元々、神道派は国家の鎮護は今まで通り国津神に任せべきであるとし、

このような惨劇を引き起こす気は初めからなかった。

御左口様が端末である中小の神霊から仏教への敵意を受け取ってしまい

それに勘違いを起こして祟りを広げるなど想定の外。

本来お願いしたかったのは小規模な自然災害での警告と、

それを完全に掌握しきる姿を見せることで

仏教が無くとも日本は十分に纏まっていると示す事だったのだが…

…。

過ぎてしまった時を取り戻す事はできない。

既に民心は神から距離を置き、仏へ近づいている。

こうして日本に仏教が根付いていくのだろう。

もっと上手いやり方はなかったのか。

私はどうすれば良かったのだろう。

考えても詮無きことだった。

私はこの地から動く事はできず、手の届く範囲は限られている。

それでも、後悔が絶えないのは、雉鳴女の行方が知れないからか。

3年が経ち、平穩が帰ってきた。

けれども全てが元通りになるわけではない。

私の土地にも幾つか寺が建てられる事になっている。

別に信仰に固執する理由もないので共存していきたいが、山犬や祖霊を被おうとするのなら、それは容認できない。それらに上手く折り合いをつけていかねば。

中央より追われた神霊が私を頼って流れてきている。

その部分で摩擦が起きぬよう、頭を痛めているところだ。

鶉鳴女に本日の仕事は終わりだと告げ、私は本殿へと帰った。

彼女は実に良く働いてくれている。

私がおらずとも、私の望むように動いてくれている。

その事を褒めると何故か表情を暗くするのであるが……。

もう少しで状況も落ち着くだろうし、

そろそろ休暇を与え、リフレッシュしてもらおう。

私は山犬と共に夕暮れに染まる空を眺める。

あの美しい雉は、この空の下にいるのだろうか。

かんぬし……穩やかなる日々

移民、移靈（？）も終息し、目的無く国を散歩できるまでになったが、

中央は相変わらずの政争政争のループで大変らしい。

政争によって建てられる事になった寺を眺めながら自分がそこまで偉くなくて良かったと思う。

今の私の立場を考えると、地方公務員に近いだろうか。

もともと、私は大和の神ではないので第三者的な面もある。
この寺はきつと私の監視と抑えとしてだろう。

……しかし、建材や職人が足りてなかったのはどうかと思う。

力を誇示する気は無いが、大和と敵対意思を見せたこともある上、引き分けまで持っていった実績を持つ相手を抑えるのに、拠点も満足に作らないとは、馬鹿にされてるのか、中央が馬鹿なのか。

政争やってる暇があるならしっかり地盤を固めろと思う。

派遣されている官僚や法師達の絶望した顔が可哀想だったので思わず寺の建立を手伝ってしまった。

霊の迫害を防ぐためにも神道と仏教で仲良くしたいし。

やはり現場の人間は道理が判る者が多い。

彼等としても、神霊が溢れるこの地方都市は恐ろしいのだろう。
仏心の加護があったとしても数に引くらしい。

私から集めたつもりは無いが、御左口異変から私を頼って人（霊）が増えた。

お互いが尊重し合うことが幸せな未来に必要な。

私の祝福を受けた寺は異なる信仰が混ざり合っていて、
ここから生まれる風は、陰陽問わず気を鎮める効果がある。
護国鎮護とはこういうものだろう。

争いの起こらぬ気風を作る事。

人も妖も、共に善き方へ歩こうという祈り。

これは神道と仏教の融合でしか成しえないだろう。

私は、私が提供した釣鐘が取り付けられる作業を眺めていた。
時刻の概念を定着させるにちょうどよいと、気合を入れた一品だ。

「杜人様、ここに居られましたか」

振り返ると壮年の男性。

彼は杜人神社の神主である。

最近では神霊を相手に話をするよりも対人間の交渉が増えてきた。

私や山犬が常人の前に立つと霊力と畏れで話も碌に出来やしない。気を使って力を抑えると今度は私が疲れてしょうがない。

すると、鶯鳴女が神威を代表する神主を立ててはいかがか、と提案してくれた。

私はモリトの血筋の中で、最も私との交感力の高い人間を選んだ。それが彼だ。

人間の居なかつた我が神社も、すっかり神社らしくなったものだ。ちなみに分社である綿津見の御社は彼の娘達を巫女として保守管理を任せている。

「鶯鳴女様が農地開拓について御話しがあるとの事です。」

他にも中央で動きがあったらしく本殿でお待ちしております」

中央に居場所を失っているにも関わらず、鶯鳴女は詳細な情報を集めてくる。

昔の伝手がどうとか言ってはいるが危険な事をしていないか少し心配だ。

その上、内政の手腕まで発揮し始めている。

休みを与えても、何故か仕事をこなしているのでワーカーホリックを疑う。

本当に色々な意味で心配になる娘だ。

果てさて、今日はどんな報告が待っているのやら……。

私は神主と共に彼女の待つ本殿へと帰っていった。

かんぬし……穏やかなる日々（後書き）

神社が出来ているのに神主が居なかった。

主人公自身が祀る側の人（霊）だったので今まで気付いていなかったのです。

モリトの血筋はちょっとした加護があります。

作物の育ちが良いとか、運が良いとか、水当たりを起こさないなど、かなりの信仰を集めている主人公の力が流れ込んでるからです。

ミシャグジと同じで、共同体である意識が集合的信仰の受け取りに繋がっています。

かいどう……この道は何処へ繋がるか

こうして落ち着いてみると、自分が凄く遠い所に来てしまったなと、しみじみ思う。

過去に放り込まれてからは生きることには我武者羅だった。身体が死んで、幽霊になってからは皆を豊かにするために悩んではかりだった。

……それが気付けばどうだろう。

仲間も沢山できたし、いつの間にやら神様にまでなっている。立派な御社も建ててもらったし、別荘（分社）まである有様だ。

これまでの道が正しかったかどうか判らないが、少なくとも、そう悪くはなかったと思う。

さて、今日も今日とてお散歩日和である。

玄関に出て、指笛を鳴らす。

山犬は時間を問わず、呼ぶとすぐさま駆けつけてくれる。

初めて会った時は敵同士、それから喧嘩相手、今では最も頼れる相棒。

普段は素っ気ないのだが、たまに甘えてくる姿が可愛くて、つい毛をわしゃわしゃこねたくなる。

……やりすぎるとこうして噛付かれるのではあるが。

ここ数日、ただ単にぶらぶらしていたのではない。

実際に歩いてみて整備が必要な街道を確認していたのである。

商取引が活発になるには商人が安心して通る事のできる道が必要となる。

私の奉納品を巡って激しい技術競争があったので保存食関連の品質

が高い。

現在、それらを都へ卸そうと商魂逞しい彼等が行き来してはいるが、獣などの被害は少なくない。

道を整備し、それにそって宿屋、飲食店ができれば新たな街が生まれ、

それによって街道が発展していけば物流がよりスムーズになり、芋類などこちらで栽培できていない作物の入手や、各種技術が交流で進歩していく。

もつとも、戦争を考えるならこの整備計画は完全に失敗である。

道とは軍事の基本的な拠点と考えても言い過ぎではないだろう。これまで何度も戦いや山賊退治を繰り返した中で身を持って学んだ確かな事だ。ある程度の行軍阻止力を維持していなければ、盾にも何もなれやしない。

まあ、戦国の時代をどうしていくか……は正直まだ考えなくともよいだろう。

今回は私の国との交流が、日本全体の豊かさを上げる一助となることを考えている。

私は日本が好きだし、どうせなら皆で幸せになりたいものだ。

こうして小難しい事を考えるのにも慣れてきた。

しかし、いくら年月を重ねようと、知的労働は疲れる。

鶉鳴女も一緒に連れてくるべきだったか……いや、これ以上彼女に仕事を増やすのもなんだ。

彼女は新米神主と巫女達への教育も引き受けてくれている。これ以上は酷だな。

息を深く吐き出し、山犬の背に顔を埋める。

うん、太陽の香りがする。

……実際にはダニだとかの匂いらしいけれど。

眞実は時に残酷なのだ知った。

正直、知らなければ良かったトリビアだ。

こんなものよりもっと農業とかの知識があればな。

今度は寝返りをうつて仰向けになる。

これは山犬との協力が必要な無駄に高度なテクニクである。

空の青さは、原始から21世紀に至るまで、変わらないな。

それから私は、山犬と共に日が暮れるまで気ままに歩いた。

かいどう……この道は何処へ繋がるか（後書き）

道の整備は戦国時代にも各武将が優先的に色々やっています。
戦争には道が必要なんですよね、空も海も。

しょうゆ……豊かな食は平和を作る

私が広めたのもあるが、遥かな昔からこの地域では製塩と保存食作りが盛んである。

何せ、魚醤などが渡来人に伝えられる前から此処では既に塩を利用し魚醤や肉醤を作っていた。

ちなみに豆類の栽培もやっていたので醤油もどきもすでにある。

初めの頃は塩をぶちこんで放置といったなんとも言えないものだったが、

今ではそれなりに体系化され、専用の工房を持つ者がでるほどに発展している。

こうした技術を学ぶ為に、中央から職人達が派遣されてきた。

まだまだ食の安定しない時代。

政府高官が栄養失調など笑えない話である。

そんなわけで、仏教を国家規模で広げると平行させて各地域にある『食』に関するあれこれを収集しているそうだ。

なんとも日本人らしいと思う。

日本人が本気になるのは義理を果たす時と食べ物関係だけだ。

もちろん、ただではなくそれなりの要求も中央へ投げた。

調査した他地域の新しい作物や加工製品の情報開示と、それらの試験的栽培や試作を私の土地で優先して行う事。

……まさか即答でOKを貰えるとは思わなかったが。

私はやるつもりはないが、自分の土地でやらないと利益の独占とできないだろう。

そういった権限を放棄してこっちに丸投げするとは、本当に呆れた。代わりに各種技術仕官の育成を頼まれたが。

失敗する可能性もあるが潜在的敵対勢力が裕福になるのを見逃すとか、馬鹿なのか。

と、思ったがそれなりに理由もあるらしい。

国津神が拗ねてしまつて土地や人の加護がなくなりかけているように、

それをカバーする為に法師たちが東奔西走と大変なのだそうなの。

そうなるとうハウのない作物の栽培は土地神の祝福なしでやるのはキツイ。

そこに私が自分から名乗り出たのである。

ついでに道の整備も進んでいるので、もはや叛意は無いだろうと考えているのが多数。

昔に雉鳴女が私の評価を正そうと良い噂ばかりをばら撒いていたのが芽を吹いたのか、

『杜人綿津見神は悪には悪、善には善を返す、自らの姿を映す神だ』との評も理由か。

交易なども、民を豊かにするための行動に垣根をつけていなかったから、

そのまま独占に走るといった行動も取らないと判断されたのだ。

中央でも必要だろう人材を預けままでして、全面的に協力をする。

私はそこまで人（神）が良いわけではないけれど、ここまで無防備に信頼されると応えないわけにはいかなくなる。

そんなこんなで、現在は北九州と私の土地が技術開発の最前線となっているのだ。

まあ、北九州は第二次産業（工業）、こっちは第一次産業（農林水産）であるが。

日本はおそらく正史よりも豊かになっていると思う。

まだまだ各豪族間で小競り合いが絶えないものの、概ね平和である。中央には是非とも頑張つて、戦乱の起こらぬよう努めていた。ありがたい。

豊かな国は豊かな食生活から。

ご飯、醤油、焼き魚。

これだけあれば日本人は幸せになれる。

それを安定させるのが今の私の仕事だろう。

……仕事を終え帰宅中、酒蔵の主から声を掛けられた。

芋を使った酒の試作品が出来たようだ。
生前からあまり強くないが、是非とも試飲してと言われれば断れない。

うん、おいしい。
これは名物になるな。

私はNOと言えない日本の神様。
その後もあれこれと飲まされてしまった。

ほどよく気持ちよくなった私と山犬はその日帰らず、
睡眠の必要なぞない身でありながら、とある農家の軒下で爆睡して
いた。

翌朝、私は鶉鳴女、神主、巫女総出で怒られる事になった。

早朝から迷惑をかけたその農村には、
お詫びの気持ちを込めて豊作祈願を念入りにおこなうこととなる。

しょうゆ……豊かな食は平和を作る（後書き）

醬……たしか今の醤油だとかの原型になるやつですが、

『大陸伝来説』と、『日本でも同時発生してた説』があるんです。

この日本史では主人公のおかげで『日本でも（ry）の方となった
ようです。

藤井教授が現代で語ってくれる……はず。

豊かな食は平和を作る……が争いの種にもなる。

杜人閑話……雉の行方『半生』

……昔はただ生きてゆくのに必死であった。

母は私を産んだ後、優しく育ててくれた。

母は私を温かく包み、巢は私の世界だった。

すぐさま私の世界は壊れる事になるのだが……。

ある日、母が死んだ事を知る。

直接、母の遺骸を目にしたわけではないが、母はその日を境に巢へ戻る事はなかった。

1人、母を待つ日々。

孤独と飢えに震えながら私は待っていたがじきに悟る。人か獣かいずれかに狩られ、命を落したのだろう、と。

揺り籠の崩壊。

それから生きる為の戦いが始まったのだ。

泥水も啜れば、腐った屍肉だろうと私は口にした。

吐き気を催しながらも、己が屍にならぬよう何でもやった。

この翼は小鳥のよう軽やかに空を舞うには重すぎて、この足は野獣のよう素早く地を駆けるには遅すぎる。

口先で難を逃れ、罠に誘い出し、危険と判れば臆面も無く逃げ出す。生きる為に卑怯卑劣の限りを尽くして私は命を繋いでいた。

私が嫌いなこの世界で、私は誰よりも嫌われ者だ。

しかし、それでも必死にしがみついた。生きる事に、命に、しがみついていた。

ただ私だけを信じて。

あの暖かな世界が壊れた日から、ずっと怖かった。

突然訪れる『死』の裁定に身体が震えるから、私は生きていた。

ある時、私は肉体を捨てる事になる。

多くの命を喰らい、永く生きてからだろう。

雉の変化になってからも、私は生きる為に戦っていた。

人型を取れるようになったのはあの便利な手に憧れたからか、
はたまた誰かと繋がって生きている人間という種を羨うらやんだからなの
か。

繋がらねば生きてゆけぬ弱い弱い種族、人間。

私は『孤独』が己を縛っている事を知った。

『温もり』『優しさ』を求めているのだと。

……それでも私は独り汚く生き抜いていた。
それ以外の生き方なぞ知らなかったのだから。

ひよんな事から私は倭と名乗る国に拾われる。

正確には、山狩りの際に捕まったのだが、この国は建国されたばかりであり、守護を担う神霊を欲していた。そこに丁度良く私が捕まったので手駒としたわけだ。

この国にはすでに沢山の神霊がいた。その誰もが強力で、私など比べるも痴がましい。

……何故、あなた方は、私を必要とするのですか。私はそれを聞かずにはおれなかった。

しかし、彼等は本当に私を必要としてくれていたのだ。

いずれこの国は全ての土地を手に入れる。どれほど手があるうとも足りぬかもしれん。私と私の民の為、お前の力が必要だ。

……王は私の手を握り、真っ直ぐに私を見据えてそう言うてくれたのだ。

その眩しさに魅せられて、私は倭に忠誠を誓う。

私は、もう『独り』ではなくなった。

誰かと、誰かとようやく手を繋げた喜び。

その『温もり』と『優しさ』に泣いた。

王の誇りを傷つけぬよう、私は、汚い私を捨てた。

今までのような卑怯卑劣で王の威信を揺るがしてはならない。
浅学を晒し、王に恥を掻かせてはならない。

私は今まで生きてきたのと同様に、必死に学を積み、あらゆる経験を積んだ。

王の様に、真っ直ぐ、綺麗に生きたい。

その為に私は過去の私と決別したのだ。

時代は流れ、何代も王が代わる。
それでも私の忠誠は変わらない。

必要としてくれる者がいるならば、そこにいたい。

私は己の限界も知っていた。

霊力はこれ以上成長する事はなく、戦いにも向かない。
だから私は誰かを補佐できるよう情報を司る者となるに至る。
私を初めとして鳴女の一族が生まれた。

それと同時期に機は熟したと王の東征が始まった。

この日の為に鍛え上げられた軍勢は順調に土地を支配下に置いてゆく。

……唯一つの敗北を除いて。

時の王、カムヤマトイワレビコノミコト神倭伊波礼毘古命の初めての敗北。

モリトと名乗る、山に守られた国を守護する土着神に敗れたと。

それを耳にした時、私は何故それを防げなかったのか悔やんだ。

その時、私は西国にて王不在の国内を纏めるため政務の補助をしていたが

斥候が情報を集める事が出来ていれば、王の霸道に傷を付けることはなかっただろう。

私に連なる部下の教育をもう少し詰めていれば良かったか、と。

最終的には和睦となったが、八咫鳥ヤタカラスを退ける武力を持った神。従軍した兵士達も、その荒ぶる神の武威に恐れを抱いている。

この和睦の裏で、牙を剥く気であるまいか……。

私はそう考えると王に願い出していた。

彼のモリトと名乗る神の抑えとして私を、と。

初めて目にしたモリト神は、想像よりもずっと貧弱に見えた。

この神が本当に八咫鳥と互角以上に戦ったのか疑うほどに。

私は警戒しながら監視を続ける。

不穏な動きをすればすぐさま伝令を飛ばし、可能であるなら私自身の手で討つために。

しかし、彼の神はひたすらに民の安堵に苦心しているだけ。

荒ぶる神の姿などそこには無く、優れた統治者がいるだけだ。領民の一人一人を考える優しき賢い神。

その姿に、私は初代王を思い出した。

懐かしさもあつただろう。

いつしか私は彼の仕事を親身になって手伝つようになっていた。

叛意無しとして中央に帰還した私は、地方を結ぶ情報網の作成に追われる事になる。

鳴女の一族は皆が皆、力の小さい戦いに向かぬ者ばかりだったが、それゆえにそれぞれが器用な特技を持ち合わせており優秀だった。

しかし、ある時、

私の世界が壊れたあの日と同じように唐突に……、

私の世界は再び壊れてゆく。

王の、仏教を国の宗教としよう、という一言によって。

杜人閑話……雉の行方『半生』（後書き）

雉の人、その半生。

みんなそれぞれがそれぞれの長い物語を背負って生きている。

杜人閑話……雉の行方『罪と罰』

国津神に代わる国家鎮護の方法。

それは、私たち弱い神霊が存在価値を失う事。

それでも干切れそうな心を押さえながら私は職務に励んだ。

……大丈夫、私は、鳴女の一族は、まだ『必要』とされている。

そう自分に言い聞かせるようにして、不安を振り切るように仕事をこなした。

けれども、神道派と仏教派の対立が激しくなるにつれ、

私たちは冷遇され、あるう事が裏切り者と疑われる始末。

……私つ、私は、私はずっとあなた方に仕えてきたのに！

『必要』としてくれて、私に『居場所』を創ってくれた王に報いてきたのに！

これが、この仕打ちが、数百年の忠誠への、答えなんですかっ！

私は神道派へ付く事となる。

そして、各地の国津神、土着神へ協力を要請するために鳴女の一族の戦いが始まった。

元々、鳴女の一族は『居場所』を欲した弱き神霊の集い。

私たちは立った。

『必要』としてください、とただそれだけの願いの為に。

私は、真つ先にある神の元へ訪れた。
民と共に悩み、困っている者がいれば助け、義を知り裏切る事はな
い。

あの優しき賢神もりひとのわたつみ杜人綿津見神の元を。

彼ならば、きっと私の気持ちを知ってくれる！

初代王と同じような優しさで、私を、私を、きっと助けてくれるっ
……！

……彼の困った様な顔に、私は血の気が引くのを感じた。

その時の私はこの上なく浅はかで、醜悪で、見るに耐えぬ愚かさを呈していた。

己の都合に彼の『優しさ』を利用し、侮辱していたのだ。

私は、なんと馬鹿な事をしてしまったのだろう。

もっとも卑劣な方法で、彼の信用も、信頼も、何もかもを裏切った。

そしてそれは、過去に決別したはずの『汚い私』そのものだった。

結局、私は何も変わってはいなかった。

繕った『清さ』でただ表層を覆っただけの愚劣で醜い存在のまま。

もう、彼の顔を見る事は叶わない。

顔向けできぬ、とはまさにこの心境を言うのだと知った。

別れの際の彼が言った、鳴女の一族を受け入れるくらいはできる、
という言葉は、

その気遣いは、その優しさは、その温もりは、私の心を強く突き刺した。

それからただ、薄汚いただの一羽だったあの頃と同じく、ただ必死だった。

必死であることで、何も考えぬようにして神道派における己の役割を果たした。

そして、御左口様ミシヤケジの大禍刻おおまがときが全てを侵す。

こんなはずではなかった。

こんなことをやろうとしたわけじゃない。

こんな、こんなはずでは……。

神道派はこの失態で悉くが失脚し、敗北した。

そして、被害が杜人綿津見神の領地にも及んでいると報告を受けた時、
私は二度と彼に受け入れられる事は無いと悟った。

御左口様と交渉したのは私であり、この災いを呼び起こしたのもまた、私なのだ。

それでも、私は、鳴女を率いたものとして、
恥知らずを承知で彼の優しさに甘える。

一族の身の振り場所として、彼の言葉を頼って一族を落ち延びさせたのだ。

……醜い、なんと醜い心根の持ち主だ雉鳴女よ。

夜毎に私を罵る声が聞こえる。

これは私の罪の意識が生み出した己への罰だろう。

自ら死を選ぶ事なく、許されたがっている、醜い私への。

贖罪と称して鶉鳴女を通し彼の仕事を陰ながら手伝う。

決して知られぬよう、見つからぬよう、今まで得た全ての能力を用いて隠匿する。

この行為の実に浅ましきこと。

結局は、ただ『繋がっていたい』という欲望。

そうと知ってなお欲するのを止められぬ己。

世界で最も嫌われ者の私を、私は他の誰よりも嫌いだ。

杜人閑話……雉の行方『鳴女の親子』

混乱も治まり、仕事が落ち着きを見せ始めた頃から、
鶯鳴女は私の住む深奥の小屋を仕事とは別に、定期的に訪ねて来る。

今日もその日のようで、書類も何も持たず、彼女はやってきた。

こういう時、彼女が何を言い出すのかは分かっている。

「まだ、自分を許せませんか？」

度々、彼女は私にこう問いかける。

許すも何もない。

私は彼に裁かれるべき罪を抱えながら逃げ回っている卑怯者だからだ。

その点、鶉鳴女には悪いと思う。

不甲斐無い私に代わり鶉鳴女の一族を率いているのだ。さらに仕事を私の為に受けてきてくれる。

彼女がいなければ私は罪を償う事すらできないから。

「その事よりも、技術仕官の受け入れ案を纏めておきました。

東の村で使えそうな土地が余っていますから併せて工房の建設計画書がこれです。

予算の詳細もそれに。いつも通り、仕事をこなしてください」

私は彼女に今日終わらせた仕事を渡した。

彼女が見せた辛そうな顔に心が痛む。

そういう風に思っ資格すらない私の心が。

いつもならここで引き下がってくれる鶉鳴女は、いつもと異なる気迫を込めて食い下がって来た。

「……もう……もういいじゃないですかっ！」

彼女らしからぬ大声に私は怯んだ。

「貴女は十分にやってきましたよっ！」

おかげでこの国は豊かになってきています。

この前の台風だって貴女が考えた堤防補修工事で被害は軽微でした！」

溢れ出る感情の濁流が言葉に乗せられている。

「鳥獣害を減らしているのだって私は知っています！」

区画整備、街道の発展も貴女の力がなければここまで上手くはいかなかった！」

涙を流しながら、心をぶつけてくる。

「あの時、貴女は全ての責を知らずに負っていたんです！」

だから心ならず、ほんの僅かな過ちを犯してしまっただけっ。
それもこれも鳴女の名を貴女だけに背負わせた私達の罪なんです！
我々鳴女の一族郎党全員が、貴女を許しますっ、認めますっ、だ
から……！」

彼女の可愛らしい表情は悲しみでクシャクシャに歪んでいる。

「……許されるっ、母さんはっ、許されるべきなんです！」

全ての言葉を吐き出した最後に、私に縋り付くと、
鶯鳴女は私の胸でシクシクと泣き出した。

「ひっく、お、お母さんが、悲しいと、んっく、みんな、か、悲し
い、のに」

私は、そつと義娘むすめの髪を撫でてやった。
だいたい二百年振りだろうが、こつして義母ははと呼ばれるのは……。

血の繋がりどころか種族も違う鳴女の一族。
それでも私達は確かに家族なのだ。

「……随分昔に一人前になったと思ったのに、
やっぱり泣き虫で、甘えん坊なのは変わらないのね」

鳴女は一人立ちできる能力を身に付けると、一人人同士になるよう
躰けられる。

それは、情報を扱う仕事に身内贗肩を混ぜたりしないようにする訓
練でもある。

けれども、私は娘を突き放す事なんてできない。
彼女を拾った時と同じように、あの懐かしき日々と同じように、背
中をトントンとあやしてやる。

「お、お母さんが、ひっく、ん、お母さんが、ばか、ひっく、ばか
だから」

そうかもしれない。

けれど、今更戻れないのだ。
私は、私を未だに憎んでいる。

そして、彼の前に立つ勇気も、無い。

糾弾されるのが怖くて、怖くて、地を這って逃げている、泥塗れの醜い雉一羽。

彼の前に立つことで、私はこの最後の『繋がり』が絶たれてしまうのを恐怖している。

「……っしょ、一緒に、あやまる、わたしも、っく、行く、から」

しゃくり上げ続ける娘は、恐怖に震える私を強く抱きしめた。

『温もり』が心を満たしていく。

けれど私は……。

「私は、……私は今のままでいるべきなのよ。

こうして罪を償える事は、きっと、幸せなことなのだから」

一步を踏み出すのが怖い。

「だめ、お母さん、泣いてる。

そんな顔して、幸せなはずない」

言われ、初めて頬を伝う雫に気が付いた。

「泣いてる……、私……泣いてる？」

こんな汚れた心でも、涙を流す事が出来るのか。

何故、泣くのか、何故、心が震えるのか。

あの頃へ戻りたいと願っているのか。

浅ましくも願おうというのか。

……私は。

私は……。

杜人閑話……雉の行方『鳴女の親子』（後書き）

鳴女を背負っていた重庄は当時の彼女を苛んでいた。
その重荷を鵜鳴女は外してやろうと動きました。

さて、彼女は何を選択するのか。

かのきじ……親想う鶉のさえずり

中央の情勢は陰惨を極めているそうだが少しの落ち着きをみせた。

暗殺に暗殺が相次ぐなか、初の女性大王、私の知る所の天皇が即位したらしい。

とよみけかしぎやひめのみこと
豊御食炊屋姫尊こと、推古天皇。

かみつみやのつみやととよとみのみこと
上宮之厩戸豊聡耳命がその補佐と付く。

こちらにも馴染みある言い方と言えば聖徳太子。

……名前については鶉鳴女經由で教えてもらったものだが。

私の中では歴史教科書にしかいなかった人物。

女性天皇の即位、そして冠位十二階と十七条の憲法が制定されなければ

彼女等がそうであるとは思いつくことは無く、気付かなかっただろう。

私は一生懸命に生き、死んでからも一生懸命に今を豊かにしようと頑張ったが、

それでも、私は、どこか遠くに時代を眺めていたのだと知った。

時代とは現在いまなのだ。

自分はこれまで、果たしてその重みを感じていただろうか。私はより気を入れて全てに当たらねばなるまい。此処が私の居場所なのだから。

と、私の反省はさておいて、時代はこの2人を鍵に動き始める。

各地の豪族の裁量に任せていた軍事、税を中央が管理するようになった。

不足する人員は、氏姓に縛られることなく有能であるならば取り立てられるよう法を定め、さらに大陸にも使者を送り学を深め、試行錯誤を繰り返しながら中央集権を進めてゆく。

結果、今まで大和と呼ばれた国は一つの区切りを迎え、日出ずる国、『日本』へと向かっていった。

そんな中、『三宝』を敬えという国家的な思考統制が齎したものの。

三宝とは仏・法・僧。

仏教による国家鎮護をより進める政策であったがために
神と人の距離は徐々に離れてゆき、人の色が強くなってゆく。

その時、僅かだが、確実に、人は神秘を失った。

私はまだ、それがどのような未来を描くのか気付いてはいなかった。

何故なら、私は国家の転換期、国を治めるのに全精力を果たして
いたからだ。

肅々と山に恵みを与え、海を鎮めて、配下の神霊を統率する。
民を豊かにしていくためにいつも通りの仕事をするだけであったが、
今回、税や土地の扱いに関して、不当な取立ての防止や、税を集め

られぬ場合の保障など、
法の穴に悪用の恐れがある部分に関しての上申書を中央に送ったり
会談したりが増えた。

とはいえ、少々仕事が増えても、それは前述したようにいつも通り
なのだ。

精根尽き果てるような忙しさになったのはある理由があった。

なんと鶯鳴女を含め、鳴女の一族の全員が突如休みを欲しいと言
出したのだ。

こちらとしては常日頃から休まず働いてくれる彼女達に休暇を与
えるのは吝かではないのだが、
ストライキ染みた一斉休暇申請は進行中の各事業を停滞させかね
かったので大変困った。

急遽、休暇のローテーション表を作成し、出来た穴を私自らで補
つて回してみたが
本当に彼女達の仕事能力には頭が下がる思いだった。

山林に詳しい者、水利に詳しい者、医学に詳しい者、農業に詳しい
者。

おそらくそれぞれ細かい仕事に至るまでの確に才能や適正を合わせ
て分担していたのだろう。

私はとてもじゃないが完璧にこなしたとは言えず、何とか及第点レ

ベルの仕事振りだった。
と、同時に彼女達に甘えすぎている事も自覚した。

それらが一段落ついたあと、
私は鶯鳴女にどうして一族全員がこのような休みを取ろうとしたか
尋ねた。

労働条件が悪かったのならば改善するので教えてくれ、と。

鶯鳴女は、静かに答えた。

貴方様に不満があるのではありません、身内で少し問題がありました。
て。

私はそれこそ一大事だ、と焦った。
この国に鳴女の一族は必要不可欠な存在となってきた。

何か私が手伝えることはないだろうか。

再び私が問いかけると鶉鳴女は誰かを思わせる鋭い眼差しで、「では幾つか、質問をよろしいでしょうか」と問い返してきた。

それは遙か昔に雉鳴女から詰問を受けた情景に似ていた。美しい刃の様、凜とした声色までもが。

「雉鳴女を憶えていますでしょうか？」

憶えています。

当時、彼女には大変助けられましたよ。

「雉鳴女を恨んでおりますか？」

何故、私が彼女を恨まねばならないのですか。
むしろ彼女こそ私を恨んでいるはずでしょう。
私は彼女の心を手酷く裏切ったのですから……。

「もしも雉鳴女がこの国に戻るとしたら？」

歓迎します。

そして、私は過去の裏切りを詫びねばなりません。
憎まれようと怨まれようと、その責めを負う義務があります。

「……会えるのならば？」

……会いたい。

最後の問いに私が答えると、
鶯鳴女は安心したように視線を緩め、大きく深呼吸をした。

私は、鳴女の一族が『彼女』を発見したのだ、そう確信する。
でなくばこのような質問がなされる理由が無い。

『彼女』は無事なのか？

鳴女の一族にとって雉鳴女はどのような地位の者だったか私は知らない。

一族全員が休みを取ってまで彼女に対する問題に当たるといのは異常に思える。

厳しい戒律や掟があるのではないだろうか。

彼女に会いたい。

会って、頭を下げ、謝らなければならない。

自己の保身のため、彼女を見捨ててしまった事を。

たとえ彼女に許されなくともそれだけは。

私は自然、鶉鳴女の手に縋り付くよう両手で握り締め、頭を垂れる。
雉鳴女に会わせてくれ、と何度も何度も懇願した。

「雉鳴女は必ずここに帰ってきます。」

何故ならここは彼女が必要とされる場所だから……。

ですから、もう暫し、ほんの少しだけお待ちください」

誰も悪くないのにお互い自分を責めたがる……ほんと似た者同士な
んですから……。

そう言って笑う鶉鳴女が印象的だった。

かのきじ……親想う鶯のさえずり（後書き）

鳴女の一族が休暇申請したのは雉鳴女に一步踏み出してもらおうと

全員で雉鳴女を応援するため。鶯鳴女の提案。

一族全員がこうなった彼女に負い目を持ってもいた。

贖罪だと言って病的に仕事をこなす彼女の為に、家族の情を捨てていた

鳴女達はどうにかしたいと思いつつも何もできずにいた。

その中でも特に雉鳴女を慕っていた鶯鳴女が感情を爆発させ、

雉鳴女の気持ちをおぼれずかでも動かすことが出来たのが切欠となって皆が動いた。

一族の絆は、血よりも濃かった。

あやかし……陰陽師の出現

あの日の出来事から随分と年月が経ったが、私は雉鳴女とは未だに逢う事が叶わずにいた。

鶉鳴女曰く、まだその時ではないのでしよう、との事。

私はいつ彼女に謝れるのか。

正直な所、刑の執行を待つ咎人の心境である。

しかし日々の仕事は待つてはくれない。

今日も今日とて、様々な案件が飛び込んでくるのだ。変わらず新たな問題に頭を悩ませていたりする。

それは陰陽師。

私の貧困な想像力でだと、妖怪と戦ったりお札で呪いを祓ったりだとか、

そういうオカルト的なものだったが、実際は意外と地味な仕事だ。

もちろん心霊現象を扱う部分もあるのだが、

気象、天体観測や、水時計などを使った時刻管理。

あとはもっぱら各省庁の公文書の管理といったものである。

初めは政務を補助する程度の小さな部署であったのだが、

大陸からの技術者などが主となって構成されていて、

その外交的重要性から次第に発言力を増していったのだ。

結果、都を護法するには過剰なほど人間の霊的武力が平城京に集まっている。

陰陽術は大陸の道教などと神道、仏教思想とも混ざりあっており、それぞれへの信仰が奇妙に融合されていたのか凄まじい進化を遂げていた。

『力』の貸借といった形で複数の概念から奇跡を取り出す事まで可能になっている。

ここまでの部分だとそこまで問題というわけではない。

だが、国津神の離れ始めた都は安定を欠き始めていた。神霊に代わりに人間が『力』を行使するようになるものとあるものが現われる。

人間の想念から生まれ出でる妖。あやかし

自然から生まれたのではない、人間派生の『妖怪』出現である。

この本来有り得ぬ存在を消し去るために更に靈的な力を高めよう、集めようとし、それが結果的に人の心から化生を生み出していく。

都に派遣している鳴女によると、この負の連鎖が始まっているという。

まあ、都の中心で権力争いに暗殺など暗い情念を燃やしていれば然もあらん話だ。

そして、陰陽師が金になると思った馬鹿共が大した力も知識もない俄か陰陽師となり、命を落すだけならまだしも妖に魅入られ、魔に落ちてしまい強盗、強姦に走るなどしている。

民間陰陽師が増加し、皮肉なことに被うべき妖怪化生も増加の一途。

それに釣られて街全体の空気が悪い事を悪いと思えない空気になっ
ていき、

ちよっとした不満から軽犯罪を犯す者も増えてくる。

都の治安が急激に悪化し始めているのだ。

ぶっちゃけると、中央の事は中央で処理してもらいたい。

しかし、民間陰陽師が賊崩れとなったり、妖怪の雪崩れ込みなどとなつて、

すでに我が領内でも乱暴狼藉を働きだしているので放置するわけにもならなかった。

今のところ頼れる番犬である山犬によって水際で退治したりもしているが、

いつまでも防ぎきれるとも判らないし、いつまでも続くようでは交易などに影響がでる。

私の領民が陰陽師を必要としないように土地の浄化や祝福などおこなつて

信仰が離れないように各地域の祖霊や守護者に言いつけてはいるが、現状維持が精一杯だ。

改善には至らない。

ここはもう、教育してもらつしかない。

大陸より入った儒教などの日本人の道德観を教育する思想を上手く利用するなどして

日本人のモラルを高くしていけないとやってられないのだ。

事細かに起きてしまった事件を書に纏め、上奏する。

都の陰陽寮がもっと真面目に仕事をしてくれさえすれば良いのだ。

それこそ無償とまでいかずとも国家がある程度を保障するようにすれば

わざわざコストの高い民間で陰陽師の真似事も出来なくなるし、発言力も上がるだろう。

そついう風に助言してやって改善させていく。

……あまり陰陽師が神格化されていくのは望ましくないが、痛し痒しである。

そも大和を守護していた神霊衆は何をやっているのか。

未だに仏教に対して拗ねていたりするのだろうか。

いい加減に立ち直って民を治めて欲しい。

この世はままならんものだなあ。

私は書きかけの書状をそのままに、境内へ出て空を見上げた。

あやかし……陰陽師の出現（後書き）

雉鳴女はまだ躊躇ってます。

「あ、明日行こう」「……今日は雨だから」「台風で今は忙しそう」
そんな感じで勇気を出せないままモジモジとしております。

もともと、そんな状態でも陰ながら主人公の仕事を手伝ってますが。

陰陽師。

実際は特殊な技術を持った人の集まりなだけで、特殊さ故に地味です。

この物語では民間陰陽師が治安を悪化させる遠因に。

人の敵は人、ここから多種多様な妖怪が人から生まれていく事となります。

かむさび……忘らるる神秘と平安の都

平城京が限界に近づいている。

元々が水資源の確保に難い土地柄ではあったのだが、都の拡張と居住者の増加によって賄いきれなくなっているのだ。更に、生活廃水によって少ない河川が糞尿などに汚され、伝染病を蔓延させてしまい、民衆は不安な日々を送っている。

食料品を中心に物価が上がり物取りが増えた。

一時期は治安の悪化が改善に向かったものの、都は再び危機を迎えていた。

こうして民草が困窮しているのに中央は相変わらずの権力闘争。民心は離れていく。

私はこの水から始まった一連の問題から泣沢女ナキサワメが力を失っている。

そう確信した。

泣沢女は古くから大和についていた水の神霊である。

伝承によれば涙から生まれたとされ、

『泣き』は湧水を、『沢』は古語の多いを意味する。

水の浄化、水源の管理を行なっており、ある種生活に近い存在。

必須となる生活物資であり、生活基盤となる水を象徴する神霊だ。

彼女には実は面識があったりする。

雉鳴女がまだ私の国にいた頃、地下水を探知できないかと協力をお願いした事がある。

非常にネガティブな性格だが親切にしてくれた。

災いを齎す神ではなく、むしろ益神。

その上、農業従事者の命綱と呼べる水の神霊が力を失う事態が訪れるなんて信じられなかった。

私はすぐさま鷓鳴女に事実を確認してもらった。

結果は、発展の弊害によるものだった。

ここ数十年で随分と人間の神離れが進んでいるらしい。

新たな人の力として仏教の信仰代替力『法力』

自然を巡る様々な因果から信仰を貸借する『陰陽術』

人間が神だけに頼らずともよくなった事で信仰が減少している。

そしてそれは、信仰によって力を補っていた元々の霊力が少ない神霊を中心に影響を及ぼし

最悪、存在が限りなく希薄なものとなり消滅も有り得るといふ。

215

泣沢女のケースだと、井戸の掘削技術や堤防の建設技術などによって水の神霊に対する信仰の薄れが原因となって力を失っているとの事だった。

それでも大和の神として可能な限り都の水利を守ろうとしているが、手も力も足りず病を食い止めることができなかつたという。

伝染病の解決に陰陽師が奮戦した事もあつてか更に信仰が低下して
いて、

このままでは都を守り切れない、と毎日涙を流し続けているそうだ。

人間が豊かになり、神の力を借りずとも
自らの手で道を切り開けるようになるのは私も望んでいた姿である。

けれども、不思議な寂しさが私の胸を締め付けていた。

忘れられはじめた神々……。

私もいずれそうになっていくのか。

中央は平城京を捨てる事を決定する。

平城京より北へ行った平野に、新たに都を創る計画を立てたらしい。

大和の神々の協力によって創られた平城京を捨てる……。

これは単に遷都しただけではない意味を含んでいるように思えた。

平安京、そう名付けられる都。

名前通りの時代が訪れて欲しいと思う。

かむさび……忘らるる神秘と平安の都（後書き）

忘れられていく神々……主人公もそうなっていくのか。
何より本人に対し信仰を持たれない鳴女の一族は……

おはなみ……桜は誰が為に

今年も山桜が咲いた。

近代のように覆い尽くすような花吹雪とはいかないが、春の山を程よく彩って美しく、これはこれで風情があった。

私がどうしても見たいからと、

桜の木を鼻肩して祝福してしまつたのは日本人の性さがだろう。

桜は樹木の中で強い種類ではなく、むしろ病気や湿気、虫など弱点が多々ある弱い木だ。

それがこのように見事な花を咲かせるから、心惹かれてしまうのか。

そして、農民は桜が咲く事で田畑に種を撒きはじめる。

『種蒔き桜』と呼んで一年の農作業が始まっていく。

彼等にとって桜は新たな命を運んでくる先触れなのだ。

桜と、上手い酒。

それだけ揃えば後は何をせずとも花見になるう。
今年はそれだけで終わらせる気はなかった。

人も、神も、妖も、

皆が春を祝う、神遊び。

特に桜が多く景観の良い高台に私は陣取った。

身分どころか種族の垣根も取り払って

ただ今年も春が来たのだと騒ぎ合うのも一興じゃあないか。

そう言つて山犬、鳴女の一族、祖霊衆、官民、農民、漁民も席を共にし杯を掲げ、

陽気に誘われた地霊や妖怪達もそろそろとおっかなびつくり輪に入る。

鶉つくみに 花鶉あとり、真鶉まじわなど、鳴女の喉のど自慢が歌を披露し、
黄鶉きひたきが歌人俳人の真似をすれば、かけす?がおどけて旅芸人の真似をする。

やんややんや、春を謡えと。

鳴女の一族は基本的に裏方だ。
自ら表に出る事はまずないだろう。

昨今の神霊に対する恐れや信仰の低下は確実に彼女達にも影響を与える。

そして、それは日陰者の彼女達には致命傷となりかねない。

かちよつやく
歌鳥桜祭りうたどりと称して表舞台を作つてあげたかったのだ。

信仰を得るのとは少し違う、『そこにいる』と認識してもらうだけの祭りだが

私が呼び、それに応えた者共という事で私との関係性を強くし
二次的な信仰の流れ先となって鳴女の助けになるのを狙っている。

ついでに鳴女達のように自らを出すに至れぬ小妖怪たちにも効果を
期待していたり。

私達神霊以上に人が無くては存在が保てぬのが哀れだったのと
痛みを伴う教訓的な神秘（妖怪）は人間の倫理観を育てるのに必要

だと思ったからだ。

……まあ、それらは結局言い訳で、実際は失われていく者に対しての感傷なのだろう。

既にそうなった者が居たから、私は新たな神遊びを実施したにすぎない。

近頃は段々と自分本位な、
とても神と呼ばれるに相応しくない行動が増えてきたと自覚している。

民の為、民の為と言いつては、私の手から離れるのを怖がっているだけ。
面倒を見てやると言いながら己を他より高い位置に置いておきたいだけ。

これは自分勝手な考え方だと思う。

さくら、さくら。

美しい花と醜い私が良いコントラストだろう。

誰もが心を喜びに沸き立たせ、歌い、踊る。

仕事詰めでストレスもあったのか、鶉鳴女は一際目立っていた。
鳥の歌は可愛らしく、曲飛行は幾何学な軌跡が美しい。

……こつこつという風景をずっと見ていきたいな。

その為ならこの醜い我が儘も許されるだろう、なんて自己弁護をしながら私は桜を見上げた。

何処からか雉の歌が聞こえる。

ああ、もしかして全ては君の為だったか。

おはなみ……桜は誰が為に（後書き）

お花見は日本人には欠かせない。

鳴女や小さい妖怪を保護する為に神遊びを開きました。

その実、雉鳴女の為。

会いに行くと言って作中で何年も既に経過してます。

主人公が段々と神らしさを失っていくのを危惧してます。

元々そうでもなかったですが、神らしくあらねばならなかった昔と
違い、

民が神を必要としなくなってきた事で元の間人間色が強まってきたよ
うです。

このことは一体何に影響するのか。

しんとう……その刃のうつくし

唐突だが、日本では鉄鉱石の入手が困難である。

大陸のように鉄鉱石が豊富なわけではなく、鉄器は高級品の証だ。

制限された資源によって、日本の製鉄技術は独特の進化を遂げていく。

それが、砂鉄から純度の高い鉄を還元する『たたら式』製鉄だ。

更に、より良い物を作れないかと切磋琢磨し鉄器を作る内にある到達点に至る。

『折れず』『曲がらず』『良く切れる』『最高峰の刃物。』

日本刀の登場だ。

昔から九州や山陰地方で刀剣類の開発が行なわれていたのは知っていた。

残念ながら私のお膝元では鉄鉱石どころか砂鉄すら碌に手に出来ず鍛冶工房は申し訳程度の規模のものが領地内に二箇所しか存在しないのだ。

鉄製農具による農業振興策は始まる前から頓挫してしまっただけでどうしようもない。

……この構想、当時は雉鳴女、今は鶉鳴女に呆れられている。

鉄がここまで高級品過ぎると思わなかった。……少々脱線してしまったか。

今までに見た事のある刀剣は両刃であったり、片刃とは言えど直刀だったりと

自分のイメージにある『日本刀』とはちょっと違うものしかなかった。

あくまでも刀より剣の範囲にあるものが多かったと思う。

しかし、今、目の前で陽光煌かす白刃。触れれば即ち斬れる、これこそ日本刀。

鍔も柄も何も無い。

純粹に刃金だけが台座に鎮座している。

私は河川の鉱物汚染が進行していないか定期的な製鉄工房の視察を行なっていた。

最近では人間にあまり干渉しすぎないように、影から鳴女達が見守るだけであるが。

今日は何故か鶯鳴女から私に赴いて欲しいとお願いされたのだ。

断る理由もなく、山犬に乗って来てみれば、立派な刀が目の前にある。

今朝方に鍛ち上がったばかりの刀であるそうだ。

老鍛冶師は刃越しに平伏し、恐れ多くもと前置きをして語りだした。

防人とし九州へ派遣された際に刃の美しさに魅せられたと。

それから異国の地で鍛冶を学び、ようやく祖国に帰ってきた。

先祖代々杜人綿津見神を信仰しており、私の為の刀を打った……らしい。

青年が一人遙か九州の地で修行し、老人となるまで研鑽を積み、鍛ち上げた奉納刀。

私は言葉を失ってただ刃を見つめた。

私には刃物の良し悪しなど解らない。

けれども気圧される程に真っ白な想念を刀身から感じる。

雑念の混じり気もなく、純粹に良き物を作り上げようとする心が生み出した物。

ただ、見事、としか言えない。

漏れた言葉に老鍛冶師は涙を流して喜んだ。

信仰している神が目の前に顕れた上に

自らの捧げ物に最上とも言える評価を貰ったのだ。

驚きと喜びに打ち震え、ありがたい、ありがたいと繰り返している。

ここまで熱心に信仰してもらっているのなら何か応えて上げたい。

名を聞くと雑賀さいかの嘉平かひらと言つらしい。

私は奉納刀の茎なかこし（柄で覆う部分）に『雑賀嘉平之作 杜人神刀』と刻んだ。

そして裏面に慣れぬ漢文で、その作り見事なり、と書いた後に

『杜人綿津見神』と私直々に褒めたぞと署名もはつきり刻んであげた。

……老人の大喜びする様は、もう死んでしまうのではないかとこちらが慌てるほどだった。

後日、刀はシンプルな鞘に納められて杜人神社に奉納された。

錆びたり劣化したりするのがもつたいなく感じたので、

実験的であったが、私の霊力を割いて刀身を保護してみることにした。

そしてこれ程までに優れた技術が失われるのは大いなる損失なので、しっかりと技術を継承させてゆく事をお願いする。

弟子を取って技術を守れと。

これが後の鉄砲複製に多大なる影響を及ぼすなど、私は知る由も無かった。

しんとう……その刃のうつくし（後書き）

日本刀って鳥肌が立つほど綺麗ですよ。震えます。

日本人なら刀剣博物館は一度訪れてみるべきだと思います。

御神刀という響きは厨二病精神が反応する格好良さ。

雑賀……鉄砲……。

杜人閑話……藤井教授講義『杜人神刀・天下六剣』

「え、君達は『天下六剣』あるいは『天下六名刀』を知っているかな」

「歴史小説や、あとは、漫画などで聞いた事があるかもしれませんが、数ある日本刀の中でも様々な云われ、伝説を持った名刀達の事です」

「ん、あれの名前なんだったかな、戦国武将でバツバツサと敵を切り倒すゲーム。」

ゲーム自体の歴史考証とかは無いようなものでしたが、その使用武器に名前があったので

そういうサブカルチャーに親しんでいる人は私より詳しく調べてる人がいそうですね」

「おおでんたみつよ大典太光世、どうしきりやすつな童子切安綱、おにまるくにつな鬼丸国綱、みかつきむねちか三日月宗近、じゆすまるつねつぐ数珠丸恒次、
そして私が講義するのですから薄々分かっている人もいるでしょう、かみふりかひら神降嘉平。」

刻まれている正しい銘で言えば、もりひとしんとうかひら杜人神刀嘉平の六振りが天下六剣と呼ばれています」

「……で、どうして先週の内容を無視してこんな話しをしているのか疑問に思っているでしょう」

「なんとですねっ、昨日の夜に日本文化財科学会からお電話を頂いて土曜日に神降嘉平の現物を拝見させてもらえる事になったんですよ！

いやあ、持つべき物はコネを持った友達ですね、所属してて良かった」

「ですから、この喜びを伝えたくて今日は予定していた講義をスキップし

杜人神刀に関する由来や逸話を君達に勉強してもらおう運びになりました」

「サツとどういったものであるのか触れておきましょう。

『神降嘉平』製作年はおよそ9世紀前半、日本刀と呼べる物が成立した時期ですね。

この時代の刀剣類は錆びや破損していたりと殆ど現存していないのですが、

何故か錆びや歪みが無く、1000年以上経過している鉄器にしては異常に劣化がありません。

ですので、美しい刃の芸術性だけでなく歴史的な価値からも文句無しの国宝認定を受けています」

「製作した刀工は初代さいかのかひら雑賀嘉平と言われています。

初代とあるように、彼は複数人の弟子を取り自分を継ぐに相応し

い者に名を継がせました。

『何とか嘉平』と銘打たれた刀が色々ありますが、それらは彼の一派が鍛ち上げた刀です」

「多くの門派が一子相伝であつたりするのに比べ、多くの弟子を篩いに掛けて厳選し

高い鉄鋼加工技術を保ち続けていたのが当時としては特徴的です
ね。

鉄砲の複製や高品質化は彼等が居なければここまで上手くいかなかったとも言われており
傭兵集団として有名な後の雑賀衆発生にも大きく寄与して行く事となります。」

「え、そんな一大勢力の祖となつた彼、実は極々平凡な農民だつたそうです。

その頃は大陸への守りとして九州に兵役に行く義務、労役が課されていました。

そう、『防人』まきもりです。ちょっと前にやりましたが憶えてるでしょうか」

「行くも帰るも昔は大変で、危険に溢れていました。

ですから、帰れずにそのまま九州に居着いてしまう人も大勢いたわけです」

「そんな中、嘉平は刀剣の美しさに魅せられ刀鍛冶に弟子入りします」

「北九州は大陸からの技術流入とあわせて当時最先端の工業地帯でした。」

鉄の入手が他の土地に比べ容易だったのも味方していたでしょう。人夫不足から故郷へ帰れなくなった防人の雇用にも積極的だったかもしれません」

「弟子入りした嘉平は九州で30年掛けて刀剣製作のノウハウを取
得。」

そして、生まれ故郷である雑賀の地へ帰還を決意します」

「何故、危険を犯してまで彼は故郷を目指したのか。」

鶉草子の記述によれば、嘉平は代々杜人綿津見神を信仰しており自らの刀を奉納したいが為に30年の修行を積んだ、熱心な信奉者だったそうです」

「故郷に戻った嘉平は全てを投げうって鍛冶場を作り、一心不乱に何十と刀を造り続け、

ようやく神に捧げるに足る一振りが完成……というところで『神降嘉平』最初の逸話、

杜人神語鶉草子収録『杜人神刀』の見所、杜人綿津見神の降臨となるのですが……

あゝ、順番間違えましたね……次の講義は『杜人神刀』をやりますよ。 うん、やりますよ」

「まあ、要約して教えますと、神様直々にお褒めの言葉を貰い、刀に銘どころか署名まで刻んでもらって嘉平はますます信仰を厚くする、と」

「こうして奉納刀『杜人神刀』が完成したわけです」

「杜人神社に納められたこの御神刀は様々な逸話を生み出します。本来の銘より有名になってしまった『神降』かみぶりを元にして」

杜人閑話……藤井教授講義『杜人神刀・神降嘉平』

「かみふり神降、読んで字の如くですね」

「完成時に神が降りてきたのと同様に、持ち主に危機が迫った時、あるいは何かを守るうとした時。そして邪な思いから刃を抜き放ってしまった時に、杜人神が降りてくる」

「千年前は山賊などが珍しくない時代でしたから寺社が襲われる事もあったわけですよ。」

鎌倉前期には剣術を嗜むわけのない巫女さんが杜人神の力を借り見事に山賊を返り討ち」

「野盗崩れの浪人から村を守るため刀を借り受けた農民も、神を降ろして戦っています。」

振れば相手の太刀を斬り、守らば風が矢を逸らす……と幾らか誇張もありそうですが。

まあ、彼は後に成り上がる為に刀を使おうとして破滅してしまうんですけど……」

「戦国時代には時の領主に徴収されかかった事もあるんですよ。」

ただ、良い刀は武将のステータスになりますから当然とはいえ、相手が悪かった。

神威を味方に次の戦で近隣を奪ってやると息を巻き、いざ鞘から引き抜くと

たちまち空が真っ黒に曇って竜巻が天を衝き、雷が雨の様に降ってくる。

これはたまらん、と慌てて神社に返却しに行ったなんてエピソードもあります」

「かの徳川家康も刀剣収集を趣味の一つとしていましたが

神降嘉平はコレクションに並べる事ができなかったんです……何故か分かります？」

「家康は罪人を使って名刀の試し切りを行っていたりするんですが切り役が神降嘉平を鞘から抜く度に崩れ落ちて寝入ってしまうというハプニング。

誰も試し切り出来ず、しまいには怒った家康自身が刀を握るも同じく眠る始末……」

「まあ、『天下治まった世に血を流すべきでない』と神よりの仰せか『なんて取り繕ったという記録がすっかり残されているんですが、本人の著に『心底恐ろしかった、すぐ神社へ戻したい』と書かれていたり」

「まさに守る為だけに振るう事が許される刀」

「名刀には切れ味や威力を誇る逸話は沢山ありますが
斬るべきを選ぶ各逸話が民衆に受け、天下六剣に選ばれたん
でしょうね」

「ちなみにですが、催眠効果、これ本当かもしれないそうです」

「や、冗談じゃあないですよ、最近分かったそうなので私も触りし
か聞いてませんが」

京大でレーザー当てたら光の反射率が何か変だということで表面を
拡大して見ると

ガラス質の埃に似た物が不思議な規則性を持って並んでいるのが
見つかったんですよ。

どうしてそんな物が形成されたかは謎ですが、

刀を握り込んだ時に微細な光の反射が全て持ち手側に行くように
揃っている」

「昔テレビアニメで光の点滅が問題になったように、光が脳に与え
る影響は大きいです。」

なので、今後の研究次第でそういった医学分野のニュースに名前
が出てもおかしくないですね。

もしもこれが狙って造られていたら完全にオーパーツと言ってい
い代物です、堪りません」

「あゝ、早く土曜日に来て欲しいものです。」

その辺りについても加島君に詳しく聞きたいなあ……と失礼」

「そうそう、神降嘉平ですが、現在も御神体として杜人神社に祀られています。

博物館での展示は今まで全て断っているそうなので滅多な事ではその刃を目にできません。

私も毎年参拝してお願いしていますが、ことごとく玉砕しております」

「ああ、そういえば最近のニュースでこの刀の面白いエピソードがまた一つ増えたんですよ。

7……いや、8年だったかな、前に盗難騒ぎがありまして、そして無事に返ってきた。

ただ、それも神降嘉平が本当に神秘に富んだ一品だというのが良く分かるものでした」

「その時ですね、中華系外国人グループの空き巣が流行ってしまって国宝、という響きに犯人達は神降嘉平をターゲットにしたらしいんです」

「神社には鍵らしい鍵はありませんし、犯行も楽。実にあっさりと盗み自体は成功してしまいます」

「翌朝、神主さんが盗まれている事に気付き、

警察に電話したのですが、『山犬様が犯人を捕まえてくださった』

との返事」

「どういう事だと神主さんが聞いてみると、
昨晚、なんと犯人達が血塗れで交番に駆け込んできたような
化け物に襲われた、と言って錯乱状態で」

「見ると人食い鮫にでも咬まれたかと思われる大きすぎる歯形。
救急車を呼んで待っている間に応急処置を施していると
交番の外に体高2m近い犬のような獣が、啜っていた物を地面に
置き去っていった」

「こうして刀も返ってきたわけですが、交番にはビデオカメラが設
置されています。
もうお分かりでしょう、角度的に足と鼻先しか写ってなかったの
ですが本当に居たわけです」

「後日、そんな大型犬が野生にいたら危険だという事で
地元猟友会が総出で山犬を探しましたが見つからなかった。
じゃあ、あの山犬は何だったのか、本当に杜人綿津見神の使いだ
ったのでは？」

「どうです、今も息づく神秘の香り」

「……と、時間が来てしまいましたね。
もっと語りたいですが今日はこれまでとします」

「あゝほんと、土曜日が待ち遠しい」

杜人閑話……藤井教授講義『杜人神刀・神降嘉平』（後書き）

色々と思ふざけが過ぎた感がありますが、ゆるゆると許してください。

天下五剣に割り込ませようとしたら問題でるなあと六剣にしてみました。

逸話をいっぱい作ったけど全部書くのが辛いから要約したり。

催眠効果とかでオーパーツっぽくしてみたり。

何故か山犬が出てきたり。

書いていて楽しかったです。

ありがた……必要と不必要の境界

神と人と、どうあるべきなのか。

最近殆ど全てを人に任せる事が出来ているため、恒例の神遊びを除くと、突発的な自然災害や大規模霊障以外は動く事もなく、それさえも鳴女仕込みの神主や巫女が優秀すぎてやる事が少なくて暇を持て余す。

なので、専らそればかりを考えている。

奇跡を願う人間は昔より幾分少なくなった。

私達神霊が飢饉や流行病を防いでいる事も、彼等には時に忘れてしまうほど当たり前な事となっている。別にそれを怨んで何かをやるうと考えているわけではない。

少し寂しいと思うが、これからも影から守り続けていくと思う。

しかし、守るのはあくまでも人では抗えぬ事象に対してに抑えるべきか。

ここに至っては既に人の時代。

あれこれと手を出すのは些か無粋であると思うようになってきた。

失敗も多かったが、農具から始まって網や舟などの漁業技術の開発など

実に沢山の物を与えられるだけ私は与え、施してきたのだ。

おかげで人は増え、知は成長し、新たな物を生み出し己を支えるまで来ている。

私の原初は何だったか？

『みんなを助けてあげたい』と願って私は運良く力ある靈魂と成り果てた。

私はその通りに行動してきたし、期待を裏切らぬよう頑張った。けれども、その与え続ける行為はどうなっていくだろう。

助けるとはどこまでを指すのだ？

一から十まで全ての面倒を見るなど到底できやしないし、何よりもそれは押し付けただけの迷惑だ。

生を歩く足とその気概がある者を背に負ぶってやるのは助けではない。

必要の無さから足は歩く力を失い、気概も燻りやがて消えるだろう。これは『人を殺す』のと変わらない。

生きていない。

そう、死んでいないだけの人間を生み出すだけ。

成長の無い停滞。

近頃、山向こうに任せられた領主が戦える者を集めて武士団と呼べるものを作っている。

ある程度の武力があるのは治安維持に不可欠なため構わないが、人数を揃え、一地方都市を支えるには過剰とも言える兵力に私は危惧を抱いた。

中央で王の派閥が割れ、戦の気配が近いからだと言うがその矛は無辜の民にまで向くまいか？

けれども、人同士での争いは人同士で解決されていくべき事柄。

何処から何処までを守ると線引きしていくのか。

民を助けるとは……。

神々への信仰低下なんて事態が起こらなければこんな事を考えたりしなかった。

考えれば考える程に、私は『私の存在理由』を削っていつている気がする。

私は信仰を失ったわけではない。

むしろ他の地方神に比べて優遇されている方だろう。

それなのに、このまま自分が消えてしまう姿を容易に想像できる。

そう在れと望まれ、誰かに認められる事で想念は形を為し妖は生まれれた。

……同じだ。

『必要』の存在が私を産み、そして留めている。

結局はそれが理由で、それが全て。

……やめよう。

哲学者でも気取ったつもりか。

振り返ると思考の二転三転ぶりが我が事ながら恥ずかしい。

そんなに難しい事じゃあない。

私が消えるのは私の助けが要らなくなった時。
つまり私は本懐を遂げるわけだ。

未練も何も無い。

死後（？）の世界がどうなっているか知らないが。
仏教風に言えば成仏する。

それは素晴らしい事に違いない。

そうなるように人が人だけで歩めるような手助けに留める。
あとは徐々に手を離していく。それだけ。

杜人綿津見神のスタンスはそうあるべきだ。

まったく、暇というやつは心を乱すばかり。

社に籠っていると死んでしまいそうだ。

なあ、山犬。

散歩に行こうか。

ありがた……必要と不必要の境界（後書き）

死亡フラグを建ててみた主人公。

まさかど……武士と神威

日本という土地は、残念ながら有限だ。
けれど、そこから得られた税によって貴族は生活する。

朝廷が安定し、貴族達が増え始めた頃からそれは問題になると分かっていた。

増えすぎた上級貴族へ俸給を支払うのに必要な税を搾り取れる田畑が無いのだ。

それから税の免除をぶら下げ開墾、墾田が国家プロジェクトとして進められていったのだが、

初めは自らが開拓し耕した土地であっても律令制の名の下にいずれは収公され

結局は国の物となってしまう事でやる気を削がれた農民や豪族たちは開墾に意味を見出せなくなってしまった。

そうして出てきたのが私も名前を覚えていた『墾田永年私財法』である。

簡単に言えば自分で開墾した土地の私有を期限なく認めます、という法律だ。

これによって中央貴族や地方豪族などが土地を手にし、それぞれの基盤となる本拠地を築いていくことになった。

荘園が出来るまでの簡単な流れはこんなところか。

そして荘園を外敵から守り維持するために地頭などが武装したのが武士の起り。

この歴史でも、始原の武士たいらのまさかど平将門は立ち上がった。

国司より印鑰を奪い自らを『新皇』と称し東国に新たな国を立ち上げたという。

知る者からするとさもあらん話だ。

彼は東国生まれと中央で蔑まれたが一生懸命に仕事に励んだ。誰も彼を有能であると理解しながら彼の出世を阻んでゆく。利を取り合う政争、更には平氏一族の派閥争いに巻き込まれ、この国を治める全てに対し失望し、絶望する。

どれほどの葛藤や苦悩がそこにあったかは本人でない私には解らない。しかし『朝敵』と呼ばれ何もかもを敵に回しても彼は立ち上がったのだ。

……そして、敗れた。

鶯鳴女によると、強い念から怨霊と成り果て東へ飛び立っていった
そうだ。

平将門の乱は、これで終わったわけではない。
新たな波紋が日本を覆っていく。

第二の将門と成り上がる為に各地で武力の囲い込みが行なわれ政治
が乱れに乱れた。

中には中央に忠しているはずの国司も巻き込んで行なわれる無法も
ある。

力の無い領民はその歪みの皺寄せに搾取されるだけ。
それは私の土地でも例外はなかった。

何かが切れたのだろう。

私は、もう何百年も忘れていた『怒り』という感情から祟った。

将門は確かに『朝敵』となった。

けれども彼は領民に慕われていたのだ。

何故なら、彼は自らの民のため、立ったのだから！

武力を蓄えるのは別に構いはしない。

しかし、民を蔑ろに私服を肥やそうとする行為は許せぬ。
為政者が野望を果たすなら政を果たした上で行なえ。

……私は自分でも思わぬほど、平将門に共感していたようだ。

国司の館と地頭衆の集まる荘に嵐を起こし、警告してようやく頭が冷えた。

農業に影響の出ぬよう収穫後の時期に暴れた私の無意識に感謝したい。

自分でやっておいてだがお詫びに田園修復や土地の祝福と仕事に精を出しながら思う。

久しぶりに暴れたな、と。

これまでも野盗や中小の祟り神相手に力を使用する事はあったが、戦いに於いて山犬が優秀すぎるので最近は力を振るう機会がなかったからだ。
力加減が上手いかず被害を見ると正直やりすぎてしまった感もある。

当然、山犬と鳴女一族、配下神霊一同から怒られ……るかと思えば
そうでもなかった。

修復作業について、あれこれと言われるだけで暴れた事に関しては
何も言わない。

不思議に思っていると一通の手紙が風に乗って私の元に届いた。それは単なる手紙というには少々枚数が多かったが……。

「理不尽に対した荒ぶる神威に民は感謝しています。」

「これにより貴方を必要とし信仰を捧げてくれるはずです」

前置きにこうあり、そこから修飾と婉曲表現が多いので要約すると

永きに渡り民を守るには力を維持し続ける必要がある。

性格的に神力を振るう事を躊躇うだろうが時には見せ付けるべきだ。

鞘に納められ続けた刃はいずれ畏れを失う、そう書かれていた。

直接的に自分の力を見せない私の、信仰低下を憂いてくれている。

もつとも、それ以降の文章はひたすらに暴れた後の処理や、感情に身を任せてしまった浅慮、力を持つ者の責任について事細かに数枚何十行に渡つての説教が延々と懐かしい書体で綴られていた。

鶉鳴女があまり私を怒らなかつたのはこれがあつたからか。変わらない厳しさを嬉しく思う。

『こうして諫め咎める者が私には必要です。見る事も叶わぬ貴方の
ような』

和歌を詠んで便箋にしたため、墨の乾きを待って紙飛行機を折った。
そつと外へ放ると風でフワリと天に舞い上がり飛んでいく。

良く晴れた、真冬の空を切り裂いて。

まさかど……武士と神威（後書き）

前の話で武士とか触れてるのに発生について書いていなかったのが、
莊園の発生まで遡ったのが将門公。産土神化して東の靈的要になる
お方。

主人公のと雉鳴女の文通がはじまりました。
内容は9割小言に1割の褒め。

しんぶじ……己が仏の背比べ

伝来からおよそ四百年、仏教は随分と市井に馴染んでいた。神に参ってきたのと同様に、今では仏を参る事も当たり前となりつつある。

最澄が天台宗を。

空海が真言宗を。

法然が浄土宗を。

仏教といえど画一ではなく多様性を持ちながら成長している。

そこまでなら問題も何も無いのだが、少々困ったことになった。

山を挟んだりしているとはいえ都に近い土地柄、多くの寺が領内に築かれている。

信仰を得るにはある程度人が集まる都心部に建設するのは当然なの

だが、異なる宗派の寺が隣接していたりするのだ。そこに私の神社や祖霊の小さな社、祠などがゴロゴロあるので宗教的力オス地帯と呼ぶに相応しい有様。

私もここまでできたら仏教が広まるのを阻害する気はないし、寺社建立に関しては積極的に協力してあげたわけだが、お互いがお互いを貶すネガティブキャンペーンが発生しているのは見過ごせない。

仏の教えがあーだこーだと我を張っていてそれぞれの信徒で仲が悪いのだ。

仲立ちしようにも「神が仏の話に口を出さないで頂きたい」と取り付く島も無い。

この言い分に山犬や祖霊衆が殺気立ったりしてそちらを宥めるにも労力を使う。

確かに人間同士の話であるし、人間側の霊的武力の源についてだから神が横槍を入れるのも無粋だとは思うのだが、争う理由が理由なので止めざるを得ないのだ。

その理由とは、寄付について。

朝廷側も護国鎮護に仏教の力を借りようとしている以上、当然それなりの資金援助は勿論、神職者の税の免除等々の援助を行なっている。

けれども、経典や仏具を新調したり揃えるには中央都であっても結構な金額だ。

果ては流行りとして唐から運ばれた仏具が良いだのブランド志向まである。

仏像に至ってはその寺の建築費に比類するレベルのものも。

まず形からピシッと決めねば、と思うのが日本人らしいというか。生半可な敬意では失礼に当たると伸ばされた背筋の分、何かと物入りになる。

そこから仏事で対価（お金、作物など）を取るようになったのだが、己の宗派の人間からしか徴収できないのに、ライバルの寺が近くに幾つもある。

もうここまでくれば信者の奪い合いが発生するのは自明の理。これが前述のネガティブキャンペーンに繋がっているわけだ。

この問題で重要なのは振り回される民衆が最も可哀想である事。

Aという宗派とBという宗派の両方から寄付をせがまれるとまず断れない。

まだまだ安定していると言えない日本は今も神秘に頼ったり縋る事も多い。

閉鎖的な村環境から神や仏を必要無いと言えば他の村民から白眼視されかねないのだ。

そうなると支払うしかなく、民を守るはずの仏の名が民を苦しめる原因になってしまっている。

寺側の言い分も分からなくもないのだ。

仏教が深く浸透してきた為、各宗派で門徒が増えた。

寺の規模を維持発展させるには金が掛かるのもしょうがない。

かといってこのまま険悪な関係が続けば最悪武力衝突までありえる。

私も習合されている神霊やその分霊に融和をお願いしてみたが結果は芳しくない。

朝廷に寄付の二重取りや信仰の強制などが罷り通っている現状を報告し

これが腐敗の温床となる前に対処すべきであると国司の権限を強めるよう要望しているが

何年経っても改善に向かっているようには思えない。

朝廷側も最近では仏教の持つ政治的圧力を疎ましく思っているようなので

いい加減に重たい腰を上げてくれると良いのだが……。

神が仏の事に頭を悩ますハメになろうとは。

中央貴族も情勢が怪しいと都の鶉鳴女から報告が来ている。

歴史など殆ど覚えてはいないが、そろそろ時代が動きだす何かが起こるに違いない。

263

霊的な物事はやはり私が解決するべきなのだろうが、
いやはやどうして人間を芯に据えられるところまで難しくなるものか。

先のように崇つて無理やりに言うことを聞かせるのは避けたい。
あくまでも抑止力の一つとして見張る位置に在るべきだと思つ。

嗚呼、悩ましい。

しんぶつ……己が仏の背比べ（後書き）

日本の悪習そのいち村八分。逸脱したものが嫌いな日本人。
村の掟とかで明文化される理由はきつと宗教とかにあったのではと
妄想。

墮落してたのも大きいが仏教は後に武力まで持ってしまうため、
戦国武将にとって厄介な敵勢力となった。

きよもり……とある現実主義者の現実

時代は動く。

意思を持った人間が動かしてゆく。

中央での権力闘争に一つの区切りが付いた。

かつての藤原氏の勢いは無く、今や台頭してきた平氏が上である。

平清盛が武士として初めて、太政大臣まで上り詰めたのだ。

私は『平清盛』という人物にあまり良いイメージを持ってはいなかった。

朝廷内での権力闘争に勝利して多数の実権を握り

その繁栄ぶりから「平氏でなくば人ではない」などの言葉が生まれたと、

振り返れぬほど昔に歴史の教科書で習ったからである。

私は鶯鳴女にお願いして初めからその動向を注視する事にしていた。彼を起点として、平氏と源氏の確執はここから始まっていくのだ。

幾度もの乱を重ねていくのが分かっている。

しかし、『いつ』『どこで』『なに』があるかまでは残念ながら覚えてはいない。

もし私の土地で事が起こるのならば、その時を逃さないように注意しなければ。

その思いで私は彼を調べていたのだが……。

調べれば調べるほどに私は私の偏見が恥ずかしくなった。

権力を握る為に色々とやっているのは確かで、野望もあるようだったが

決して配下の者を蔑ろになどせず、気の利く賢君の素養も持っていた。

報告書を見てみると臍痕目などしない鳴女達が口々に褒めるほどだ。

「己の部下は当然として更に下々に至るまでその人格を尊ぶ」

「相手の失敗を頭ごなしに罵倒せず、理由や原因にきちんと耳を傾ける事ができる」

「従者に無理を強いる事はなく、重要で無い者の体調をも気遣う優しさを見せた」

人格面だけでなく政務の結果もきちんと出しており
公共事業による景気高揚策や日宋貿易で財政強化なども概ね成功し
ている。

聞けば聞くほどに優秀な政治家である事が分かるだけだった。

気になるのは政治に干渉してくる仏教勢力との仲が悪い事くらいで
あるが、

これもまた清盛個人が政教分離に近い現実的思考を持っていること
の証明か。

政治を行なう者として宗教が暴走する危険性も理解しているのだろ
う。

影響が各地方、地域、村単位で完結している神道へ対してはむしろ
支援している。

神道サイドが力を持つ事で仏教と政治的拮抗を生むのを狙ったのも
の。

羨んでしまうほど出来る男である。

平氏一門自体は成り上がった事に対する自負心から些か傲慢が鼻に
つくが

昨今の仏教関連は問題が多いのもあって清盛個人は応援したい。

不可侵な部分にまでメスを入れる気概を持つ彼ならば

私の抱える問題にまで手を伸ばしてくれそうだ。

……そう思っていたのだが。

やはり易々と思い通りに事は運べないのが世の摂理か。

娘を高倉天皇に入内させるなど権力体制の磐石化を急ぐあまり強引な手法が増えた。各方面からの不満や批判を押さえつける為に徐々に荒い方法を取らざるを得なくなる。

それは負の連鎖を生み、ついに爆発。後白河上皇との対立構造が明確となり泥沼の政治抗争が行なわれた。上皇とひとまずの勝利を迎えるも平氏の専横を討つとして各地から拳兵。

これらの反乱を後手に回りながらも抑えていくが火種を消すに至らず、反平氏を謳う興福寺など南都の仏教勢力からの支援が大きいとして攻撃を決意した。

リアリストたる清盛ならば『仏敵』となるデメリットは分かっていただろう。

都周辺の反乱を治めきったが、次の戦いはそこから芽吹く。

……東国にて源氏、ついに挙兵す。

きよもり……とある現実主義者の現実（後書き）

藤原から平氏へ、平氏から源氏へ歴史の転換期。

多くの戦絵巻、戦記物が記される源平合戦、平氏追討の始まり。

仏教の描写が悪いですが、作者は仏教に対して

含む所が無い事をここに記しておきます。

小説なのであくまでフィクションです。

（追記） 8 / 19

法皇 上皇に修正。

げんべい……制約と神器の代償

驕れる者も久しからず……諸行無常の鐘が鳴る。

私は初めから源平の争いに介入する気はなかった。

もはや人の世。

人の歴史はできるだけ人が紡いでいくものだろう。

神社の管理者であるモリトの血筋『森戸家』は歴史の記録者として
一歩離れた場所から静かに時代を眺めてゆくと決めている。

推定未来を知っている私の我侭に子孫を巻き込んでしまった事を申
し訳なく思う。

本来異物である者が出張るのはやはりよろしくないだろう。

食糧事情の改善などを行なっておいて何を今更と笑われるかもしれないが。

なので今回も鳴女達にお願いをして戦とそれにまつわる人々を記録し、

後世の歴史研究に役立ててもらおう事とした。

……介入はしないと云ったものの、
歴史が知る通りに動いたなら海中に沈むであろう三種の神器については要監視対象。

あまりにも歴史的遺物損失がもつたいたないので戦場が西に移動していったら

慣れぬ西国で任務に支障が出ないよう鶯鳴女に精鋭を送ってもらえるようお願いした。

回収で大和の神へ恩を売り、朝廷から森戸家の中立的立場を安堵してもらえれば良いと思いつながら。

ところが、世の中そう上手くは行かないよう出来ているらしい。

鳴女の力が急激に弱まっている。

鶉鳴女からそう報告を受けた時、私は山犬の背で間抜けな表情をす
るだけだった。

その場にいた別の報告待ちの花鶏に話を聞くが霊力の低下は感じな
いという。

私からの信仰供給ラインが絶たれた訳でもなく、どこにも不審な要
素は感じない。

どういう事態か詳しく説明してもらおうと私に問題があった。

私は以前から春に祭りを行なっている。

その歌鳥桜祭りは私が主催し、私に集う人外の者達へ一定の存在力
を与えているのだが

逆にそれが眷属としての繋がりを作ってしまっただけである。

とはいえ、燃料を渡しているだけで自立、自律可能なスタンドア
ローンと変わらない。

王樹様の形質を引き継いだ私と違い自由に行動する事ができる。

現に一部の妖怪などは春だけ帰郷してそれから方々へ戻るなど
お盆のような光景が見られたりする。

ここ数年を見ても彼等には特に影響はないように思われた。

……では、何が鳴女に影響したか。

依存度の違いだ。

妖怪類は人間の畏れから生まれた者が殆どである。

神秘が薄れたとはいえ人は暗がりや不可解を怖がり、それは妖怪に還元される。

その他の化生も自力で発生させる現象からある程度の自給自足が可能なのだ。

比べて、鳴女達は表に出ない。

鷹や鷲を畏れる人間は居れど、鶉や花鶏に恐怖や神秘を感じるものだろうか。

更に鳴女には寄る辺が杜人の地にしかないのだ。

大和から離れた以上、その恩恵を預かることはできない。

結果、縁が私と深く繋がってしまう事となり多くの信仰が鳴女に流れ、

与えられる力に引っ張られる形で距離的な制約を受けてしまった。

私のように完全に動けないわけではないが、

遠距離に行けば行くほど霊力が削ぎ落とされていく。

西は九州中部以南では雉、鶉レベルの最々古参ですら人型を保てなくなる。

壇ノ浦は五百年級の鳴女で行動できるギリギリのラインらしい。

東は中部地方、東海地方から房総半島までが監視可能地域。

そこから北は土着信仰が強く妖怪達の独自コミュニティがあるよう
うで

力の減少も相まって踏み込むには消滅も覚悟しなければいけないと
の事。

私は鳴女達に決して無理をしないよう厳命し、今回の戦を記録する
よう伝えた。

三人一組を守り、危険そうなら放棄して帰還してくれ、と。

戦場の血と炎の香りが運ぶ狂気は容易く怨霊を生み出す。

霊力乏しい今の彼女達でも簡単な倒滅だけなら大丈夫だろうが
それでも無理はせずに逃げろと伝えてある。

歴史書を作るにあたって記録は重要だが、それでも鳴女達には代え
られない。

戦場は時代の流れなのか、はたまた運命か。

歴史をなぞり西へと流れてゆく。

西方組（神器回収班）には瀬戸内海で海戦が予想された事から泳ぎに長けた鳩ニオを選抜。
残りは最古参かつ鳴女の要である鷗、同じく古参組の技巧者カケス?が選ばれた。

今回はそも神器が海中に沈まないかもしれないので
神器紛失を防ぐように監視する、くらいに伝えておいた。

無理だけはしないように。
道具と違い、その存在は代えが利くものではないのだから。

……諸行無常。

変わらないものは無く、自分達も移ろい、いつか消えてしまうのだ

ろうか。

平家、壇ノ浦に没す。

『水没した神器の回収成功。』

鳩鳴女の消滅を鳩鳴女が確認。

詳細は帰還後報告いたします。

？ 鳩女 印

げんぺい……制約と神器の代償（後書き）

妖怪達に現代人のお盆に似た集合行事が出来ました。

神様が集まる出雲のようなもの。一応神だが主人公は行った事が無い。

そうしつ……ありがとこの意味を噛み締めて

神器は無事に朝廷へ届けられた。

その功績により森戸家は政まつりごとに関わらぬ代わりに幾つかの権限を頂く。歴史の傍観者として天皇家とは違った方向で不可侵の存在となったのだが、私の心は晴れなかった。

鳩ニオが散ったのだ。

支払った犠牲は等価と呼べるものではない。

林業に必要な輸送路として川は地域経済を支えている。彼女には沼や河川といった内陸系水利を良く任せていた。

水が枯れぬよう、山が痩せぬよう、この地を愛し、守ってくれていた彼女。

いつもの薄笑いは鳴りを潜め、強張った表情で報告に来たカケス？の姿に

私は喪失したものの大きさを感じた。

原因は鳩鳴女の独断専行。

壇ノ浦は本州と九州に挟まれた潮の渦巻く難海。
戦場となった其処は終戦時、怨霊の群れをも呑み込んで荒れていた。
霊力をまともに振るえない状態では成功できても危険が大きい。

水中に沈んだ神器の回収を諦める判断を下した鳩鳴女と？鳴女。
そんな中、鳩鳴女は故郷の為に、と強行したそうだ。

止める間もなく荒れる海へ飛び込んで、戻ってきた時には魂魄消失の寸前だったという。

報告を終え、夜空に飛び去った？鳴女は背中で泣いていた。
鶉鳴女が頭を下げ、山犬が遠吠えで見送る。

嫌になるくらい星が綺麗な夜。

数百年来の盟友の一人が亡くなったのだ。
感傷も良いだろう。

最期の言葉は「ありがとう」か……

鶉鳴女が受け取った遺言。

鳴女の居場所を作ってくれた事
望むまま力を振るわせてくれた事。
何より、必要としてくれた事。

それらに対しての言葉だったと、鶉鳴女は私に言った。

どれだけ、その「ありがとう」に応えられていただろう。

彼女が遺した特殊な政治的中立の立場。

今度はそれに応えなければならぬ。

故に、粛々と時代を書き留めていく。

鳴女達が集めた源平合戦、その裏側にあつたものも含めて
全ての情報を編纂し歴史書として遺してゆく。

今までありがとう。

その気持ちを込めて。

平氏を打ち倒した源頼朝は征夷大將軍となり、鎌倉に幕府を開いた。

主に関東へ配置されていた武士団を家臣に取り込み『御恩』と『奉
公』によって

各地方領主の力が増し、律令制国家の緩やかな解体、武家による封
建制が確立されていく。

最高位の神威体现者である天皇はある種の象徴として、

武力を持つ者達による武家社会が構築されていった。

無論、そこに行くまでに暗いドラマ、人の業が数え切れぬほどあったが、

日本はまた大きく変わろうとしているのだ。

それが善いか悪いかはまだ誰もわからないだろう。

日本はこれよりどうなるのか。

私のやる事は変わらない。

政権の移り変わり、徴税制度の変更による民の混乱を抑え
自然災害の被害を軽減し作物を祝福し実り多くする。

変わる事、変わらぬ事。

私は綿津見神社から見える丘に碑を築いた。
海を望む素晴らしい展望。

通り過ぎてしまった数々の人、神、霊、妖に恥じぬように。
彼等が此処に居た事を決して忘れぬように。
これからも胸を張ってゆけるように。

ふと、記憶の中の鳩が微笑んだ気がした。

そうしつ……ありがとうの意味を噛み締めて（後書き）

杜人一族を歴史から切り離しました。

森戸家は記録者でありますが家長が杜人神社の神主も勤めます。

綿津見神社は同じ苗字ですが現在分家方が管理。

新たな制約、身内の喪失。

消えた神霊は一体どこへ行くのか……

杜人閑話……鳩の水中飛行『わたしのそら』

鳩ニオは空を飛べない。

正確に言えば飛べなくもないが、無様にすぐ地へ落ちる。数え切れないほど空へ挑み、同じ数の徒勞に泣く。彼女にとって空は絶対不可侵の存在だったのだ。

しかし、彼女は水に愛されていた。空を舞う小鳥のように、湖は彼女にとって羽ばたける空だった。

どこまでも続く空への憧れは当然あったが、それ以上に自分を支えてくれている湖を愛していた。

私の強さはそこから形成されていったのだろう。

鳩は自分の『居場所』に固執するようになる。

『この場所が無ければ私は飛べない』

強迫観念が彼女の過剰な攻撃性を育んだのか、

たとえ同族であろうとも、己の縄張りを侵す者に排他的であった。

元々仲間内では大柄な方であったから喧嘩は強かったのだ。

触れるモノをみな傷つけながら鳩は生きていた。

収まらぬ恐怖と癩癩。

ヒステリックを撒き散らす彼女を、飛べぬ、飛べぬと喧しく囁し立てる鴉や雁。

心の平静など、その時の鳩は一刻以上保てた日はなかっただろう。

ただ、彼女は飛ぶ事への憧れを捨てる事が出来なかったただけだ。

そうしてどうにもならぬ程に心が疲れた時は、水の中を無心で飛んだ。

その時だけは、苛々も収まり穏やかな気持ちになれたからだ。

五月蠅い鴉も雁も、湖中を飛ぶことはできない。

自分だけの空。

そんな彼女に転機が訪れる。

……神武東征。

ある程度の力を持っていたとしても所詮は矮小な鳥の化生に過ぎない。

鳩の空は、居場所は、圧倒的な武力で奪われた。

己の縄張りを焼き焦がす炎。

蒸発し水の引いた岸辺。

緑消え失せた茂み。

変わり果てた湖の姿に鳩は絶望に沈んだ

破壊の跡を亡羊と眺める彼女に鉄剣の切っ先が向けられる。

その事自体、鳩にとってどうでも良かった。

二度と飛べない悲しさが頬を伝って溢れ出す。

もう飛ぶことはできない。

飛べない私は、鳥ではなくなったのだ、と。

しかし、振り下ろされた剣は彼女を庇った一羽の雉に受け止められていた。

「雉鳴女よ、何故に庇ったのだ」

「何卒ご容赦頂きたく存じます。

彼女の翼は我々に必要な物であると」

「飛べぬ翼が必要と申すのか」

「その翼は、我々が未だ持ち得ぬ翼です」

「……今回はその傷と、鳴女の名に免じよう。
そやつを連れ、早う治療へ向かうが良い」

「温情、誠に有り難く」

鳩はこうして鳴女一族へ編入された。

雉鳴女が庇ったのは、遙か昔の自分と重なったからかもしれない。
自分を支える世界が壊れてしまう恐怖を雉鳴女は良く知っていたか
ら。

引き取られて以来、鳩は憎む事で生きていた。

『居場所』を奪った大和を、
自分を中途半端に生かした雉鳴女を。

飛べない私を屈辱のまま生かしている事をいつか後悔させてやる。

その思いだけで、鳴女として生きていくようにと与えられる高度な教育も、
いずれ復讐に使ってやろうと砂地が水を吸い込むように身に付けた。
人型の時に必要な各種所作や着付け、人間の常識も全て。

そうして行く中で、徐々に鳩の世界は広くなる。

まず、友人が出来た。

歌だけはどうしても身に付かず、同じく苦手だった^{かけす}と共に
黄鷄きひたきの和歌講習の補習授業を何度も受けた。

温い温い日常は、ゆっくりと縁を築いていく。

そして知った。

誰もが己の『居場所』を失くして此処に居る事を。
此処を新たな『居場所』として頼りにしている事を。
自分だけが悲しみを負っていたわけではなかった。

生まれる苦悩。

あの日、飛べない私の翼を『必要』と言った意味は。
私の復讐は友人の『居場所』を奪う事になるのか。

……空さえ飛べれば、この気持ちは溶けていくだろうに。

そうして日々が流れていく。

いよいよ鳩は鳴女の名を頂くに至る。

雉鳴女が告げた初仕事の場所は、

鳩の湖すくよりも広い、どこまでも、どこまでも続く大海原おおぞらだった。

それからの鳩鳴女について深く語る事は無粋だろう。
彼女は鳴女という『居場所』を手に入れた。

そして、鳴女を維持してきた雉鳴女。
更には散り散りに消えてしまいそうな鳴女を受け入れた杜人綿津見
神に敬意を抱いている。

鳴女の中で、彼女ほど泳ぎの上手い者はいない。
鳩鳴女は池を、川を、沼を、湖を、海を深く愛した。

水を司る神靈に迫るような働きを見せる彼女は、間違いなく水に愛されていた。

彼女以外に、怨霊と渦潮の荒れ狂う海中を飛びきる事はできなかつただろう。

『あたしや志賀、楽浪の出だからよ。』

大昔に縄張りを好き勝手荒らしてくれた大和にや恨みがある。

神器だか何だか知らないが、このちんけな剣がどうなるうと構わんさね。

けど、それ以上に雉の姐御に恩があるからよ。

それで、杜人の旦那にも、返さなきゃなるめえ。

嫁入り道具にしちゃあ、物騒だが、姐御の……為なら命張れるぜ。こいつを……手土産に祝言……あげち……まいなって、伝えて、くんな。

後、ありがとよ、って。

泣くなよ、？、……あたしや飛べたんだ。

鳴女んなって、よ……こんなとこまで、とべたんだ。

あねご……も……、また、そら、とべるはずさ。

……ああ、さいごに、おめえの下手くそな、うた、きまてえ、な『

杜人閑話……鳩の水中飛行『わたしのそら』（後書き）

誰しも自分の空を飛ぶ事は、とても難しい。

実際の鳩はだいたい空を飛ぶのが苦手。泳ぎは上手い。
幾つかの種類でまったく空を飛べないやつもいます。

今回は、飛べない鳥が、飛んだお話。

ふるまわず……互い合わせの幻痛

しばしの平穩が杜人の地に流れる。

頼朝が築いた鎌倉幕府はもはや北条氏のものとなり、
数百年前と変わらぬ政争の繰り返しを、
私は神主（森戸家当主）の報告書越しに静かに眺めていた。

……探題たんだいに協力しろ、ねえ。

北条政子の尼將軍という渾名は伊達じゃあない。

天皇家からただの記録者であれとされている森戸家まで利用しよう
とするか。

武士や朝廷の監視役を創設するので森戸、正しくは鳴女衆の情報網
を寄越せときたものだ。

まあ、政権を握っている者からすると森戸は不気味にしか思えない

存在だろう。
駄目元で要求を投げてみて、それを測ろうというのも分からなくもない。

北条氏ではなく、北条政子個人で見ると

あまり皇族に対して敬意を持つてる雰囲気ではなくそれに繋がる者にもやや敵対的。

森戸は身分的なもので言えば天皇の脇辺りにある……が、しかし自治を越えた政治力を使えば一族死罪になる権力だから警戒しなくとも良いのに。

当然、不可だ。

鳴女教育を受けている神主や巫女達も、協力反対で一致している。

確認のために一応文書を回してもらっただけなので返事はもう済んでいるはずだ。

過保護になりすぎるのは今後によろしくないからと家の殆どは彼らに任せている。

二つ目の案件に目を通す。

私達神霊が動くのはこういう場面だろう。

『南海地震』の最終報告。

日本は世界有数の地震大国である。

火山が多い上に複雑怪奇に大陸プレートがひしめき合った直上に位置している。

これだけ長く生きて（？）いると大地震を何度も経験してきた。

今なら地域限定である程度の軽減できるが全てはカバーできない。たかだか個人の力では大地、地球の力には勝てない。

今回は海底地震であり、直接的な陸上被害はなかったが予想よりも大きな津波で少なからず被害が出た。

しかし、人的被害がゼロだったのは全て鳴女達のお手柄だ。

まず、野鳥を使った高台への誘導に民衆が素直に応じてくれた事。これは私の信仰地で鳥類に対してある種の親しみを持たれていたのが幸いした。

そして『彼女』が遺してくれたものが、多くの家々を守り抜いた。以前から津波に備えて鳩鳴女や祖霊衆と昔作っていた防波堤。津波の高さが上がりやすい入り江型漁村に建設したのが功を奏している。

その時の私は必死で防備の薄い地域の波を抑えたりと動けず。やはり鳴女の力は私の生命線だと再確認した。

報告書によると復興も順調に進んでいるようで何よりだ。

綿津見神社の脇に備えられた書齋から気分転換に外を見渡す。

良い陽気に山犬は境内で丸くなっている。

箒を片手に巫女が掃き掃除をする音が心地良い。

遠くに望む海も今日は比較的凪いでいて漁にはうってつけだろう。

しばらく眺めていると、山犬が突然飛び起きた。

祟り神が領内で発生するか何かしたのかと思っただが、

視線で『そこから動くな』と珍しく命令される。

戦いに関してはもはや山犬の方が上なので霊障は山犬の指示に従う
事が多いのだが、

殺気立つわけでもなく、何故か無理やりに掃除中の巫女を口に啜え
て境内から去っていった。

半泣きどころか本気で恐怖心から泣いていた巫女が哀れだ。

どんな理由でそんな目に合わせたのだろう。

気まぐれ等という理由ならいくら山犬とはいえ注意せねば。

誰も居ない境内。

私は戸を閉めて寂しくなった視界を報告書に戻そうとする。

動くなと言われたが書類仕事ならいいだろう。

そのとき、廊下がきしり、続いて障子を開ける音が鳴り、隣の部屋に誰かが入ってきたのが分かった。

「先日の南海地震はお疲れ様でした」

えっ？

……まさか。

急ぎ振り返る私には、この薄い隔たりの先に誰がいるのか確信でき
る。

襖越しに聞こえた声は六百年前と変わる事なく、凜と澄んでいた。

間違いなどあるものか。

この声は、彼女だ。

「お待ちを……」。

戸を開けないで下さいまし」

静止の言葉。

自然と戸へ伸びていた手を、私はゆっくりと下げる。

「文を交わすだけでは切なく、

されども顔を合わす勇気がございません」

それは私の言葉だった。

彼女には私を責める権利があるのだから。

「あの子達に勇気をもらったというのに、
我が事ながら情けないとは思いますが身体が震えるのです」

……もう彼女が何を告げるのか、私には分かっている。

「今日は……昔話を、あの日の話をしに参りました」

ええ、私も、貴方と話したい事があります。

あの日の話を、遠かれど今なお鮮明に蘇る昔話を。

ふたりで。

おもいで……犬も喰わぬと言ったもの

あの別れの日からどれだけ時間が経っただろう。

私達は互いに己を責め、相手に深い傷を与えたと互いに自ら作り出した罪に悩んでいた。

私は良き仕事仲間である彼女の願い、信頼を裏切った事、そして多くの苦難を生んだだろう行方知れずとなる原因を作った事を。

彼女は私の（ありもせぬ）高潔さを利用しようとし、信頼を裏切った狡さを。

御左口様が引き起こした惨禍が私の土地をも巻き込んだ事を。
ミシヤグジ

彼女からすれば私の罪は的外れらしい。

断った理由は当然のものであり、民を守る神が余所者の神霊の為に民を危険にさらすものではない。苦難云々は己の行動から出たもので、自分で責任を持つものだ、と。

私からすると彼女の罪も的外れだろう。

私自身がそこまで立派な存在ではないし、断りには自己保身もあつたのだ。

御左口様の大禍刻おまがときは誰にも予想できない天災のようなもの。あくまで神道派の伝令であつた彼女自身に責任は無い。

謝罪合戦は一日続き、

さらに相手の弁護合戦が一日続き、

それからまた自分に非があると喧嘩に似た譲り合いが一日続いた。

私が馬鹿だつたんです。

「いいえ、そこは譲りません」

まったく強情な。

「貴方には負けませよ」

ああ、貴女は馬鹿だ。

「ええ、そうですねうとも」

それでも最後には、ゆっくりと戸が開いて……。

告解の日から幾らか月日が経って。

私は杜人神社の縁側に腰掛け、冬支度を始めた森を山犬と眺めていた。

領内に不思議と浮ついた空気が漂っている。

そういえば今年は合神の祭りがあるな。

鳴女達が揃いも揃ってうわの空だったのはそのせいだろう。

報告書の誤字脱字など彼女達にしては珍しいミスも微笑ましく思える。

そんなにも祭りを楽しみにしてくれているのだ。

「報告です」

スツと背後に現れた気配に、乗せられていた気持ちも落ち着く。

変わらないのは雉鳴女だけか。

あの頃のように、透き通る声で告げる。

幕府、朝廷共に大陸で何やら不穏な動きを察知したらしい。

一体何であるうかと頭を巡らせる。

平氏が貿易していた宋はすでにモンゴル帝国に呑み込まれ

現在の大陸の覇者の名は『元』となっていた。

ならば次に起こるのはおそらく、元の日本侵攻、元寇の始まりか。

元はもっぱら西方に対して注意を向けているため本腰を入れてくるわけではないが

九州防衛は楽な戦いではなかったはずだ。

とはいえ私はここから動けぬし、

鳴女も先の事件を思うとあまり動かしたくはない。

静観だろう。

報告ありがとうと声を掛けると雉鳴女は会釈をし、
すぐさま立ち去ろうとする。

何か寂しいものを感じたので、良ければこのまま一緒に山を眺めな
いかと誘ってみた。

再会の日、雉鳴女は正式に鳴女の長に返り咲き、
鶯鳴女と交代する形で私の秘書係に収まった。

とは言つものの、常に何処かへ飛び回っており日に一、二度ほど顔
を合わす程度である。

今では人間に殆ど任せていいから諜報係以外はそこまで仕事が無い
はずなので

彼女があちこち足を運ぶ必要もなく、むしろ本拠で情報整理に居座
っていて良いのだ。

働くのが好きなのは昔から知っていたが無理はして欲しくない。

雉鳴女が此処に帰ってきてからあまり話してもいなかった。

ちよつと休憩がたら私の話し相手になつてもらおう。

懐かしい話をして昔を偲ぶのも良いだろう。

雉鳴女は困惑の表情でこちらを見つめている。

いつまで経っても動いてくれないので、ほら、隣に、と半ば強制的
に座らせた。

あの頃に帰ったようで懐かしい。

私と山犬と雉鳴女、三人しかいなかった杜人神社。

今では神主や巫女に鳴女の面々と賑やかになったが原点はココなのだ。

山犬が私達に擦り寄ってじゃれつき、つられて雉鳴女の鉄面皮が緩む。

嬉しくなった私が声を上げて笑うと

雉鳴女は顔を赤く染めて、はにかんだ笑みを向けた。

今年の祭りは楽しみだ、なんてことを語り合いながら。

大きな問題になるだろう元寇の事も忘れて、ゆるやかに夜が流れていく。

おもいで……犬も喰わぬと言ったもの（後書き）

今年の合神祭には鳴女たちの協力の下で神輿に雉の彫刻が施されたとか。

それを見て赤面し感涙する雉については、また別のお話。

杜人閑話……学生Sの語源探索『森山雉姫』

□

・夫婦喧嘩は犬も食わぬ（ふうふげんかはいぬもくわぬ）
夫婦間の諍いさかいは一時的ですぐに和解するものが多いから、
他人が仲裁などするものではないということ。
または、仲裁に入るのは愚かなことだといったとえ。

・語源 近畿地方南部の民話による。

・歌舞伎 森山雉姫「己が悪しと言いい合う様は山犬とて口をだすま
い」

・落語 杜辺長屋「かつか、かつかと大声だすない。夫婦喧嘩は犬
も喰わぬとそこらの鳥も言ふだらう」

□

時間を持て余したので電子辞書に適当な諺ことわざや慣用句を打ち込んで
だらだらと過すごごしていたのだがふと目に止まるものがあった。

最近の俺はすっかり歴史や民族文化にハマってしまっている。

古典芸能にはまだノータッチだったが、元ネタが近畿地方南部の民
話であるなら

うちの藤井教授に聞けば即座に説明してもらえるだろう。

高まる気持ちに足が速くなるのを自覚しながら、研究室へ向かった。

「おお、坂本君よく来てくれたね」

教授は幾つかの小冊子を小分けする作業中のようにだった。

手伝いますよ、と近づくとサツと手順を教えて自分は本棚へと消えた。

大した作業量ではなかったけれども全部押し付けるのはなあ。

教授のちょっとした言うには自由過ぎる性格は知っているが流石だと思っ。

これくらいの変人でないと教授にはなれないのだろうか。

こちらの作業が終わる頃、教授の方も一息ついたのか戻ってきた。

「いやはや、ありがとう。」

ところで何の用だったのかな？」

俺は電子辞書を開いてそれを教授へ見せた。

教授は古典芸能にも精通しているのだろうか。

「お、森山雉姫じゃないか、2ヶ月前に友達が大阪でやってたなあ。人気演目だからまた来月辺りに再公演やるらしいし、見に行ったらどうだい。」

比べて落語の杜辺長屋はかなりマイナーだから探さないと難しいかな」

実物を見るのは来年に期待して、あらずじを聞く事にした。

なんとなくのイメージだが落語や歌舞伎だとかはオチまで知っていてこそ

予定調和が生み出す笑いや感動のような気がするからだ。

「森山雉姫は領主の若君と武家の娘のすれ違う恋模様を描いた名作だね」

こうして語り出すと教授は止まらない。

上手く乗せる事が出来たので後は聞きに回るう。

もはやあらずじどころか細部まで語りそうだが……。

「昔、紀伊の国に森山という領主がいた」

「民衆からは大層好かれていた名君で、部下も多かった。

それは雉姫という才女が様々な献策をし国を潤していたからだ」

「雉姫は数代前に外様として配下にやってきた武家の娘で

決して表へ出る事はなかったが、誰もが彼女や彼女の功績を知っていた。

困りごとはその知恵に富む姫に回せと不文律が出来てしまうほどにね」

「けれども元々が余所者であり、更に女であった為に才気を疎まれ他家からの風当たりは当然強く、そのせいで表へは出る事は叶わなかった」

「だというのに雉姫はそれを不満だとは思っていなかった。何でか？」

女である自分の考えを治世に活かしてくれる領主がいたからだ。

雉姫の権力者として民を守る義務についての意識はそこの武士よりも高く、

その優しさ故に上昇志向もなく、現状が身分相応の幸せだと満足していた」

「そんなある日、雉姫はある噂を聞く」

「森山の若君、守秀もりひでが現領主へずっと雉姫の案を通してくれたこと。

女であろうとも、余所者であろうとも、賢き者に違いはないと擁護していたこと」

「それで雉姫は守秀に逢ってみたいと思うようになるわけだ」

「守秀は文武両道で、書や歌を愛する若者であり元服前から将来を熱望されていた。

身分の貴賤を問わず優れた者を市井から見出す様も名君の片鱗を見せていて

人使いの上手さもあり、街を発展させた実績もあつたから当然とも言える」

「その夏、台風が森山の領地を襲い沢山の被害がでた。

様子を聞いた雉姫が復興案と次回の予防策を書いたためようとしたその時に

同じくこの災害をどうにかしたいと考えていた守秀が屋敷に訪れるんだ」

「問題を解決していく内に二人は互いの人柄を知って好ましく思いこれから何かある度に協力して事にあたるようになっていく」

「そうした日々の中、守秀は雉姫を外へ連れ出す。

彼女の献策によってどれほど領民が助けられているのか。

それを目にして欲しくて雉姫と領内をくりと一周デート」

「雉姫は自分が知恵を巡らせた成果に喜び、

守秀も彼女の姿に連れ出して良かったと。

二人の仲も一気に進展してくんだが……」

「……帰りの山道で事件が起きる」

「喜びに舞い上がっていた雉姫は足元が疎かになり、

石に躓いて崖に落ちそうになってしまう」

「守秀はこれを助けようと、雉姫を腕で庇い一緒に崖へ転落し、

右腕に大きな傷を負って武芸者としては致命的な損傷を抱えてしまっただ」

「雉姫はこれを自分の所為であると悔やみ、屋敷から一步も出なくなりました。

輝かしい未来を約束されていた若君の将来を奪ってしまった罪の意識から

たとえ相手を好きでも顔向けできないのだと泣き続けた。

『守秀様は私の事を許しはしないだろう』、と」

「だけでも、守秀は腕一本を代償に救えたことに対し後悔はなかった。

もし、あの時に動けずに好きな女を守れなかった方が後悔したに違いないからだ。

守秀は雉姫が転落の恐怖により屋敷に籠ってしまったと思い、己の弱さを悔やむ。

彼女の身体は守れても、その心を守れなかった自分が許せなかった。

避けられているのは自分と居る事で思い出してしまうからだ、会いに行けずにした」

「そして、互いが互いを好きなのに、会えない日々が続いていく」

「二人ともそれなりの身分のため縁談話が舞い込んでくるが好きな者がいる、とどれも丁重に断っていた。

二人の気持ちは同じで、会いたいけれども会えない、そのジレンマに苦しんでいた」

「けれども時間は待ってくれるはずがない。領内には日々様々な問題が発生する」

「未練か贖罪か、雉姫はそれを解決するよう決して守秀に気付かれぬように影でひたすらに働いた」

「守秀が失った右腕の代わりに、唯一誇れる己の知恵を絞り家の者を通じて領内の発展に努めていく。ただ守秀のために」

「しばらく経って、現領主から守秀が家督を継ぐ」

「当然領内の全てを把握するわけで、ようやく気付く。雉姫が自分のために何をしてくれていたのかを」

「それでも会いにいけぬと悩む守秀に家来達からも声が上がる。『雉姫の功を一言でも労わねば、森山家の義が疑われる』と」

「家来達は全員が雉姫の主君に対する真摯な思いを知っていた。働きを見ればもう、女だてらに、などと陰口を叩けるはずがない。あれほどまでに誰かを愛している者が影にいる切なさに皆が共感

し、
主君もまた愛しているが故に会えないと悩むのがもどかしかったわけだ」

「雉姫に謝り、そして感謝を言わねばと守秀は決意する」

「日取りが決められ屋敷に雉姫を招集、いよいよ対面となるところで、

戸一枚を挟んだ先から雉姫の静止の声がかかる。
顔を合わせればやっぱり糾弾されるのではないかと雉姫はまだ恐れていた」

「薄い境界を挟み、お互いがその思いの内を吐き出していく。
すると、互いが抱えている罪の意識は相手の勘違いにすぎなかった」

「腕を失ったのは守秀にとって納得済みであったし、
雉姫が屋敷に籠ったのは恐怖体験によるショックではなかったわけだ。

「……となると今度はお互いにその罪悪感を否定しなければと口論に」

「いじこから面白い」

「私が悪かった、いや私の方が悪かったのだ、と。
かつてない己の非を相手に認めさせる謝罪合戦が続く」

「どちらも似た者同士で、似た思考形態、実にお似合いだった。

遠めで様子を見守っていた家来達はその不思議な微笑まじさに

『己が悪しと言いつつ様は山犬とて口をだすまい』と言ったのさ」

「その後で二人は結ばれ、雉姫は守秀の正式な右腕として

領内はこれまでに以上に発展しましたとき、めでたしめでたし」

「とまあ、こんな感じのお話だ」

「で、え〜と、そう『夫婦喧嘩は犬も喰わない』の語源は

この歌舞伎演目が元になったというのが有力説の一つだね」

「途中で出てきた山犬のくだりだけど、この地方だと

魔除けの意味で犬が悪いものまで食べてしまつと考えられていて、

夫婦喧嘩は害の無いものだから食べないという考えもある。

もう一つ、犬というのは自分より大声を上げられると黙ってしま
うので

夫婦喧嘩で大声を張り上げると犬が吠える事もできない、という
解釈もあつたりします」

「っと、そういえばだけど、この歌舞伎は和歌山の民話から作られ

ているんです。

杜人綿津見神の祭司となっている森戸家文書に雉鳴女の恋話があるって、

そっちの記述を神様から人間の妥当な配役に直して広めたものだとされています」

「文書の原文からすると脚色が激しいので残っている部分はすれ違い、戸挟み対面、謝罪合戦くらいなものですけどね」

「で、次は落語の杜辺長屋でしたっけ、あれは……………」

教授は今日も絶好調のようだ。

想像以上の長い説明に、寮の門限を気にしながら俺は教授の話に聞き入っていた。

まだまだ終わる気配はない。

杜人閑話……学生Sの語源探索『森山雉姫』（後書き）

鳴女衆によって演劇演目に。

落語の方は残念ながらありません。

あまてる……脅威の前に

元寇とは二度に渡る蒙古軍の侵略。

初めて日本が経験する、外国からの仕掛けられた防衛戦争。

記憶によると苦戦の印象が強い。

言葉も通じず、戦争の儀礼行為も異なり、戦術基盤も違う。

日本は天然の防壁と言ってよい海に囲まれるが故に

蒙古軍の最大戦力である騎馬部隊を封殺できているが

それでも取り回しの容易い短弓や火薬を用いた兵器は脅威となる。

彼等が足がかりとした吉岐、対馬での略奪は凄惨を極めたという。

私には一つ気に掛かるものがある。

はたして大陸側の神霊が参戦してくるのかどうか。

日本側は兵力で負けようとも質では諸外国でも上の方だろう。応永の外寇において李氏朝鮮の侵略を対馬単独で撃破できたのもそれを裏付けている。

武士は言わば職業軍人であり常に武術に磨きをかけているが、今回の相手の兵は朝鮮で強制徴集した奴隷兵で士気も何も無い。

この事が正史において日本を最終的な勝利に導いている。

しかし、人間では抗しきれない災害級の神秘が着くとなれば……。同じく同等の神によって対抗せねば勝利は難しいだろう。

幕府はこの神霊という不可思議の要素を軽視している。

きっとそれらに依らず打ち立てた政権であるからであろう。

神仏習合などで全体的に力は弱まっているが神の力を甘く見てはいけない。

私風情でも全力を振り絞れば領内で大嵐を吹き荒らす事も可能だったりする。

まあ、私の場合は地域密着型の狭く深い繋がりから習合が避けられ
たなど、

影響の度合いは格段に小さいというのはあったのだけれど。

しかし、殆ど弱体を受けていないとはいえ、片田舎の一土着神でそれなのだ。

比べ、使い走りだけで征伐を成せた大和の主要神ともなれば、弱体化して尚、私を上回っているに違いない。

朝廷側もそれを警戒しているのか、全国の寺社仏閣に祈祷を命令し短期的ではあるが日本の霊的防衛力を上げるよう積極的に行動している。

そつちに気を取られているせいか飢饉や純粋な自然災害で

一般民衆が割を食っており、もう少し援助に動いて欲しいが……。

静観するとは決めたが、何も出来ないもどかしさに心は晴れない。

雉鳴女が悩む私を心配し気遣ってくれた。

とはいえども言葉ではなく行動でだが。

この問題以外の書類を私に回す前に自分達で処理してしまうという如何にも彼女らしい気の遣い方で、余計な事を考えずにすみ、ありがたかった。

そんなある日、朝廷、というより天皇本人の筆で書状が届いた。

使者は森戸家でしばらく滞在するらしい。

政治に関わらない事を大前提に権力を天皇から貰ったのに天皇から反故にされると困る。

そういう風に現森戸家頭首が使者に対して断ろうとしたのだが、この件に関しては森戸特権の政治使用に当たらない事が天皇の名で約束されているという。

何のために天皇の名でここまで来たのか。

先に書状をあらためた頭首が軽く動揺した。

退室させ、雉鳴女が読み上げる。

すめのおおみかみ
皇大御神（天照大御神）が夢枕に立ち、杜人綿津見神に助けを乞えと。

彼の神は民を守るを善しとする守護に関しては大和に並ぶ者の居らぬ神。

太陽の化身を持ってしても崩すこと叶わぬ城塞の如き守りの神であるから、

恥を忍びこの日ノ本を大陸より守り抜く神威を授かりに行くべし。

そう皇大御神に言われるまま助力を願いにきた。

要約するとこんな感じであったが、私に対して何処となく偉そうな文体だ。

守護神たる天照大御神が夢枕に立ったのならしょうがない、といった感情が透けて見える。

私のところに文をやったのも嫌々だと。

今代の天皇は上皇含めて仏道に酷く傾倒しているらしいが、
なんだか天照大御神も子孫にないがしろにされてないか？

仏教はもはや日本で主流の宗教と言えるまでになってきているとはいえ

天皇家を見守ってきた大和の神霊達の心労や肩身の狭さが偲ばれる。
仏教普及も彼女等が子孫の為にと身を切る思いだったろうに、少しばかり哀れに思えた。

読み上げた雉鳴女が珍しく怒気を発している。

静かな内に秘められたその苛烈さは、部屋に入った鶯鳴女がそそくさと退出するほどだ。

何となく何を考えているのかは分かる。

倭の血はいつから義を弁えなくなったのか、といったところか。

雉鳴女は許せないのだろう。

仏教普及で神霊が背負う事になるリスクを飲み込み許容した天照が
どれほど苦しんだのか。

己はそれを受け入れる事ができずに裏切った身ではあるが、
きつと大和の神々でも意見は分かれ、そつとうの突き上げを受けた
に違いない。

その義憤が心から溢れ、空気が痛いほど張り詰めている。

とりあえず、護国の依頼を断るわけにはいくまい。

天皇の勅命に逆らえば森戸家は権力に潰されるだろう。

上手く成功させて次回以降はこのような強制がないよう誓約させた
い。

……が、困った事に私が静観を決めた最大の理由である『私自身が
動けない』事がネックだ。

天照大御神、というか大和の神霊達はそれを知らなかったからこん
な依頼が来たのだろうか？

正直なところ杜人一族総出で、山犬、鳴女、祖霊衆、地元妖怪のフ
ルメンバーであるなら、

それこそ地形を変えてしまつような相手でも守る分なら戦えるとは思
っている。

私が全面的な防御を担当し、山犬が攪乱と遊撃。

妖怪達が牽制しながら鳴女が諜報含めて後方支援で祖霊衆が細かいカバ―。

今ならこれで八咫鳥ヤタカラスも凌げるはず。

しかし、遠征となると無理な話だ。

全員が動けない。

私は無理、山犬も同様、鳴女は九州北部が限界、祖霊はそも地元でしか動かないし、妖怪は遠地で行動条件を満たすのが厳しい。

となると出せるのは鳴女達だけになるけれども……鳴女達を捨て駒にできるはずがない。

大和の神も幾らか参戦しそうだが、九州に常に詰めているわけがないだろうから

たぶん求められているのは恒常的に向こうに待機できる靈的防御力。最初の接敵を凌ぎ、援軍を待てるレベルの能力が必要となる。

静観のもどかしさから一転、とんでもない問題になってきた。
天照大御神直々の願いをなんとか果たしてやりたいが解決の術が無
い。

そうして三日も頭を抱える私に思わぬ場所から手が上がる。

「私達がいきましょう」

たびだち……我が子へ祈りを

八方塞がりな状況に名乗りを上げたのは、私の子供達だった。

「森戸一族から戦働きのできる者、神威を扱える者を選びました」

日も昇らぬ早朝、雉鳴女から呼び出されたと思うと涼しげな風に気の張り詰めた境内に並ぶ20人の男女。彼等は一様に旅支度を整え、私の前に立っていた。

雉鳴女の表情は堅い。

何事かと問おうとした私へ口々にその思いをぶつけてくる。

「杜人綿津見神様は常から人の戦は人が、神の戦は神が行なうと仰つておられる」

「しかし、天皇勅命を守りたくともこの地を離れられぬといつのであらば」

「今こそ我々が立ち上がりこれまで貴方様に頂いた恩に応えるべし」

「お家の一大事を神だけに任せて座すほどの不義理はございません」

「私共は男も女も、皆覚悟してこの場におるのです」

驚きで口を開けたままの私は見た。

雉鳴女がスツと地に伏せ深く頭を垂れるのを。
合わせて森戸家一同も土下座する。

これは彼女の差し金なのか。

確かに人間である彼等なら距離の制約を受けない。

そして杜人、綿津見神社に仕える神職者達であるため天照大御神が指名した私の代行者となれる。

無論、振るえる力は全員を合わせて山犬に及ばないだろうが……。

人的資源を出すまでしたとなれば神道派でない朝廷の人間も悪くは思うまい。

詳細を雉鳴女に聞くと鳴女衆の精鋭も情報収集や逃走補助についていくとの事で、

鳴女が事前に相手方の情報を得られれば対策の立てようもあるし神々の援軍を早く呼べる。

策を弄して初撃の衝力をいなす事だって可能となるだろう。

まず生き残る事を重点に学ぶ鳴女教育を受けた彼等なら、神霊相手に足止め程度は出来る見込みがあるそうだ。

なるほど妙手ではある。

……妙手であるのだがそれは彼等の犠牲を孕む。

しかし、他に打てる手もない。

雉鳴女を糾弾するなぞ以ての外。

彼女は私達を取り得る最大益の策を考えたのだ。

代替案を出さずして却下する事はできない。

答えのさせぬ私の代わりに、優しさを押し殺して動いてくれたのだから。

私は子供達を戦わせずすむように森戸家を特別なものとしたかったのに。

世はままならない。

私は全員を立ち上がらせた。

山犬の遠吠えで、私に連なる全ての神霊、祖霊、精霊を集合させる。あちらこちらから私の呼びかけに応えた者が顔を出す。

私に、私達にできるのは彼等の安全祈願くらいだ。

そこまで広くは無い境内が神秘に満ちる。

故郷を離れる子供たちを祝福しようとして霊が列を成す。境内どころかぐるり神社を巻き、参道に至るまで。

私は光景を目に納め、背を向け歩き出す。

一人本堂の奥へ進み、祀られていた物を手に取った。

白木鞘からスラリ抜き放たれた白鋼は冷たい光を返す。
それは杜人神刀と銘打たれたシンプルな造りの日本刀。

願わくば、私に代わり我が子らを守り給え。

ありつたけの靈力を守護の力に変えて刀身に流し込む。

矢、槍、剣から、守れ。

火炎、稲妻、荒波から、守れ。

悪意から、狂気から、絶望から、守れ。

守る為に在れ。

鞘に納めて振り返り、社から境内を見下ろした。

人妖の区別無く私の前に平伏している。
皆、私の言葉を待っているのだ。

「生きる、そして死ぬな」

森戸家遠征の頭、杜人神社神主、森戸^{イヌヒコ}戌彦に刀を託した。

私は九州へ旅立つ彼らを見送った。

鳴女は雉鳴女をリーダーとした遠征第一組と鶉鳴女をリーダーとした第二組が
消耗を避けるのと各種補給のために半年交替で九州に勤める形となる。

杜人神社は残された森戸本家から神主を、
綿津見神社は分家方から神主を立てて委細変わりなく治めているが
三軒増えた空き家と畑の管理もあるので忙しそうである。

表向きは変わらぬものの、人の気配がたしかに減った神社が寂しく
映った。
本堂奥、納められていた物の消えた台座を眺めて無事を思う。

こんな風にずっと祈っていたいがそういうわけにもいかなかった。

問題は日夜発生するものなのだ。

鶉鳴女が持ってきた書類に目を通す日々は続く。

昨今の政情不安に付け込んで日蓮宗が民衆を煽っているらしい。

やれやれ、だ。

西も東も、慌しいものだ。

寺社仏閣への祈祷命令から様々な宗派がそれぞれにアピールを始めた。

『世の乱れは我等が教えに耳を貸さぬからであり、近い将来災厄が訪れるだろう』

といった風の終末思想的な宣伝をもっぱら耳にする。

飢饉や疫病が流行ったのもあり民衆はそれに釣られてしまい、

何処其処の寺へ駆け込んだり、お布施を弾んだりと流されている。

どこから耳に入るのか大陸からの戦争の気配もそれを助長していた。

別に悪いと思っっているわけではない。

苦難にぶつかった時に己を支える何かがあれば勇気を振り絞れる事もある。

人の心は脆い。

だから仏教を人の支えとして広めるのを否定する気はないのだ。

ないのだが……。

宣伝文句によって民草の不安を煽るのは止めて欲しい。

治安が悪化するからだ。

ただでさえ作物不良や天候不順などで日本全体が不味い雰囲気。

街道に野盗が増え、都でも強盗が横行しそうな空気。

火に油を注ぐように不安を掻き立てられたら当然犯罪が増加するだろう。

すると、ますます民は不安を抱えてしまう。

これは人間だけの問題ではない。

不安の伝播は主に私のような土着系の神霊に問題を齎す。

土地を治める神霊、妖怪などの化生は残留させた意思によって加護を与える。

強い影響力を持つ存在が願う事でその土地の事象に干渉するのだ。

『良い実りを』と正方向へ祈れば生命に溢れた土地に。

『腐り落ちる』と負方向へ呪えば凶事を招く土地となる。

これが私の行なっている基本的な祝福の掛け方。
意思は力を持っているのだ。

どこことなく信仰にも似ている。
そして、それが問題だ。

多くの人間が不安を感じていると土地の祝福が負へ書き換えられかねない。

実際にその場所に立つ人物の意思が影響しないわけがないのだ。
一人一人が持つ影響力や意思は弱くとも、生活の拠点とする場所には
様々な感情や祈りが込められているのである。

具体的には作物が上手く芽吹くように、だとか。

私は応えてきた実績があり、農民も育ててきた経験があり、
生まれた自信は土地への愛着として加護を安定させていく。

ところが昨今の全国的な『不安』、負の想念は僅かでも確実に土地
を蝕むのだ。

現在の全国的な異常はこれが原因かもしれない。

こまめに領地を巡って祝福を続けても住人達が綻びを生んでしまう。発生した被害で彼らの意思が良くない方向に向いて悪循環が起こり、土地を治める者への信仰が減少するのにも繋がっていくだろう。

杜人の地では何とか飢饉が起きるような事態は防げているものの来年は分からない。

早く世情が安定してもらわねば解決には至らない。

こうして日本を覆った負の意識はまるで御左口様のようだ。

長くこの状態が続くのであればかつてのように全国で祟り神が発生し再びあの^{おおまがとき}大禍刻が起こる危険も孕んでくるだろう。

それだけは避けたい。

外憂たる元寇が解決すれば朝廷も存在感を発揮し日本の陰気も晴れるだろう。

日が落ちる西の空に、子供達の無事を想う。

私は蒙古軍の武装は鳴女を通して憶えている範囲で伝えていた。

鉄や陶器に火薬を入れた手榴弾もどきである『鉄砲』は知らなければ脅威だと思っただからだ。

飛び散る破片と大きな音は戦意を挫いてしまうだろう。

「大陸で開発された火薬と呼ばれる物は炎の力が込められており雷のような音だして弾けると云う、このような武器として使ってくる可能性がある」

えらく抽象的な説明であるが、こんな風にざっと鳴女達に説明して霊力を固めた玉を大音響で破裂させ予想効力などを実演してみせた。

おそらく鎧さえ着込んでいれば目の前で爆破されない限り致命傷は無いだろう事。

音による怯みや、臆病な動物である馬の無力化などが厄介だろう事。実演に関しては雉鳴女、鶉鳴女の霊力でも可能なのでぜひとも行な

う事。

被害予想やそれからくる対策などは九州の武士団にも情報を共有してもらおうようにお願いしている。

他に、大陸では動物の骨を使った短弓が多いのにも触れる。

「日本の長弓の方が射程は長いものの、短弓は取り回しが良いため連射が考えられるのと、

威力を補う為に集団で大量に射掛けてきたりやじり鏃に毒を用いてくるだろう」

森戸家は独自の薬学も修めているため自然と後方支援で治療に回るケースも多くなる。

毒消しの類が効くか分からないので矢傷は毒が回らぬよう逆に切って血を抜くなども頭に入れさせる。

体調悪化で済む程度の毒であれば良いのだが……

嘔吐や失血を補う生理食塩水もどきや増血剤に関しては拠点に常備させるべきだ。

そして、言葉や風習の違いから名乗りや一騎討ちを受け付けられないだろう事。

これに関しては武士達に言い付けておいてもどうせ破って矢を射掛

けられるだろうが、
相手を理解してそこからの復帰が早ければ早いほど被害は少なくなるので
駄目元で周知させるようお願いしておいた。

最後に、予想される霊的な攻撃力について。

中国や朝鮮半島の神話にまったく詳しくないので予想はできないが
おそらく日本と同じ土着信仰と先祖信仰が主だろうと思われる。

日本に送り込まれるのは朝鮮奴隷兵がメインだったはずなので彼らの
祖霊が第一候補。

土着神は海を越えて異国まで来ると信仰減少で満足に力を震えない
だろうから居ないはず。

ただし、敵祖霊に関しては朝鮮の征伐を受け怨霊と化し理性を失く
しているかもしれない。

その場合は呪術師や泣き女等の巫女に合わせて呪われると厄介なの
で大宰府の陰陽師と連携する事。

陰陽師の人員については朝廷へ要請している。

気をつけるのは、それらを統率する大陸の神霊が必ず居るだろうこ
と。

これについては鳴女頼りで彼女等に判断してもらおうしかない。

王樹様の跡へ私は山犬と共に足を運んだ。

日課の御参りにプラスして、
子供達の無事を王樹様に祈る。

守人となった彼らの無事を。

げんじつ……そして誰もいなくなるか

……嵐は去った。

今では、その後始末に何もかもが追われている。

結果から言えば、九州防衛成功。

日本は始めて経験する海外勢力の侵攻を無事に防ぎきった。

しかし、二度に渡る蒙古襲来は深い傷痕を残していく。

特に吉岐・対馬は壊滅と言ってよい損害を受けた。

避難を促し島外に連れ出せたのは島民の3分の1しかおらず
事前準備を行なったにしても悔やまれる結果……。

九州の都市部は殆ど損壊なく防衛できたが、

守りきれずに被害を受けた沿岸部の小さな集落もある。

何もかも救えると思うのは傲慢だが。

鳴女達の報告書の頁をソツと捲る。

遠い九州の地で森戸家は誰よりも頑張ったのだろう。

限られた靈的武力を持って多勢を凌いだ、それだけで賞賛されるべき。

相手方の神靈は大方の予想通りのラインナップだったものの、それでも大陸上がりは重ねてきた戦場が違うのだろう。

人間の戦争は武装予測と情報の共有で鎌倉武士は押し返せた。けれども神靈の戦争は苦戦を強いられる事となる。

蒙古側の神靈統率者は二回とも山犬級の上位神靈だったそうだ。おそらくモンゴルの祖靈から成長した存在のようだと聞いている。

経験から言わせて貰うと、祖靈というものは強くなりにくい。

元々の種族である人間の脆弱さからか、途中でどうしても伸び悩む。私の場合は王樹様の力を引き継いだ為に壁を越える事ができたのだが、そうでなければよっぽど徳のあった人物で広範囲に信仰されていないと無理だ。

それが私の中の常識だった。

しかし、子孫が数多の国々を呑み込んでゆくその氣勢に引つ張られて歪な形で成長を遂げたものではないか、と鶉鳴女の報告にある。

正史において世界征服に最も近づいた国家『元』はあらゆるものを呑み込み続けたという。

私には征服の行程で未来へとひた走っていく子孫に、

過去の遺物である自分達を忘れられまいとした霊の姿を文字の中に見出していた。

人の力が膨れ上がった先に、彼らは己を捻じ曲げても子孫に尽くそうとしたのか。

吉岐・対馬での蛮行は許されるものではない。

ただの拠点作りに留まらない凶行であり唾棄すべき行為だったが怨みや憎しみを糧に更なる強化を図ろうとも考えたのだろうか。

在り方に、妙な共感を覚えた。

その悲壮な魂は、たしかに強かった。

報告をもう一度読み直す。

『第一期 蒙古襲来』

- ・森戸 戦死者 14
- ・鳴女 戦死者 2

『第二期 蒙古襲来』

- ・森戸 戦死者 3
- ・鳴女 戦死者 0

侵攻時期を読めなかった事、危機意識の低さで万全の防備には遠かった事。

一戦目は神社や仏閣の援軍が遅く、人の身で敵の神霊を押し留めるにはこれが限界だった。

逃げ遅れた民衆を誘導していた後方組が地元民を守って死んでいったという。

二戦目になれば前回の脅威を省みて対策や準備も十全に整えられた。設置された防塁は幕府の率先した協力もあり敵兵の進路制限に大いに役立つ事になり、

宗教の各派閥も協力して対抗したので被害をかなり抑えられた。

しかし、兵の負けを神霊が取り返すべく、闘争は前回を上回るものだったらしい。

人智及ばぬ大和と大陸の神秘が激突する戦場を形容するに「凄まじい」の一言以外は無い、だと。

鳴女も精鋭2名が共に世を去っている。
そして、森戸の犠牲も。

私の代わりに血を流した子供達。

それは彼らの意思や覚悟を踏みにじる、してはならない考えではある。
だけでも、悔やまずにはいられないのだ。

この段階で旅立った20名の内17名が死んだ。

……この段階で。

そう、人の業は深く、愚かだ。

次の頁に記載された文字が私を苛む。
お前は我が子を殺したのだ、と。

森戸家が九州に入植してまず最初に行なったのは各所への参拝であった。

いつ、いかな場所であろうとも歴史は生まれる。
そして歴史を刻んできた先人達がいるのである。

遙かな昔から古き者を祀ってきたのだ。
九州にも既に霊のテリトリーが形成されているだろう事は知っている。

そこに他所から別の神の使徒が我が物顔で陣取るのは失礼にあたるだろう。

私は土着の神々から路傍に潜む小さな妖怪に至るまで敬意を示すよう連絡していた。

しばらくの間で良いから土地を借して欲しいと様々な神霊妖怪化生に頭を下げさせる。
決して追い出しに、戦いに来たわけではなく、勝手ながら守りに来たのだ、と。

鳴女の休息用に物置小屋程度の社を建てさせてもらえるだけで良か

った。

礼儀を弁え、控えめな要求が気に入られたのか
九州の神霊はこれを認めて友好関係を築けたのだ。

近隣の村や町とも上手くやっていた。

全員が計算や建築、医療などの特殊技能を身に着けているのが便利
だったのか
ある種の何でも屋として隣の村からも困り事を相談されるまでにな
った。

そう、上手くやりすぎた。

徐々に蓄積されていく信頼と実績。
付け加えて蒙古軍から民を守った功績。

嫉妬した地元豪族と宗教家の暴走によって、悲劇は成ったのだ。

開かれた頁には……。

『第二期後 森戸 被暗殺』
・森戸 死者 3

旅立った彼らの死が記述されている。

杜人閑話……十三世紀九州『継がれてゆく足跡』

今津は小さな村だ。

半農半漁で成り立っている、小さな村だ。

東から来たという彼らは皆立派な着物を着ていて、それが寂れた村には不釣り合いに思える。

聞けば、帝の命により九州の守りに来たらしい。

私達は『モリト』と名乗る彼らを訝しがった。

そうなら大宰府や博多といった大きい町へ詰めるべきではないのだろうか。

辺鄙な村に何がある、帝を騙った山賊の類ではないのか、と。

彼らは言った。

「小屋を建てる程度の自由以外に、求めるものはありません」

懐から書状を出すと、確かにそこには御家人と守護の印があり

彼らの身分を証明するものだった。

『森戸』とは神職の家系なのか。

文面をよくよく読むと大宰府から厄介払いされたようにも取れる。見た目礼儀正しく見えるが、それでも私を含めた村人は信用しきれない。

なので監視できるよう、それでいて村の安全を確保できる場所……村から少し外れた窪地へ案内した。

一月が経つ。

森戸の者は本当に小さな社を建てただけで、村に何かを要求することはない。

それどころか農作業を手伝ったり、漁網を繕ったりと役に立つ。金銭を取るでもなく、食事を強請るでもなく、何を目的にしているのか。

尋ねると、

「この村の祖霊と約束したのです。」

土地を借りた代わりに子供達をよろしくと」

祖霊、先祖の霊が村を見守ってくれていたらしい。

この村で毒を持つ虫が出ないのはそのおかげだそうな。

彼らが神職だからなのか村の霊にも敬意を持って対し、土地の対価を労働で払おうとしている。

こんなご時世に義理堅いものだ。

話を聞くと彼らはもつと大勢居て、

散り散りに九州の守りとやらに就かされたらしい。

他の村でも同じようにやっているそうだ。

大変だな、と私が零すと

それが森戸の役目だから、と胸を張る姿が眩しかった。

半年が経った。

彼らは既に村に受け入れられている。
一ヶ月前の流行り病が大きな切欠だろう。

村中で嘔吐や腹を下す者が大量に出た。
山向こうの村でも同じような病で沢山亡くなったらしい。

私の娘も苦しんだ。

もはや藁にも縋る思いで森戸を村へ呼びつけ、
神様でも仏様でも良い、娘を助けてくれと私は実にみつともなく叫んだのを憶えている。

症状を聞くと彼らは『せえりしょくえん』なる水を大量に持ち込み、
村人に飲ませていった。

なんでも吐いたりした事で失った気質を補うものだからで
根本的な治療ではないが、悪化するのを防ぐのだという。

他にも近くの山で取れるらしい痛み止めや解熱の薬草など、
彼らの優れた医の心得で娘の命は助かったのだ。

こうまでされるとお礼をしないのは心苦しい。
野菜や干物を出せるだけ持って行ったのだが謙虚に断られる。

曰く、

「礼を求めたわけではありません、……が受け取らないのもまた失礼ですね」

そういつて一本の瓜を手にとっていったのだ。

ここまでされても彼らを邪険に扱おうものなら人じゃない。私達はただの農民で、ただの漁師で、武士でもなんでもないがこの恩に報いないのはあまりに恥知らずに思えた。

村は一つの家族なのだ。

彼らも、許してくれるなら我々と家族になってほしい。

……娘も薬を飲ませてくれた若い男を好いているようだしな。

三年が経った。

『森戸さん』と言えばこの村に欠かせぬ家になっている。

今では村長の私と同じような扱いだ。

少々悔しい気もするが彼らの功績は素直に認めるしかない。

農業指導、新しい漁の方法、薬草、建築に至るまで

森戸が修めている技術は村の暮らしを良くしてくれている。近くの村でも話に上がるらしい。

それでいて自分達が余所者だという自覚もちゃんとあるのだ。変にでしゃばって私の面子を潰す事の無いよう動く。

最近はそのせいで私が村の中で悪者になってしまっている。彼らを良い様に扱き使っているなど濡れ衣なんだ信じてほしい。私にそんな意図はまったくないのだ。

証拠に、彼ら用の田畑や住居を提供したではないか。森戸家に離れられて一番困るのは村長の私だぞ？

そして、村の女衆に良く急かされる。

「アンタんとこの娘さん、はよ森戸に嫁がせなあ」

正式に身内に組み込んでしまえば変な気兼ねもなくなるのだから。

当然、私も森戸に打診はしている。

けれど戦が終わるまで待つて欲しいと濁されているのを理解してほしい。

彼らが言うに、海の向こう朝鮮を属国にした元という国が日本を狙っているらしく

数年内に博多近辺が戦場になる可能性が高いそうだ。

まったくそんな噂を聞かないので嘘かとも思ったが全員の真剣な瞳からそれが真実だろうなと感じているのだ。

今夜も寄合所でこの議題が出ると思うと、気が重い。

いつそ先に娘が子を成してくれれば有耶無耶の内に婚姻できるか。

無事に恋仲にはなれたようだから、早く孫の顔が見たいものだ。

さっさと戦なんて終わってしまえば良い。

森戸の皆さんはきつとこの村に残ってくれるだろう。

もしかしたら故郷へ帰るかもしれないが村中で引き止めれば断るまい。

あの優しさや義理は今時もつたいないほどだ。

弱みに付け込むようだが、娘の幸せを願って何が悪い。

明日は朝から森戸の家にお邪魔させてもらおう。

色々と話しておくのは大事だからな。

それからしばらくして、戦が始まった……。

全てが終わった今、森戸はこの村に無い。

娘の腕で眠りこける孫のあどけない表情に私は切なさを覚えた。

「お前の父ちゃんはな、村を守り抜いたんだ。

矢も槍も、蒙古の化け物さえ相手取ってそれでも負けなかった。

なあ、守人^{もりと}よ、はよう大きくなれ。

お寺さんも神社さんも森戸を知らんと言いよる。

知らんはずがあるか、お前は森戸の子で、お前は森戸の足跡だ。
あの氣の良い連中が此処に居た証拠だ

継いでいくぞ、お前の子、お前の孫の、その先も。

森戸が此処に居た事を皆が忘れたって、ずっとな」

杜人閑話……十三世紀伊勢『思惑すれ違』

……罪。

そう、これも罪。

私はまた……。

「……森戸の者に関してはこちらの意図する処ではなく大変遺憾であり、

今後はこのような事が起こらぬよう注意いたしましょう。

報告ご苦労様でした雉鳴女、もう下がってよろしいですよ」

このような言葉で納得し動く筈もない。

目の前に平伏し、されど静かに怒り滲ませた雉鳴女。

私は彼女から視線を外せない。

それは正当な感情である。

良いのだ。

もっと怒りを燃やしても良いのだ。

今すぐ私へその憤りをぶつけても、それは正しい。

子を仲間を殺され嘆かぬ者がいるだろうか。

況や理不尽な裏切りであれば。

身体よ震えるな。

全ての結果は私に還るのだ。

しかと見届けなければならぬのに……。

嗚呼、私はいつだって弱いまま。

太陽の踊り手、陽光の神子と崇められ敬われ奉られ
いつしか神と振舞わねばならなくなった千年前のあの日から
子を照らす太陽として、守る為に戦い続ける覚悟をしてきたのに。

いざ憎しみを前にすると、こつも胸が詰まるものか。

信仰に天蓋の力を得た身でありながら
情けなくもたかが一羽に気圧されている。

しかし、そのような私は許されてはいない。

『許されない』のだ。

私は子を照らす太陽でなければならぬ。
在り続けないければならない。

この怒りは私が齎したもの。

知らなかったとはいえども彼の神に難題を押し付けたのは私。
同じく子を愛する者へ、子を戦地に送るよう仕向けたのも私。

数多の神霊から倭を託された者として屹然と受け止めねばならない。

逃げるな、怯えるな、目を逸らすな。

一切合財悉くが私の罪である。

雉鳴女から静かに、けれど熱を帯びた言葉が発せられた。

「戦場での死ならば彼らは覚悟していたのです。たったあれだけの戦力で大陸を相手に回す無謀も全て含め、最も有り得る未来として、きつと誰も帰れぬ事を悟っていた。

私の発案で森戸を死地に導いたのは紛れも無く事実。このような事を口にする資格など本来無いでしょう。

しかし彼らは勇敢に守り抜いた、犠牲は多かったけれども、……三人も、三人も生き残ってくれた！

その彼らが迎えたこの結末は、あまりにも救われないっ！」

彼女らしからぬ激昂。

遙か昔に袂を分けた時以来だろう。

「ええ、分かっていますよ貴女の所為ではない事もっ
どうして杜人綿津見神を頼ったのかも全て分かっています！」

だからこそ振り上げた手の下ろし場所が無いのだ、と。搾り出すように雉鳴女は私にそう告げた。

……一つ私には気になる事がある。

「彼の神は知っておるのか？」

「……いえ、鳴女しか知らぬはずです」

「そうだ、それで良い。」

世には理屈よりも優先すべき感情もある。
余計な事は心乱し苦しめるだけだろう。

その怒りは私が齎したもの。
私がこの身に刻むべきもの。

杜人綿津見神へのけじめを付けねばならない。

「よろしい、ならばそなたの神に伝えよ。
憎しみあらば討て、私は其を許そう。」

「されど日は天空に在るが理、易く非じば」

驚きに固まる雉鳴女を強制的に退去させ、私は物思いに耽っていた。

正しさとは何か。

過ちは如何に贖われるべきか。

外は宵闇、薄雲から顔を覗かせる月に在りし日の弟を想う。

たとえ情けない姉であろうと、月光は優しい。

優しさが、痛いくらいに胸を刺す。

「『文句があるならかかって来い』とは随分陳腐な挑発だ、笑つちやうよ」

夜の静寂を打ち破った声は、
毎日顔を合わせる馴染み深いもの。

「馬鹿だねえ、天照。

アンタは馬鹿だよ、ほんとにさ。

長いことアンタの側にいるけど筋金入りだよ」

振り返ると豊受媛神トヨウケノカミが酒と杯、肴の塩を盆ハシに載せ
呆れ果てたとばかりに深い息を吐いていた。

「泣くな太陽神、夜といえど空が曇る」

言つて彼女は私の隣に腰を下ろす。
そして沈む私へ無理やりに酌をしてきた。

良い酒なのだろう、豊穰神たる彼女の酒なのだ。
鼻をくすぐる香りはそれに相応しい。

「相も変わらず泣き虫で、弱虫で、怖がりで、本当に臆病。
それでいて偽悪的に振舞おうなんざ都合が良いにも程がある。
アタシの時だってそうだったか、いやいや何とも懐かしいね」

……彼女の明け透けな言葉はいつだって私の心の芯を突く。

滑らかな口当たり、微かに喉を焼く酒気。
私は何も言えなくなつて、視線を月に戻した。

「大和朝廷には……いや、言つてしまえば日本には
もつまともな神霊は残つちやいないんだろ。」

アタシの知るところ誰も彼も消えちまったに等しいものさ。
あたかも健在と見せ掛けた神がどれほどいるか。

土着となり土地に依存、自由は消え、振るえる神威は枯れてゆく。

信仰を掻っ攫おうっていう戦馬鹿の良いただからねあの国は「

どこか遠くを見つめた風に、豊受媛神の言葉は宙に吸い込まれていく。

そう、だからこそ私は頼った。

勅命を下させ、強制した。

始原の倭を思い出させるあの優しい国を直接的に私の下に付け、
日本防衛という巨大すぎる功績を以って余計な干渉を抑えさせる。
人の世界だけでなく、神側からも隔離して上げたかったのだ。

目の前の友は千年越しの郷愁を笑うだろうか。

移ろい行く世界の中で、変わらずにいたあの神に憧れを抱いていた
事を。

このささやかな我儂がそもその間違이었다のたろう。

傲慢にも上から守ってやると言う愚かしさ。

権力を笠に着た厚かましさを私は悔やむ。

最大の誤算は山犬の神も地に縛られていた事。

杜人綿津見神が縛られているのは知っていた。

元よりその在り方からすれば容易に想像できるものだ。

しかし、動けぬからこそその山犬であると思いついていた。

私が生み出した八咫鳥のように本人の届かぬ場所を補うものだ。

鳴女と共にあの山犬の神が先頭に立てば並大抵では崩せまい。

そう甘い考えで決断したから、今の状況がある。

「行くのかい？」

杯を煽った豊受媛神は真剣な表情で問いかけてきた。

私は頷きで答える。

「なら、ここで謀反だね。」

おい私の巫女共、ざっと三日は閉じ込めておいてくれ」

……ッ！？

突如、伊勢神宮の外宮を司る精銳が現われ
私を取り囲んで靈力を縛ろうとしてきた。

しかし、太陽が無い夜とはいえどもこの程度で私を封じれるはずが
ない。

そもそも豊受媛神は戦う神でも奪う神ではないのだ。
癒し、育み、生む神である。

その意図は……？

「日本の為に生きてなくてはならない。
けれど責任を取らなくてはならないから戦う

……不器用だねえ。

アタシはね、好きだよそっぴいっつと。」

わざと悪ぶってるところも、強がってるところも。
まるで手のかかる妹みたいでさ、気に入ってる」

何を言っ……、言葉が、……だせない？。

「杯にね、少彦名神スクナヒコナの眠り薬さ。

古いから効果があるか不安だったが流石だな。

天照、アンタの代わりにアタシが行くよ。

あちらさんとは顔を合わせた事もあるからな。

知り合いの喧嘩は見てて気分が良いものじゃないしねえ。

アタシが説得できりゃ良し。

できなくてもアタシの首があれば収まるだろ」

意識が少しずつ、薄れていく。

そんな事が…許されるはずがない。

それは私の罪で、……私が戦うべきなのだ。

……だから、いくな。

おねがい……まって、……いかないで。

歩み去る後ろ姿を最後に、私は眠りについた。

杜人閑話……十三世紀伊勢『思惑すれ違ひ』（後書き）

豊受媛神は天照大御神を祭る伊勢神宮の外宮に祀られる神。

天照にわりと強引に遷宮させられたりしている。

実は神話上かなり凄い神。高位神階の大物忌神と同神であるともされる。

らいほう……百年後の勝ち戦へ

伊勢へ報告に行った雉鳴女が帰ってきて一日。

日ノ本を支える天照大御神は何を考えているのだろうか。

……というか、之は喧嘩を売られていると解釈していいのか？

『憎しみあらば討て、私は其を許そう。』

されど日は天空に在るが理、易く非じば』

379

任務を受け、人を出し、避け得ぬ犠牲があった。
それでも完遂して報告をすると宣戦布告？

森戸の死は、我が子の不幸は、確かな教訓も残したはずだ。
それを何ら汲み取るうとせずに憎いなら気を晴らせと戦いを持って
くる。

まあ、労いの一言が無かった事に雉鳴女が過激な反応をしてしまっ
たのも原因であろうが。

悪意で捉えれば役目の無くなった杜人および森戸の消去。
善意だとすれば罪滅ぼしに怒りの矛先となろうというものか。

妙に冷たく事務的な言い様は雉鳴女から伝え聞いていた性格と食い違う。

その辺りから想像するに偽悪的な振る舞いだと思われ、後者の可能性が高いが……。

……それは違っただろう天照！

哀しみや怒りがまったく無いとは言わないが、見るべきが違う。

問題の本質は『組織力の低下』であり朝廷の存在感が危ういのだ。名目上朝廷の臣下である幕府や対等であるべき仏教各派を抑えきれぬほど。

森戸は天皇家によってその地位を保っている。

つまりは朝廷に大事があればそれは返ってくるわけである。

このような戦いなぞ必要なく、他にやるべきはあるだろうに。

そもそも何故、大和ではなく私を指名したのかを考えたら判る事だ。初めは杜人の戦力を測る為かとも思っていたが、九州の現状を見ておおよそ目星は付く。

人と人の結びつきからくる仏教と比べ、徐々に神と人の結束が綻びを見せているのだ。

大和神霊はこちらが思っている以上に問題を抱えている、それも軽くは無いものを。

先の天皇から貰った手紙を見てもそうだろう、そこを忘れてはいけない。

目の前の悲劇に心を砕くのは構わない、慈母と称される優しさは美德だ。

しかし、何も見えていない。

感情だけでは政治なぞ出来ない。

私が怒りに身を震わせるのは、

このままでは我が子が無駄死にと終わってしまうから。

私は裏に、天照は表に立つ事を決めた神。

お互いに道理の判らぬ幼子ではあるまい。

重ねてきた歳月が無為だとも言う気なら、

私はそれこそふざけるなと怒鳴り散らすだろう。

偉そうに言える口ではないが、同じ背負う者として見てもらえない。

……が、実に頭が痛いことに攻めてくる、と。

こつちが動けない、にも関わらずそう言ってきたならそういう事。読みが合っていれば積極的交戦の意思は無いであろうが保証があるわけでもなし、だいたい最高位の神威が吹き荒れて無事で済む土地なんて無いわけ……。で……。

戦闘区域の設定や避難誘導のマニュアル作成に大忙しだ。

古巣の主である天照に何か思う所があったのか雉鳴女は上の空。代わりに鶉鳴女に陣頭指揮を取ってもらって諸々の雑事をこなしてもらっている。

私は山犬と共に山を歩いて戦場の選定とその土地の地霊、縄張りにしていた妖怪に連絡。熊や鹿といった動物達にも戦の匂いが近づいてきたら退散するように言いつける。

中には協力を申し出た者達もいた（人妖の区別無く）が全て断っている。

これは私宛の宣戦布告であるし、もし全力で来られれば勝ち目も無い。……のだが、山犬に関しては頑として共に戦うと言って聞かないので諦めた。

私の手足、とは失礼に当たるか。
もう半身と喻えて過言ではないだろう。
そんな相棒を除け者にはできないものな。

森戸家に関しては祭神が代わる可能性がある事を話し、
山犬が生き残っていたならば山犬を杜人綿津見神と据えるよう、
両方ともに消滅した場合は雉鳴女を頭にし一先ず降参、納得が行く
ならば中央の裁定に従うように、
そつでなければ鳴女の自由意志に任せるように命令しておいた。

もしもを考えると当然の処置なのだけれども、これには皆が驚いて
いた。

それと、手出しを禁じておく。

人間では逆立ちしたって敵う相手でもないからだ。
たとえ杜人神刀を手にしていたとしても遙か格上の神秘を相手に人
の身体が保つまい。

神刀は私が欲しいけれど。

力を通しやすい神器があれば少しは楽になりそうだが、
森戸家に貸与した神刀は現在九州で紛失中だから手元に無い。

普通の人間が持つていても不思議な何かを感じられる程の加護を込
めてあるので
折れたりしていなければ何処かの寺社に回収されてはいると思うの
だが……今回は使えない。
戦争の後始末が終わったので鳴女にお願いしたばかりなのだ。
回収は早くて二ヶ月後だろうが、おそらく後の祭りだろう。

モリトの頃から負け戦しかしてないなあ、と山犬に零したら、
いつも百年後に勝つ戦をしているだろう、と素っ気なく答えられた。

山犬はあまり喋らない。

基本的に行動で全てを語る奴である。

これは、励まされているのか。

背中に飛び乗って毛皮に抱きつく。

そういう偶に見せる優しさがどれほど私を勇気付けてくれると思っ
ているのか。

384

そうだな、百年後の子供達が笑っていれば私達の勝ちだ。

私達はいつだって、今この時でさえ、百年後の勝利に動いているの
だ。

日頃の感謝も込めて入念に毛繕いをしてあげると気持ち良さそうに
声を漏らした。

私は山犬の背で仰向けに空を眺めながら思考を加速させる。

もし本気で天照大御神と戦う事態になったら最も重要になるのは『方角』だろう。

日光の権現ともあれば昼であるだけで絶対的なアドバンテージだ。本人プラス外付けの信仰供給源が顕れることになるし、こちらが多少曇らせようとも強引に雲を散らすだけのパワーがある。散らした分の力はその後で十二分に補給できるので消耗ですらない。

太陽信仰は伊達じゃないのだ。

農民も漁民も、武士も貴族も、お天道様を拝まない者はいない。

今は冬であるが、それ故に生命満ち溢れる春の暖かさを皆が望んでいる。

信仰量で一番勝機が見出せそうなのは秋、そこから信仰は膨らみ、秋で一巡すると思われる。

昼間が短いのは助かるが開戦は確実に日の出すぐになるだろうし焼け石に水。

となれば可能な抵抗は太陽を背負わせない事。

北西にずっと押し付ける形で戦場を構築できれば瞬殺は免れそうであるが、

東から来る相手をどうやって逆側に追いやれば良いのか。

誘導の為に河川や溪谷を動かしたりするのは被害が大きすぎて実行できないしなあ……

そんな事を考えていると、山どころか領地中に大声が響き渡った。

まさか、早すぎやしないか。

『我が名は豊受媛神也トヨウケビメノカミツ！』

天照大御神、御身優れず其の名代として参った次第だ。

この声届いたならば我を杜人綿津見神の元へ導き給え！』

この声は豊受媛神で間違いないだろう。

以前、土地を肥やし実りを多くするにはと言葉を交えた事がある。

偉大なる豊穰の神、豊受媛神。

彼女は天照大御神を祀る伊勢神宮の外宮に祀られた神。

平常の碎けた口調とは打って変わり硬い言葉遣いだ。が殺気も敵意も

感ぜず、
どうにも戦の空気ではないようである、どういった用件なのか。
もしかして決闘のように日取りを決めてから等の連絡に来たのだからか？

鶯鳴女に報を飛ばして丁重に杜人神社に迎えるよう指示し、
私自身も山犬に乗って本殿へと急いだ。

そうして半刻後、私が境内に降り立った時、
すでに到着していたのか豊受媛神から声が掛けられた。

「やあやあ、急で悪いが久しぶりだな、杜人の。
アンタの前で飾るのは無粋つてもんだ、口を崩させてもらおうよ。
さっきも言ったが、あの子の代わりに此処に来た。

見ての通り、何一つ持つちゃいない、この身一つで来たわけだ。
アタシを煮るなり焼くなり好きにしちまって良い。
それこそ夜伽だろうが首切りだろうが何だって構いやしない。

戦いも、抵抗もしない、その代わりにアタシの話をちょっと聞け」

豊受媛神は鳥居の前で胡坐をかき

強い決意と覚悟を宿した鋭い眼光で私を射抜いていた。

……全裸で。

かいだん……何故今へと至ったか

「いやいや驚かしたようで悪かったね」

豊受媛神が悪びれた様子もなくカラカラと笑いながら部屋へ入ってきた。

惜し気もなく晒されたすらり美しいその肢体。
今は雉鳴女に渡された小袖と袴を纏っている。

まったく、先程まで戦準備に緊張していた私が馬鹿のようだ。

既に戦意は失せ、流れは彼女が握った。
騙まし討ちも何も無いと、真に正面から裸でぶつかって誠意を示した。

狙ったのだとしたらこの上ない策士なのだろう。

……なのだろうが、豊受媛神は何も考えていなかった気がしてならない。

自然に、最短で、事態の急所へ辿り着く。

真つ直ぐ芯のある人物はこういつ妙手を無意識に出すものだ。

自分の意思を信じる心。

それはどこか祝福に似て、世界に働きかける力があるような気がする。

『そう在るべし』と意思を貫く者を様々な偶然が手助けする事は珍しくない。

ましてや存在の強い神霊ともあれば言わずもがな。

さあ、話を聞こう。

話し合いという名の情報交換、現状確認はスムーズに進んだ。

戦いに来たわけではない豊受媛神と、戦いたくない私だから当然の帰結だろう。

今回の問題は地盤を安定化できていなかった天照大御神が、信仰を求める戦神の矛先になりかねない杜人の地を遠まわしに守ろうとした事から始まる。

正直、そこまで狙われている意識はなかったのだが、側に控えていた雉鳴女に確認を取ると影ながらそういう噂もあったらしい。

諏訪大戦の再来となれば弱体した戦神達も共に滅びる危険があるので天照は阻止したかった、と。

それは完全に善意であり、多少の打算はあってもお互いに益があるように動こうとした。

守ろうと思った最初の理由はなにか。

豊受媛神曰く、杜人の地にある神と人の関係が懐かしく思えたからとの事。

昨今の神霊弱体化にも悩んでいて、もしもの時に大和神霊を引き継げる器を私に期待していたらしい。

そこで目下外患である蒙古に目を付け、周囲が納得できる実績を積ませる意味で日本防衛を依頼。

杜人一族の能力があるならば、ある程度の援護で達成は可能だと思われたわけである。

ところが、誤算があった。

私が動けぬ事は知っていたが山犬まで防衛戦に向かえないとは思っておらず

遠隔地で行動するために用意している眷属や式、使い魔の類だと思
い込んでいた。

山犬は共に王樹様の力を受け継いだ同盟者のようなものだからなあ。
私が生み出した存在ではないし、同じ力に根ざしているから同様に
縛られているけれど

存在としては厳密に言うとは別個で、命令にも逆らえるし私を殺す事
だって可能な力の持ち主。

この勘違いは古事記、日本書紀の時期に書かれた古い記述からしか
情報を取っていなかった事が原因。

まあ、天照を弁護するなら、当時の私は雉鳴女にも鶉鳴女にもそこ
を教えておらず

彼女等が大和に残した資料は実測した能力や系譜ではなく推定され
るものに留まっていたのが一点。

そして、鳴女を手放した時期から情報網の再構築を迫られたのと
私の身内となった鳴女の機密性の高さでそれ以上の情報を得られな
かったのはある。

九州に行くのは森戸家精鋭と鳴女だけ、と天照が知ったのは出発し
てから。

もはや中止とは言えない。

天皇に命じて勅命まで出させた以上、コロコロと言葉を変えるのは許されない。

権力は実行される重みが無くなった時点で意味を成さなくなるからだ。

そして、天照の誤算その二。

鳴女までもが半分縛られた形になっているとは思ってもよらなかった事。

これは私達もつい百年程前に気付いた問題で、弱みとなるため外部へは秘匿していたから知らなかったのは当然。この点に関してはお互いに不幸だったとしか言えない。

豊受媛神もこれは初耳で驚いていた。

雉鳴女が何かに縛られ弱っている様にはまるで見えないという。

むしろ昔より安定してるんじゃないか、と不意に近づかれ困惑する雉鳴女の

手や腰を触ったり顔を覗き込んだりしていた。

距離で影響を受けるから地元では十全である。

存在が安定するように気を使った結果そついう風に縛られたのだ。

私がそう言つと豊受媛神は声を上げて「良かったな雉鳴女」と笑う。何が良いものか、その負担は幾つもの犠牲を生んだのだと流石の私

も怒った。

彼女達の自由は私によって制限されているのだ、と。

すると、豊受媛神はそれは悪い事を言ったが、と前置きをして語り出した。

「生きていくため飛ぶ鳥おんなには、止まり木が必要なのだ。

帰らなきゃならん場所がハッキリしてるのは良い事だよ。

お前の嫁は、それが嫌だと言ったかい？」

……そもそも雉鳴女は私の女房でもないのだが。

まあ、彼女を妻とできるなら、

他に代え難い最良の伴侶となるだろう。

それは間違いあるまいが……。

脱線した話を元に戻すべく雉鳴女からも何か言って貰おうとしたが妙な流れに頬をぼうつと上気させ、使い物にならなくなっていた。

彼女はこういった話に弱いのだ。

色恋沙汰を話し合いに来たわけでもあるまい、とズレた話を強引に打ち切る。

一応、天照は大宰府などに森戸への協力と応援を送る様に命令はしていたらしいが、

第一次蒙古襲来時まで危機意識が薄く、余所者である森戸は疎まれ、半分孤立状態だった。

最終的に彼女の想定よりも森戸の戦力は数段低かったのだ。

ここで朝廷の組織力低下が響いてくる。

初戦を凌げたのは奇跡だった。

二戦目からはスムーズな援軍が用意されたが、トップから一本化した意思疎通、

そして問題意識の共有があれば援護はもつと容易かったろう。

それでも森戸家は役割を果たした。

数々の誤算や見通しの甘さで被害を大きくしてしまい天照は心折れそうになっていたが

三人も生き残ってくれた事を我が事のように喜んでいたらしい。

無謀な死を課させてしまった罪の意識を軽くできたからだろうか。

そこへ最後の誤算、森戸暗殺が追い討ちをかけた。

御家人の暴走は幕府の手綱を握れていないのもある。

仏教の政治力を牽制できず朝廷の存在感が薄れていたのもある。

初戦で望むように報酬を出せなかった幕府への不満と、余所者を妬んだ者共の暴走は、天照にとって己を刺す刃に等しかった。

不利を強いて、援護も遅く、最悪の状況下で守りぬいた者に対するあまりにも酷い裏切り。

それを生み出したあらゆる要因が天照自身である事に、断罪を求めた。

私への宣戦布告は、心が追い詰められたが故の逃避行動か。

憎まれる事で、傷つけられる事で、

誰よりも天照大御神本人が救われたがっている。

細かい部分に至るまで全てを話し終え、

私と豊受媛神と、ようやく再起動した雉鳴女は瞳を見合わせて声を揃えた。

難儀だ、と。

豊受媛神が今回来たのも、止める間もなく天照大御神が宣戦布告してしまつたから。

何でも、慌てて眠り薬を用意して伊勢神宮に閉じ込めてきたらしい。外宮の人間も無理矢理にかき集めて封じたから帰る場所が無いかもしれないと彼女は笑つた。

それはまた随分と無茶をしたものだ。

この言葉に豊受媛神は誇らしげに胸を張つた。

「人も神も『大事なもの』に命を賭けて生きるものさ。

アンタも身内の為なら何だつてやつてやろうと思つたろ。

今のアタシはあの子が『大事』なんだ、可愛い妹分だもの」

もしも私が激昂していたならば、本当に首を差し出す覚悟はしていたそうだ。

それでも、短慮の尻拭いで死ぬ事になつたとしても、天照が何を想い行動したかを伝える為に此処に来た。

空回つた善意に、何が足りなかつたのか。

天照大御神が必要する視点、心構え、能力は何なのかを私に求めて。

頭を床に付けるほど深く下げ、
豊受媛神は祈るように願いを吐き出す。

「次はあの子を連れてくる。

なあ、多くを背負う神、杜人綿津見神よ。

豊受媛神の名に於いて伏し願い申し上げる。

天照大御神を導いて、成長させてやっておくれ。

アタシはあの子の為にならない。

本来ならアタシがやらなくちゃいけないけれど、

情けない事に甘やかすだけだった。

いつまでも少女じゃいられないって事を、教えてやってくれ」

私は頷いて、
願いを受け取った。

……結局、良い姉じゃなかったのさ。

最後にそう呟いて豊受媛神との会談は終わった。

その一言の内に何が込められているか、察せ無いほど馬鹿ではない。

それは優しさしか与えてこなかった今までを振り返る、重い後悔だった。

はんせい……日出づる国の神様

「杜人綿津見神、此の度の招きをありがたく思います」

豊受媛神の来訪から半月ほど経って。

猿田彦、ではなく豊受媛神の先導で

朝焼けを背に、天照大御神は伊勢より杜人の地へ渡ってきた。

なるほど、美しさと可憐さの黄金比と言つべきだろう。

私は思わず目を奪われた。

ただそこに立っているだけでも惹かれてしまう強烈な存在感。

周囲へ溢れ出る暖かな神気は安心を与えてくれる。

絶対的な何かを感じさせる女神。

これが大和の最高神位、天照大御神か。

……しかし、言い難いのだが、

澄ました表情も不安を隠すためのようである。

本来ならもつと神々しく差すべき朝日もどこか力が無い。

これは彼女の精神状態が影響しているのだろうか。

初対面でかなり失礼な感想なのは理解していたが、
随分とまあ、わかりやすい神だと私は思った。

神社での会談は天照の謝罪から始まった。

その者の前に立ち、正面から瞳を合わせ、頭を垂れ、謝意を示す。

まずは神の都合に付き合わされた森戸家へ。

次に思惑を押し付けんとした私へ。

最後に皺寄せを受けた鳴女へ。

三度、ゆっくりと。

泣き出しそうなのを堪え、ふるふると表情が揺らいでいた。

面と向かう事で後悔が蘇っているのかもしれない。

しかし、泣いて情に訴えるのは卑怯であると己を戒めているのだろう。

精一杯の強がり功を奏したのか、雫が零れることはなかった。

それから今度はそれぞれに

ありがとうございました、と。

三度、ゆっくり頭を下げる。

私は天照に対してまだまだ言わねばならない事があるが、もう特に隔意はない。

長く生きてきたのもあって、わりと柔軟に受け止められるものだ。

けれども短い生を持つ人間は感情の生き物。

人間である森戸家はこれに納得できたのか心配だったが大丈夫らしい。

まあ、旅立った彼らの功績に対する報酬がそれを慰めたのもある。

私が身内を大切にしているからか、

死んでいった先達をきちんと評価してもらえれば十分だと言う。

人間側の報酬は以下のもの。

直接的な金銭と、以降朝廷からの派兵要求に対する拒否権。

そして森戸家の土地拡充、京、堺、伊勢に小規模ながら土地の保有が認められた。

全国で土地が無いと御家人や幕府が唸っている中、かなり破格の報酬である。

私達神霊側はこのようになった。

杜人の地は天照大御神の名に於いて大和神霊の行き来に申請が必要になった。

これで不意打ちや戦争目的で侵入すると天照側から厳罰が下される。天照の性格上、どこまでやるのか心配であるが天照を敵に回すのであれば効果は見込めるだろう。

そして、一通り天照が果たさねばならぬ義務を終えた後は小言の時間だ。

では今回の大き過ぎる一件について、と前置きをして私は彼女へ説く事にする。

大神ともあるう者が視野狭窄に陥るとは情けない。命令を下したのは天照本人であり犠牲に關してはさっきのように報酬で報いられたいわけだ。変に感情移入した拳句に碌に考えもせずには宣戦布告とは上に立つ者としては浅薄が過ぎる。そもそも下調べの段階で粗が目立つ。鳴女離反をここで言うのは筋違いだが代替となる組織構築を怠っていないかったか。大昔からずっと気になっていたのだから言わせてもらいますが、大和神靈は私が獅子身中の虫であると認識していたのか甚だ疑問です。実際、考えていなかった気がしてならない。ここ二百年でそれは特に顕著だ。おそらく大和神靈の弱体によるものもあるのだろうが甘えが見て取れる。私は自分の範囲を守ればそれで良いと思っただけでなかったわけですが、もしも私が野心家であったならばどうだったのか。権益を安易に譲りすぎてはいませんか。そういう相手を調べないというのは怠慢もここに極まれば。武力ではなく情報こそが組織の長を守る鎧で矛なのだから軽んじてはいけませんように。大和勢力は人材の豊富さと精強さこそが要だったと憶えていますけれど、今それが失われていつていることを嘆くだけでなく具体的な行動を起こしていますか。何となくの想像であるので違っていたら謝りますが仏教を認めるに当たっても子孫に推されて感情で決めている気がします。結果的に当時の民の安堵や神秘に対する考えの多様性を生んだのは悪くなかったとも思えるけれども。その後の全てを予期しろとは言わないが、その時の吟味を疎かにしているように思えてならない。他にも……………それで……………

…を見据え……………だから……………もつと……………部下……………

自分でも溜まっていたのか、気がつけば日が沈み始めていた。

途中から雉鳴女と鶉鳴女も一緒になつての説教大会。
随分と長くなつたものだ。

終始、天照はポロポロと涙を溢しながらも真剣な表情でこちらを見つめていた。
私達の言葉の雨が終わった今も、説教を胸に今後を考えているのだらう。

……正座が辛いのかプルプルと兔の様に震えているので台無したが。
浮くなり、靈性を強めるなりで正座程度どうでもよくなるのに……。
おそらくは戒めとして、自虐も含めてあえて痛みを受けていると思
うのだけれど
何度か崩しても良いと言つたが頑として受け入れなかった。

なんというか、こうなると見ているこっちが止めてあげたくなつた。

まあ、私達が居ると崩しにくいのもあるかもしれない。
静かに考える事が有りでしょう、と鳴女と共にソツと席を外した。
当主と土地管理で話さなければならぬ事もあるし。

ちなみに、説教には豊受媛神も付き添っていた。部屋から出る際に横目で窺うと、胡坐のまま魂が抜けたように呆けていた。というか煤けていた。

外に出ると野次馬に集まってきたのだろう、祖霊、地霊、妖怪も含めて神社周辺の山まで大賑わいだった。

天照の名は良くも悪くも此処では有名だ。

私は何百年も大和神霊と友好ではあるものの一線引いた関係を保っていた。

お互いに少々の警戒を抱きながら基本的に不干渉だからそうできたのだ。

それを一方的かつ派手に破ってくれたのが天照大御神。

嗜好きな妖怪などがここ30年ほどの私が悩む様を広めていたらしく事態の認知度は非常に高いわけで、一目その元凶を見てみようと思いのように集まってきたわけだ。

ざっとどんな顔ぶれかを確認していたら、

神社の中に居るといふのに天照の神氣に中てられて従属しそうになつてゐるものがチラホラ。

これは一種のカリスマと呼んでいいのだろうか？

無自覚、無意識的に、理不尽と言えるほどに他者を惹き付ける太陽。

妙だと思ひ山犬と共に気を張つて原因を調べると

靈的に安定する力場が天照を中心に発生しているようだ。

さしずめ歩く靈脈とでも言つたところか。

天照の性格にそぐわぬ高い地位は、この体質で担ぎ上げられた物に思へた。

どこか抜けた所のある彼女を支えてあげたいと周囲は奮起したのだらう。

人が集まり、神が集まり、自然とそうなつていったと思われる。

その事に、少し悲しいものを感じた。

今日はそれで一先ずの終わり。

天照大御神と豊受媛神は杜人神社に泊まる事になった。

事が大きかっただけに一朝一夕で済むとは思って居らず、泊まり用の御社を建設中だったが

完成するまで後二日はかかるらしく、それまではこうなる。

寝所を共にするわけには行きますまい、と雉鳴女の進言から

私は綿津見神社もあるのでそちらに寝泊りとなる。

お互いに睡眠が必要なわけではないが身内だけで話し合える場所が必要だろう。

鶯鳴女に二柱の世話を任せ、私は雉鳴女と共に山犬に乗って海に向かった。

分社があつて良かった。

私の前に座る雉鳴女が小さく呟いた気がした。

確かに、分社があつて助かった。

これからは大和神霊との付き合いも深くなる。

そういうお客様用に仮宿があると便利だと思ひながら、山犬は夕闇を駆けていく。

杜人閑話……とある地方伝承『津蟹』

三池の山には大蛇が封じられている。

遙かな昔、大蛇は辺り一帯を喰い荒らし民を脅かしていた。

山を統べる神に成り上がるべく畏れを信仰とし

牛馬を飲み込むほどの巨大さで暴虐の限りを尽くしていたと。

しかし、大蛇の野望は潰える事となる。

ある時どこからか玉姫と呼ばれる美姫の噂を耳にした大蛇は姫を襲ったが

助けに入った津蟹（沢蟹）によってその身を三つに裂かれて三つの血溜まりと化したのだ。

血溜まりは僧によって清められ池になり、大蛇は荒魂を鎮められた。そして津蟹は片目を鋏で切り落とし、蘇らぬよう社からその眼で池を見張っている。

『三池』とはその池を表すと共に、封を忘れぬよう付けられた名前

だ。

とはいえ、時が移ろうにつれ人の記憶は薄れてゆくもの。
守りを任せられた三池宮の者だけが書物の上で大蛇を記すのみ。

その上、姿も影も見せぬ大蛇の魂に、
もはや終わつたものだと三池宮の者も思っていた。

だが、宮司が何代か代変わりした頃、水底で脈動を始める事になる。

山の神と成りかけた人喰い大蛇を封じた実績があるとなれば、
蒙古が押し寄せてきた折、当然の如く大陸の悪鬼怨霊に抗する為に
三池宮にも声が掛かるもの。

宮司は博多を守りに行くその時に神具の『津蟹の眼石』を社から持ち出してしまったのだ。

そして、運の悪い事に宮司は蒙古軍に殺され、戦場に消えてしまう。

ついに大蛇を抑えていた眼石は失われた。

清められた池の底に、それでもなお血塊として存在していた大蛇の欠片は存在を増し
三つの池は三つの血溜まりへと姿を変え、かつて討たれた古代へと時を巻き戻す。

これに焦った三池宮の者は津蟹の名を呼ぶも応えはない。

津蟹は過去の戦いで重傷を負っており回復の為に深い眠りについていたのだ。

危機が訪れた時に起きる事ができるよう、それを感知するために眼を残したのである。

眼が何処に消えたか分からない今、津蟹を呼ぶ術が無い。

大蛇は血の赤にぬめる鎌首をもたげ完全に姿を取り戻した。
血の池は瘴気を発し、麓の村へ病を広げ始める。

もはやこれまでかと皆が諦めた時、

一振りの太刀を手に天から洩加計須神モリカケスノカミが降り立ち全員に告げた。

我は土地神でなく神刀を主へ届けんとする者なれど、

この悪を見逃すは許されざる悪と同じく。

汝らの内に一心カウジツの曇りなく守る為に立つ者在れば

我が前に歩を進めよ。然らば守護の一太刀を貸し与えん。

誰もが大蛇の異形に尻込みする中、唯一踏み出したのは少年だった。

私に母を守らせ給え。

そう言った少年に洩加計須神は太刀を渡すと天に消えた。

少年が一振りすると村を覆う瘴気が風に吹き飛ばされていく。

これに怒った大蛇は少年を丸呑みにしてやろうと襲い掛かるものの
刀が巻き起こす風に逸らされて喰い付く事ができない。

毒液を牙から吐きかけても同じように防がれてしまう。

少年は必死に大蛇の猛攻を凌ぎ、山を、村を、母を守っていた。

しかし大蛇も賢しいもので、戦いを長引かせてきたのだ。

刀を握ると力が沸いてきて風のように動けたが

一昼夜も戦い続けては疲れも溜まりついには動けなくなる。

決着がついてしまった。

倒れてなお諦めぬと力無く切っ先を向ける満身創痍の少年へ
無慈悲に大蛇が噛み付こうしたその時……。

津蟹が現われて巨大な鋏で大蛇を三つに引き裂いた。

古の昔、そうあった様に、再び大蛇はその身を三つに分けられたのだ。

来ないはずの津蟹が何故この場に現われたのか。

山に居た全ての鳥達に命じて洩加計須神が『津蟹の眼石』を一昼夜かけて探し出していたのだ。

少年が守り抜いて生まれたその時間は、確かに村を守ったのである。

「やいや、藤井君の熱心さにや勝てんて」

「玉姫までの津蟹伝説は知っていたんですけど、続きがあるとは知りませんでした。」

しかも、私の欲しいものが出てくるとは思ってもみなかった」

「ま、洩加計須神と刀は十中八九そげんやろうけん、連絡してみたっちゃけど、そこから掘るとがあたんの仕事やろ、頑張りや」

「仕事じゃなくて趣味も含みますけどね。」

……っと、もうこんな時間か、ご飯どうします?」

「んじゃ、せつか来たんば、ラーメン食べに行こうでて。向こさ違うちよるけん、楽しみにしいよ」

「良いですねえ、良い店を教えてくださいよ」

「誰に言いつてる思っつとや」

「ええ、期待してます」

「任せんじやい」

杜人閑話……とある地方伝承『津蟹』（後書き）

三池宮関係者の方について少々失礼な内容となりました。
神具等、大部分がフィクションです。実際の伝説とは異なります。

神様の名前は当て字も多い。読みが違う事もザラ。

刀の回収は上手くいったようです。伝説を創りながら
……というか何をやってるんだ回収班。

かりやど……神霊の拠り所

久方ぶりの忙しさだった、と天照大御神の来訪からを振り返る。

天照大御神の世話は勿論、大和神霊の来訪用に仮宿となる社を建てたり、

堺や京へ駐留させる人材の選定やその土地の神霊への根回しなど息つく暇もなかった。

ついでにどさくさ紛れで鳴女用の家、御社を建設しようと企んだがすぐに察知され立ち消えとなった。

前々から打診していたものの裏方である自分達へは不相応と固辞されている。

私との繋がりだけでなく、己の信仰集積地の有る無しでは安定感が違うと思うのだが、

地盤を築く事で私と同様に縛られる可能性があるという理由もあつたりはするのでまたも断念。

ただ、今回のように遠地へ分社を立てるお膳立てが整うのならば距離的な制約を擬似的に外せるとは思うのだ。

北は蝦夷地……は無理だろうけれど関東北部くらいに、

南は北九州あたりに鳴女神社を建てたならもう少し自由にさせて上

げられるのだが……。
無いものねだりを言って仕方ない。

どうにかして彼女達に報いられないかなと頭を悩ます日々はまだ続きそうである。

その雉鳴女は天照逗留中の専属講師となっていた。
こちらもそれなりに忙しかったようだ。

天照は雉鳴女から様々な講習を真面目に受け、自分を磨いていた。
組織の頭として物事を判断し決断するには知識が要る。
ある種の技能である知恵と違い、才に乏しい者であるうと蓄える事は可能なのだ。

知恵を生む閃きは知識が無ければ容易くない。
土台無くして家は立たない。

これは700年の経験則。

天照は己が足りないことを自覚していた。
だからこそ愚痴の一言も漏らさずに勉学に励めたのだ。
雉鳴女の指導が良かったのもあるかも知れない。

それに比べて私から天照に何かしてやれた事は少なかったが
大切なものを見つけてもらえたとは思う。

私は天照と海を巡り、野を巡り、山を巡った。

そこには人が当たり前のように日常を生きている。
しかし、どこであるうと生きていく事は戦いと同じ。

発生する問題に人間の知恵が立ち向かった結果が村や町なのだ。
ただの風景と思うか、偉大な手本と取るかは彼女次第。

知識を持つて物事の因果を知れば行なわずして成否は分かる。

また、失敗が予想されたとしても、それを元に成功への道も見える。
そうした積み重ねが人々の集まりだから。

考える事の大切さを、子供達を通して感じてもらえてはいるだろう。

伊勢へ帰った彼女はその足で東国へ行き、知恵の神を訪ねたそうだ。
ヤゴコロオモイカネノカミ
八意思兼神と言えば私も名を知っているメジャーな神である。

雉鳴女曰く、「中央が面倒になったから隠居した物臭、しかし智慧は
本物」だとか。

大和創成期を支えた賢者だったそうな。

こういう人材が色んな所で腐っているのを何とかする為に天照は率
先して走り始めたが
また行動力が空回ったり変な方向へ流されないか他人事ながら心配
である。

あと、仮宿があるのを良いことに相談事を持ち掛けへ杜人の地まで
お忍びになる。

別に構わないのだが、出来れば外様の私でなくそれこそ思兼神のように譜代の者を重用してほしい。

表に出過ぎないよう公的に記録を残さぬようにしているのに、この空白が逆に目立つ。

曰く「外からの視点は大事」だそうであるが、良からぬ種にならないか不安だ。

そんなこんなの中で、ついに鎌倉幕府が滅んだ。

初の防衛戦争で財政が悪化し碌な報酬を出せなかったのが武士の不満を爆発させたようだ。

朝廷も武家政治から再び貴族政治に戻すためにそれを煽ったのもある。

何にせよ諸行無常と繰り返される。

俗に言われた建武の新政であるが、倒幕に一役買った武士を軽んじ公家に重きを置いたので

押さえつけられた武士が反発し京の都を占領……朝廷内のごたごた相まって南朝と北朝に分断。

なんとというか、簡単に言えば人死にがボロボロ出るほどに天皇の後継争いが過激化しているのである。

そっちは良いのかと天照に聞くと「兄弟喧嘩は手を出すものでないでしょう?」とのこと。

これを聞いて私は天照大御神を計り損ねていたのに気付いた。

天照大御神の至上目標はあくまでも最大権威『天皇』の恒久的な相続なのだ。

次点で大和神霊の維持であるが、これは天皇家に何かあった時のための戦力や地盤でしかないのか。

これまで朝廷内で起こった後継争いと南北朝の対立は彼女にとって同じようなもの。

祖霊を敬ってきた日本において、最も古く、最も尊いとされてきた血族は既に十分すぎる権威になっている。

それを滅ぼしたとあれば経緯がどうあれ『悪』とされるに足る理由

になつてしまふ。

成り代わり権力を振るうに当たつて誰も付いてこなくなるのだ。つまりは完全な外的要因、海外勢力の侵攻以外にそうそう『天皇』は滅びないのである。

手を出すとしたら互いが完全に滅びそうである場合だけ、となるのだらう。

だからこそ、これまでの骨肉争う権力闘争を半ば放置気味に見ていたのか。

年月が育てたであろう、あどけない少女のような神の意外とドライな一面を持って。

その手の長さをもつて、内外に区切りを付けている。

優しいだけ、甘いだけでなく、歪だけれど割り切りもできていた事に関心すると同時に

私も身内以外には、つまり目標以外にはドライだよなあと妙なシンパシーを覚えた。

まあ、あちらから何も言つてこない以上、南北朝には関与しない。

神霊側でも天照やその使いに相談を受ける程度であるし、最近は緩いものだ。

雉鳴女が持つてくる報告も少ない。

のんびりとできる幸せを感じながら目を通していく。

堺、京、伊勢での森戸家は味噌や漬物の生産などで徐々に馴染んで
いると報告書にある。

他にも薬を作ったり、草鞋を改良したりと浅く広くでやっているら
しい。

座や組といった商業ネットワークに目を付けられない程度で雌伏の
時だそうだ。

無理はせずにはどほどでやってほしい。

……ふむ、先週の大雨被害は軽いものだったのか。

野次馬していて川に流された若者が一人居たが妖怪が拾って助けた
とか。

代償に男の身ぐるみは全部剥がされたそうだが良い教訓になったん
じゃないかな。

天照大御神の通り道で沼が乾くと地霊からの苦情……。

道の整備と、どこを通るのか参道を指定させてもらおうか。

あとは……。

そうしてスムーズに今日の仕事を終え、山犬と散歩に出ようとした
矢先だ。

何やら緊張した面持ちでカケスノナキメ鳴女が声を掛けてきた。

「杜人様すいません、散歩前で悪いんですけど、かなり大事になっちまいました。

九州の、刀取りに行ったところに、その、あたしの祠が建っちゃまってるみたいなんです。

や、独立とか、そんな気は全然ないですよ。

……って、ちよっ、山犬様なんで唸ってんすか!?

あたしだって何でこうなったか身に覚えが……アレ、ある?

……け、けど違うんですホントにっ!

っていうか先月に鳩達の墓参り行って初めて知ったんで、あたしも怖気づいてるんですが……これ、どうしましょう?」「

。U'F C U'N

。U'N U'F C U'N

げんじつ……不自由にある幸せ

突如として降って湧いた？カケスの祠。

発端は九州に杜人神刀を回収しに行ったところから。

あの時は遅くても半年から一年で戻ってくると思ったのだが最終的に手元に刀が来たのは五年後だった。

その五年は何をやっていたのか。

森戸家の蔵から当時の経過報告書を発掘し確認を取ってみる。

すると、刀の搜索自体は一年で終わっているのだが、
穩便に譲り受ける為に地元民に協力して農業指導をしていた、とある。

他にも探し物を見つけたり届け物を預かったりと様々な理由で帰還が延びている。

それなりに思い入れのある刀だったので手元に戻したかったが、私としても別に自分の物だからと強奪する気はなかったので、事を荒立てずに返還されるのならと逗留許可や援助許可も出した記憶はあった。

……が、実際はそれだけでは無かったそう。

一先ず、保留状態にして事実確認に九州へ鶉鳴女を派遣してみた。するといくつもの武勇伝が出てきた。

本当に何をやっているんだ。

人を騙して喰っていた狐狗狸コクリを知恵比べで打ち負かしたり、血に狂った地狐ジコウと喧嘩して善狐ゼンコウへ反転させたり、民草と協力して祟り神化した大蛇相手に山を守ったり、他にも色々とやらかしていた。

？鳴女が言うには、通りすがりで起こった些細な私事で何ら任務に影響せず報告するまでも無いだろうと記載しなかった、だそう。

しかし、余所様の土地で下手に大きく動くとは反感を買ってしまうわけ

九州の神霊から悪い心証を持たれなかったが心配だ。

鳴女衆が杜人系の流れだというのは元寇もあつた事だし地方とはいえ知られているだろう。

古参鳴女の中でも感情の波が激しい？鳴女。

動いたのはすべて『無知なる者から理不尽に搾取しようとする道理を弁えない神霊』に対して。

おそらく彼女の正悪観に触れた出来事で、放っておけなかったのだらうけど……。

確かに私事で収まるように自分の力だけで全部解決させているのは流石であるが

一言あつたらフォローなり援助なりできたのである。

……とはいえ、さすがに大蛇退治を些細とは言えないと思うのだが。これについて尋ねると、戦つたんじゃなくて探し物を手伝っただけだと言つ。

大蛇を前に今にも自殺しそうな村人の陰鬱な気が滅入つたので、出掛けに喝を入れた程度。

杜人神刀を貸したつもりはなく、ただ依頼された神具搜索を前に荷物を預けただけのはずだった。

実際には土地神となつていた津蟹が大蛇を倒した、との事。

「どいつもこいつも、大蛇に好き勝手されようが無抵抗。

立ち向かう気も起きない負け犬の目をしてやがつたから怒鳴つちやつたんすよ。

『大事なもんはねえのか、好きな女やっとかいねえのか。

「そういつ守るもん守んねえでテメエらホントに生きてんのか！
って」

熱くなった？鳴女は荷物を押し付けて捜索に行き、
神具を発見し津蟹に大蛇の無法を伝えたに過ぎない。

刀を渡された子供がまさかそれを振るって戦うとは思ってもみなか
ったそうだ。

何がどう曲解されたか、

村人は？鳴女をありがたみ、祠を建てた。

鶉鳴女がサツと絵に書いた全体図に目を通す。

通りすがりであると言ったからなのか、大掛かりな社ではなく
来た時に少し休めるようにと小さく簡素な石積みの空間、ミニスト
ーンサークルの様な物だった。

常在しない、あるいはもう来ないかもしれない事も村人は知ってい
て建てたのか……。

鶉鳴女の報告と？鳴女の事情聴取もこれで終わった。

悲鳴を上げる？鳴女を雉鳴女が連行していくのを見送り、
私と鶉鳴女は次なる九州調査団の編成に取り掛かる。

まずは周辺神霊の心証調査だろう。
次に、祠があっても良いのかを聞いておこう。

許されれば？鳴女に限ってではあるが九州南部からひょっとすると琉球まで手が伸ばせる可能性がある。

徐々に鳴女の信仰へと変化させたら西日本に関しては彼女達の自由が生まれると思われる。

豊受媛神はこの話が出る度に当人達は満足しているから気にする事ではないと言うが

正直、距離の制約は元が自由の象徴たる『鳥』である彼女達への負
い目なのだ。

間のラインを上手く繋げれば霊力の減衰も軽減できるはず。

？鳴女の独断専行は褒められたものではないが、この偶然は活用すべきだ。

派遣組を決定してからも私は紙束を前に思案に暮れていた。
時折、鶯鳴女が追加で私が欲しい資料を手に部屋に入ってくるのみ。

これまで集められた九州の資料を読み返していると、
机の隣へ座った鶯鳴女と不意に目が合った。

まっすぐな瞳で私を見つめ、口を開く。

「杜人様が何を考えておられるのか……。
私には手に取るように分かっておりますが二、三言ほど申させて
ください。」

大禍刻からずっと、

鶯鳴女の家は此処なのです。

そして、それが幸いである事を私達は知っています。
不自由は不幸では無く、私達は十分に満足しているのです。

どうかこれをお忘れにならないよう」

……母も同じ事を言うでしょうが。

鶯鳴女は最後にそう付け加えて静かに退室していった。

しがらみ……歳月が積み重なるもの

色々細かい悶着はあったものの、？の祠は撤去とはならなかった。

事務処理が終わってみて強く思ったのが、
悪でも善でも、純粹な『力』に対する恐れや憧れは強い信仰になる
という事。

大蛇事件で一気に信仰を回復させた津蟹の口添えで、祖霊系統の支
持が集まった。
これで周囲を半ば数の力で納得させたのであるが、問題も少なから
ず噴出している。

暴れ回った大蛇を、神格の高い龍と同視し信奉する者もそれなりに
いたのだ。

本来ならば土地神同士のただの喰い合いであったのに横槍いれた鳴
女は
大蛇側を信仰していた妖怪達と一部祖霊からは敵対心を持たれてい
る。

将来的にどうなるのか頭の痛い所。

そして、人間側からもちよつと待ったと声が掛かったのだ。
一般民衆というよりも寺社仏閣のお偉い方からであるが。

紀伊を本拠とする神霊が渡ってくるのに対し、周辺の寺社から難色を示されたわけだ。

中央と繋がり深い杜人系の神霊が九州の地に入る事で
それまで集まっていた信仰（信者）を掻っ攫われるのではないかと
の危惧と、
不気味な監査役が近くに来るのを嫌ったからである。

本人達は気にしていないが、鳴女衆は対外評価が悪い。
彼女らは存外、自分について無頓着だから困る。

遙かな古代から情報処理や諜報を主な仕事としていた事。
各地を飛び回ってコソコソと調査している事。
一度、主人を裏切つて大和朝廷に反旗を翻した事。
なのに大和神霊の頭である天照大御神の憶えが良く、
高位神の杜人綿津見神に重用されている事など様々な理由がある。

外から見ると、確かにあまり近づいて欲しくない存在だとは思ふ。
最近森戸家の歴史記録をサポートする名目で身分保証までされて
おり

朝廷が影で使っている監視者ではないかと考えられても不思議ではない。

簡素な祠を拡張して御社にし、合わせて森戸家にも居付かれては困ると。

結果、？の祠に杜人神霊は一年の内で合わせて一ヶ月しか滞在を許されなかった。

その辺りが妥当だろうなと思いつながら、一応中央にも問い合わせてみた。

返事を要約すると、杜人神系は大和神系と近くでナイフを突きつけてあっているようなもので遠地に拠点を立て、杜人神シンパが各地で膨らんではどこかの暴発で均衡が崩れかねない。理性的な対処ができる杜人神を地形的に中心として広がらないように抑えたい狙い、だそうだ。

だいたい予想通りの答えである。あちら側もそういう危機感を持ったのは良いことだろう。

津蟹の許可でごり押しな感じに設置されたのはどうなのかを尋ねると、

彼ら津蟹や大蛇のなど旧来のミシヤグジ型神霊は殆ど大和神霊の統制化には無いらしい。

現代人、21世紀人的な感性でいえば選挙の無党派層に似たようなもので、自陣に取り込みたいがあのレベルの強さになってくると変に締め付けて祟り神化されるのが不味い。

だから、土地と民を守ってくれているのである程度の自由にさせているのだと。

その加護によって作られた以上、祠の存在は認めるが重要拠点化はさせないよう滞在制限をかけたのだと云う。

まあ、何にせよ、まずは祠を建ててくれた人間に挨拶しに行くのが筋だろう。

？鳴女の為に作られたのだから彼女が代表者として、祭られる者として顔を出すべきだ。

九州への出立前日に頑張れと声をかけたら「柄じゃねえです」と照れながらも何処か嬉しそうだった。

四季に7日ずつの滞在を予定しており、これから彼女には何度もの

トンボ帰りを強いる事になる。
その上であちらの活動は彼女をメインに据えていくから仕事はぐんと増えてゆく。

肉体はないが精神は疲れるのだ。

土地の祖霊との交流などで信仰が祠を元に集積するまで霊力も安定すまい。

無理しないで良いからコンディション管理には気をつけて欲しい。

翌日、彼女の門出を一族総出で祝福しながら見送った。

境内から姿が見えなくなるまで手を振っていた私は、
山犬に跨ってこの辺りで最も高い山の山頂へ登る。

途中で修行に勤しむ修験者に挨拶したりしながら、私の『全て』を見渡せる場所へ。

初夏、太陽は眩しく雲は日の光を受けて白く輝いているようだ。

そして山犬のどこまでも響くような遠吠え。

音は山彦となって跳ね返り、山全体が声を上げているように感じた。

……？鳴女、いつてらっしゃい。

山犬の遠吠えで好戦的な妖怪が殺気立ったとか喧嘩が発生したとか。

……無用な行動は慎んでくださいと雉鳴女に怒られたのは余談である。

かいいい……父と母と子供達

倭寇と呼ばれる海賊達。

武装商人や武士の私掠船だったりして対処に厄介な存在だったりする。

倭寇その物には私に対応すべき理由などないのだが、
そついう、人側の情勢不安はこちら側にも影響してくる為、
？鳴女のカバーをすべく各所に文や作物の苗を送ったりと少々のお節介を焼いていた。

偶然の重なりで生まれた機会をつまらない事で失うのはあまりにもつたいないだろう。

季節に7日しか滞在しないものの、
地盤を安定させないわけにはいかない。
周りには彼女への好意ばかりがあるのでなく危険も多い。

雉鳴女と共に頭を悩ませる日々がいくらか続き、
暇があれば西の空を眺めていたのを、
鷓鳴女に「娘の心配をする父親のようだ」と言われた。

まあ、私も杜人という集団の大黒柱だという自覚はある。
そこからすると父親との形容もあながち間違っではない。

彼女達が認めてくれるなら、だが。

鳴女衆は表向きは杜人一族の下部組織となっではいるが、実質は同盟者に近い。

責任をある程度こちらが持つ代わりに協力してもらっているのが正しいところ。

もつとも、ここまで長く親密な付き合いをしてきたので家族同然だけれども……。

そういえば雉鳴女は真実、鳴女衆の母である。

血の繋がりは無くとも、彼女の優しさや思いやりはまさしく母性と呼べるもので

『失くした者達』は自然に雉鳴女をそう慕っていったのだと鶉鳴女から聞いた。

仕事中は鳴女の掟で表には出せないらしいが、雉鳴女は皆の母で鳴女は家族なのだ。

家族か……では私と彼女は……、

……ふむ、今日は春先だというのに気温が高いようだ。

独りごちる私を見て、近くに居た山犬が呆れた風に欠伸をして去っていく。

それが、どこか私を見透かしていたかのように見えて気恥ずかしい。

私は一人寂しく日課の参拝をこなした。

そんなこんなで、それとなく西を見ている間にも時代は進んでいく。今では足利氏によって起った室町幕府が日本の政治の要となっていた。

未だに南朝と北朝で争っていたが早いところ終息して欲しいものだ。

手元の手紙に目を落す。

そこにはいつもの報告然としたものだけでなく、京、堺、伊勢の子供達が一斉に帰郷して神社に顔を出す旨が添えられていた。

なんでも、森戸の苗字を変えてもらいたい、との事。

彼等はそれぞれの土地で商売を営んでいた。

森戸らしく、ひっそり、したたかに。

しかし、時が経つにつれて規模が大きくなりすぎてしまった。

鎌倉幕府が倒れ、室町幕府が全国の統制を担うわけだが、領地の引継ぎや派遣が上手く行っておらず地方の規律が緩んでしまっている。

森戸分家は比較的政治統制が効いている中央へ近いが、このままで行くと本家側に迷惑が掛かるかもしれない。

人脈や経済力の広がりや既に各地の御家人に目を付けられておりこれを機にと無理矢理に取り込まれてしまいかねないのだそうだ。

最後に、森戸家の役割を果たすには不用意な伸張であった事を詫びる文言。

……これは子供達側の落ち度ではあるまい。

私が森戸分家の商業進出を進めた事は間違っではいなかった。子供達が経済的に豊かな生活を営めるようになったのは良いことだろつ。

しかし、新天地へ向かう彼等に私の側から新たな名を授けるべきだった。

そうすれば祝福と共に、前に進み続けられたに違いない。

家名を変更する事がどれほど苦しいか。

血と古きを重んずる日本において、

それを捨て去る覚悟を決めさせてしまった。

捨てる事を己の始祖に報告する苦しみを与えてしまったのだ。

名を変えようとも私の子供達への愛は変わらない。

けれども、改名を子供達がどう受け取るのかは別だ。

私は見捨てない。

この思いをどうか受け取って欲しい。

それを理解して欲しくて、何日も掛けて、沢山の家名候補を紙に書き出していったのだ。

鳴女、山犬、森戸本家、皆の想いが込もった字を並べる。

『入道杜辺』

たとえ森戸家の役目から外れようとも、一族である証としての名。大昔に初代森戸が神と同じ字は畏れ多いと固辞したこの文字を贈る。

その名を持つ者の側にいつも杜人は在るのだ、と。

あまり好みでは無いが父親として押し付けさせてもらう。

そもそもが私のミスであり、子供達が自責の念を感じるの筋違いだからだ。

一方的に私が謝るべき問題で、名を受け取るに相応だろう。

……恐れ多いと言ったとて、受け取るまで父は梃子でも動かんぞ、
つと。

ポツリ、口から漏れた一言は側に居た雉鳴女に拾われた。

「ふふっ、頑張ってくださいね、お父さん」

静かに微笑む彼女の珍しい洒落っ気に何故かしてやられたと思った
私は、

とんでもない事を口にしてしまった。

「その時は『母さん』も手伝ってくださいよ」

失言とは言ってから気付くものである。
私達は星が出てくるまでの間、夕陽で真っ赤に染まる事となった。

……母親の心配をする娘も居るのですよ。

遠くから眺めていた山犬の背で、鶉鳴女がそう呟いたとかいないと
か。

その、なんともまあ、余計なお世話である。

やまぶし……妖怪は人間と遊ぶ

いくら森戸本家が広いとはいえ、50人も人が増えれば部屋も足りず近くの宿場や村人の家も借りなければならなくなり、数週間はお祭りの様に賑やかであった。

分家の改名については予想よりも反発はなく、逆に喜ばれ拍子抜けしたり。

何にせよ、許されている事、縁を断つわけではない事を理解してもらえてよかった。

改めて皆を集めて眺める。

向こうの土地の者と結ばれ、広がっていく家族達の姿には感慨深いものがある。

もはや私からアプローチをかけねば半数程度が私の姿を目にする事はできなくなった。

縁が繋がっている以上、声が届かなくなる事態にはならないだろうが寂しいものだ。

本家と分家はこれから少し離れた道を歩いて行く事になる。

もつとも、本家の人数が膨らんでまた分家が増えていくというもの十分に考えられる。

逆に分家側から本家に嫁入りなり婿入りなりもあるだろうし、関係は今までとあまり変わらないのかもしれないが。

こうして改名騒動が終わった所で、
いつものように新たな問題が噴出してきた。

神がどう悩んでいようと世界は自由気ままに歩みを進めていくもので、
追われるようにして生きとし生ける者は壁に挑み続けなければなら
ないのだろう。

近頃の報告書はこれ一色である。

最近、近くの山に籠る人間が増えてきたのだ。

いわゆる山伏だとか修験者と呼ばれる人間達で、頻繁に修行しに訪
れている。

川や滝で身体を清め、頂を制しては精神を空にする。
彼等は人間の霊的な能力を引き出そうとするのを目的としているの
だ。

実際に一時的ながらも霊的感受性の向上や神秘との同質化も可能だ。

山岳とはそれ自体が人格無き神霊と云って良い。

かつて私が王樹様に抱いた畏怖畏敬と同じく、

日本人は古来から種々の偉大なるものに神性を抱き、崇めてきた。

僅かの生を散らしていく己とは違つ、堆積した時間に磨かれる全てに価値を感じ、神を見た。

時にそれは大樹であつたり、あるいは巨岩であつたりもした。

この思想から血族への尊敬も生まれていく。

根底にあつたのは『生命への敬意』だろう。

何かが時を経て成長した姿への感嘆は当然ある。

しかし、それだけではない。

同時に自身の小ささにも気が付くのだ。

ただでさえ生死の境界が薄い時代。

『矮小な我が身でもここに至るまでに数え切れない苦難があつた。

目の前の偉大なるものにも当然その数十、数百倍の過程があつたはずだ』

……と日本人は共感し想像し慄くのだ。

時間と死が切り離せないものであるが故に、それら全てを乗り越えたからこそ存在するという奇跡に。

だからこそ、尊び敬つというわけである。

そして、山は全ての営みを見つめてきた存在。

頂上から眺める世界はどれほどまでに山が常世と隔絶したものであるかを語るだろう。

その視点こそが山の視界だと理解してしまえば、自然と頭を垂れるもの。

特に山は恵みを齎す象徴でもあった。

縄文の彼方からずっと。

これが信仰を集めぬわけがない。

……とまあ、『山』であるだけで祝福と同様の霊的力場が発生するのは珍しい事ではないのだ。

よく山に寺社が建立されるのはそういう理由もある。

死への距離の近さも、己の魂と向き合うのに最適なのだという。

霊を感じやすくなれば行使も楽になるから至極当然。

仏教も、神道も、陰陽道だって力を感じるまでのステップが容易くない。

だから山岳信仰は宗教を問わず修行の助けとして根強くあるわけだ。

ちなみに神霊にとっての山は優秀な陣地として機能する。

長く棲み付くなどして『山』に馴染めば馴染むほどに山岳信仰は強力な補助になっていく。

例えばだが『大江山の鬼』といったように神霊化生の拠り所だと広まるまで馴染めば

その山自体が抱える畏怖を幾らか自分が借り受けられるのだ。

このあたりが地方を守護する大和の神が徐々に土着化していく要因だったり。

本格的な拠点を築くと動くのが億劫になるのも分かる。

山を押さえたいれば信仰が薄くなってもそれなりにやっていけるからな……。

私も一応は山の神も兼ねているので他より恩恵は大きく、

一度山に籠ったならば、そこんじょそこらの神霊では崩せない霊地となる。

流石に天照級になるとどうしようも無いのだけれど。

……で、だ。

修行の場として山を利用するのは構わないのだが、

杜人の地は他より多くの神霊や妖怪が棲んでいるわけで不要な衝突が起こりやすい。

以前から僅かながら修行目的で山に入る者はいたが、雉鳴女の報告が修行者関係だけ、という日が何度も続くと流石に問題だ。

私が入りな神なものもあって、妖怪達がやり過ぎたら制裁したりもする。

おかげで襲うにあたって逃げられる条件が作ってあったり、謎掛けの勝敗で逃がしたりとそれぞれの方法で自重してくれてはいるのだ。

しかし、鬱憤は溜まるもの。

これ幸いと山伏にちょっかいを出し始めたのである。

ここで大誤算だったのは山伏側も半分これを望んでいた事。双方の同意があるのなら、どうにも粛清しようがない。

向こうは修行にきているわけで、霊的存在が近づいてくるのを歓迎している部分があり
命懸けで自ら山の妖怪に挑むような気合の入った者も中にはいるのだ。

妖怪側は娯楽道具が壊れたら困ると、私や山犬に睨まれるため多くを生かして返す。

すると、その噂を聞いて修行しに来る人間が増えて……以下エンドレスとなっていた。

中には若い鳴女が彼等に手を出した事案もあって、雉鳴女もこれには呆れていた。

逞しい者が多い上に魂が綺麗だから遊ぶに丁度良い、とは鴉鳴女のカラスナキメ談。

後日、対神秘の気運が高まり鳴女全体の不利益に繋がるとして古参組から賤られたそうだが。

霊山として着々と広まりつつあるなあ。

山犬の背を撫でながら境内を眺める。
掃き清められたそこは落ち葉一つ無い。

……知ってるか山犬よ、君や鳴女は天狗だ山童だと呼ばれてるそう
な。

そこらの妖怪と一緒にするなと言いたいのだろう。
不満気に鼻を鳴らす仕草が妙にコミカルだった。

杜人閑話……嘘つき鴉『白と黒』

昔々、とある山に変わった鴉がいた。

鴉は群れを作るのが普通であったが、その一羽だけ、いつも群れの外。

同族が楽しげの過ごすのをいつだって遠目に窺っていた。

「どうして、私は違うのか」

問いかけても彼女の声を聞いてくれる者はいない。
彼女は、己が他と違う事に悩んでいた。

「どうして、私は『白い』のか」

真白の鴉。

これこそが全ての原因であった。
漆黒であるはずの翼は、青空に浮かぶ雲と同じ純白だったのだ。

「どうして、どうして……」

生まれ持った色が、周りの黒からぼっかりと浮いてしまい、
まだ碌に飛べない頃から白鴉と呼ばれ、彼女は苛められた。

お前は鴉ではないのだ、と。

けれども彼女は鴉でありたいと願い、必死に彼等の真似をした。

白い身体を誤魔化す為、汚泥に身を浸すのは日課である。
元々のか細かい声も、何とか喉を震わせて同族の様に五月蠅く叫んだ。

噂好きな鴉達の話題に乗り遅れない様、山から川から何でも調べた。

一重に、彼女の純粹さがそうさせたのだろう。

迫害する同族への憎しみや妬みではなく自身に責任を求めた心根の
優しさが……。

ただ、寂しかっただけなのだ。

誰も彼女の存在自体を認めてはくれなかった。
それは親でさえも。

忌々しい白は孤独を強要する。

だから彼女はいつも群れの外で眺めるしかなかった。
薄闇の森から紅い瞳で羨ましげに。

いつかあの輪の中に自分が居る未来を夢想しながら。

そんなある日、白鴉は物憑きの少年を夕暮れの山で見つけた。

妖怪も棲む山なので狐や狗、貉といった憑き物も珍しくは無い。

けれども、その少年の異様は白鴉の目を惹くに十分過ぎた。

人間かどうかを疑うほどに、肌が黒色に染まっていたのだ。傍目には影がボロ布を纏って人間のふりをしている様に見える。

憑いた物自体の姿は無く、呪いだけが残されている。

それを白鴉は哀れむではなく、反対に羨み、歓喜した。己の欲したものが、呪いを受けるだけで手に入るとは、と。

詳しい話を聞く為に彼女は黒い少年に近づいた。

「少年、少年、どうしてお前は黒いのか？」

少年は突然現われた白い鴉に驚いた。

森の中、夕闇と木の陰に沈んで尚も輝く白い姿と、紅い瞳に。

妖怪が跋扈する森にあまりにも似つかわしくない鴉を見て、これは神様の使いだろうか、とも思った。

そんな勘違いのおかげで、白鴉は呪いの出所を聞き出す事に成功する。

少年は、とある貴族の息子だったそうだ。

父親が金貸しをやっており、裕福な上流階級層だった。けれども、知り合いの陰陽師に金を貸した事から転落していったのだという。

借金を返せなくなった陰陽師が、命を代償に家族全員を呪った。

それが黒色の呪い。

誰かに好かれるとその分だけ身体が黒く。それを誤魔化そうと嘘を吐けばその分だけまた黒く。肌の色が変わっていく。

仲の良かった家族は互いの愛で黒く染まり、物憑きだ、異形だと忌み嫌われ、迫害されて離散。誰も助けてはくれず、辛くて生きてはいけない。

いよいよもって死のうと思ひ、黄昏の山へ入ったのだと。

白鴉は呪った本人が死んでいたのに落胆したが、それ以上に少年に対し奇妙な共感を覚えていた。

共通した孤独の苦しみに対して。

しかし、今はそれよりも呪いが大事だった。

白鴉は頭を軽く振って雑念を払い、少年に告げる。

「少年、少年、今から私は君に憑くけれど、

それは呪いを解くのに必要なの、ジツとしておいて」

これが騙すという事が、と白鴉は生まれて初めての嘘を思った。

何かに憑くというのは存外大変であると昔に狐が言っていたのを憶えている。

狐曰く、相手の魂の器へ割り込むように自分を乗せるのだという。当然の如く反発されるので、大きな力が必要になってくるそうだ。

精神が死に近くなっていた上に自ら受け入れようとしてくれるのなら憑き物経験が無い鴉でも簡単に魂の深い部分に触れるだろう。

少年は彼女の思惑通り、力を抜いて心の底から白鴉を信用しているようだった。

結果から言えば、白鴉は少年から呪いを抜き取り己の物にできた。

憑いた事で縁という残滓がお互いを微かに繋げていたが、

ずっと会わずにいればその縁もやがて自然に消えてゆくだろう。

別れた少年がこの先どうなるかなど知らなくても良い情報だ。

とかく、白鴉は喜んでいた。

道すがら出会う全ての者に憶えたての『嘘』をばら撒いて、黒く染まっていく身体にうつとりする。

望んでも手に入れられなかった黒が彼女をどこまでも幸福な気分に行っているのだった。

最早、白鴉は居ない。

彼女は大手を振って鴉の群れに入れた。

もう自分から泥に浸かって身体を汚さなくても良くなったし、同族の太い声を真似るのも今では楽なものだ。お喋りだってそこらの話題を調べ尽くしている彼女は完璧にこなせた。

重ねてきた今までの苦勞が報われているのを、確かに感じている。自分は幸せなのだ、と。

しかし、その幸せは長くは続かなかった。

呪いを奪い取ったあの日には夜の闇よりも深い黒だった色が徐々に色褪せて灰色にまで戻ってきたのだった。

彼女は恐れた。

身体が『白く染まっていく』のを。

昔のような、一人ぼっちには戻りたくない。

それから、彼女は誰よりも『嘘つき』になった。

日に何度も何度も嘘を吐かないと安心できなかったのだ。

自分を保つために。

「太陽は『西』から昇るよ」

「麓の村で『聞いた』んだけど、山狩りが『近い』ってさ」

「『向こう』の森に甘い実のなる木が生えてたの」

嘘が日課になり、嘘を積み重ねていく中で

失われていく物があるのを彼女は気付いていなかった。

少しずつ、少しずつ、彼女は群れから再び孤立していく。

嘘ばかり吐く彼女は誰からも信用されなくなったのだ。

それでも、彼女は嘘を止める事ができなかった。
一度染み付いた恐怖を拭い去る事が。

昔と同じく必死に知識を集め、なんとかできないかを考えたがどうにもならない。

嘘はそれほどまでに破滅を齎すのだと身をもって知った。

……が、それでも日に三度の嘘を重ねなければ心が安定しなかった。

梟よりも賢いが嘘つきな鴉。

いつしか彼女はそう呼ばれるようになる。

その噂を聞いて、鳴女衆と呼ばれる鳥の化生の寄合いから彼女へ声が掛かった。

情報収集の能力を高く評価しているのだという。仲間にならないか、と。

……初めてだった。

誰かに請われるなんて今の今まで無かった。

どうせ私の嘘で嫌われるのだ、と使いの鶯には素っ気ない対応をしていたが、

内心、踊り出したくなるほどの喜びに満ちていた。

嫌われる恐怖はある。

しかし、鳴女は嘘つきである事を承知で声を掛けてきたのだ。ここならばもしかして……その思いで申し出を受け入れた。

「快諾なんて『勘違い』よ。

私は誰かの為に何かするってのが『大嫌い』なの。

生活が楽になるから『仕方なく』仲間になっただけ」

そんな嘘混じりでしか答えられない自分を恨みたかったが、鶯はこんな返答に静かな微笑みを返してくれたのだった。

杜人閑話……嘘つき鴉『百度参り』

鳴女は鴉にとって温かい環境だった。

正直に呪いについて告白した彼女は『そういう体質』だと認知されたのだ。

一族への顔合わせの時に鶇、もとい鶇鳴女がこう言ってくれたのも大きかったのだろう。

「鴉さんの言う事を反対の意味で考えたら、もう、面白くって。

私達の誘いを快諾してくれたのは、人と手を取り合うのが大好きだから。

ね、だから、喜んで仲間になってくれるって言ってくれたのよね」

恥ずかしい事この上なく、鴉は赤面しながら『鶇なんか嫌いだ』としか言えなかった。

天邪鬼な言葉だと理解できれば逆に可愛いですよ、と鶇鳴女は笑った。

元よりそこらの鳴女と同等程度の情報処理能力があった鴉はすぐさま鳴女の名を貰うに至る。

『鴉鳴女』と名を呼ばれる度に、自分は鳴女の仲間なのだと実感できた。

嘘を嘘であると見抜いてくれる種族を越えた仲間達は鴉鳴女の居場所になつていく。

彼女の赤眼は僅かな月光でも遠くを見通せたし、漆黒の翼は闇夜に溶け込むので

自然と夜間調査の専門家として鴉鳴女は最若年にも関わらず鳴女でも特殊な位置まで地位を上げた。

これほど自分を活かしてくれる場所はあるまい。
成果を上げれば上げるほどに信用は高まってい

た。
仕事中の私語は慎まなければならないが、
こうして気安く話せる友がいる幸せは彼女が昔に夢想した未来だった。

嘘をネタにからかってくる仲間もまた、幸せの象徴になった。

そんなある日、一人の山伏が何かを探している風なのを巡回歸りに見かけた。
いつかのような臨視感を覚えながら。

歳の頃は三十路は越えて四十前といったところか。
無骨な顔付きは山道で鍛えられた身体と合って美しくもあつた。

ボロボロになつた着衣は河童と相撲でも取つたのか、
はたまた人食い妖怪の追走を打ち破つた代償か。

最近、この山で妖怪にちよっかいを掛けられようとも決して諦めな
い人間がいると
噂になつていたので思い出した鴉鳴女は興味から近づいていく。

鴉鳴女は自分の中の何かが反応し鼓動が早まつたような気がした。

戦いになればそこの妖怪以下しか動けないので
鴉鳴女は鳴女時の人型ではなく元の鴉形態で近くの梢に止まる。

すると、ピクリとこちらに気付いたように動きが止まつた。

気配は消しているし、どこにも発見される要素はないにも関わらず
気付かれた事で

ある種の確信を鴉鳴女は得ていた。

視線を上げた山伏と鴉鳴女の瞳がぶつかる。

「鴉様、鴉様、どうして貴方は黒いのか？」

「おや、そこな山伏、白い鴉なんて世に『居ない』もの」

「お言葉ですが鴉様、私は貴方を憶えております。

昔に私を救ってくださった白い翼とその紅い瞳を。

御身の黒はもしかや我が呪いによってでございましょうか」

鴉鳴女はあの時の少年が自分を憶えていた事に驚いた。

ほんの数刻程度の邂逅、騙すようにして呪いを奪ったあの日。

死人の様に虚ろな眼差しで山を彷徨っていた少年。

それがこんなにも逞しい男に成長していたというのが感慨深い。

気付かれたのならしょうがない、と人型に戻って向きあった。

「ええ、その呪いです。

私はとても『恨んで』いるのよ。
こうして黒く染まったのは貴方の『所為』だから」

少しだけ悪戯心が出てきた鴉鳴女はいつも通り嘘をついた。
別に恨んだりはしていないし、むしろ今を作ってくれた事を感謝してもいる。

何でこんな嘘をついたのか。
それは予想を遥かに越えて良い男になっていた少年をからかってみたくなつたというだけだ。

「鴉様、そう思われるのも当然でございましょう。
私はあの日のお礼と、償いに来たのです」

山伏は己の半生を語りだした。

呪いから解放された後、読み書きが出来たので大きな商家に拾われたのだという。

そうして三十年が経って落ち着いたのだが、
鴉の恩を忘れて生きるのは不実だと全てを捨てて山伏となった。

恨んでいるというのならば相応の償いを果たさせてくれ、と。

「たとえば百回謝りにきたって『許さない』わ」

「ならば百一度、参ります」

そう言つて山伏は下山していった。

残された鴉鳴女は、

「馬鹿ねえ、私がこんなに黒いんだから百回で良い事に気付きなさいよ」と一人呟いて、

明日も山伏がくるのか期待しながら寝ぐらに帰っていった。

翌日、山伏は鴉鳴女の元に辿りついた。

鴉鳴女は仕事で隣の山に居たのだが、何故か山伏はそこへ辿りつけ

ただ。

千切れて消えたはずの縁。

先日の出来事で繋がりか直されたのだろうか、と。

山伏は昨日と同じく頭を下げ、下山していった。

次の日も、その次の日も。

鴉鳴女の元に山伏は足を運んだ。

良い暇つぶしだと、鴉鳴女は山伏の到着を次第に楽しみにするようになっっていく。

二十日を過ぎた頃、急に山伏が来なくなった。

心配になった鴉鳴女は麓の村を搜索すると、山伏は床に伏せていた。

連日の登山で無理が祟ったらしい。

鴉鳴女は仕事で『偶然』手に入れたらしい高価な医薬品を枕元に並べ、山に戻った。

もう五十回目の逢瀬、その帰り際。

山道を下る山伏を影で見守る鴉鳴女の姿があった。

こそこそと木の陰に居るのを同僚が尋ねると、上司が親人間派だから、『偶然』帰り道が一緒になった以上、見守る義務があるのだと早口で捲くし立てた。

七十を数えるに至って、帰路に土産を持たせるのが常になっていた。

山の恵みは分配される事で流動し、再び山の力として返ってくる。

『偶然』訪れた山伏に山菜や果実を渡すのは極々自然で当然な成り行きであり、

山を生活の場としている神霊として当たり前の行為なのだ。

と、柿の木を前に鴉鳴女の独り言が虚しく響いていた。

そして、今日が百回目。

山はとつくの昔に冬支度を済ませている。

雪がちらつく中、それでも山伏は鴉鳴女に逢いに来るのだ。

冬になって、鴉鳴女は何度も止めさせようとした。

厳しい気温に激しい風、雪に滑る斜面など気が気でない。

しつこい男は『嫌い』だと、嘘でも何でも吐いて遠ざけようとした。

『偶然』山登り用の草鞋や分厚い脚藩が破損していても山伏は山に

入り、

鴉鳴女は泣きたい気持ちで訪れるのを待った。

しかし、それも今日で終わる。

百回で許してやると決めたのだから。

百一回は山伏の勘違いだと笑ってやろう。

今日で終わり、終わらせる。

だから早く来なさい。

こんなに待たせるなんて、貴方なんか『大嫌い』よ。

どうしたのよ。

いつも通りに『不細工な顔』を見せなさいよ。

山に入ったのは、ちゃんと見てたわ。

貴方が迷うなんてありえないでしょう。

早く来てよ。

早く、ねえ、早く来なさい。

もう陽が沈むじゃない、何をやっているのよ。

夜の山が危ないって知らないの？

しかも冬よ、冬、まったくもう、馬鹿なのかしら。

だから、早く。

お願いだから、早く来て。

鴉鳴女は胸騒ぎを止められなかった。

九十九回も紡がれた縁がぷつり、ぷつりと切れ、解れていくのを感じていたからだ。

この全てが絶たれた時、その先にいる者が死ぬのだと言われているようだった。

翼が翻り、鴉鳴女は夜の山を飛翔した。

山伏が記憶の頼りとしたこの紅い瞳は、夜目の強さは、今日この時の為にあつたのだ。
今、彼を見つげ出さずして何を見るところのだろう。

夜空の半月は雪を照らし、雪は残光を放つ。

いつもよりも見える。

いや、見えなければおかしいのだ。

何故ならば、鴉鳴女はずっと山伏を見つめてきたのだから。

鴉鳴女は飛ぶ。

速く、もっと速くと飛んでいく。

まるで猛禽の様に目を光らせて。

夜の闇になお浮かび上がる漆黒の翼は風を切り裂いていく。

……見つけた！

鴉鳴女はうつ伏せに倒れ、雪に埋もれそうになっている山伏を発見して叫んだ。
すぐさま抱え起こして胸に耳を押し当てる。

生きている。

しかし、非常に不味い状態であるのも間違いなかった。
記憶から最寄りの猟師小屋を探し当て、即座に飛んだ。

山伏の体温が死人の様に冷たい。

鴉鳴女は小屋に着くと中に備蓄されている燃料を囲炉裏で燃やし、山伏の雪に濡れた服を脱がせ、乾いた布でふき取っていく。

……温めなくては。

決断すると鴉鳴女は早かった。

自分も服を脱ぎ捨て山伏に寄り添うと、大量の藁束を互いの上に載せて藁蔭で包んだ。

自身の温もりを分け与えるように。

翌朝、目を覚ました山伏は胸に寄り添って眠る鴉鳴女に驚いた。

「鴉様、こ、これは一体？」

「……百回目、これで貴方は許されるわ。

いや、初めから許していたのだもの、ふふっ、おかしいわね。
今日の私は正直者だわ、この上なくね」

声に反応して瞳を開けた鴉鳴女は、山伏が生きていた事に安堵した。
緊張に固まる山伏に更に擦り寄った鴉鳴女は甘えるように呟いた。

「まだ身体は動かないでしょうから、私の枕になっていなさい」

鴉鳴女は自分が山伏にどうしようもなく惚れているのだと自覚した。
この男の番つがいになりたいのだ、と。

「これから言うのは正真正銘の本音よ。
お昼にはきつと嘘つきな私に戻ってるから二度は無いわ。
だからね、聞き逃さないでちょうだいね」

鴉鳴女は深く呼吸をした。

自分もまたこの状況に緊張しているのが分かる。

でも、この一言は言わねばならない。

覚悟を決めて、生来の美しい喉を静かに震わせた。

「貴方を愛してるわ」

「……というわけで、今のような置敷きが一般化したのは君達が思っているよりも大分後の事なんだよ。布団だつて今みたいなのは少なくてね、貴族も大変だつたのさ」

「えーっと、ふむ、時間が余つた」

「今日の講義はここまでしか用意してなかつたんだよなあ。興味がある人はこつちでいつもの趣味の時間と行きたいんだがどうだろう。そうじゃない人は後ろの方で内職なり何なりやってくれても構わないよ」

「んっ、結構来てくれたねえ、嬉しいよ。別に単位とか関係ないからそんな熱心にならなくても大丈夫なのに。」

……って吉田君は戻るのが、正直だな、まあいいのだけれど」

「さてさて、君達はアルビノというのをご存知だろうか？」

「昨日テレビを見てた人は知ってるんじゃないでしょうかね。」

大阪府の水族館に真っ白なペンギンが生まれたとニュースになってました」

「先天性白皮症だったかな、これが医学的な名称でだね。」

遺伝なんかでメラニン色素を上手く作れなくて肌や髪の毛が真っ白になったりする」

「おっと、いくら女子が白い肌に憧れるといっても、アルビノは危険が大きいんだよ。」

肌の細胞を紫外線から守れなくなって皮膚癌の発生率がとても高くなる。」

ついでに言うと視覚障害も起こしやすい厄介な体質なんだ」

「赤目って言うってね、黒目のところにも色素がないから血の色を映した色になるんだけど」

これが非常に光に弱くなってしまっただよ、本当に大変らしい」

「三年前にも、岩手で白い鴉が発見されたニュースがあったけどあれもアルビノの鴉だね……」つと、あったあった、私のPCに壁紙があるから。」

「どうだいコレ、上手く撮れてるだろう、思わず休みをとって行ったからね」

「……なんとも神秘的だよねえ」

「実はこの子、撮影の三カ月後に死んでるんだ。
美しいけれど、野生を生きていくのに不利な形質だからね」

「程よくしんみりした所で、私の趣味に戻るわけなんだけども。
アルビノっていうのは見ての通り通常では有り得ない容姿になる
から」

「大昔から世界中で神聖視されたり、逆に忌まわしいとされたり、
様々な信仰を集めた」

「白蛇なんかは聞いた事はあるでしょう。」

「出会ったら幸運に恵まれる、つてのが日本では一般的かな」

「そして、近畿地方から中部、北陸地方に掛けて白い鴉の伝承があ
る」

「そつえばだが、君達が鴉に持つてるイメージは多分、狡賢いと
かそんなのじゃないかな」

「鴉が賢い動物だというのは昔から思われていたようで
海外でも神話には意外とポピュラーな鳥だったりするんだよ。」

学習能力の高さや、渡りを行なう種がいるのが主な理由なんだろうけどね」

「……おお、また微妙に逸れてた。

で、白い鴉に戻すんだけど、そこでは厄祓いとして今も一部で信仰されていて、

白い鴉は厄や穢れを集めて黒い鴉になっていく、と言われてる」

「鴉の羽が黒いのは厄を身代わりしたからで、

嘘つきで狡賢いのは人間の業を溜め込んだから」

「ちなみに、鴉が集まった下に動物の屍骸があるのは

そういう穢れの元に何より早く駆けつけて穢れを引き受けてるからだそうなの。

なんというか、役割的には雛人形みたいなものだろうかね」

「そういう呪いや穢れといった部分が修験道や密教に馴染んだのか、山伏や修験者が修行を積んだりした、山岳信仰の強かった地域では山開きの時に

紙で造った人形ひとかたならぬ鳥形からすがたを奉納や地鎮ひとがたに用いる所もあるんだよ」

「あと、試練を与える山の神とも言われたり、なんてのも」

「メジャー所な山の妖怪で天狗つてのがいる。」

場所によつて彼等は山の神様としても扱われていてね」

「彼等は修行者を墮落させる悪者なんだけれども、力を認めさせれば自身の知恵を授けたりしてくれるなんて顔も持っている」

「天狗は実は中世日本において姿が安定しない、よく分からないモノの形容詞でしかなかったんだ。今は山伏の格好が定番だけど、犬や猿だったり、あるいは鴉だったりもした」

「これが、鴉が嘘や集積した厄を振りまくのを試練の一つと取るのと繋がり、

それを乗り越えた報酬として動物の賢者、鴉の知恵を頂くなんて考えられた。

修行で真理と神秘を求めた修験者達の思想は、天狗の形成に寄与していると思つているよ」

「よく言われる鴉天狗、という天狗。

これは山伏、修験者や山賊が起源とも言われてるけど、

その『鴉つてのが何処からきたのか』はこの辺りじゃないかと私は個人的に考えてます」

「ああ、そういえば、天狗の中に女郎天狗って女の天狗が居てね。

美人で惚れっぼいんだが、気に入った人間に難題を与えずにはい

られない。

好きな相手ほど大変な試練を与えてしまうという思春期の恋愛話
みたいな妖怪」

「で、試練を達成すると『褒美に私をやるっ』と

嫁入りしにくるユニークで気難し過ぎる乙女な妖怪なんだけど…

…」

「……っと、ふむ、時間もそろそろ終わりですね。

最早、鴉の話ではなく天狗の話になっていましたね、

女郎天狗は日本昔話でも有名な話だから見たい人はDVDを貸し
ますよ」

「では、次の講義で会いましょう」

あしもと……日常に息づく強さ

山は冬を前に彩りを増し、今年も沢山の恵みを世界に振りまいた。

今年も天候も安定し、台風も程々だったおかげで実りも深い。

快晴、秋の空は高く澄んでいる。

差し迫った仕事も無いのに引籠もってでは勿体無い。

なので今日は山犬と共にそっと忍んで街を観察して回る事にした。

人々の群れには活気が満ちている。

それを見て私は思うのだ。

こんなに嬉しい事はないな、と。

どの酒蔵を覗いても住人は良い顔をしている。

この喜びに醸されて、祭りの酒も良い味になるに違いない。

私は山犬と取らぬ狸の皮算用ならぬ、飲まぬ酒の味比べを楽しんだ。

野菜や漬物、味噌などを売る行商人も多い。

大分昔に新製品開発の商業特区だった名残からか

この近辺は流れや新規事業者でも座や組に入るハードルが低いのだ。合神祭で大規模な消費が定期的に行なわれるのも商人に取っておいしいのだろう。

新たな商売の芽ならうと開発競争も盛んで活気がある。

今年は農作物が全体的に豊作だったので尚更だ。

相場が安い内に買い込んで商品改良や開発と相成る。

それは新たな消費として需要を呼び込む。

経済活動の活発化は国の成長に欠かせないから良い傾向だろう。

恒常的に土地を祝福しているとはいえど、それはあくまで補助。

人の力があってこそその豊作であり、そこに人の強さを思う。

上流階級から庶民にまで人気があり、水菓子などと洒落た呼ばれを

する蜜柑も

つい百年前までは酸味とエグ味が強すぎて薬の一種だったりしたのだが、栽培へ励んだ農民達が血と汗と涙を流した末にそう呼ばれるまで至ったのである。

港に近づくと今度はまた違った賑わいがあった。

漁業だけでなく、収穫された作物を売買する大規模な海運や貿易も興っているのだ。

川が道となっていた様に、海もまた重要な道として機能している。

木材の加工技術、造船に必要な建築技術、そして海を走る為の操船技術など

色んな人間がそれぞれに専門とする技を組み合わせなければ達成できない事業。

彼ら海に生きる人間に対して私が出来た事は精々が波を抑えてあげる程度しかない。

だから、海辺の発展を見る度に思わず何度も感心してしまう。

工房では熟達した男達が先達から受け継いだ知識と、己の経験を元に材木を削っていた。

それを自分の作業をこなしつつ食い入る様に見つめる弟子達の姿。受け継がれていく職人の粹の心。

一人乗りの小舟から、今や大きな船を造るにまで彼らの知は育っている。

こういう部分が私のような人間上がりの霊、つまり『終わってしまった者』の眼に眩しく映るのだ。

人間の意思が持つ力はずくづく偉大である。

「杜人様、ここに居られましたか」

物思いに耽っていると雉鳴女が私の側に降り立った。何事かと思っただが、慌てた様子も無い。

話を聞くと、今日は仕事が殆ど空いたので暇になったのだそうだ。気分転換を兼ねて空中遊泳していると偶然私を見つけたので降りてきたのだと。

鳴女自体が古い神霊なので、従う霊も僅かながらいる。身内から神と信仰される者も輩出されたので近頃は配下が増えていくらしい。

経験を積ませるべく部下に仕事を投げれるシステムを試行中らしく、おかげで暇が増えてきたわけだ。

私も昔から鳴女達に色々丸投げしていたのを思い出してしまった。こうして散歩できるのも彼女達のおかげなので苦笑いしかでない。

そういえば、と最近の鳴女事情を尋ねてみる。

鴉鳴女が寿退社というか、おめでた休職となっただけなら経つが、引継ぎ等に滞りはないらしい。

一応、特殊技能である夜間調査がどうしても必要である場合は出てくれるそうだ。

こちらとしても馬に蹴られたくはないので、そうそう呼び出すつもりはないが。

ちなみに、結構な人数の居る鳴女衆なので、

誰かと結ばれるのは過去にも二百年に一度くらいのペースであったりしている。

人間を相手にしたのは私が認知している内で二例目だが、今回も上手くいつているようで何よりだ。

神秘が血として地域に馴染む事で祝福や加護に影響が出たりと色々あるので可能な限り円満な家庭を守って、真っ直ぐな子供を育ててくれると良い。

私は仲間の福利厚生に気をつけているつもりである。育児休暇や補助金を出したりとケースを重ねることに改善してきたので事務も慣れたもの。

……あとは傷心休暇が短ければ言う事なしだが、今は考えるべきではないか。
必ず来てしまう結末から立ち直れるかは彼女次第だろうから。

街の視察自体は大体終わっていたので、
雉鳴女を連れて王樹様への参拝に行く事にした。

かつて王樹様が威容を誇ったその場所へ。

もうかれこれ千年に及ぶ日課が積み重なった場所へ。

今日も頭を垂れ、感謝を告げる。

あいぼう……戦乱の足音

日本と中国、いや明との貿易が本格化してしばらく。

海外文化の流入と別に、日本でも芸能関連が発達を見せている。能楽や狂言、茶の湯や連歌も貴族だけのものではなく、武士達の娯楽となってきた。

世がある程度の安定を見せてきた証拠か。

芸術の発達は精神を豊かにする。

鳴女でも黄鶺きひたきや真鶺まひわなど特に芸術を愛する者は我が世の春といった様子である。

休みの合う日は集まって創作に勤しんでいるらしい。

時たま鶺鳴女も一緒になっているのを見かける。

残念ながら私は門外漢なので歌を聴きに行く程度だが、その私に恋愛物の脚本について感想を求められるのはきついものがある。

一般的な機微は持ち合わせているつもりだけれども
なんとというか、マニアックな近親物などを出されても共感し辛い
しか言えない。

そういうのに憧れているのか、と呆れ気味に尋ねると

「自分でやるのは嫌ですけど、近くで見たいですわ」との事。

……なんとも、女性心理とは理解できない複雑怪奇なものだ。

こうして平和な日常が続く。

私としても時間が取れると計画の準備が捗るので助かる。千年先を見越すには時間が幾らあっても困らない。

しかし、最近はきな臭い空気も感じていた。

雉鳴女の報告から今後を予想していく。

時の將軍は文化人、と言えば聞こえは良いが軍事どころか政治への関心も薄くもっぱら茶や猿樂などに興じているという。

これによって武家の統制に緩みが見え始めているらしい。大きな事件でもあれば、その綻びから崩れかねない。

詳しく見ていくと、朝廷には動揺も軋みも無し。

朝廷の相変わらず何処吹く風といった余裕は流石だ。というか、崩れるのを待っている様にも見える。

それぞれへ派閥を分けているが、
状況がどう転ぼうとも捌けるだけの体制が出来ているのだろうか。
大事が起きなければ良いと思う。
巻き込まれるのは子供達だから。

しかし……。

無ければ良い、と思えば
何故か有ってしまうのが苦難や災難。

嫌な予感は的中率が高い気がしてならない。

まあ、嫌な予感とは知識や経験則から予測されるのだから
長く生きてきた者の勘が良く当たるのはしょうがないのだが……。

何が起こったのか一言で言えば、これはひどい、で済む。

久方ぶりに全国的な大規模飢饉。

台風と水害で田畑が流されたのと、追い討ちの虫害が酷く更に疫病が流行って農民が満足に作業ができなかったので米や野菜が全滅する地域も珍しくなかった。

……で、あるにも関わらず、將軍は飢饉に対して一切の対策や復興援助を行なわなかった。

天候や災害で飢饉が起こるのは自然のサイクル等の避けようもない問題が多いから仕方ない部分もあるのだが、呑気に寺社の改修を行なっている場合ではないだろうよ。

私の信仰地でも少なからず被害は出ていた。

風を抑えたり、樹木を強化して地滑りや崖崩れを防止したりしたものの、完璧にカバーする事はできない。

疫病関連で森戸、杜辺で救援物資を回したりと動いてみたが限界はある。

どちらにしろ長雨で農作物の収穫量や出来は良くないし、決して他人事ではなかったのだ。

当然、彼等農民を抱える守護大名は幕府への不満が募ってくる。

また戦が始まるのだろう。

九州を除いて、方々で剣呑な雰囲気漂っている。

次に起こるのは誰を担ぎ上げるのか、どの派閥に付くのか、だろう。

森戸家にはこれらに干渉しないよう、慎重に、それでいて正確に歴史を記してもらう。

かつてない規模に膨らんでいるために広範囲に人員を散らさなければならぬ。

鳴女達もそれについていくが、人手を増やすために雉鳴女も直々に補助に出る事になった。

外に出る人間が増えるので神社周りが少し寂しい。

……好都合でもあるのだけれど。

ふと、思う所があったので、

久しぶりに山犬に付き合って貰って手合わせしてみた。

地形を変えたり、荒らしすぎたりしないレベルで。

しかし、まあ、当然というか勝負が付かない。

山犬は私の守りを破りきれず、私は山犬の動きに当てられないのだ。

やはり、互角なのだろう。

同じ力を分け合った仲間なのだから。

戦いを終了させ、よしよし、と頷く私に山犬が擦り寄ってくる。

いつものように撫でてやると、難儀な男だ、と山犬が呟いた。
それが私だ、と返すと、それもそうだ、と笑い合った。

自分の姿は思いのほか見えない。

知ったつもりになっているものも意外とあるものだ。
付き合いの長い山犬には私がかかっているのだろう。

きっと、私以上に私について。

……楽に事が運べると思うな。

ひとしきり私の撫でる手を楽しんだ山犬は鋭い忠告と共に私から離れると、

神社の境内の隅で日光浴を楽しむべく森から出て行った。

どうにも、千年の相棒には敵わないらしい。

背伸びをして、私も神社へ歩を進めた。

けいかく……鳥達は知らぬまま

考え事があるので緊急時以外は誰も近寄らせないよう神主、森戸当主に言付けて

私は人避けの壁を作り、杜人神社、本堂奥に籠った。

今、私はひっそりと鳴女や山犬にも隠れて、一人あるプロジェクトを動かしていたりする。

それは『封神』計画。

御左口様の存在にヒントを得て考えた、
神霊『杜人綿津見神』の力を貸借する新しい方法。

新しいとはいえども、中身はミシヤグジ式に仏教式を少々混合した
ような信仰貸借なのだが、
将来予想される私の消滅、それが生み出す諸々の問題への対応力を
考えるとこれがベターだと思われる。

今のまま時を進めても、あと五百年くらいなら私への信仰は無事だ
ろう。

しかし、それが千年、二千年ともなれば話は別だ。

人間が幻想神秘を必要としなくなる日が来る。

それも遠く無い日に。

人の力であった陰陽術や仏教ですら徐々に力を弱めていくだろう。
『教え』からくる集合知の力は知る者、信じる者が多く必要になる

からだ。

私は昔に書いた手描きの世界地図を広げる。

海を渡り、山を踏破し、地図を埋めていった人間は
一つ、また一つと未知を既知へ塗り替えていく。

異なる文化文明との交流は知恵を集め、束ね、発展を繰り返し、
やがては海の底から星々の世界にまで彼等の手は伸びていく。

人間はそれでいい。

真理を探求する心こそ人間の素晴らしさなのだから。

ならば神は？

消えていく定めでも私は構わない。

『必要』とされる居場所が無いのならばそれで。

私の存在理由は『求められているのか』どうか、なのだから。

しかし、未練がある。

私が消えた後、子供達に何を残して上げられるのか？

そして……。

……そして、私と共に消える事になる鳴女に生きる自由を。

『再び必要とされた時に振るえる力を眠らせる』

『道連れとなる鳴女を私から切り離しつつ維持する』

この二つを両立させなければならぬのは頭が痛くなる問題だったが、希望はある。

私が畏れ敬い祀った千年樹は、ミシヤグジの中でも有数であった。その王樹様が残してくださった物が無ければ、この計画は初めからなかっただろう。

運命、という言葉はあまり好きではないけれども、この巡り合わせはそう呼ぶ他無い。

『根』の拡張は順調だが、私と馴染ませるのに今の感じだとまだ百年ちよつと掛かるか。

御左口様……いや、ミシャグジという仕組みへ介入するのは中々骨が折れる作業だ。

ついでに、どこまで混ぜて良いのか、まだまだ実験が必要そうである。

最低限の自我は残すようにしなければ管理できなくなるので一層注意せねば。

何にせよ、現在を蔑ろには出来ないので、
実行は来る戦乱の終結を待ってからとなりそうだが。

さて、と。

落ち着いた所で計画の進捗や出てきた問題点を資料化しておく。

思いついてから、もう二百年が経つ長期計画。

私一人の秘密計画だが、こうして資料を残すのは重要である。何しろ出てきた問題全てを把握し、対策を施すには過去に起きた問題まで浚う必要があるからだ。

一度起きたエラーを繰り返さないように、資料作成は非常に重要。

記憶力には自信があるけれど、何百、何千とあった失敗や危険を全部憶えるのは正直な話、無理である。

墨が乾くのを待って床板の下へ隠す。

一仕事を終え、境内に出ると山犬が気持ち良さそうに寝ていた。

この可愛くも鋭い相棒は計画について何処か勘付いているようだが侮れない。

何も言つてこない所を見ると信頼されているのか、個人の自由と取られているのか。

まあ、山犬に何か特別影響がある内容でもないから構わないのだが。

私は王樹様の森へ視線を向けた。

王樹様の跡に偶然にも生まれた巨大な信仰の塊。

神霊が何百年も祈っていれば必然だったのだからうけれども、
鳴女達はそれを私の切り札的な力としか認識していない。
……当初は私もそんな考えだったのは置いといて。

あれほど大きければそうとしか思えなくて当然だから計画を隠せて
丁度良い。
重要なのはその下に在る『根』であり『回路』であり『経路』なの
だ。

鳴女の協力を受けられればもっと楽に行けそうであるが、
どうにも鳴女衆に反対される未来しか見えないからなあ。

特に雉鳴女を筆頭に。

雉鳴女は貸し借りを重んじる義理堅い性格で、
未だに鳴女を受け入れた事を恩に思ってくれている。

おかげで神社も建てさせてもらえないし、
この上で鳴女の将来の為の計画を話しても固辞されるのがオチだ。

一応、実行直前に全てを説明する予定だが……少し恐ろしいな。

晴れた空は遠くまで澄んで、夕焼けが彼方まで幻想に染め上げていた。

杜人閑話……学生Sの心配『杜辺世界図』

教授が頭を悩ませている。

何やら古い世界地図がプリントアウトされた用紙を睨みつけ、ウンと唸りながら、

『整合性』『時代が』『有り得ない』『渡来人』『アメリカさえなければ』など

不気味な呟きと共にパソコンに何やら打ち込んでいる。

時折、メモ用紙に落書きのような絵や記号（実は文字かもしれないが理解できない）を書いている。書いてはクシャリと丸めてゴミ箱に放っていた。

机の脇にあるそれはとくに飽和状態で、床に散らばっている。片付けるのは俺なんだろうなあと溜め息を吐いた。

先週、資料集めを手伝った時からずっとだ。

いい加減に気になってきたので、尋ねてみる。

するとパソコンから顔を上げる事なく答えが返ってきた。

「ああ、坂本君、私はもうドラえもんの実在を信じてしまいそうだよ。」

タイムマシンがあるとしたか思えないね、何処にあるんだろうなあ」

……教授が壊れた。

アハハ、と高らかに笑いながら高速でペン回しを続けている。無駄に滑らかで速い。

常々、変人だとは思っていたが遂に変人と狂人の境界を越えたらしい。

どうしたらいいんだろうと考えていると、机の下に落ちていたビニール袋が目についた。

数日分はあつただろうと食料品、ペットボトルの残骸が詰まっている。教授の服がちょっと匂うのにも気が付いた。

もしか、この人は三日くらい籠って徹夜してたんじゃないだろうか。

目の隈が凄い。

シヤンとしていれば凜と整っている顔が幽鬼のようだ。

そつと近づいてペンを取り上げ、無理矢理に研究室のソファに倒すと毛布を被せる。

……寝たようだ。

それにしても、教授がおかしくなるくらいの難題なのだろうか。机の上にある世界地図を眺めてみた。

墨で書かれている、普通の世界地図だ。

日本が右端に描かれているのを見ると海外で描かれた物なのだろうか。

地名は書き込まれておらず、世界の輪郭が分かるくらいの簡素なもの。目に付くのはそれぐらいで、あとは古いくらいしか……教授が起きたら聞いてみよう。

「……ん、いつのまに寝たんだ私は。」

「おや、坂本君じゃないか、どうしたんだい？」

目を覚ました教授はあちら側の住人から戻っていた。
非常に安心した。

早速、先生を悩ませている古地図について尋ねてみる。

「君も杜辺グループを知っているだろう。」

ああ、当然か、現代社会の教科書にも載っている大企業グループ
だものな。

杜辺という家は由緒正しい家柄でだね、千年近い歴史を持っている
凄まじい家なんだ」

その杜辺家が築百年を越え老朽化した蔵を改築しようという事で
これを機に納められていた芸術品や学術的価値の高い諸々を鑑定し
ようという運びになった。

チャンスを見逃せないと調査員として名乗りを上げた教授はそこで
恐ろしい物を見つけた。

……という流れらしい。

古ぼけた世界地図の写しに目を向ける。

未だにピンと来なかったのだが、教授が告げた次の事実で納得した。

大学総出で紙の質や墨の成分鑑定、炭素鑑定だとか

考え付くだけの調査の結果、年代が1200〜1300だと判明したそうだ。

「これは歴史の中で、その時に存在している筈の無いものなんだよ！」

教授の興奮具合が凄い。

なんというか、クリスマスプレゼントを前にした小学生と形容すればいいだろうか。

そういえば、地図の歴史はどうなっているのだろうか。どういふ風に発展していったのが気になったので教授に講義をお願いしてみる。

テンションの高い教授は快諾してくれた。

と言うか、解説したくて堪らないようだった。

ただで専門家に講演いただけるからありがたいな。

そう思いながら教授の言葉に耳を傾けていく。

「世界地図の歴史ってのは中々面白くてね」

「古代ギリシヤ、天才数学者だったピタゴラスが初めて地球が球体であるを知り、

後にアリストテレスが論理的にそれが正しい事を説明、証明。

そして、アレクサンドリアの図書館長エラトステネスが地球の大きさを計算した」

「大体、これが紀元前500年から200年くらいの話なんだ」

「そして、エラトステネスの世界図が古代に置いて最も真実に近かった世界地図の一つ」

「天体観測から緯度を求め、緯経線を引いた現代の地図に近い形で、誤差も大きいけれどアフリカ大陸やインドなど、アメリカ大陸を除いた

世界の姿を良く補完できている大変素晴らしい地図なんだ」

「……っと、資料用の画像が……と、あったコレコレ、凄いだろう」

「ちなみにエラトステネスの時代は紀元前、およそ120年、だったかな。

この地図、緯経線の考えなどは後の天文学や地理学に大きな影響

を与えていく」

「しかし、それから発展を見せるかと思いきや、キリスト教によって球体説が否定されたり、天文学者が肩身の狭い思いしたりと長い長い停滞を見せるんだけれども……まあ、これはいいか」

「で、色々と端折るけども大きな船を作れるようになって海図作成の技術が発達する」

「帝国主義、というか未開地への拡張政策が流行ったのもあって俗に大航海時代と呼ばれる新たな地図の時代が訪れるんだ」

「で、コロンブスがアメリカ大陸を発見するわけだが……」。

そう、このくらいの年号は常識だね。

1492年、人間は地球の全容解明に大きな一歩を踏み込んだ」

「実は10世紀頃、バイキングで有名なノルマン人が既に到達してたらしいけれどね……」。

まあ、地図に書き込めるようになったという意味ではコロンブスが発見したと言って良い」

「それから新たな植民地時代の幕開けだ。」

大陸にアメリカと名が付けられ、沿岸部が測量されていく」

「最後に、マゼランが世界一周の航海を成功させ、地球が丸かった事を証明した」

「これ、地理学者泣かせでね」

「今まで白紙だった場所に次々と書き込まれていく大陸の姿。広がっていく地図に今まで計測してた値が信用できなくなっただ変だったそうだ。

地球の輪郭がハッキリした喜びはあつたらうけれど、ね」

「そう、1500年代、いよいよここから真の意味で『世界地図』となるわけだ」

「1570年に作られたオルテリウスの世界図は今と殆ど変わらないものになっている。

ほらほら、どうだい、エラトステネスと比べると進歩が分かるだろうっ？

「ここに至ってようやく世界地図は一先ず完成と相成るわけなんだよ」

「……で、杜辺家から出てきた世界地図。

仮に『杜辺世界図』と呼称しようか。

作成年代を若く見積もっても1300年前後」

「緯経線は引かれておらず、まるで適当に描いたようにも見えるが大陸の位置関係は正確で、しかも下部に南極大陸らしき波線が引かれている。」

「細かな部分は粗いが、正角円筒図法、もといメルカトル図法で作られた地図だというわけだ」

「見つけた瞬間、思わず言ってしまったよ」

「ありえない、何かの間違いではないのか？」

「この当時の日本地図だって大雑把なものしかないんだ。」

「これは『行基図』という奈良時代に作成されたとされる物なんだが、

「実際に江戸時代に入って本格的な測量が行なわれるまで日本地図は大体こんな感じだ」

「鑑定中も、その、不思議な話だが

「半ば間違っていてくれとも思っていたよ」

「世紀の発見なのだが、どうやっても説明を付けられないからね」

「一応、当時は大陸との貿易は行なっていたから、

「もしかしたら西洋の地図文化が入ったのかもしれない。」

ヨーロッパを中心に描かれているからその可能性が高いし、南極大陸の存在については昔から想像されてはいたわけなのだが……」

「当のヨーロッパはまだアメリカ大陸を認識できていない」

「樺太から蝦夷地、アイヌ民族経由も考えて資料を漁ったけれども予想通りここまで正確なアメリカ大陸の姿なんて無いんだ」

「もう何処かの研究者の悪戯で、研究用に取っておいた当時の紙になんらかの細工をして世界地図を捏造したと言ってくれた方が安心してしまうレベルだね」

「杜辺世界図にアメリカ大陸さえ描かれてなかったら、屁理屈やこじ付けで何とか説明がつかなくもないんだけど。おかげで学会も半分混乱気味で資料や証拠探しに大忙しさ。偽物じゃないかって何度も何度も鑑定を繰り返してるらしい」

「このオーパーツを発表するかどうかすら上の方は揉めてるからなあ」

「とりあえず私の名前で報道されそうなんだけれども、これが偽物だったりしたら……発見者は大変だよ、本当に」

「納められてた木箱に『神託図』なんて書かれていたから
杜辺家と関係の深い杜人綿津見神じゃないかという事で
私が専門にしてたから調査と資料を求められているのだけれど芳
しくないし……」

「一緒に出てきた古文書の解読も合わせて進行中……、
次の発表までに間に合いそうに無い……、とにかく時間と資料が
足りない……」

「……更に追い討ちをかける物があっただね」

「……日本地図も出てきたんだ」

徹夜の疲れもあるのだろうが
解説途中でテンションが急下降し燃え尽きた教授を見て、
初めて可哀想だと思った。

教授の明日はどっちだ。

杜人閑話……その後の教授『学生Sの小論文』

資料室で欠伸びつつ背伸びをしていた教授に、
最近忙しそうですね、と尋ねると困ったように笑った。

「あゝ、もうそろそろ飽きられて良いんじゃない？
そもそも私はテレビタレントじゃないんだって。
スタジオじゃなくて遺跡か古民家の方が断然楽しいんだから」

地図騒動によって一気に有名になってしまったのだ。
俺らの教授は、いつの間にか各家庭のお茶の間で見ることが出来る
人になっていた。

大学での公式発表の際、睡眠不足と疲労によってファンキーな事にな
っていた教授は
俺たちへ講義する時と同じ感じで……いや、それよりもノリノリで
解説を始めてしまった。

しかも、最終的な結論が『分からない、だからこそ素敵だ!』というぶつちやけたもの。

大手のテレビ局では大部分をカットされての放送だったが、編集者の悪意か悪ノリか、最後のこの台詞だけは切られずに流されることに。

あまりにはつちやけた発言に、ニュース番組やワイドショーのコメントーター達は『教授という地位にありながら頭の悪いコメントだ』と一蹴した。

……のだけれど、これが何故か一般人にうけた。

コミカルで面白い、あんな先生だと授業が楽しそう、端々の蘊蓄が凄いい、など

考古学や民俗学という地味で暗い印象のある学問の権威が親しみ易い性格をしていた事に擁護する意見が携帯やネットユーザーを中心に広まっていたのだ。

更なるきっかけは動画投稿サイトで脈絡無い意味不明なアニメーションを集めた切り張り動画。

その最後で教授が『分からない、だからこそ素敵だ!』と叫んで終わるものが上位にランクイン。
MAD教授MADと名付けられた教授シリーズが本人の知らぬ所で流行した。

そこから、

この謎の人物は誰だ 何か古い地図見つけた人らしい 大学の
教授

と特定されて話題に。

大学側は、著しくイメージを損なった、として教授の処罰を検討していたのだが、
世間が小惑星探査機の帰還で科学技術や理系熱に沸いている時だったのもあってか
この流れに乗って教授のテレビ露出を増やし、来年の受験生を大量獲得しようと
教育意識の高まりと合わせて文系側の学問ブームの旗手に（勝手に）任命したのである。

そんなわけで教授は今、半ば命令気味にテレビ出演や各地講演会を受けさせられていた。

一番最初に投稿した『式愚民』さんが何者か知らなかったが、おかげで教授の罰は取り消され、注意程度に収まった。

実は俺と研究室のみんなもシリーズの支援動画を投稿してたりする。なんとか教授の印象を良くしようと、ささやかながら頑張ってみたのだが……。

趣味のフィールドワークの時間が減ったと愚痴っているのを見ると、若干の罪悪感。

「出演料のおかげで家を増築できたのは良いんだけどね」

……訂正、ほくほく顔なのを見ると、別にどうでもよかった。

教授は昔から蒐集癖や放浪癖があったので貯金があまり無かったらしく

これでもっと旅や研究ができると喜んでいる。

そういえば教授の家はこの間テレビで見たが強烈だったのを思い出した。

一人住まいにしては結構な大きさだが、家と言うよりも資料庫と言い換えた方が良い有様で

日本刀やクナイは勿論、様々な地方のお面や装飾品が整理され収納されていた。

生活スペースは二階の一部だけだったか。

客間のド真ん中に巨大な棚が鎮座しているのもまた……客を通せる部屋じゃない。

ずらりと並んだ大量のこけしや和人形が見守るリビングも不気味すぎる。

屋根裏に入るや否や数十枚の鬼面が鋭い視線を向けているとか……。

女性キャスターが半泣きだったのは可愛かったけども。

何処のホラー映画の舞台なんだ。

増築してかなり広くなるそうだが、

おそらく中身は対して変わらないだろう。

結婚できない理由をそこに見た気がする。

教授は民俗学の性質からオカルト関係にも詳しく、

歴史番組から心靈番組、喋りの軽快さからトーク番組までこなせる万能の人なので

きっとブームが去るまで毎週のようにテレビで教授を見れるのだろう。

「……と、それは良いけれど、何か用があるのかな。」

坂本君は熱心だから私としても講義していて非常に楽しい。

正直わくわくしているよ、何を持ってきたのかね。」

教授の言葉に目的を思い出した俺は、脇に抱えていたノートや資料を机に下ろした。

自分で纏めた考察も見てもらって、教授の解釈を聞きに来たのだ。

表題を見て教授は少しだけ驚くと嬉しそうに口を歪める。

「最も新しい日本神話『杜人騒乱記』とはまた……珍しいものを。成立は確か1620年だったかな、うん、そう最後の日本神話でもある。」

まあ、何をもって神話とするか何て定義があるわけではないけれどね。」

「乱心した杜人綿津見神、孤高を守る山犬、裏切りの雉鳴女」

「君がこれをどう読み、どう解釈したのか、

しかし『神話：騒乱記の寓意と人々の関係性』とは……。

なんて私個人向けの興味深いタイトルだ、中身を期待させてもら
しょう。」

「あ、研究室でコーヒーでも飲んで待つてると良い。
君がこないだ持ってきた豆もまだあったと思うから」

せんごく……始まった戦乱と歴史に忍ぶ者

応仁から文明まで続いた長い乱は収まりを見せたが、それは数々の軋みと疲労、憎しみや野望を生み出していった。

山城、加賀などでは土着武士や一向宗信徒が守護大名を追い出し自治を始めるなど下剋上の世が訪れているのだ。

時はまさに戦国、と言ったところ。

まあ、周囲に血風が吹き荒れようと行動方針が変わる事はない。森戸家は変に名が売れているが、無茶をしない程度に役目をこなすだけである。

歴史を傍観する者として朝廷に深く繋がっていないながら、同時に離れてもいる奇妙さ。

そこを成り上がりの機と狙ってか、概ね何処の土地に行っても大名や武將に厚遇されている。

この辺りが殉職者が未だ出ていない理由だろうか。

しかし、賄賂などが絶えないので長期間同じ場所に同じ人員が滞在できず、

隠れるように諸国を回らせたりと過酷な仕事を課してしまっているのが目下の悩みでもある……。

下手に天皇に敵対的な勢力と結びついてしまえば、我々は肅清されるのだ。

戦国時代は任務を果たすにあたって今までよりも色んな意味で危険度が高い。

その辺りがあるので表に喧伝出来ないが

杜辺の者も財政、人脈の両面で協力してくれていたりする。

杜辺家一同が商売で築いた伝手が東西に上手く伸び、

所々に小規模ながら隠れ家兼、歴史編纂の拠点を持っていないければこつも良くはいかなかった。

念の為、後で急にこの事を持ち出されて肅清されては敵わないので朝廷というか大和神霊の代表者である天照大御神には杜辺家の協力について内密に報告してある。

彼女としては天皇家への害意が無いのを知っているので見逃す、そうだ。

あちこちに飛び火し始めた騒乱が収まるまでは歴史記録の補助に経済力を増し、存在感を見せてきた杜辺を（あくまで目立たない程度に）利用してよい、と。

そこには、この間の一方的な杜人侵攻未遂を帳消しにする意味合い

も含んでいる。

調査や確認も含めた編纂が完全に終了した歴史書は凡そ十年周期、編纂中のものは約五年刻みで経過報告として写しが朝廷に届けられる。

人物や事件を書いただけでなく地方の行政風景や風俗についても記されたそれは

独自に記録体制や情報網を持つ朝廷側から見ても重要な情報ソース。

杜辺程度の融通を利かせるだけで借りを消せるなら断る理由も無いわけだ。

こちらは一見、貸しを消化した形になるが、消した貸しとは割りに合ってはいない。

その超過分で逆に大和神霊の信用を買ったと考えるとむしろプラス。

森戸と朝廷、もとい私と天照大御神の間の密約。

性格から考えてこれが違えられる事はないだろうし、互いに幸せになる良い約束となった。

そんなこんなで、現在までに大きな問題は発生していない。

今日も報告書に目を通しながら、日本を読み取っていく。

莊園制度が崩壊の様相を呈しているのに合わせて、各地の村落にも変化が見えてきた。

昔から自衛できる範囲の武器や男手を持つ村は珍しくなかったが、こんな世である。

村が丸々傭兵集団となっていたりと、武将だけでなく地侍レベルでも勢力争いは盛んなようだ。

武装商人達や宗教団体も影響力を發揮している。

特に、物資運搬など戦略の要となる水路を生活の場とする貿易商の発言力は大きい。

自治都市が今以上に発生してもおかしくないな。

……ふと、伺見うかみという単語に目が止まった。

情報収集を主に行なう、要するに間諜の事で

遙か未来では忍者などと名が付いたが、今はまだ統一されておらず素破すしばや草とも呼称される者達。

最近では鳥見とりみとも呼ばれ始めている。

鳥見自体は貴族が遊びで狩猟に出る際に獲物が何処に多いのを見極め誘導する、

山や森の生態系を知り尽くした特殊技能職を指す単語なのだが……。ウチの諜報活動を担う鳴女衆から間諜の意が含まれるようになった気がしてならない。

森戸家に限らず、杜人一族は伝書に鳥類を使う事も多いからなあ。

主に鳥の神霊で構成された鳴女様々と言ったところか。この辺りは杜人一族の大きなアドバンテージとなっている。

ちなみに、鳥を使つての通信は中央でも研究や試行がされているが現在、実用化まではまだまだ遠いようで、失敗に終わっているらしい。

けれども、研究が打ち切られる事はないそうだ。

私達が情報の重要性云々を天照に説いたからかは知らないが、都の北西部に位置する山中で根気強く実験を続けていると報告を受け取っている。

いつ頃から伝書鳩が実用化されたのか知らないが、ひよっとすると史実よりも早く登場するのかもしれない。

全てに目を通し終わったので気分転換に境内へ出てみると、
地元の農民や遠方の武士まで集まって、神主と祭りの打ち合わせを
していた。

そういえば今年は何年目か。

合神祭はかなり広範囲を回る祭りなので、領主同士の仲が悪い土地
を横断したりもする。

しかし、祭り中は抗争を禁止し休戦となっているのは暗黙の了解だ。
各陣営から代表者を出し、そこを確認しにきたのだろう。

都の商人も訪れるので資産や人脈を増やすチャンスであり中止する
には勿体無い。
ついでに各所と交流するのに合わせて歩き巫女などの間者を忍び込
ませ易い。

……とまあ、それぞれが腹の内に抱える物は黒かったりするのだが、
開催は素直に嬉しい。

あれやこれやと難しい事を考えないで、
平和に神遊びと洒落込みた
いものだ。

溜め息は初秋の空に吸い込まれていった。

きりすと……緑眼の愛し姫

九州の情報総括を一手に引き受けていた？鳴女からの連絡で、私は新たな潮流の訪れを知った。

キリスト教、伝来。

……とは言えども、正直あまり大きな変化があったわけではない。
遙か昔の仏教騒動と比べると静かなものである。

神道ではそれこそ八百万と祈る神が居り、
仏教では教えの解釈から沢山の宗派に分かれるも共存。
独自の自然信仰も各地に多数。

まだまだ歪であるが、こと信仰に関しては、
多様な価値観を受け入れる下地が出来始めている。

二十世紀には世界で最も名の知れた宗教であつても、
日本においては数多ある信仰の一つに過ぎないのだ。

キリスト教が日本の神秘形態のトップシェアとなる事はないだろう。

……実は内心、ホツとしていたりする。

それが偏見であると自覚はしているが、
私はあまりキリスト教に良い印象を持っていない。

魔女狩り、学問の規制や弾圧と言った黒い部分の知識がちらつくか
らだ。

まあ、これに関しては今の仏教の腐敗具合も負けず劣らずだし、
閉鎖的な日本の村における異種異端の排斥も五十歩百歩で言えた義
理ではなく、
キリスト教自体が悪いのではなくて、そういう風に固定化させた教
会の所為なのだ……。。

それと、どうしても絶対者としての『神』に違和感や拒絶感を覚えてしまう。

現代日本人特有の感覚なのかもしれないが、『完善』な存在が胡散臭く思えるのだ。

その辺り、あらみたま荒御魂やにぎみたま和御魂と、恵みだけでなく崇りにすら神性を認め、
神も人間と同じく善悪や陰陽を抱えた個なのだと言容する思想が自分の好みという話だけでも。

ちなみに朝廷、というか大和神霊衆からは当然の如く調査する様に言われていた。

イエズス会宣教師の面々は京へ訪れた後、
朝廷の計らいで私の近くに数週ほど滞在させられたのだ。

鳴女では万一の時に被われる危険があると見て私自ら隠行しつつ観察してみたが、
キリスト教自体が持つ霊的な武力はそれほどでもないようである。

仏教と同じく集合知による信仰を汲み出す形式。

……のだが、信仰中心地への距離的なものか、はたまた東洋の地に思想が馴染まないのか
大きな奇跡を起こすには些か心許無い神秘量に思えた。

この分なら大和神霊が過敏に反応しないでも大丈夫な筈だ。

ついでにもう一つ心配無用となる理由があつて、今の所キリスト教は人を動かす力と成り得ていなかったりする。

九州南端、島津などを筆頭に海外貿易の足掛かりとしての保護が中心だからだ。

さすがに戦国武将はシビアな目をしているようで、交易の利益確保を目的に奸知権謀を渦巻かせている。

熱心に祈る信徒が居ても、根付くにはまだまだ長い時間が必要だろう。

異文化との交流は様々な発見や発展を生む。

そういえば火縄銃が根来や雑賀に持ち込まれたとも聞いている。菓子類などの食文化もそうであるし、方位磁針といった器械も新たな知恵だ。

生前の私は棚上げさせてもらうが、学びたがりなのは日本人の美德。

専門とする学者や凝り性な職人だけではなく、

それこそ農民に至るまで知への探究心、好奇心は旺盛だ。
この新しい風は日本をまた成長させていく。

あまり杜辺に肩入れしすぎると不味いが、意思の読み取りを応用して
スペイン語とポルトガル語の簡易辞書を作成中だったりする。

昔に作った中国語版の簡易辞書の時よりは大変だった。

細かいニュアンスが分からずとも大体の意味が伝わる漢字はやはり
優秀な文字だと思う。

文法などは流石に理解できないから簡易も簡易で、単語の意味程度
しか載せられていないが

これが纏まった暁には、何とか学ぶ一助として欲しい。

……しかし、良いこと尽くめとはいかないのが世の摂理。

私は縁側で寝息を立てる幼い少女に目を移した。

良い夢を見ているのか、山犬の尻尾に抱きついて幸せそうな寝顔で
ある。

先ほどまで山犬にしがみ付いたり、首元にぶら下がったりと忙しく動き回っていたので遊び疲れたのだろう。

子供の寝姿は時代を問わず可愛らしい。

山犬も、尻尾を掴まれては仕方なし、と動かず静かに見守っている。

この少女は安芸の国へ派遣されていた森戸の若者が連れ帰ってきた。

淡い栗色の柔らかな猫毛も、ようやく肉の付き始めた腕も始めて会った時は随分と悲惨なものだったらしい。

戦国とあって捨て子や孤児の珍しくない世。

彼女もその一人だったが、彼女の場合は少々訳が異なっていた。

交流が生んでしまった緑眼の私生児。

それは太陽の下で緑色に映る瞳。

そういう問題もやはり出てくるのだ。

異色の瞳は迫害の対象。

流石に宣教師ではなく同行していた使節の誰かの子だと思われるが、

母親は差別の果てに死に、彼女は異国人との混血であつたが故に孤独を強いられた。

よくありそうな話だが、若者には割り切れない話だつたに違いない。『自分が育てます』と当主や私にまで熱心に頭を下げてきたの思ひ出した。

いや、本当にあの時の気迫は大したものだつた。

今は齡十六の若造が養育費を稼ぐべく奮闘しているのを一族が影ながら応援している。

少女が寂しくないよう、森戸の子供達や山犬で構つてやつたりと。

この少女がどの様な出会いや経緯で拾われたかは知らない。しかし、別に詳しく調べようとは思わなかつた。

青く若い正義感が一人の少女を孤独から救つた。

その結果だけで十分であり、

何かを付け加えるのは無粋だろう。

だから、早く帰ってきてやりなさい。

未来の為に頑張るのも良いけれど、
大事な物は意外と近くにあるもの。

この子の寂しさを癒す為にお前は親になると言ったのだから。

帰ってきなさい、お前の姫が目を覚ます前に。

杜人閑話……山犬と少女『翠の意思』

「ちかごろ、戌介がおそくまでかえってきてくれません」

舌足らずな声で呼びかける幼子の声を、山犬は背中から聞いた。

「翠はもつといっしょにいたいのです。」

戌介はやさしいけど、そこがいじわるです」

声の主は山犬の豊かな毛並みに顔どころか身体全体をうずめた。うっ、と溜め込んだ不満を解消できない様子で強くしがみ付いている。

先月、戌介が拾ってきた小さな雌。

山犬にとって初めはたったそれだけの存在で、特に目を掛けるほどでもなく、群れの長である相方から暇な時に出来るだけ構ってやれと言われた

ので付き合つに過ぎなかつた。

しかし、翠という少女は『特別』だった。

遙か彼方、大陸の西端にある異国の民との合いの子らしいが、杜人の縁者ですら無いのに神霊をハッキリと捉えるほどに靈的感受性が高かつたのだ。

突然変異によるもの、あるいは血か……。

血だとすれば捨て子同然の子に残された物にしては随分と皮肉が利いている。

その様な哀れみもあつて、自然と山犬は翠を受け入れていた。

また、翠も保護者である成介以外の人間に気後れするのか、山犬に甘えた。

鳴女達も彼女をとても可愛がりたがつたが、人の形が駄目なようで、もっぱら山犬の役割。

周辺の妖怪達はそんな戦神の姿に有り得ない物を見たとき驚いていたりする。

もつとも、山犬は己の片割れの様な、ぬるま湯の甘さを嫌いではない。

元々、野生にはなかつた、優しさや慈しみの持つ眩しさに惹かれ此処に居るのだから。

「山犬様、どうしたら成介といっしょにいれますか？」

ぼつりと零れ出る寂しさ。

それを癒すべき戌介が、自力で彼女を育てようと

男の甲斐性を果たすべく奔走しているのを山犬は知っている。

この問い掛けを聞けば、何が一番大切なのかも分かるものなのに、まったくもって『何かを背負う男』は厄介だ、と山犬は改めて思った。

『意思は世界を動かす力、それは獣も人も、神とて変わらぬ。

その気持ちのままに、お前はお前が在りたい様に動けば良い。

何せ杜人の男共は揃いも揃って鈍いのだ、動かねば何百年と気付かぬからな』

「んう、むつかしくて、翠にはわかりません」

山犬の背中から離れた翠は、

子供らしい癩癢をゆらゆら揺れる尻尾にぶつけようとして何度も手を伸ばしたが逆に上手く捌かれ続けていた。

「えいつ、あ、ずるいです!」

次第に尻尾との格闘自体が楽しくなってきたのか、新しい遊びが出来たとばかりに笑いながら挑みかかっている。

キャツキャと喜びに溢れた声、くるくると切り替わる表情に、山犬は安心した。

子供がこうして無邪気に戯れる姿は、実に微笑ましい。

やがて遊び疲れたのか、翠は山犬に擦り寄ってへたり込んだ。このまま寝入ってしまうのが常である。

山犬は風邪を引かぬよう小さな身体に尻尾を絡ませながら少女が以前、夜に恐怖で中々寝付けないと言っていたのを思い出した。

一ヶ月経ったとはいえ、まだ安心できないのだろう。だからこうして自分の傍で寝てしまうのか。

もっと安心するべきだ。

山犬は自分がかつてないほど饒舌になっているのを感じていた。

『……………森戸は好きか？』

翠は静かに頷いた。

『良く神社に遊びに来る子供がおるだろう。
あやつらはどうだ、好きか?』

翠はまた頷いた。

『鳴女の世話焼き共は嫌いか?
少々お節介が過ぎると思つが』

首を横に振る。

『戌介も好きか?』

翠は頷く。

『そうとも、分かっているだろう。
お前にはこれだけ好きな者が居るのだ。』

そして、お前を好きでいる者も同じだけな』

眠たげな目蓋のまま、
ゆっくりと翠は頷いた。

『……さ、今はゆっくり眠れ』

寝息が聞こえてくるまでに、その時間は掛からなかった。

子は宝。

その意味はこの安らかな寝顔にあるだろう。

山犬は翠を包むように身体を丸め、彼女が起きるまで優しく見守っていた。

後日、成介は色々な人達からやんわりと注意を受け、
今までよりも翠に構うようになった。
夜も一緒の布団で寝て、不眠も寂しさも消え去った。

心底効いたのは、翠の涙。

少女からすれば信じた人に連れられてとはいえ、見知らぬ土地に来たのだ。

唯一繋がりを持つ自分が傍に居ないのがどれだけ辛かっただろう……と反省。

成介は危険手当の多い坂東の実地見聞役に名乗りを上げていた。

方々へ頭を下げて行っていたのはそこに割り込ませてもらう為だったが、
また頭を下げなおして近場の編纂所勤めに納まった。

そして翠は今、鳴女達の元で勉学に励んでいる。

その動機というのが……

「山犬様、どうしたら戌介と、えっと、……その、めおとになれま
すか？」

やきうち……風雲児が見るものは

雑賀は戦国の世において、傭兵集団の名を響かせると同時にある種の何でも屋、便利屋でもあった。

広い川や海路と貿易にはうってつけの立地は勢力を伸ばすの丁度良かっただろう。

水運、海運業が発展、集積地である堺との距離が近かったのも幸いして大きく成長した。

堺に荷を卸す関係で紀伊南部との結びつきも深く、海路繋がりで瀬戸内にも顔が効く。

そして、大昔に一人の刀鍛冶が大成し技術を広めた結果、鎧や刀剣だけでなく鉄砲の複製や改良を行なうなど、金物関連の工業力も高い。

傭兵業はそれらの需要を発生させるデモンストレーション的な意味も込められており、それぞれがシナジー効果を発揮し今日まで至っている。

具体的には、自前の建築工具を用いた工兵部隊。
注目を浴び始めている最新兵器、鉄砲を専門に扱える玄人衆など。
更に物資の運搬まで付いてくるのだ。

敵にして厄介、味方なら金さえ出せば水準以上に働いてくれる戦力。
道具と技能を商品に乱世を泳ぎきろうという何とも逞しい武装商人
達。

なのだが……出る杭は打たれるものである。

京へ上った織田信長は、従来から権力構造の一本化を阻害してきた
自由な戦力、
経済力や戦力を持ちすぎた傭兵や寺社勢力の擁する過分な僧兵を常
々問題視していた。

まあ、本人も過去に利用してきた経緯はあるが、切るべき時がきた
と判断したのだろう。

信長包囲網から起こった比叡山延暦寺の焼き討ちも、
前年に石山本願寺へついた雑賀衆と僧兵から頂いた痛手が決断の要
因か。

焼き討ちの結果から言えば、比叡山はかつての政治力を人員ごと削ぎ落とされて死に体。

本当にあの時は酷かった。

仏道から外れ腐敗していたり、敵を匿ったなど焼き討ちされるだけの理由はあったが
四千人を越える死傷者を出した大惨事。

こちらの調査員も早々に引き上げさせなければ危険で、遠巻きに惨禍を眺めるだけだったと鶯鳴女が言っていた。

そして事が事だけに終わった後も大変である。

……が、各地で多大な反発を生んだが、それを信長は着実に沈静化させ続けた。

坊主は祈るだけ、とおそらく本人の意図通りかどうか、政教分離が始まろうとしている。

話が大部分ずれてしまったが、現在、雑賀衆へ向かっている矛先も数ある反発の一つに肩入れしているから、というもの。

抵抗の強かった根来寺が信長の次なるターゲット。

根来寺の持つ僧兵、いわゆる根来衆は総兵力一万を越え、それを支える人口も多く、もはや宗教都市と呼べるレベルの一大勢

力である。

雑賀は彼らと仲が良く、また鉄砲の運用に関してノウハウの交換などを行なうほど

縁が深かった所為か巻き込まれる形で対信長スタンスを取らされている。

杜人神刀以来、代替わりのする毎に奉納刀を届けてくれている鍛冶師嘉平の一族など

私への縁もまたある地だけに出来るだけ無事でいて欲しいと思うが……こればかりはなあ。

ついでに、権力構造の微妙な位置に定住している森戸家に矛を向けられないか不安でもある。

今の所、織田領内で人員を不当に処分されたりはしておらず、あちらから賄賂などの常識的な範囲の干渉しかきてはいない。

（無論、賄賂は断っているし中立的な記述をさせている）

しかし、邪魔であると感じれば寺社勢力同様に焼き払っておかしくない。

何せ純粋な兵力など保持していないのだから数百人から掛ければ森戸家は簡単に潰せる。

朝廷から討伐の勅命を下されても恐ろしくなければ、だが。

そういう意味で、しっかりと朝廷の力に頼らないといけないし、朝廷の力が今これくらいだぞ、と忠告して力を維持してもらわないと不味い。

室町幕府も倒れ、政情は不安のまま。

さりとして、森戸家は守ってみせる。

腕の中にあるものを守れずして、何が神か。

……つと？

紅葉を前にぐるぐる思案していた私が本堂に戻ると、思わぬ小さな
闖入者。

「あゝ、もりひとさま、こんにちわ〜！」

「こんにちわ〜！」

「えっと、えっと、わ〜！」

可愛らしい三つ子が私の部屋で出迎えてくれた。
なんとも残念な光景と共に。

片付けていたはずの机に本棚から無造作に取り出したであろう巻物
や絵図。

なんとというか、色々と面倒くさい物も表に出てきていた。
良くそこを見つけたな、という物まで。

すぐに飽きたのかどれもこれも放置されているあたりに子供らしさを
覚えたが

これはちよつと叱っておくべきだろう。

まずは事情聴取からだけでも。

詳しく聞くと、どうやら隠れ鬼をしていて紛れ込んだらしい。
元々、神社で子供を遊ばせてはいたが、ここまで侵入を許したのは
始めてだったりする。

親から本堂奥には行かないように言いつけてあるし、
そも、棒を引つ掛けて簡単な施錠はしてあるのだが……今日はうっ
かり忘れていたのか？

こうなると私の過失であるが、どうにもそこが釈然としない。

子供達の代わりに目の前で何度も頭を下げる翠に、
施錠を忘れた自分が悪かったのだからと気にしすぎないよう言っ
てこの件は終わった。

部屋の整理片付けが終わって縁側に出ると、山犬が月見と洒落込んでいた。

一人より二人が良かろうと隣に座る。

子供達が元気なのは良いけれど中々まいったよ、溢したら
子は未来を創る種なのだからそれぐらいで丁度良い、と笑った。

山犬に懐いていた翠の子供達だから、
きっと山犬にとっては孫に似た感覚なのだろう。

あの子達を話題に出した時、山犬は少々上機嫌になる。

しかも今日は取り分け良いようだ。

二人、静かに秋月夜を楽しんだ。

杜人閑話……山犬と雉『発覚』

その日、良く晴れた夏の夕暮れ。

山犬は何でもないかのような自然さで
単身、雉鳴女の私室に足を運んだ。

部屋には旅から帰ってきたばかりなのか、
荷を解き筆記具や巻物を整理している雉鳴女の姿が窺えた。

「……おや、貴方が私を訪ねて来るとは珍しい」

雉鳴女の反応は然もあらん。

山犬は暇だからといって友人を訪ねたりはしない。

互いに信用も信頼もしている仲ではあるのだが、
実のところ、山犬と雉鳴女の関係には奇妙な距離がずっとあった。

もつとも、雉鳴女に限った話ではない。

近頃は随分と他人に近くなつたが、

山犬は基本的に杜人神以外との馴れ合いをあまり好まない。

杜人神に呼ばれていなければ神社周辺を一人気ままにぶらついて
いるか眠っている。

鳴女衆も例外ではなく、雉、鶇、きびたき黄鶇などの一部古参を除けば、
進んで会話するような特別に仲が良い存在というのがいないのだっ
た。

入った年の浅い鳴女などは対面するだけで少々緊張してしまうらし
い。

そんな風に、山犬は杜人神のコミュニティにおいて
輪の中心に限りなく近いにもかかわらず、不思議な距離感で周りと
離れている。

たとえるなら、どこか旅人に似た自由さを持っていた。

雉鳴女も昔は同じ神に仕える身として近く遠いこの関係を縮めよう
としてきたけれども、

どうやら山犬の性分、山犬の芯に根ざした生き方なのだろう、と早
々に諦めている。

「先ほど戻ってきたばかりなのですが……。
私も出張しなければならぬような祟り神でも生まれましたか」

そう、山犬は暇だからといって友人宅を訪ねたりはしない。
動くとすれば何か問題が起こった時である。

雉鳴女は仕事から数日ぶりに帰還したばかりであったが、
即座に緊急用の道具袋を隠し戸から取り出し戦構えを整える。
脇には天井の梁から現われた座敷霊が護衛に控え、ピリピリと緊張
感を高めていた。

この間、五秒。

言葉を言い終わる頃には臨戦態勢となっている。

山犬はそれを見て可笑しそうに
『今日はただ、友人として話をしに来ただけだ』と、くつくつ笑っ
た。

普段とは異なった山犬らしからぬ様子に雉鳴女達の緊張は霧散する。

『聞く聞かぬもお主次第ではあるが……、
自己軽視で身内至上主義の、そう、あの阿呆についてだ』

雉鳴女は座敷霊に退室を促した。

何を持ってきたのかは分からなかったが、

雉鳴女はそれだけで聞かねばならないと判断した。

直感であったが、山犬が何かを起こそうとしているのだ、と。

しかも、杜人神を中心に、杜人神に知られぬ様。

わざわざ訪ねてきたのはそういう事に違いなかった。

今さら叛意はないだろう、とは思っている。

それだけの絆を、山犬は杜人神との間に築いているのだから。

雉鳴女からすれば羨ましい程の、それこそ互いに命を預けられるくらい
の絆。

ならば何を考えているのか。

そして、自分がどんな役を求められているか。

雉鳴女は姿勢を正して言葉を待った。

『誤解せぬよう、初めに言っておこう。』

真実、私はあやつの幸せを願っておるよ。

それは我が生命の誇りにかけて、

決して違えられる事のない祈りだ』

話はそれほど長いものではなかった。

王樹様の跡に生まれた『信仰結晶』。

そして、その下にある『根』と呼ばれる存在。

この二つを杜人神が近々『何か』に使用するだろう、と。たったそれだけの話。

茜色の空が群青を経て濃紺となってきたが、遠く視界の端では残光が完全に沈んだ太陽をまだまだ追いかけている。

宵の初めと言ってよいものだった。

「それを私に伝えたという事は、つまりは、それを調べ、阻止しろという事ですか？ 貴方も把握できていない、杜人様の『何か』、杜人様の『計画』を」

行灯皿に油を用意しながらの雉鳴女の確認に、山犬は軽く首を振って、静かに答えた。

『私はどちらでも良いのだ。』

それがあやつの幸せ、選択であるなら尊重しよう。個人的には阻止されて欲しいがな。

……お前とも付き合いが長い。
知らせてはおこうと思っただけだ。
勿論、知ってどう動くかはお前の自由』

この言葉に、雉鳴女はピクリと反応した。既にある程度を掴んでいる様な物言いだからである。

しかし、山犬には動く気が無い。
消極的な反対のまま傍観するつもりらしい。

今ここで初めて知った『根』の存在。

昔から杜人神の妙な秘密主義を雉鳴女は気に掛けていた。

チグハグで突飛な知識や発想、未来予知染みた直感。これらがどんな仕組みで生まれるのか誰も知らない。

大地や植物と深く繋がった能力の産物だと無理矢理に納得していたが、たったそれだけで語れる様なものでなかったのも事実。

情報を司る鳴女としては内心、己の居場所を揺るがす恐怖でもあった。

けれど、今まで杜人の地に積極的な不利益を齎した事例はない。その一点を持って信頼を預けていたのだ。

きつと山犬もそうだろう。

ならば今回は今までと何が違うのか。

山犬は何を知っているのか。

何故、阻止を願うのか。

その問いに、思いもしなかった答えが返ってくる。

『杜人綿津見神が消えるからだ』

雉鳴女は言葉の意味をとっさには理解できなかった。

消える？ 誰が？ あの人が？

聞き間違いであれば良い、と尋ねなおしたが……。

『もう一度だけ言っぞ。』

杜人綿津見神は、自ら消えようとしている。

目的は分からぬが、おそらくは我々の為に』

……時が、凍りついた。

『私には『根』の正確な正体を理解できぬ』

しかし、凍りついたままの雉鳴女をおいて、
山犬は説明を続ける。

『分かっているのは偉大なる千年樹の遺物である事。

神霊よりも高次な何かだと思われる事。

あとは、私と奴に共通した巨大な力の源泉だといっくらいだ。

王樹殿との縁が我々に耐性を与えているのかもしれないが、

まともな神霊程度では『根』の直視ですら存在が危うくなるほど
次元が違う。

もつとも、そうなるまでに『根』を開拓したのはあの阿呆だが…

…』

『あやつは、その『根』へ無理矢理に自身を溶かし込もうとしている。』

己の存在を削ぎ落としながら、異物に馴染ませる。

魂を自ら切り刻み攪拌してゆく苦痛、およそ正気の沙汰ではない。

取り込むのか取り込まれるのか。

このまま程度が進んでゆけば、いずれ戻れなくなるよ』

少なくとも私は御免だと、

山犬は不機嫌に鼻を鳴らした。

杜人閑話……山犬と雉『戦いの始まり』

『座れ、何処へ行く気だ』

雉鳴女は自分が無意識的に立ち上がっていたのに気が付いた。

直接、問いただそう。

その気持ちだが、雉鳴女を自然と立ち上がらせていた。

『座れ』

「ですが、山犬っ！」

『座れ、と言っておるのだ、黙って座れ……』

戦場と同じ空気、山犬の巨大な存在感が部屋を満たす。気圧されて、雉鳴女はゆっくりと座り込んだ。

『焦るな』と前置きをして山犬は言葉を紡ぐ。

知る限り『計画』自体は少なくとも百年以上前から動いていたのだ、と。

今日明日にすぐ実行されるようなものでもないから、まずは頭を冷やせ、とも。

『だが、その意思、選択を私は嬉しく思うぞ』

そして、最後に口の端を柔らかく緩め、山犬は笑った。

意思是、世界を動かす力なのだ。

老いも若いも、男も女も問わず、人であろうが獣であろうが、たとえ神霊の類であろうとも。

世界を動かすのは強い意思である。

山犬の、杜人綿津見神の口癖が雉鳴女の心にすっと染み込んだ。

『さて、杜人の地はあやつの世界同然だ。
ただ一羽で挑むには足りぬ物も多かるう』

「では貴方も、……いえ、そうでしたね」

『そうとも、私はあやつのを幸せを祈っている。』

男が満足して死ぬならばそれもまた幸福に相違あるまい。
幸せの定義は個々にある、故に中立だ、お前鼻屑ではあるがな。

とはいえ、私は無理でも古株共は喜んで協力するだろうさ。
孤高という野生を捨て、縁という人間の力をお前たち鳴女は手に
した。

他の神霊共とは比べ物にならん『数』の力をな』

落ち着きを取り戻した雉鳴女は、墨と硯を用意した。
現時点で分かっている事を記録する為に。

『ふむ、先ほどのように、』

『直接聞きには行かぬのか？』

からかう様な山犬の口調に、
雉鳴女は先刻の自分が恥ずかしくなった。

「あゝ、もうっ、さっきのは無しです。
からかわないで頂きたい！」

私は『雉鳴女』なのです。

そもそも情報がまったくもって足りていません。
この状態で何かを訴えてもただの感情論にすぎない。
『計画』に対する判断基準すら無いのだから、まずはそこから。

おそらく『計画』は我々に益を生むものでしょう。
『目的』自体が掴めていませんが……。
しかし、問題はそこではない。

杜人様が消える可能性のある『手段』が私にとっての問題なので
す。

何にせよまず情報、これが基本。
そう、私は『雉鳴女』ですからね」

雉鳴女には暗さも悲壮さも無かった。

ただいつも通りに問題を調べ上げ解決の糸口、
至るまでの道筋、着地点を探るだけ。

積み重ねてきた『いつも通り』は道を開く。
経験から雉鳴女は悟っていたからだ。

これほどまでに大仰な計画。

杜人神をして、身を削らねばならない原因が出来たのだろう。
それを取り除く事が出来るのならば、そもそも計画自体が起こらない。

つまり、ほぼ確定的に訪れる何らかの難題に対する答えとして計画は用意されたのだ。

遙か彼方の、数百年先の我々を見据えて。

雉鳴女はそう考えた。

手段に信仰結晶と根が選ばれた理由もまた重要である。

特に、根に関しては謎ばかりで得体が知れない。

結晶は純粹に事を行なう際の燃料だとは思われるが今はまだ判断できない。

差し当たり今後の行動にまず必要な物。

「山犬、私は戦乱の終結を機と読みますが、貴方は？」

『同じくだ。』

あやつは阿呆だが馬鹿ではない。

森戸に杜辺が落ち着くまでは動くまいさ。
……と、同時に無茶もせぬだろう、元々が臆病者だからな』

「…………元々？」

『あぁなに、私だけの思い出だ。
妬かずとも良い、大した事ではないのだ』

独り笑いを噛み殺しながら背を向け、
山犬は来た時と同じように飄々と帰っていった。

『健闘を祈る』

それだけを言って。

気が付けば東の空が白み始めていた。

行灯からたまにジリリと油が焼ける音を聞きながら、
雉鳴女は過去200年分の資料請求の履歴を一晚中見直していた。

そして、ほんの数分を調べ終えた程度の進捗に、深く息を吐く。

当時あった事件や各種案件の報告書と合わせて

その請求に違和感が無いか、不自然な調査依頼がないか、
全てを精査しながら調べなおすのは思いのほか手間が掛かった。

全国の戦乱が終結するまで短く見積もって20年。
時間制限は決して長いとは言えない。

そも、これで尻尾を掴めるとも限らないのだ。

徒労に終わる事も考えると分担しなければ到底間に合わない。

しかし、作業難度は非常に高かった。

杜人神が各案件でどのような資料を求めるのか。

そういう癖を把握していなければ微かな変化を捉えられないだろう。
身近で接し続けた者でなければ任せるのも容易くない。

「鶉……次点で黄鶉きびたきかしら」

任せるに足る鳴女を上げてみたが、
彼女達が協力してくれるかは分からない。

鳴女の保全という観点で見るとならば
軒下を貸してくれている杜人綿津見神が不利益を生まない以上、
このまま静観した方が良いと言うかもしれない。

もし杜人神が消失したとしても鳴女はおそらく大和に受け入れられる。

影働きだけになるだろうが、今とそう変わらない待遇になるだろう。
そういう扱いを受けられるだけの能力と自負はある。

……不安が鎌首をもたげた。

計画阻止へ動く事は鳴女の利益ではなく、
雉鳴女の個人的な願望に基づくものだからである。

自分の我侭に一族を巻き込めるのか？

それが胸の何処かでもやもやと渦巻いている。

しかし、立ち止まってはられない。

不安を振り払う様に、雉鳴女は朝焼けの空へ羽ばたいた。

協力者を獲得する為に。

山犬は暁の空に飛び出した雉鳴女を遠目に眺めていた。

『雉よ、あの阿呆は幸せの勘定に己を入れぬ。
だからあやつは阿呆なのだ。』

しかし、唯一お前だけがあやつ幸せとなれるだろう。
それはきつと誰にとっても喜ばしい結末になる。

誰かを想う力、野生で在るとしたこの身には、眩しくも羨ましい』

意思は世界を動かすぞ。

世界を動かさせたならば、
それが世界の意思、世界の選択なのだ。

咳いて、山犬は大きく欠伸をした。

秋も深まり、紅葉が美しい。

天高く馬肥ゆる秋……か。

自分で言っておいて何だが、響きと裏腹に血生臭い言葉だったりする。

大昔、いや、未来で使っていた時は気にしなかったが、実際、戦国ともなると生々しく感じる。

収穫を終え、農閑期に入る時期は人員も駆り立てやすい。農民にとっては堪ったものではないが。

そういえば、各領内の財務官僚も秋、冬を終えた後は大変だろう。土地が空いたり増えたり、耕作者が居なくなったりで年貢等の予測額が上下するだろうし。

つじつま合わせで隣家から追徴課税を取るといった悲惨な事例も報告されているから恐ろしい。

戸籍や課税帳簿を導入していない戦国大名はまだ多い。

数学的知識を持った人間が居ないと正確な検地が難しいので仕方な

いと言えはそうなのだが、
理不尽な被害についての報告を見ると、どうにもやりきれない話である。

何にせよ早く戦乱が治まると良いなど、
縁側からまだ日の高い空を仰ぎながら今日を振り返った。

今日は山犬も雉もいなかったので、日課の参拝は周りを気にせず済んで楽だった。

特に滞っていた実験を幾つか消化できたのが大きい。

しかしまあ、東国諏訪、もりやのかみ洩矢神もこれを御しているととなると大概な常識外れである。

私も洩矢神には御左口様で一杯喰わされたが、然もあらん。

……きつと私よりもスマートな方法を取っているのだろう。
毎回の如くボロボロになるようでは様になるまい。

外見を取り繕えても、まったく、中身は酷いものだ。

洩矢神が御左口様の『まほろし存在』を創り上げた御技の一端でも手に出来れば

これほどまでに苦労しなくても済んだらうけれど、現実の中々ままならないもの。

ミシャグジというシステムの利用に気が付いた時から

それとなく東国の調査を名目にあちらの情報を集めたけれど、結局、介入方法は自前で開発した力業になったからなあ。

もつとも、流石に秘儀秘奥の類だろうから鳴女でも易々と手に入らないに決まっているが。

私が気付いていて、しかも調べている事自体、洩矢神に知られたら危険なのだ。

攻め込まれてもしようがない代物だったりするから無い物は無いと割り切るしかない。

直接訊いても返ってくるのは祟り神付き鉄環の雨がオチだし。

この日本において神霊を生み出す根源的な枠組み。

『ミシヤグジ』を理解している事こそ洩矢神の特権なのだから。

帰り際、神が神に祈るのも何だと思ったが、

忙しいらしい雉鳴女が上手くいくように手を合わせてみた。

というのも、鳴女の中で問題が発生している『らしい』のだ。

雉鳴女からはここ百年試行しながら継続的に続いている組織改革。配下祖霊組の組み込みや指示階層の刷新に関する騒動だと説明されているのだが、

長引いているようなのでと協力を申し出ても、

「杜人様は手を出さないでください。

これは鳴女の血と肉になる大事な経験です」

こんな風に断られた。

鳴女は昔は一族だけだからこそその結束と統率を持って組織されていた。

外部人員（とはいえど信仰区域の祖霊や妖怪だけが）によって規模が膨らんだ事で

規律などに問題が発生するのは当然とも言える。

……が、百年経ってからどうこう問題が出るのは、どうなんだろう。運用開始時にも似たような感じにはなったが最近までは安定してきたと言っていたような。その辺りがちょっと腑に落ちず、妙に気に掛かる。

ひよっとすると……『鳴女の存続に関わる様な大事件』なのではなかろうか。

そういう心配を、私はこの所ずっとしている。手伝わせてくれないものだから余計にだ。

雉鳴女的能力を信頼していないのではないし、むしろ高く買っている。

鳴女の運営や維持に関しては、私は極力触れない様にしてきた。概要程度の組織図は把握しているが、細部となると今更触れようが無い。

長く歴史と伝統を繋いできた組織であったのと、雉鳴女個人への信頼からだ。

完璧とも言える組織運営を雉鳴女は行なってきた実績もあった。

その彼女、そして彼女が鍛え上げた鳴女衆が梃子摺るような『何か』とは？

彼女の頑迷なまでの優しさや義理堅さから迷惑を掛けまいとしているのではないだろうか。

もっと私を頼ってくれて良いし、甘えて欲しいのだが、何分、彼女は心が非常に強い女性なので少しだけ寂しく思う。

現在進行形でしばらく顔を見ていないのもあって尚更、だ。

山犬に偵察を頼んだが、雉鳴女がやるべき事だから放っておけ、と相手にされない。

詳しく知っていそうなので問い詰めたのだが『心配すらいらん』そうだ。

それは些か酷くないか山犬よ、せめて心配するくらいはさせてくれ。

うだうだと思考を回転させていたら、

とつくに日は沈んで辺りは真っ暗になっていた。

どうやら、考えながら眠っていたらしい。

いつの間にか仰向けとなっていた私は、天頂の月を正面に捉えている。

土の匂いが心地よ……、……土？

……縁側からも落下していた。

これで起きなかったのか。

どうにも近頃、ボーっとしすぎである。

祭りが近くて浮かれていたのもかもしれない。

よし、と気合を入れなおして起き上がる。

信長が明智光秀に討たれたり、雑賀衆が武力を自主解体したり。目まぐるしく時代は動き続けているのだ。

考えなければならぬ事はそれこそ山ほどある。

杜人に連なる者の為に。

皆の為に。

杜人騒乱……雉の戦い『関の声を』

山犬によって『計画』を知ってから雉鳴女の毎日は忙しくなった。

哨戒や異変の察知、森戸の任務補助など

以前からの日常をこなしつつ杜人神の秘密について調査を進めなければならぬからだ。

これを杜人神に気付かれるわけにはいかなかった。

表面上取り下げたとしても、今まで以上の隠匿を持って進められる可能性はある。

事の大きさを見るに強行すら考えられるのだから慎重にならざるをえない。

自分が計画の存在を知る事、それを知られていないのが、一步分の有利。

『その時』まで、絶対に守り抜かねばならない有利だと雉鳴女は感じていた。

賭けられている物が杜人綿津見神あひひ自身である。
万全で無ければならない。

日本は今、混乱にあるように見えて、確かに収束に向かっている。
織田信長の死で宙に浮いた様に見える天下は、羽柴秀吉が手に納め

つつあるのだ。

時間制限は厳しい。

乱を望んでいるわけではないが、

森戸や杜辺への影響が大きい戦乱が治まれば、即ち約束の時。

未だ全貌を掴めていない雉鳴女は、

日常の平静と内心の焦りに神経を締め付けられるような気持ちである。

それは、彼女の協力者たちも同様であった。

あの日の午後、彼女は古参の者達から鶇、きびたき黄鶇、まひわ真鶇の三人を召集した。

「どうか、私に手を貸してください」

土下座し、額を畳に付け、お願い願った。

自分が何をしようとしているのか、その愚かさも全てを正直に伝えた。

杜人神に弓引く事になる可能性が高い事。

鳴女ではなく雉鳴女個人の願望である事。

そも鳴女に対して不利益しか生まない事。

それでも、いや、だからこそ彼女達は雉鳴女の要請を受け入れた。雉鳴女がそれを知って尚、行なおうとする意思を持っていたからだ。たとえ謀反人と呼ばれようとも。

「母の為に身を張らぬ子がおりましようか。

それに、杜人様が消えるかも知れぬとあれば尚更です。

貴方の次にあの人を見続けてきた私なら、十分に力となれましよう」

「『君がため 惜しからざりし 命さへ』……なんて。

私は貴方への恩を、たかだか千年で返せたとは思ってませんわ。当然ですが付き合わせていただきますわよ、とことんね」

「正直に申し上げますと、私には重い話です。

けれども、私は貴方についていくと疾うの昔に決めております。

卑小非才の一羽に過ぎませんが、どうぞ我が身をお使いください」

彼女達はその場で雉鳴女に応えた。

それは雉鳴女が積み重ねてきた徳や縁の賜物だろう。

このようにして仲間を得たものの、

仕事の合間の調査、更に誰にも気付かれぬよう秘匿しつつ、

200年に及ぶ資料を精査するとなると並大抵では済まない。

鳴女が全国を回って集めた情報の海が、巨大すぎる壁となっている。進展しないまま、もう何年も過ぎていたのだ。

何年も……。

「何も、掴めない……」

伊勢杜辺家へ編纂済みの歴史書を運び終えた雉鳴女は
杜辺が泊まる宿の屋根から青空を眺めながら無力感に打ちひしが
れていた。

これまでの方針は誤りだったのだろうか……？

資料請求履歴や調査依頼の経歴を辿るのは決して間違っ
てはいないはず。

なのだが、一向に成果が上がらない現状、暗闇を手探りで進むよ
うなもどかしさが心を蝕む。

たった一年ぼつちで見つかるとは雉鳴女も思っ
てはいない。

けれど、それが五年、十年と経るにしたがって不安だけが際限なく膨らんでいく。

あれから山犬は根の性質についてある程度の情報を渡してくれた。実際に触れてみて感じた事も含め、事細かに。

中立公平と言いながらも、山犬はきつと期待してくれている。

しかし、そこから進めていない。

雉鳴女の目頭が悔しさで熱くなる。

雲を掴むように宙を彷徨わせていた掌は自然と顔を覆っていた。

不甲斐無い。

長く隣に居たつもりだった。

でも、あの人を何も分かつてはいなかった。

何を抱え、何を考えているのかを。

感じている無力感がそのまま互いの距離に思え、悲しくなる。

雉鳴女は、静かに泣いた。

その日、太陽が山へ傾いていく頃。
日雀ひがらの伝令が一羽、雉鳴女の元に届いた。

特に連絡が必要になる案件は無かったはずだと思い、
誰からかを尋ねた雉鳴女は、一気に緊張を高め表情を硬くする。

「真鶉鳴女様から急ぎの報告です」

……送り主は真鶉。

木板に挟み誰も見れぬよう封がされた報告書を日雀から受け取った。

急ぎ、というが心配だった。

もしかや杜人神に知られてしまったのではないか。

最悪ばかりが雉鳴女の脳裏を過ぎる。

これまで何一つ進展しなかった過去がどうしても考えを暗くしてしまっ
まう。

しかし、続く言葉は雉鳴女を良い方向で裏切った。

「そして、伝言を承っております。

一言だけ『芽が出ました』……と」

「……！」

一瞬、呆けてしまった。

予想していなかった伝言の意味が頭に浸透すると、
堪えていた今までを取り返すように喜びが溢れ、胸を満たしていく。

ついに手掛かりが見つかったのだ。

雉鳴女は顔に出さない様にするので精一杯だった。

少しでも気を緩めると泣いてしまいそうな自分に気付いた雉鳴女は、いつもの様に日雀へ労いの言葉を掛けると、返しの伝令を頼んだ。

「まず、『ご苦労様でした』と。

それと『ありがとう』と伝えて」

日雀は軽く頭を下げ会釈すると黄昏時の空へ飛び去ってゆく。

夜、雉鳴女は真鷲の報告書に目を通していた。

真鷲によれば、精査済み140年分の調査依頼を統計していくと、十数年程度の短期に連続して何かを調べるといった物はなかったが、全体を通して、ある事柄の調査数だけが頭一つ抜け出していたそうだ。

「……原始神霊、ミシヤグジ型神霊の調査」

西は九州からは津蟹や大蛇の経過、東は坂東以北の自然信仰に遠野妖怪。

他にも各地の大きな力を持つ原始神霊や大妖への調査指令。

型分けの種類としては広義すぎるかも知れない、と注意書きはされていたが

調べる価値は十二分にある。

そもそも、鳴女が使うミシヤグジ型という呼称や定義、分類は杜人神が定めたもの。

そういえば神霊の成り立ちについて杜人神は興味を持っていたようにも思えた。

杜人神の力の源だという王樹様と呼ばれる神霊もミシヤグジ型に属していたのだという。

『根』もまた、王樹様の遺物。

御左口様、いやミシヤグジに『何か』あるのか？

真鷲と鶇には引き続き残りの調査を任せ、

雉鳴女は黄鷄と共に新たな指針へ手を伸ばす事を決めた。

土着神の統括者、祟りの元締め。

最大最凶を冠する原始神、御左口様。

危険度が跳ね上がったのを感じていたが、雉鳴女は恐れてなどいら
れなかった。

計画そのものの危険もまた、これで理解できたからだ。

「雉も鳴かずば……と人は言う。

それでも、鳴かねばならない時は来る、か」

雉鳴女は行灯の火を消し、月を見上げ、そつと瞳を閉じた。

杜人騒乱……古強者黄鶡『粹である為に』

御左口……、それは日ノ本の誰も起源を知らぬ最古にして謎多き神。
あらゆるものより出でては信仰を繋ぐ原始神。

万象に宿る陰なる神。

かの神を調べ上げ、謎を解き明かすべく雉鳴女と黄鶡は苦心するも
残念ながら結果は芳しくなく、攻めあぐねている状態だった。

「……やはり、一筋縄で行く相手ではありませんか」

夏の終わりの、金色に輝き始めた山頂から静かに目的地を見下ろし
て黄鶡は一人ごちる。

通算で三桁に達した失敗回数には悔しさも零れ出ようものだ。

何しろ、調べようにも肝心な場所にまったく近寄れない。

蛇は目以外の物で世界を見る、と杜人神が言っていたのを黄鶡は思

い出す。

特に熱だとか氣勢のような物に敏感なのだ。

その蛇を主な象徴とする御左口ともあれば察知能力の高さも納得できた。

だからこそ、僅かでも神力の弱まる冬を雉鳴女は調査時期と設定したのである。

しかし、前年、前々年の冬の調査や、今まで集積してきた情報でも殆ど御左口の本質には近づけてはいない。

過去に面会した雉鳴女の話によれば、

洩矢神の立会いの下でしかお目通りした事がなく、それも御簾越し。そんな不明瞭な状態な上、当時は巨大過ぎる力に向き合う事も出来なかったそうだが、

今振り返ってみると杜人神の抱える『信仰結晶』を直視した時と似た感覚を覚えた……らしい。

御左口様は果たして実体を伴う神なのか。

そこを確かめなければならぬ。

黄鶉の勘が必要であると囁くのだ。

その為に東国での任務にかこつけて季節を問わず御姿を盗み見ようと侵入を繰り返している。

現在単独で調査を行なっているのは実のところ黄鶉の独断。

早く真実を見つけないければ、愛しい上司が危険に飛び込んでしまう。世話が焼けるものだと思態を付きながら身代わりとなろう。

「埒が明かずと言うならば、明かせてみせるが粹と云うもの。
恋路邪魔する有象無象には、恋歌響かせて魅せますわ、っと」

そして、今日もまた祟りを恐れず御左口へ挑んでゆく。

黄鶯の過去を知る者は少ない。

彼女は在籍年数で言えば鶯よりも長い最古参の一人。

鳴女を支える各種教養の講師として、

若かりし頃の鶯も彼女に礼義作法や芸術を学んだ。

今でこそマニュアル化や分担が進み直接とはいかなかったが、
教育課程や教材はどれも黄鶯の手が入ったもの。

つまり、彼女は今いる鳴女たち殆どにとって師にあたる。

鳴女の心は雉が育てた。

鳴女の技は黄鷄が鍛えた。

けれども、鳴女内での序列自体はあまり高くない。

精々が全体方針を決定する上級会議への出席権を持つ程度。

能力や適正の関係だと本人は鳴女における序列を鷄を初めとする後輩へ譲っているのだ。

……鳴女の誰もが心の内で考えている事があった。

黄鷄は雉に次ぐ、いや、それどころか雉よりも上を行く存在ではないかと。

そんな彼女が何故、雉鳴女を慕い敬うのか。

今より遙か昔に鷄が興味本位で聞いた事がある。

黄鷄は笑って問いに答えた。

「私の小さな小さな誇りを、彼女は命を賭けて守ってくれた。ならば、命を賭けて応えたいと思うのは自然な事でしょう」

鳴女では良くある話の一つよ、と懐かしむ様に呟いた。

詳しくは己だけの思い出にしておきたいのか、それ以上は何も語らなかつたが、十分だつた。

「……そうね、きつといつまでも返し切れない借りなのよ。だつて、ほら、私も彼女も安い女ではありませんから、ねえ」

冗談めかして笑う、気位高い彼女の誇り。

その対価は千年や二千年程度の忠節では返済にまだまだ足りない。

何の為に生まれ、何をして生きるのか。

人間も霊も、同様に『生涯において成すべき事を成す時』がいつか来る。

その時を後悔をしてしまう躊躇いは、雅でも粹でもあるまい。

『美しく粹であるべき』

これが黄鶯の生き方であり在り方だ。

敬愛する親友であり、母であり、長である雉の為ならば
鳩の様に全存在を賭けて行なう事を恐れなどしない。

独断専行しているのも可能な限り雉鳴女に危険を負わせない為。
自分に出来る限りを以って、黄鶯は自身の手で彼女を守るべく動いているのだつた。

御左口様を調べる。

そう雉鳴女が口にした時、黄鵪鳴女は静かに喜んだ。

最も危険であり、最も重要な仕事を任せられる信頼と友情。
黄鵪の胸にはこれからの緊張よりも、喜びが先立った。

時が来たのだと。

その日、黄鵪は夜になっても粘っていた。

夕暮れ時の通り雨に、若干冷える夜。

乱立する数多のシャグジ社、シャグジ宮に絡め取られぬ様、
影から影を飛び渡り、中々効かぬ夜目に気合を入れ直す。

通りすぎた全ての社からは御左口と思われる強い力が残っていた。

犬ではないが、残滓を嗅ぎ慣れてしまった黄鶉は大本を探してゆく。

ここまではいつも通りである。

居たら良いな、程度で可能性として殆ど無い事は知っている。

問題は上社と下社。

洩矢神の警戒網が最も厳しく悪辣。

明らかに何かある、と思わせる威圧感。

……だったのだが、今夜だけは常と異なった。

轟音。

上社本宮、その中心で尋常ならざる力が沸き出している。

地面が揺れ、竜巻の如く暴力的なまでの神威が放出されていた。

直下で洩矢神と思われる存在が必死に鎮めようと力を振るっているのも分かる。

祭りや行事が前後二日に予定されてはいなかったはずだと黄鶉は高速で記憶を辿った。

「……となると突発的な事故の可能性が高い、か。」

もしかすると洩矢神が御左口様の不興でも買ったのかしらね？

何にせよこの荒ぶり様は不味い、ここは一旦退いて……」

撤退を考えた黄鷄は、周囲を見渡した後、即座に考えを改める。

「いいえ、危機は好機也、か」

びっしりと足の踏み場が無いくらいに地に絡みつぎ、鉄壁の城砦と化していた中小ミシヤグジ群の多重包囲が皆揃って本宮を心配そうに眺めていたのである。

異常事態に、警戒網も有って無きもの。

竜巻が吸い寄せた雨雲が霞み雨を降らそうとしている。

今をおいて無い。

決断すれば後は早かった。

迷いも後悔も無く行動は成されていく。

黄鶇は己の速さに全てを託して飛び込み、
制止する障壁や霊群を振り切って……、

ついに、答えを目にした。

しかし……。

【小鳥風情が……『見てしまったな』】

杜人騒乱……古従者真鶉『仁者の嘘』

「先生も、随分と無茶をしたものです」

真鶉は、厄と祟りに塗れた手紙の中身を丁寧に模写し終わると火にくべた。
黒煙を上げ燻るも、やがてパチパチと弾ける火の粉が灰を天まで導いてゆく。

煙が目には染みたのか、
空を見送る真鶉の頬を一筋の雫が伝っていった。

「『もっと笑えるようになりなさい』……でしたか」

笑えば可愛いのだから勿体無いわ、と真鶉の記憶で黄鶉が微笑む。

「どうにも私には難しいようで……」。

ですが、笑えぬ事で成せる事もあるようですよ」「

真鷲にはいつまでも休憩できる暇など無い。

部屋に戻った真鷲は伊勢杜辺家所有の空き倉庫の長期使用許可、侵入制限を掛ける為の書類を仕上げ、既に提出されていたかのよう
に偽装。

あらかじめ隔離された場所が確保されていた事にした。

黄鷲に指示されていた通りに。

表向き（鳴女にとって）はそこに隠れているように見せ掛ける。
面会その他を遮断するのは自己治療に専念する為、と。

実際に黄鷲が逃げ込んでいるのかは真鷲にも現段階では分からない。

尾張の隠れ家に手紙が投げ込まれていた事から、
そこまでは彼女が存在していた足跡が残されている。

だが、祈っていても現実には過酷だというのも真鷲は知っていた。

果たして生きているのか、消えてしまったのか。

念のため信用の利く部下を伊勢と尾張に走らせてはいるが……。

死者も生者も、認識されるまで何処にも存在しないものだ。

報告書が何故、雉鳴女ではなく自分宛てだったのか。真鶉は何を求められているのかを把握していた。

『仁は人の心』

心してくれた方に、仁を尽くす。それこそ己が忠とするところ。

真鶉は自身の無愛想を、鉄面皮をこの時ほど喜んだ事は無い。喜びも哀しみも怒りも嘆きも、誰にも気付かれはしないのだから。

「しかし、笑えるようになれと言いながら、こんな指示を残すのは意地が悪いと云うもの。分かっていて書き残しているとは、先生も中々酷いですよ」

最後に、再び黄鶉の筆跡を完璧に真似て、手紙から報告書の偽造をする。

『私の事を気にしている場合ですか。貴方は貴方の戦いに全てを尽くすべきです』

報告書の最後に、手紙原本には無かった言葉を書き加えて封をする。雉が目的とする物へ到達するまで、余計な気苦労を背負わせはしない。

主君が存分に力を振るえる様に場を整えるのが役目。

鳴女において凡百な、秀才止まりの身に出来る可能な限りの奉公。

すぐにバレル嘘ではあるが、それもまた方便。

仏も上手い事を言ったものだ、真鶉は妙な感心を覚えた。

師は、黄鶉は、確信しているのだ。

全てを賭けて運んだこの情報こそが雉を答えに導くと。

だからこそ僅かな時しか生まなくとも欺く様に手配した。

僅かの平静が至らせると信じて。

「黄鶉鳴女より報告書を預かっております……」。

今朝方、文が届きまして本人は現在伊勢にて療養中との事。

『負傷は勝手に動いた罰だと思って大人しく養生しますわ』

……だそうです」

そんな真鶉の言葉と共に雉鳴女は彼女の戦果を手に入れる事になる。
そして、それは雉鳴女を大きく前進させるに足る内容だった。

『御左口様は、実体の無い『何らかの力』で象られた幻想の可能性が高い。

推測の域は出ないものの、洩矢神が古代に神霊統治を円滑化する為に創ったと思われる。

だが、御左口様と洩矢神は同一でも同質でも無いと断言する。

間近で目にして、外から信仰結晶の様な『異なる力』を引き出している様に感じた。

力の大小で計るならば御左口様は洩矢神を容易く上回っており、実に不自然な関係。

現地の人身御供など生命を伴う神事は大きすぎる力を制御する為ではなからうか。

そして、逃走中に新たに発見したものだが御左口様の神威はまるで大地から沸くかの様に、仮の呼称だが『穴』を通して現出するようだ。

特定区域で追撃の激しさに波があり、洩矢神の力と混合して分かり辛くはあったが

御左口様の力を運用するには条件が必要らしい（地形や空間に依るのか詳細不明）。

更に『穴』に関しては『根』の入り口に酷似した感覚を受けた事を記す。

『穴』自体が御左口様、洩矢神のどちらに由来するのかは不明。

周辺のシャグジ社、シャグジ宮はこれを兼ね備えているようである。

今回の潜入は上社本宮の『穴』に発生した何らかの事故に合わせてものだが、

洩矢神は厄と祟りに大きな損壊を負ったにも関わらず回復でなく追撃を優先した。

あれほど執拗な攻撃を加えてきたのを見ると御左口様にはまだ秘密があるのだ。

ミシャグジ型と呼ばれる神霊との繋がりを考えるに、きっと私達の想像を超えるものが。

杜人綿津見神様の計画はそれを利用するものではないかと現段階では推測される。

あとは貴方の仕事よ、頑張りなさいな雉鳴女』

杜人騒乱……至る雉『根と穴の先の解』

雉鳴女は真鶉が報告から帰るのを見送った後、

黄鶉へ無茶を注意する手紙と、もう一通感謝の手紙をしたためた。

雉もまた季節を問わず侵入を繰り返していたので人の事をとやかくは言えなかったが

怪我までしてくれたのだ、叱るべき時は叱らなければ、といつもより気合と友情を込めて。

心配無用と言われても付き合いの長い友人が床に伏せるとなれば気にせずにいられようか。

それぞれが紙三枚ほどの文量に膨らんでようやく書き終えた。

そして、伊勢へ任務がある日雀へ手紙を頼もうかと思いつながら、彼女が手に入れた値千金の情報を基に思考を組み立てていく。

不思議な近似系が杜人神と御左口様……洩矢神の間に見つかった。これは大きな鍵だ。

『根』と『穴』の関係からも何か解けそうな気がする。

杜人神は根との半同化という手段を選んでいるのだ。

もしも、だが『根』と『穴』の先にある物が同じであるのならば……

御左口様を象る力を杜人の地に降ろそうとしている？

同化を考えると御左口様に成り代わろうという線もある。

しかし、そうだとしたら益々目的が分からない。

強大過ぎる力を得る事になるだろうが、杜人神に拡張的野心は無い。元々が土地に縛られているし、内々に籠りがちな気質だというのは近くでずつと見てきた。

最近私達の為に外の土地へ興味を示していたが、力との関連が薄い。

やはり危険を冒して力を手に入れる必要性が生まれるほど、強大な

『何か』に抗するため？

これも微妙にしっくりはこないのだ。

それならば大和の神々に任せておけばそれで事足りるはず。

天照大御神との繋がりには作ってあるのだし、自陣を削らないようそちらから当たって良い。

なのにそんな形跡が無いとなると杜人神を中心に起こる……のだからうか。

う、目的よりも先に御左口様と洩矢神を解明しきつた方が早いかもしれない。

こちらは着実に正体に近づいているのだ、急がば回れ、堅実に攻めていくか。

雉鳴女の思考がグルグルと渦を巻きながら回転していく。
あれではない、これでもない、ブツブツ呟きながら。

確かに何か掴めそうな所まで来ている。

それから一日が経ち、二日が経ち、三日が経った。

鶉や真鶉にも時間が合う時は集まってもらい、
それぞれで知恵を出しあいながら唸っているが微妙に届かない。

あと一つ鍵になるものが見つかれば。

先日伊勢より届いた黄鶉からの返信に励まされながら、
作業机の前で思考に没頭する。

「黄鶉の言うように御左口様は幻……だがミシャグジ型の神霊は繋
がりを持って……」。

そういう意味でも根と穴が繋がっている可能性は高そうだけれど、
……うん？

そもそも、何をもってしてミシャグジ型は繋がっている？

やっぱり御左口の名前……そこから集合知、になっってしまうのでしょうか。

……いや、生まれ自体は自然物、畏れを集めた物、なのに御左口に集まるのは理由が要る。

となると共通している条件が樹木から鼠、果ては石ころにまで存在してなくてはならない。

うーん、ああ、駄目ね、

もう一回紙に書き出して整理しないと混乱してきているわ」

白紙と関連しそうな原始神霊の資料を倉庫から取ってきた雉鳴女は、この日も時間の限りなく、虚空と睨めっこを続けた。

早起きな鳥達の囀りに、雉鳴女は手元から障子の先を見やる。

白み始めた空が日付の変更を告げていた。

本日はこれまでか、と机に広げた書物を片付けていると

一冊の本からハラリと一枚の紙が滑り出てきた。

それは絵図。

杜人神が描いた森戸家門外不出の情報兵器『日本図』の写し。

こんな危ない物を適当な資料に挟んだ部下が居た事に肝を冷やした。

組織の長は大変である。

閲覧履歴から誰かを調べ、それなりに処罰しなくてはいけない。
こんな真似をして森戸家を潰す気なのかと説教せねば。

心情的にも時間的にもやりたくは無いがしょうがないのだ。

重く溜め息を吐いて拾い上げる。

……瞬間、畳もつとする手は凍りついたように動かず、目が離せなくなつた。

雉鳴女の中にあつた情報の欠片達が組み合わさっていく。

今、この時だけは迂闊な部下を褒めてあげたい。

未だ杜人神の最終目的には辿り着けずにいたが、

『御左口』の正体について、幻だったとかそういう次元ではない、もっと核心的な部分の真相がパツと目の前に現われたのが分かった。

「まさか御左口、ミシヤグジとは……。」

蛇を象徴とするのも、そういう事なのですか。

だとすれば根と穴の先に居る者、在るのは……。」

そして、朝。

この日、慶長5年、西暦で言えば1600年の事。

世間は東西に分かれ天下を巡る戦いが全国を揺らしていたがいよいよ持って日本戦国史上最大の大戦が関ヶ原で巻き起ころうと
していた。

決戦の秋、来る。

あかつき……早すぎる『その時』

太陽が昇る前の濃い藍色。

眠りにつき始めた星々。

早起きな虫や獣達、

ざわめく枝葉が森を音で彩っていく。

なんとも、風が心地良い朝。

……と、格好付けて見たが自分の姿を見直して溜め息を吐く。

何がどうなればこうなるのか、逆さになった上で草木に埋もれていた。

ボンヤリした頭で昨夜の自分を思い出す。

木に登って月見して……、いつのまにか眠り込み落下の流れ、か。

そして、私から無意識に零れた力が植物を育て、周りを囲って珍妙な状態に。

野晒しだった私を心配してか、登った木の木霊も合わさって葉と枝に絡まっている。

いや、何も一緒に絡まなくてもいいのではないだろうかね。

おはようの挨拶に続けてそう聞いてみると木霊はケラケラっと笑い、気持ち良かった、また来てね、などと言いながら自分の宿り樹へ帰っていった。

『根』の拡張や同調率を上げていくにつれて、私の中の王樹様の力は徐々に強くなってきた。

同じく地に根を張るタイプの神霊、私と親和性の高い妖怪化生には実行前だが『封神計画』の影響が出始めているのか。

影響といえば最近睡眠が必要になってきた。

繰り返す同調の負担を回復させようとしているのかもしれない。慣れてきたとは思っているが、その辺りはまだまだなのだろう。技術が向上していけば解消できるだろうから暫くはこのままだ。

眠りに落ちる瞬間は、人間だった頃を思い出して懐かしい。

……眠る事の不都合が出るまでは気にしないで良いか。

背伸びをして、欠伸をして、深呼吸で姿勢を正す。

今日は日本史の大きな区切りになる。

戦国時代に終止符が打たれる大決戦、関ヶ原の戦い。東軍西軍に分かれ勝った方が天下を握る決着の大戦。

鳴女たちからは、やや西軍が有利と聞いているが、史実通りに推移するのならば強烈な調略攻勢もまた行なわれている

だろう。

もっとも、私の知る歴史と生きている武将達や兵の数も違うのだから、

まったく同じ流れになるとも限らないのだが。

個人的には東軍に、というか家康が天下を取った方が良い気がする。豊臣にも義将多かれど、もはや時勢は握れまい。

国家百年の大計どころかその倍の期間の安寧を守るといっ

世界的に見ても稀有な、磐石の国家体制の基盤を作る能力が家康にはある。

宗教勢力に対してのシビアさは豊臣も徳川も変わらないけれど、民の事を考えたら斜陽の西軍よりも暁光の東軍、と相成る訳だ。

大和神霊からの依頼もあり、鳴女たちも結構な数で戦場を監視させている。

果たしてどう推移していくのかと私も気になってはいるのだが、こちらはこちらでやるべき事がある。

だいたい一週間ほど前からだろうか。

どうにも『根』の調子がおかしいのだ。

不自然なくらいに同化が容易かったり逆に弾かれたりと、今までの安定性が嘘の様に私を翻弄している。

なので、ここらで一回、深い所まで調整を掛けようかと画策中だ。
東軍が勝ったとしたら、幕府を開いて豊臣方の肅清が終わった頃に
計画実行予定。
西軍の場合も相手方を捌き終えたあたりで実行しようと考えている。
だから期間的にも最終調整ぐらいの心持ちだったりするのだ。

そろそろ雉鳴女にも説明、もとい説得を掛けなくてはいけないし…
…。
きつと、それだけで数年単位になるんだらうなあ。

……憂鬱だ。

どうにも彼女に舌戦で勝てる気がしない。
でも説明しないまま実行する訳にもいかないからなあ。

美人が怒るとそれはもう怖いのだ。

表面上は何も無いのに奥でグツグツ煮えたぎっているというか、
逃げ出したくなる雰囲気が発散されてくるともう駄目である。

ああ、おそろしや。

そんな他愛も無い事を考えながら、王樹様の跡へ到着。
日が昇る前の柔らかな静寂に自然と背筋が伸びた。

頭を深く下げ、昨日までの感謝と、今日がある感謝を捧げる。

これは一つの儀式だ。

自分は誰かに生かされているのだと。

神と呼ばれても本質はちつぽけなものだと。

託されたもの、抱えてきたものをありがたむ。

両手を合わせ生まれる輪。

この中に和を創る事が繋いでゆくべき事。

次代に託していかなくはならない心。

己を再確認する儀式。

さて、落ち着いたところで早速今日の作業に取り掛かる。

並の神霊が迷い込むとそれだけで危険な『根』の入り口は頑張つて偽装してある。

すぐ隣の『信仰結晶』が大仰に封印してあるので、まあ気付くまい。

封印といっても過度の祝福による個人認証みたいなものだから

同質の力を持つている山犬にだけはスルーされてしまうんだけども、伊達に長い間この山に居座っているわけではないから、山の加護も

合わさり鉄壁。

普通はこっちに気を取られて根の発見には至らない、と。

ちなみに根の入り口も結晶ほどではないにせよ、さりげなく強固な守りをしている。

山犬がスルー可能なのも同じだが。

……作業開始。

ずぶずぶと、身体が地中に沈んでゆく。

意識を大地自体に拡散させながら根へ到着。

文字通りの『根元』を抑える自我と、散り散りに『根先』を目指す自我。

自分を分割して細分化するのは何十年とやっても辛い事に変わりはない。

五十年くらい前によく激痛や吐き気を感じる部分を切り離せるようになったが、

統合する時に分離数に比例して倍化する苦痛を味わうからさほど意味が無かったりする。

作業中に影響を受けないというのはリスクを避けられて良いのだけでも。

そして、根はミシヤグジへ届く。

イメージ的にはケヤキに取り付いたヤドリギのような物だろうか。

この根で向こう側の膨大なエネルギーの流れ、地脈とも言えるものから

ほんの僅かばかりながら拝借する事ができるのだ。

……この作業をする度に昔の弱い自分を思い出す。

根が繋がってしまっほほどに発達したのはおそらく八咫鳥戦だ。

如何に王樹様とて敵う筈がなく、対抗する為の力を求めて地を探り見つけ出したのだろう。

あの頃の自分に今の半分程度で良いから力があればなあ、なんてどうにもならない事を毎度毎度考えてしまっ。

いい加減に納得しているはずなのに、感情だけはままならない。

まあ、こうして遺された物が未来の為になっているというのは、計画の実行が近いのもあって酷く感慨深い。

なるべくしてなった事をあれやこれや言っても仕方がないか。

根先の接続部を中心に異常が無いかを点検していきながら、空いた意識に計画について考えさせる。

計画では、私は根と同化し、私を要として根から力を蓄え管理する。皆が立派になったおかげで、もう私でなければ対処できない事件も無い。安心して休眠状態に移行できるほど、森戸は育ち、鳴女は強くなった。

信仰消失後の私自身の維持と修繕はミシヤグジの力を流用し、そこから流れ込む力は半眷属と化した鳴女たちを養って尚余るくらいだろう。もはや山だけに納まる存在ではなくなり、国内程度なら自由になるはずだ。

あとは津蟹の様に起動スイッチとなる物を
本家と各分家、あと天皇家にスペア込みで二個くらいずつ渡しておけば良い。

千年もあつたら九割くらい紛失するだろうけれども、祝福しまくって曰く付きな代物にしておけばある程度の廃棄は免れるだろうし、最終的に一個くらいは杜人の血統か、はたまた好事家か考古学者の手に渡るわけだ。

これに関しては数をばら撒いても良いから増産も視野に入れるかね。唯一の難点はアレだ、大きくて透明度の高い琥珀を造るのって非常に大変なんだよなあ。

とりあえず休眠中を待つのはこんな感じを予定している。

人間が幻想を再び必要とする時がくれば、地球が滅びない限り自然と目覚められよう。

……あれ、今気付いたが自動送還とかの術を付けとかないと地球上ならまだしも宇宙に出られたら流石に感知するのは無理な気がしてきた……。力が届かなくなったら、くらいの条件を付けて負方向へ反転させる、で良いノ力？

ん、新しい問題だなこれは。

……ん？

あれ？

むう……？

さっきから何か、チョット、吸い込まれている、ような気がする。いや、感覚的には力を吸ってるハズなのに総量がオカシイ？

この間からの不調ノ原因はコレなのか。巡っている力の流れが妙である。

不味い感じがスルので、作業を中断すべく統合開始。

今までコレホド能動的にミシヤグジ側ガ動いたケースは無いんだが、生体に似た相手である以上、抗体反应的なアプローチがあるのは当然ダケド。

コチラからの接触到興味を持たれた？

取り込むのトハ異なる……私ヲ飽和させようとしている？

……アレ、意識統合が進まない。

何だか理解し難いものに阻害されている。

そうこうシテいる間も私の中に力が流れ込み続けているので、安全弁用の回路に力を発散……ってソツチも溜まり始めてるじゃないか！

分散させた意識が中々戻らない。

不味い、致命的にマズイのではなからうか。

根の側に尋常じゃない量が、逆流シテ、きている。

いやいやいや、というか考察してイル、場合ジャナイ。

クソ、信仰結晶でもあれば力業で離脱できそうなのに、手元にナイ。

植物操作で……って意識分散で操作ガ遅スギル。

周りの木じゃ認証突破デキナイ、やっぱりここからしか動けない。

分散させた意識が戻らない。

不味い、致命的に。

イヤ、まてまてマテ何カ、思考が……雑にナツテ……。
何やってる考えて無いト意識ヲ誘導できなくなるダロ考えるンだ。

早く戻ツテ、返ツテコイ。

実行。

計画。

実行。

……ダ、駄目ダ。

返ってコレナイ意識が多スギル。

実行、計画実行、
実行実行実行？

計画実行。

山犬……。

杜人騒乱……一日目『崇神杜人』

誰よりも早く『異変』に気が付いたのは山犬だった。

何があった？

分かち合った力が共鳴しているのか、胸の深い部分が疼く。己の中に根付く千年樹の力が活性化しているのを感じる。

無造作に一步踏み出した足元からは蔦や草が生い茂っていった。

かつてない神力の高まりが、身から溢れ出て収まらない。

鋭い牙と爪、四肢に熱く迸る乱力の危うさよ。

昂揚していく氣勢と野生の衝動を抑える様、身震いを一つ。

早すぎる……。。

事を起こすには時期が早すぎる。

予期せぬ時の訪れに、山犬は薄闇の森から彼方その場所を睨む。

山犬は『根』を感知できてしまうが故に、

これが計画の一端なのか、それとも突発的な事故なのかを計りかねていた。

根が張り巡らされている山全体から、微少ながら杜人の神力が湧き出ているのだ。

まだ山犬にしか知覚できないそれはおそらく計画の中身。

杜人の名に連なる神霊へ恩恵を与えるだろう成果に思えた。

根の先にある高次の力を一般に至るまで受け取りやすく加工、調整している証拠だからだ。

最も深く繋がっている山犬にはそれが分かった。

自分だけが特別に強い影響を受けているのも。

……それでも、あの阿呆が説明すらしなかったのは解せぬ。

確かめなければならなかった。

結末は自由だ。

しかし、望む物であって欲しいと願う。

強く踏み込まれた足跡に美しい草花の軌跡を描きながら、山犬は走っていった。

王樹ヶ跡、祈り深き場所へ。

谷を越え、川を越え、近づくに連れて
黄色く色づく山に不釣合いな、遙か天を衝く常緑の威容が存在感を
現す。

山犬の眼に写るのは古の憧憬。

かつてこの地にあり、そして滅びた神の御姿。
一千と三百年の永きを越えて、再び顕現したのだ。

「その姿……お主の、

……いいや、我らの憧れ、か」

疾駆する山犬の口から思わず感嘆が漏れた。

遙かな天空を覆わんと伸ばされた枝葉。

大男が十人居たとしても手を繋げぬ太い幹。

見上げ仰ぐ姿はまさしく王樹の再臨である。

だが、同時に許せなくもあつた。

視線を切り周囲を見渡すと見たくも無い光景が広がっているのだ。

事が始まって半刻。

杜人神が大地から発する神気に当てられた神霊妖怪諸々の化生達が地に伏し、

誰もが呻き声を上げながら助けを求めている。

中には若い鳴女もいた。

時間が経つに連れて際限なく蓄積されてゆく力。

霊格の劣る者ほど、過度の祝福に己の身を苛んでいる。

近づくほどに供給される、いや放出されている力は勢いを増していた。

よりもよって、その姿で弱きを傷つけるなど。

あの阿呆は何をやっておるのだ！

朝日を浴び翠玉に輝く巨樹へ向け最後の跳躍。

目的地へ飛び込んだ山犬は更なる哀しみを目にする。

大樹杜人神の周辺は一層神気が濃い。

影響を受け強制的に生長させられた樹木から木霊が湧き出しているが、

分裂や破裂を繰り返してはその破片から新たな樹木を誕生させ死んでゆくのだ。

そうして埋め尽くされた木の残骸を他の木が養分と蓄え貪ってゆく。

分不相応な力を手にした多幸福感に包まれながらの殺し合い。

何かの折れる乾いた響き。

絡ませた枝で他者を絞め殺す音。

けらけら、けらけらと楽しそうに歌っている。

木霊たちの正気を失った笑い声と狂気に染まった断末魔が錯綜していた。

そこは植物の姿をした凶獣が互いを喰らい合う地獄であった。

「……聞こえるか、見えているか、我が怒りが分かるか杜人よ！」

この惨状を生み出したのは紛れも無く杜人神が化身した大樹。

『根』の持ち主であり、支配者でもあるが……、

……本来は他者を助ける事だけを生き甲斐とする神なのだ。
これを果たした後に何の意味が残るといえるだろうか。

山犬は吠えた。

けれども、応えは無い。

説明を求めた山犬に返ってきたのは更なる力の放出。

意識を失い、反射だけの行動。

何にせよ惨劇は更に加速してゆく。

「耳でも遠くなったかこの阿呆が。」

ならば良からう！

お主に牙を突き立てても

聞こえる場所まで引き摺り出してやるぞ！」

そうとも、外れてしまったなら討ってやる。

あやつは力に酔ってしまふほど愚かではない。

この状況をあのお人好しが望む筈が無いのだから。

片割れとして力尽くでも止めてやらねばなるまい。

焦りや怒りで山犬自身も随分と頭に血が上っていたのだろう。

滾る神力に任せて飛び掛つたのだが……その力は杜人神から零れ出た一部に過ぎない。

まさに喰い付こうとする刹那、噴き出る不可視の壁が山犬の動きを縛り、蔦や蔓が殺到する。

不用意が過ぎた。

首や手足へ締め付ける植物の鎖を無理矢理に蒸発させているが、すぐさま他の蔦が生長しては絡んでくるため拮抗。これ以上進む事が敵わない。

ほんの数歩先にある幹が遠く感じる。

膠着状態に悪手であったと悟ったが後悔は先に立たず。

仕方なしに目を覚ませと吠え続ける山犬に、大樹から初めての返事が返ってきた。

(……山犬……ミシャグジ……くる……くる……滅ボセ……ワタシ私わた

しを……ヤマイヌ)

言葉の意味を理解する前に大地が脈動する。

この上なく事態は悪かったが追い討ちが掛かった。
仄かに大樹を覆う生命溢れた緑光が、邪悪に漂わす濃紫へと徐々に
変貌していったのだ。

この現象を、山犬は知っていた。
大禍刻に呑み込まれていった哀れな霊達の記憶を。

「馬鹿者めツ、祟り神へ堕ちる気か！」

一度堕ちきれば失った自我が戻る事は稀である。

(やまいぬ……山犬…ヤマイヌ……)

「ああ、私だ、私はここに居るっ。
早く起きろ杜人、さっさと之を鎮めよ。
ええい、聞こえんのか、起きろというておるのだ！」

しかし、杜人神すらおおよそ正気を保つてはいないようで
ただただ山犬の名を呼び続けるだけである。

墮とさせてなるものか。

山犬は一際強く神力を閃かせると、距離を取った。
そして、前足で数度地面を搔き足場を整えると低く構える。

防御も何も考えず、杜人神の守りを貫き通す矢に。

収束した風が紫電を散らす力場となり、鏃は鋭い円錐となってゆく。

腕だろうが脚だろうが持つてゆくが良い。
たとえ首一つになろうとも通ってみせる。

……疾走。

杜人神系が誇る最強の矛が、稲妻と化して大樹に突き刺さる。

激しい衝撃と轟音が山を揺るがす。

相対速度で鋭利すぎる刃物同然の枝や葉に切り裂かれ、
美しかった毛並みがまるで襪褌布の無惨さを晒していたが、
山犬の爪は大樹に見事届いていた。

離さぬよう、しっかりと組み付いて杜人神を侵す『根』の力を押さえ込む。

祟り化の進行は目に見えて緩やかに。

力の放出も、殆どを山犬が受け、その力で封じる事により治まった。

だが、山犬に安堵する暇などない。

大樹に杜人神が存在するようではない、奇妙な状態だったからだ。

どのようにして覚醒させるかの見当がつかない。

その上、いつまでもこのままでは不味かった。

増大する力は山犬の力をも膨らませているものの、

靈魂自体が耐え切れなくなってしまっ量も当然ながらある。

山犬も感覚的にこのままの調子だと何日も持てるとは思えなかった。

木霊たちの様に弾け飛んでしまえば

枷が無くなり祟り化した杜人神が第二の大禍刻を引き起こしてしま
う。

それだけは許すわけにいかなかった。

個では勝てない。

山犬は大きな、とても大きな遠吠えを響かせた。
空を渡り森を吹き抜け川を流れて、どこまでも響く遠吠え。

多くの『縁』ある者の助けが必要だ。

鳴女よ、いつまでへたり込んでいる。
今こそ翼あるお前達の力が必要なのだ。

頼む、この男を災いの樹と呼ばせぬ為に。

救いの『縁』を運んでくれ。

山犬は、ゆっくりと蔦と蔓に覆われていった。

杜人騒乱……二日目『弱者達の恩と縁』

雉鳴女は、自身の無力をこれほど恨んだ事はない。

暴走する杜人神と荒ぶる山犬の激突を眺めるしかできなかった。

近づくことすら許されず、右往左往するばかり。

巨大な神威の前に非力な一羽でしかなかった。

ああ、世界が壊れてゆく。

そんな嘆きと共に、何をすれば良いのか頭は真っ白のまま、
平穩の終わりと絶望の始まりを、ただただ眺めていただけだ。
山犬が放った遠吠えも空虚に胸をすり抜けていった。

何がどうして、こうなってしまったのか。

まったくの偶然であるにもかかわらず雉鳴女は責任を自分に求めた。

自分のこれまでの動きを悟られたからではないだろうか。
自分が強行させてしまったのではなからうか、と。

なれば、なればこそ立ち上がらなければならぬ。

終結した戦闘と進行する祟り。
嘆く時間は一刻とて無かった。

山犬が全てを抑え込んでくれたおかげで自由に動けるようになったが、
やらねばならない事が多すぎる。

混乱と不安を誤魔化す様に、雉鳴女は忙しなく行動した。

関ヶ原へ出ている鳴女衆の召集。

次に地元妖怪達へ注意と、願わくばの救援要請。

そして山へ近い人間達の避難誘導。

この三つを一通りこなした段階で日が暮れていた。

避難に関して、彼にこれ以上子供達を傷つけさせたくないとの個人的な思いで

森戸家にも逃げるよう告げたのだが、杜人の血は彼の責任感を継承し続けているのか

女だけを避難させ周辺の寺社へ注意を呼びかけに走り回ってくれている。

しかし、状況が良くなったわけではない。
精々が被害を気にしないでよくなった程度。

問題の根本部分は何ら変わらずに脅威のままだ。

嬉々として力比べを挑んだ好戦的な妖怪達もいた。

けれども狒々や釣瓶落し、山童に天狗も守りを抜けず、

山犬に封じられて尚、直接触れるには神力の壁が厚すぎた。

彼我の力量差が大き過ぎてどうしようもない。

鳴女衆は既にほぼ全員が杜人の地に集結できていたが、
だからといって好転させられる妙手があるかといえば……。

今出来る事に全力を尽くしてはいる。

……いるのだが、全員の心は暗く沈んでいた。

辺りが完全に夜闇と包まれても、大樹杜人神は妖しく紫と緑の燐光
を放っている。

その幹の根元、蔦や蔓に覆われた繭の様な物体はそれに反発するよ
うに白く輝いていた。

あの中で山犬は今も必死で戦っているというのに。

現場に急造した陣幕へ、鳴女たちは森戸家に納められていた資料を

片っ端から広げた。
数十人がかりでミシャグジの答えを元に祟り化の解決策を探し出す
為に。

自分の力でだって何か出来る事が、為せる事があるはず。
杜辺や各地の編纂所にも鳴女を飛ばして情報を、情報を集めなけれ
ば。

雉鳴女達は自身の持つ情報の力に絶った。
今までを支えてきた、と思い込ませてしまった力を。

……そして、夜が明けてしまう。

進展は無い。

無いどころか悪化している。

雉鳴女は視線を朝の薄闇にボンヤリ浮かぶ大樹へ移した。
山犬を捕らえている繭、そこから漏れる光が弱まっているのだ。

見間違いなどではない。

着実に山犬の限界が近づいてきている。

焦れども焦れども成果は上がらず、絶望だけが膨らんでゆく。
もう全てを投げ出したくなる様な諦めばかりが頭をよぎってしまふ。

悪い夢でも見ているみたい。

雉鳴女は呟いて、涙を一つ溢した。
それでも現実から逃げられはしないのだ。

助ける、あの人を助ける。

ずっとずっと私を助けてくれたあの人を。

助けるの、助けなければいけないのに！

力が足りない。

爆発する感情を机に叩きつけたその時、

朝焼けの煌きから純白の鴉が飛び出してきた。

「雉鳴女ツ、来た、来てくれた！」

まだ諦めるには早過ぎる、だってこんなにつ、

こんなにも私達には、私達には味方が居たのよ！」

興奮して矢継ぎ早にまくしたてる鴉鳴女が背中に連れてきたのは…。

「いつまで……と泣かずに済むように」

「あつしら、弱えですけど、何ぞ出来んかいなと思つて来ちまっ
たい」

「ここよか良か土地や無かもんのう、いっちょ晴れ釜なんて呼ばれ
ち見ると！」

怪鳥以津真天を先頭に旧鼠と鳴釜が声を上げた。

更に後ろにも数え切れないほど、地霊や妖怪、付喪神が列を並べて
いる。

神秘の中でも存在の弱い者の中には杜人神によって救われたり保護

された者もいた。

祭りに呼ばれ、人と付き合い、良き関係を築いてくれた彼らがそれまでの恩返しとばかりに大拳して来てくれたのだ。

「陸の者だけじゃありませんぞ」

皺枯れた声と共に何処からともなく水が空を走り、大樹の周りにぐるぐる渦を巻くと宙に浮かぶ川となる。

「いやはや、ワタツミ殿が大変と聞いての、色々引っ張ってきたぞ」

「そんな事より、ペッ、ペッ、川の水は薄くってしょうがないわねえ」

「キユキユツ、文句ばっかじゃ手伝いも出来へんよお」

船幽霊（しゆうせい）の小法師（せうぼうし）が連れて来たのか栄螺鬼（えいろうおに）、共潜（ともかづみ）など、近海に棲む妖怪や霊が空中の川から顔を出して協力の意を示してくれていた。

「近くの川から海坊主のくしゃみで飛んできたからのう。」

ほっほ、人はおらんかったが、少々の被害は勘弁してくださいませや」

その弁に、寝てただけの俺まで巻き込みやがって、と水の中で河童が悪態をついている

……方法にかなり問題があったようだが、海川問わず妖怪化生が勢ぞろいした。

ずらり並んだ様は、まさに圧巻。

迫力に圧倒され、雉鳴女は言葉を失った。
心の奥から山犬の遠吠えが蘇る。

『縁』を運べ。

山犬は最後にそう言ったのだった。

特別な力が無い自分をこれまで支えてくれたのは情報の力なのだと
思っていた。

それは正しいと同時に間違이었다。

仲間との『心』の繋がり、『縁』の力こそが鳴女を支えてきたのに。

ああ、忘れてしまっていた。

自分がちっぽけで、一人では何もできない事を。

頭が冷え、心に平静さが帰ってくる。

独りよがりの愚を犯した。

……が、これを悔やむのは後だ。

雉鳴女は彼らの前に頭を下げる。

そして、自分以外の力への誠意を尽くす。

「お願いします、力を貸していただきたい」

妖怪達は、その言葉を待っていた、と喝采。

現在の状況について詳しく説明を求めてきた。

こうまであっさりと協力を約束してくれるとは……。

状況説明が終わった後、思わず零れた一言に一匹の地霊が答えてくれた。

「好きなんだよ、杜人神の事がね、僕だけじゃなくて皆」

地霊は照れ臭いとばかりに視線を逸らし、大樹の前へ陣取りに行った。

「はてさて、話を聞くに何をしても、
杜人神が張る神力の壁が邪魔のようじゃの」

「俺等は所詮、木っ端妖怪と木っ端神霊の集まりだ。
けどなあ、木っ端は木っ端なりに意地があるってえもんよ」

「一で足りねば十、十で足りねば百。
百を飛び越えて千も揃えば、神にも届こう」

「やんや、やんやと騒がしく賑やかに、
妖怪や付喪神という一癖や二癖どころではない者共が準備を整えて
いく。」

雉鳴女は彼らに感謝しつつ、旅の支度に入った。

その様子に気が付いた小法師が声を掛ける。

「さあさ、行きなされ雉鳴女。」

儂等であの障壁を破る術を見つけよう。

それまでに貴女は次の策を用意せねばならん。

何をあてにして、

何処へ行くのか知らんがな。

ほっほ、上手く行く事を祈っておるよ」

雉鳴女は自身の知る限り、

最大の『縁』を手繰り寄せるつもりでいた。

大き過ぎる借りを将来杜人神に背負わせてしまう事になるうが、
杜人神を失う事だけは、それだけは雉鳴女にとって許容できないの
だ。

目的は最高神格の神。

「朝焼けを辿り、東から太陽を連れて参ります」

そう告げて、雉鳴女は光へ向けて飛び立ってゆく。

杜人騒乱……二日目『天照坐皇大御神』

杜人の地より東、伊勢。

背後から沸き始めた黒雲に押され

日出ずる場所へ雉鳴女が降り立ったのは昼前。

限界に挑むような飛行に乱れた息を整え到着すると

内宮、皇大神宮前の鳥居には神官達がズラリと道を作っていた。

「貴女が来るのを、お待ちしていました」

涼やかな声音。

彼女はこちらが頼ってくる事を分かっていた。

正式な名称こそ知らぬが鳴女に代わる組織を創設したのを雉鳴女は知っている。

だからこそ万端の用意をして待っていたのだろう。

中央を神装礼具を纏った天照大御神が進み出る。

雉鳴女はその姿に思わず息を飲んだ。

華がありながら鼻に付かず、豪奢であるも不自然でない。

そう思わせるのは本人の美しさに、煌びやかな衣ですら引き立て役となっっているからだ

凛々しくも可憐、艶やかながら無垢。

その浮き立ちそうな雰囲気黒髪が流麗に落ち着けている。

幻想にある女性像とでも形容すれば良いだろうか。

同じ女性でありながら雉鳴女は目を奪われた。

いや、女性だからこそか。

神子としての戦装束。

脇で付き人となっている豊受媛神も礼装に身を包み、
負けず劣らずの美貌を振り撒いていたが、太陽の眩しさには勝てないようだった。

「まずは貴女が何を求めて来たのか。

……述べなさい、全てはそこからです」

敢然と見据えられた瞳の力強さ。

思わず怯みそうになるのを堪えて、雉鳴女は口を開く。

「杜人綿津見神が祟り神へ堕ちようとしております。
これを天照大御神の御神徳によって御救い頂きたい」

そして、ただ杜人の地に天照が行けば良いというのではない。

更に必要な物があつた。

それは、おいそれと持ち出せぬ解放の神器。

「伊勢に納められし神宝、真経津鏡を以つてすれば
まがつのかがみ
彼の神に棲みし闇を映し出し、真実へ辿り着けるはず。
是非とも、是非とも御同行願い給わりますよう伏し奉ります！」

地べたに頭を摺り、雉鳴女は請い願った。

杜人神を祓うだけならば神器など必要ない。
灼熱の太陽で焼き清めるだけで良い。

それでは、それだけでは駄目なのだ。

真経津鏡は真を映し出す鏡。
かつて世を厭んだ天照大御神を岩戸の外へ導いたと言われる神鏡。
大神と崇神の境界を彷徨う杜人神を救う手立てを見つけられる、希望。

どれほど無理を言っているのかは分かっている。
伊勢の守りの一角は真経津鏡を基点としているのだと聞いていたからだ。

神域を神域たらしめる神器を借り受けられるのか。

しかし、天照の返答は可否以外のものだった。

「時間が限られた中、無為に問答するつもりはありません。
……が、筋を通さなければ頷くつもりもありません。」

かつて貴女は、義か利が無くば人は動かぬ、と私に説きました。

動かしてみなさい。

それが貴女の教えに対する礼儀であり、筋です。
貴女は何も持たずして、この場に現われてはいけない」

拒絶する様な力の渦が、地に張り付いた雉鳴女の身体を強制的に浮き上げる。

天照の眼差しが雉鳴女に鋭く突き刺さった。

雉鳴女は少し昔を思い出す。
杜人の地で彼女の講師を務めた事を。

「さあ、示しなさい！」

これは、あの時の義理だ。
教えを以って返してくれている。

無理矢理に立たせ、対等な交渉としてくれた天照の優しさに感謝しながら、

雉鳴女は対価に差し出すものを全て言い連ねた。

「私は貴女に永劫服従する蝙蝠となりましょう。
どんな命令にも応え、生殺与奪も貴女が握っていい。

高等算術、測量術、外科医術。
薬草学、自然科学、異語教育。

杜人神が芽吹かせた『知』の結晶。
私が持ち得る知識と技術の全ては貴女の物になる」

これが自分の出せる全て。

森戸や杜辺を発展させ続けたこれらの知恵や理。

何もかもが終結した後に裏切り者だと処罰、いや消されても良い。娘達から憎悪や嫌悪を浴びせられても、当然と受け入れられる。

今この時を動かせれば未来の自分がどんな末路を辿ろうと後悔などしない。

「その程度ですか？」

それでも天照は更に踏み込んでくる。

「……………」

自分にはもう、出せるものがない。これを通さなければいけないのだ。

視線で切り結ぶ無言の戦い。

しかし、突然張り詰めた緊張が解けた。

「……ふ、ふふふつ、良いでしょう、雉鳴女」

袖で綻んだ口元を隠して、天照が上品に笑う。
柔らかな陽光に似た温かさが場を満たしてゆく。

「杜人綿津見神には借りがありますからね。
助けないと言うのはあまりにも不義理と云うもの」

義に従って動くまでですよ、と。

それを聞き、解けた緊張に力の抜けた雉鳴女はぺたりと尻餅を付く。
冷や汗だけで全身がびっしょりと濡れていた。

「あと、報酬の貴女は必要ありません。
貴女にはあの神の傍こそ相応しい。」

まったく、自己軽視は貴女の持つ数少ない悪癖ですね

女が易々と何でもするなどと言っではいけません。

これもまた雉鳴女、貴女の教えですよ」

口を尖らせて諭す様に叱る天照。

まるで教師と教え子、遠いあの日の関係が反転した形になっていた。

物が無いなら無いで見つけてくるのが貴女でしょう、とか何とか。

先生の風を吹かせて雉鳴女に軽い説教。

自身の成長を雉鳴女に見てもらいたかったのかもしれない。

「ふむ、そうですね、こちらの組織はまだ若く足りない物も多いので、

鳴女からの技術指導やある程度の知識供与だけで許してあげましょう」

そして最後に、覚悟を試すような真似をしてすみません、と気遣いながら

天照は優しく雉鳴女の手を取った。

その様を後ろから眺めていた豊受媛神がにやにやしながら会話に入ってくる。

「許すもなにも、始めっから行く気満々なのに何言ってたんだか。昨日からこの子ったら神社の中でそわそわしてるし、鳴女はまだかー、鳴女はまだかーってね、宥めるの大変だったんだから」

「と、豊受媛っ、嘘を申さないでくださいッ！
私はそんな幼な子みたいに振舞ったりはしてません」

「こんなに準備をしておいて、今更ってもんよ。
アタシなんかこの子の礼装で影武者やらされて留守番さね。
大きさが合わなくて崩れないように着付けんの大変だったんだから」

「……って、何処を見ているのですか！」

「ん〜、分けてやれないかと思ったださ。
雉鳴女はこの格差をどう考える？」

「いや、私に振られても困ります」

流石、大和一の豊穰神である。

そんな喜劇の様なり取りは
神官が真経津鏡を持ってくるまで続いた。

「さてさて、雉鳴女に天照も肩の力は抜けたかい？

大事に向かう前に、しかめっ面じゃあいけないからね」

笑う門には福来たる、苦難こそ笑え、と豊受媛神は激励した。

先ほどまでのふざけた空気はなく、戦場へ発つ者への敬意があった。

天照が右腕を掲げると何処からともなく金色の鳥が現われる。

一鳴きすると鳥は巨大な体躯となり、翼を広げると山犬よりも大きい。
い。

この背に乗って雉鳴女と天照は杜人の地へ向かうのだ。

西の空は山から湧き出した黒雲に荒れていた。

「鳥よ、太陽の渡るが如く、あの黒雲を晴らすべく、西へ」

号令を受け地を蹴った鳥は見る見る内に高度を上げてゆく。
見送る豊受媛神の姿も小さく、遠く。

さあ、助けるのだ。

太陽を連れて、雉鳴女は帰還する。

「雉鳴女、選択に怯えるなよ。

これが『正しい』と自信を持って進めば、

案外、世界つてのは味方してくれるもんなんだ。

最後の最後に頼りになるのは、やっぱり意思さ。

良い女の千年募った慕情がありゃあ、何でも上手くいくに決まっ
てる」

頑張れ、豊受媛神は見えなくなった二人の背中に呟いた。

杜人騒乱……二日目『たたかうものたち』

八咫鳥の背から見下ろす杜人の山は、
むせ返る程の妖気を孕むどす黒い靄に包まれていた。

まだ日は沈んでいないはずであったが靄によって薄暗く、宵の始め
のようだ。

天照は金色の翼に纏わりつく『黒』を自らの掌に導くと握り締め、
焼き清めた。

これは、ただの雨雲とは明らかに違う。

勝利の先触れ、という二つ名に相応しく八咫鳥は暗黒を切り裂いて
飛行しているものの、時たま濃度や粘度の高い、力ある妖魔の残滓
と思われる妖気塊が羽に付着してくる。

そのもの自体は既に使用された『力』の残り香であって
天照はおろか八咫鳥を害する事など出来ようもなかったが……。

「雉鳴女、状況は悪いと思っていましたが……。
これ程までに妖の気配が濃いのは、少々不味いのではないでしょ
うか？」

山一つどころで収まりそうもない大規模過ぎる事件の影響に声を硬
くする。

何があったのか。

眼下の暗黒から視線を逸らす事なく落ち着いているが、
雉鳴女もまた、状況の悪化ぶりに汗を掻いていた。

一千鬼もの妖怪達は？

あれだけ数を揃えれば軽い黒雲程度生まれるのは想定内。

……のだが、あまりに濃すぎる。

まさか、山犬が限界を迎えてしまったのか？

雉鳴女が想定しうる最悪の事態。

それは山犬が倒れ完全な祟りとなった杜人神が
周囲の妖怪や神霊全てに力を与え続ける事での総祟り化だ。

百鬼夜行どころではない。

根が何処までの領域を手に行っているのか不明だが呼び水には十分すぎる。

ミシヤグジが目を覚ませば大禍刻。

……何もかもを呑み込む、まさしく百万鬼夜行の悪夢。

現状は一体どうなっている。

焦る雉鳴女の前に幼児の様な付喪神かいちこ貝児を抱えた日雀が現われた。
しかし、急いではいるものの切迫した雰囲気は感じ取れない。

「あ、お帰りなさいませ雉鳴女様！」

サツと状況の説明をお願いすると、これだけの異変にも関わらず
そう悪くない膠着状態に持ち込んでいると言っただ。

雉鳴女が伊勢へ発つてすぐに、妖怪達は壁の突破に掛かった。

力業であったり、壁自体を喰らおうとしたり、とそれぞれの方法で。

当然、中々埒があかなかつたが、ただ一人、小法師だけは違ったそ
うだ。

「あのおじいちゃん、おぼうさんだけあってすごいのね。

み〜んなダメだったのに、あな、あけちゃったんだもの！」

腕に抱かれた貝児が興奮気味に言葉を繋ぐ。

「ぐるぐるまわって、なにやってんだろ？」

っっておもったら、いっばいもじがブワァーって」

要領を得なかったが日雀に聞くと、他の妖怪が暴れて生まれた力の
渦を

何やら奇怪奇妙な術で集めて干渉し壁を歪めたらしい。

その歪んだ箇所は障壁の密度が安定せず、苦勞はするが通り抜け可能なのだと。

通れる様になったら、まずは山犬を助けねばという事で繭の上に数百ずつ取り付いて飽和していく神力を吸収、満腹になったら外に出て力を吐く。

こうして山犬が限界に達せぬよう負担を減らしつつ雉鳴女の帰還を待っていた訳だ。

辺りを覆う黒雲の正体は妖気に変換され吐き出されたもの。

妖術の知識ある者たち総出でそれを再利用し歪みを維持しているが、使い切れなかった分が流れ広がっている……というのが現状だそう
な。

中心地は気が濃すぎて力を吐いても自然と吸い直してしまうようになったため、

今のところ碌に手伝えていなかった鳴女衆が上空など薄い場所まで運ぶ手伝いの最中であると。

この陣頭指揮は鶯鳴女が取っており、力の拡散は順調。

当初より広範囲になり一般人が気にあてられる危険があるので追加の避難誘導もやっている……。

千の数は何とも見事な仕事をしてくれていた。

「つまり、祟り化等の危惧された問題は発生しておらず、

山犬は未だ繭の中なれど健在、破ったわけではないが障壁内に侵

入可能」

雉鳴女が反芻した言葉に、天照も頷いた。

「ならば行きましょう」

是非も無い。

その為に貴女を呼んだのだから。

八咫鳥は一気に高度を下げその場所へ……。

降り立った雉鳴女は歓声に迎えられた。

「雉の姐貴じゃねえか、帰りを待ってやしたぜ！」

「キユ、一応仕事はしといたよぉ〜」

「ええい無駄口叩く前にとっと吐きに行かんか！」

雉鳴女登場に手を止める妖怪達を一喝しながら、
いつの間にか妖怪衆のまとめ役となっている小法師が進み出る。

「ほっほ、大口を叩いたが儂等はこれで精一杯じゃ。

水に属する者として波を起こし渦を創る事だけは自信があったんだがの、

これだけ雁首揃え、法術まで使ったが……中の安定は保証できかねる有様よ」

まるで上手くいっていない風の口ぶりとは裏腹に、

空中を走る大河は怪しげな呪文を描きながら網目状に広がり天を覆い隠そうと枝葉を広げる大樹の成長を押し留めている。

悪戯が成功したかのようにニヤニヤと笑う小法師。

その背後に揺らいだ空間はしっかりと幹にまで到達し、しっかりと道を形作っていた。

「過ぎた謙遜は嫌味でしかありませんよ。

どう見ても大妖でなくば成し得ぬ戦果ではありませんか。

そうですね、小法師などと言わず名を改められては如何です?」

雉鳴女は微笑みを返す。

これで、全ての手札は切られ、場が整った。

八咫鳥は山犬を繭から解放し、以降の護衛に合わせて余剰神力の吸収と放射。

天照は接近して真経津鏡で祟り化の要因を見つけ、可能ならば即排除。
深く探りを入れる事で防衛本能による猛攻が予想されるが、太陽神に油断は無い。

現段階で不可能であるならば祟り化の停滞を掛けつつその情報を元に救出案の再検討。

自分がやれる事は無くなった。

それこそ、上手くいくように祈る事だけ。

やるだけやった。

突入の邪魔になるかもしれない。

あとは何かあった時の補助に回ろう。

そうして距離を取ろうとする雉鳴女の腕を、にこやかな笑みを浮かべた天照が掴んだ。

さらに、最重要の鍵である神宝を無理矢理に持たせてくる。

「主役の貴女が舞台を降りてどうするのです」

呆気に取られていた雉鳴女だが、鏡から両手に伝わる無骨な重みに、ようやく意味が追いついてきた。

天照は最後の場所に立たせようとしているのだ。

「し、しかし天照、私は戦うどころか自分を守る力も……」

「あるではありませんか」

「……え？」

静かな宣告が通り抜ける。

「私が貴女を守る『力』になる。

貴女は『心』だけを持ってゆけば良い」

……それとも、なんです。

私では心配だとも思っているのですか？

そう冗談めかして天照が笑う。

合わせる様にして、周囲の妖怪達もまた大声で笑った。

我等が杜人神には太陽神も敵わぬとは、見栄の張りすぎだ。
こりゃあ男を立てるにも程があるぞ、など可笑しそうに。

そして、次第に雉鳴女に対し、行ってこい、行くべきだ、と重なってゆく。

「のう、雉鳴女よ。

儂等も見たくなつたぞ。

大神様直々に整えてくださつた晴れ舞台じゃ。

此度の報酬は神楽舞、その見世物料で構わんからの。

この地の『守り』は杜人神であつたが、

お主は紛れもなく『守りの守り』であつたのだ。

そこな大神様でも金色烏でもない。

他ならぬ、お主の手で救うが美しかろうて。

儂等はそれを見たいのだ、そうだろうよ皆の者！」

小法師に同意する者の応えに山が震えた。

御膳立ては幾らでもしてやる、だから行ってこい、と。

鏡を持つ手にギュツと力が籠る。

「さて、覚悟も決まつたようですね。

雉鳴女は決して私から離れぬよう注意を」

歪む空間を正面に捉え、歩き出す。

行って、助けてくる。

私は一人ではない。
こんなにも味方してくれる人達がいる。

もう何も恐くない。

杜人騒乱……三日目『否定的な無意識下』

這い寄る植物の群体を無造作に焼却しつつ歩を進める天照を、
雉鳴女は実に頼もしく思いながらついて行く。

何もかもが順調に進んでいた。

八咫鳥の方にも目をやるが、心配は無いらしい。

半自動的に再生を繰り返す繭の表面をそれ以上の速度で焼き払って
いる。

中で戦っている山犬を考慮して本来の火力を出せていないらしいが、
この様子だとそう長い時間は掛からないはずだ。

自分は自分の役割を果たそう。

真経津鏡は先程からボンヤリと仄かに光を放っているが何も映さな
い。

神、妖、混沌とした力場を攪拌する事で障壁の内側に侵入できてい
るが、

どうにもそれが原因なのか鏡自体が映すべき対象の多さから混乱し
ているようなのだ。

千鬼も妖怪が集まれば各々の気質も千通り異なる。
その異なる力を束ねた揺らぎで干渉しているのだから無理も無い。
真経津鏡は現在対象選別中といったところだろうか。

しかし揺らぎを全て除去しまえば障壁が復活し弾かれてしまう。
そこで、天照と二人で幹を一周しながら揺らぎの影響が少ない場所を探していた。

地面から張り出した巨大な根が邪魔で一回りするだけでも少々時間が掛かったが
繭の位置とは点対称の位置が調べてまわった内で最も適した場所のようだ。

後はそこに行くだけ。

それにしても、と雉鳴女は前を歩く背中に思いを馳せた。

武の神でない筈の天照の凄まじさには驚かされる。
最も多くの信仰を集めている神、とは紛れも無い事実だ。

技巧も何も無い、純粹に神力の巨大さだけで排除せしめんとする空間を闊歩していた。

ここからは大樹と黒雲のせいで確認できないけれども既に日没は過ぎている。

太陽神として不利な時間帯であるにも関わらず、これだ。
かつて杜人神が歩く霊脈と称したその特性は自動で身を守る鎧であり矛。

絶大なその力に、少しだけ懂れてしまう。

そうこう考えている内に目的の場所へ。

雉鳴女の胸に抱かれた真経津鏡が強い反応を示していた。

守りの全てを背の天照に託し、雉鳴女は真経津鏡を高く掲げる。すると、鏡は独りでに両手から浮かび上がり一際強い光を放った。

神鏡よ、導き給え。

祈る。

それに応える様に鏡は輝きを増す。

「雉鳴女……、どうしたのです？」

ただ祈る。

手を合わせ、ただ一つ事を。

「待ちなさい、一体何が！？」

雉鳴女、返事をしなさいッ！」

雉鳴女は天照よりも強く自分を呼ぶを感じていた。
目を開けていらぬほどに輝く真経津鏡が、自身を呼んでいるのだ。
恐怖など無い。

「雉鳴女！」

神鏡に誘われるまま、
雉鳴女の意識は光の中へ吸い込まれていった。

鏡の導きの先に何があるのか。

落着に似た感覚。

尻餅を着いた彼女が腰を摩りながら見上げたのは……異界。

ここは何処？

人の気配が一切無いのが一層の無機質さを与えていた。

異常なまでの透明度と大きさのビードロで外壁を覆った塔の群れ。およそ常識では測れない建造物が雲にも届くのではないかと思うほどの高さで空を狭めている。

言葉を失いつつも立ち上がろうと地に付けた掌から更なる驚嘆。

継ぎ目がまるで無い石畳、これだけでも異様なのだが都の大通りよりも幅が広いのだ。

表面を撫でると小さな礫を集積した巨大なざれ石にも思える。

火山から噴出する溶けた岩を固めれば……などと考えたがこんな加工が果たして可能なのか。

続く道の長さに隔絶した技術力の差を感じる。

灰色の道に浮かび上がっている不可思議な白線も通行路を区切るものかと思っただが、交差路を複雑に走るのを見るに何かしら呪術的な紋様な気もしてきた。

先端が赤や青に点滅する奇怪な棒も意味が分からず不気味。

脇に白く低い奇妙な柵が立っており、そちらにも整備された道があるようだ。

職業柄、分析から入ってしまったが、
こんなに立派な道路、貴人専用かもしれない。

中央にいつまでも座っていて良いものではないだろう。

そそくさと白い柵を越えた先……、
ようやく雉鳴女にも理解できる形式の石畳が存在してくれていたが、
これもまた、芸術性という点で見た事の無い代物だった。

寸分の狂いも許さずとまったく同じ型に切り揃えられた石材が精微
に配置してあるのに、
それだけでは味気無いとばかりに美しい絵画の描かれた白磁が一定
の間隔で埋め込まれているのだ。
酔狂が過ぎる無駄ではあるが、それを極々普通であるように作って
いる。

真経津鏡はどのような意図で私を誘ったのか。

混乱を抑え込みながら雉鳴女は考えていた。
何かが杜人神と関係している場所なのだろうとは思うが、
目に映るのは雉鳴女の常識を逸脱した理解に苦しむ光景のみ。

「この場所が何なのかさえ分かれば……」

「日本だよ」

「は？」

「日本、正確にはその思い出だけだね」

あまりにも自然に、答えが与えられた。

雉鳴女の背後に居たのは少年。

歳の頃は十に届くかどうかといったところ。

しかし、何よりも驚かせたのはその容姿。

似ているのだ。

まるで杜人神を幼くしたような……。

「ようこそ雉鳴女。」

そして、さようなら」

雉鳴女が思わず呆気に取られている内に、宣告。

少年が指を鳴らすと、全身に鉄の枷が取り付き

金縛りにあったように雉鳴女は身動き一つ出来なくなった。

もう一度鳴らすと、今度は空が軋み、
そうして生まれた罅割れの向こうには『外』が見えている。

帰そうというのか。

唐突だった。

出現から行動までの全てが。

だからこそだろう。

反射的に雉鳴女の思考は高速で回転し、束縛から逃れる事に成功する。

縛られる訳にも帰される訳にもいかない！

ただそれだけで、戒めが溶けるように消え去り、空は元に戻った。

「やっぱり、帰ってはくれないか」

神鏡は見事に導いてくれたと言えよう。

杜人神の思い出、すなわち記憶から創られている世界。

日本であるというのが良くわからなかったが、
雉鳴女は、ここが杜人神の精神世界だとの理解に至った。

ならば意思こそが力を持つ。

ここならば、意識を失い忘我に囚われた杜人神の覚醒へ直接的に働きかける事ができる。

さしずめ目の前の少年は、昔に教えられた『免疫』という概念か。

「いきなり帰れとは連れなないですね。

私には成さねばならぬ事と、その為に聞きたい事があります」

身構え、少年と相對する。

「まずは、貴方が何者なのか……」

張り詰めた雰囲気、雉鳴女とは対照的に少年は笑みを崩さない。

「そんな剣呑な空気にならなくて良いよ。

今の僕では君を外に出せないようだし。

えっと、何者か、だっけ。

杜人綿津見神……の分身というか何と云うか。

機能制限された本人……でも半分独立してるしなあ」

「いまいち要領を得なかったが、詳しく聞いていくと

『根』を制御する為に分割された意識の一つであるらしい。

広範囲に渡る『根』を管理するには手が足りない。

ならば単に融合するのではなく、多くの手と目を創ろう。

杜人神はそういう考えで人格を無数に割り『根』へとあたっていた。

しかし、異変が始まった日。

ミシャグジが根から原因不明の侵蝕を仕掛けてきたので

主人格が分散した意識の統合を行なったのだが、先に主人格が眠ってしまったのだ。

戻る先を失った子人格で侵蝕を喰い止めようとしていたが

その殆どが力尽きて眠ってしまい、ミシャグジの力が現出するだけの器械と化した。

これが現在の状況なのだ。

「山犬や君の声で僕は目を覚ませたけれど、

正直に言って、もう手遅れだ。

僕の本体も多分そろそろ限界じゃあないかな。

幸いな事に君は天照を連れて来てくれた。

分不相応な力を求めた祟り神を、祓って欲しいんだ」

だから、帰ってきてくれ。
帰って僕を滅ぼしてくれ。

少年の微笑みが哀しく映る。

「……手遅れ、なんかじゃありません」

そう、まだ手遅れではない筈だ。
自分が居る。

「私は諦めません。
こうして貴方を起こす事が出来ました」

つまりは、ミシャグジの力を弱め、子人格を起こし、
あの人が目を覚ませば全ては解決するのだ。

諦めてたまるか！

氣勢を上げる雉鳴女に少年は溜め息を吐く。

「君のそういう頑固な所が僕には好ましいよ。

けれどね……無理なんだ。

そもそも『私』は起きたくないと思ってるんだから」

杜人騒乱……三日月『誇大妄想狂』

「ところで、雉鳴女。

君が持つ杜人綿津見神、いや『私』のイメージ……、
おっと、印象か、そう印象はどんなものだい？

僕の勝手な想像だけれども、

『優しい』『献身的』『無私無欲』あたりかな。

どうだい、大体は合っていると思うんだ。

でもね、そういう風に見せかけているだけ。

優しくもないし、利己的で傲慢で強欲なんだよ『私』は。

君は知らないのだろうけど、

臆病が過ぎて君を殺そうと思った事もある。

そう、大禍刻の前、諏訪へ向かう君を恐れたんだよ。

結局は決断を下さないまま、時間に逃げたわけだけだね。

……おや、顔色が良くないけれど大丈夫？

安心して良いよ、これっぽっちも恨んでなんかいないんだから。

僕がそう思っているという事は私もそうに決まってる。

「その時の事は最近発生した僕にとって記録としか記憶されてないけど、

むしろ、心の奥では喜んでいたんじゃないかな。

大禍刻の影響で神道派は失脚し仏教が一気に浸透した。私が知るベターな、悪くない歴史に近づいた事をね。

だから恨んでるはずが無い。

意外そうにしないでよ。

君だけじゃないけど、私を過大評価しすぎなんだ。

立派でも何でもない卑怯な男だ、と僕は思うよ。

……そうだなあ。

雉鳴女、今までの不義理を私に代わって僕が謝ろう。

実を言つとね、これまでに話した事もこれから話す事も、多分、私が永遠に秘密のままにしておこうとしたものだ。

でも最後だから全部を話そうと思う。

僕が私へ戻る事も無いだろうしね。

まあ、その表情だと今の段階で君も気付いたみたいだけど。惜しいね、でも『未来視』はかなり良い線を行ってるよ。

察しの通り、この日本の風景は今から四、五百年先の日本。

信じ難いだろうけれども、

人間の技術は此処に到達する。

そして、私はこの時代に生まれただ。

色々と繋がってきた、といった顔をしてるね。

知っていなければ不可能な事柄に、ようやく説明が付いたかい？

そうだと、鉄製農具なんて馬鹿な発想はここが元。

鉄なんて何処にでもあるような資材だと思ってたんだから。

君が監督役として初めて杜人の地を訪れた時も医術や食文化に驚いていたね。

大和が攻めて来る前の段階でもこちらの農林業が進んでいたのもそれさ。

肥料、衛生観念や細菌といった知識も遙か未来で発見されたものだから仕方ない。

政変の鍵となる人物への当たりが早かったのも、

私の知る歴史書に描かれている英傑だったりしたからだ。

元寇に至っては大盤振る舞いしたもんだよ。

君を始め鳴女の皆にはさぞ不気味に映ってたろうさ。

あの時は私も焦りや不安があったんだろうけど怪し過ぎるにも程

があるなあ。

後はまあ、地図が最たる物か。

未来では全ての陸地が測量されていてね、

世界地図なんかも子供の駄賃で購入できるほどになっていたりする。

こんな感じで私は他の誰より先んずる狡い物を使っていた。

何故、私が時代を遡ったのか僕には分からないけれども、

私は未来知識によって地位を築き、ついには崇められた詐欺師だ。それを後ろめたくも思ってる。

元々は、そんな事を考えてる余裕も無かったみたいだけどね。

未来の日本は豊かな国でさ、心の余裕はあまり無いけれど、

真面目に生きていく分には食うに困る事も、病で苦しむ事も少ないんだ。

それが急に何も無い世界、過去に放り出されて途方に暮れた。

僕が体験した事じゃないけれど私には随分と辛かったようだよ。

言葉も通じない、食べ物も無い。

誰を恨めば良いのか分からない。

ただの一般人だった私は気が狂いそうになる孤独感に耐えながら奮闘。

始まりの村へ受け入れられて、ようやく安心を得た。

知識があつたとはいえ何も無い状況、

我が事ながら良くあそこまで動けたと思うね。

未来知識は恩返しであると同時に数少ない価値だったんだ。

助ける事で自分は認められていた。

最早、生きるには誰かを助けていなければならなかった。

だから躊躇わずに全てを捧げた。

失敗しては怯え、成功しては安堵する。

捨てられないように、とね。

死して神霊となっても根底にはそれがあつた。

不味いと思い始めたのは東征が終わった頃。

守れなかった物と、守る物が増えすぎたのを悩んだ。

助ける事について僕が恥ずかしくなるくらい私は悩んでいたようだけど、

自分が消えてしまう事を恐れて最終的には何も答えを出しじゃない。

僕が思うに、都合良く守れる弱い者を欲して、森戸が生まれた。

そんな記録は無い様だけど、無意識下できっとそういう事を考え

てたはずさ。

守る者、頼られる者として自分を上位に置きつつ、狭い場所を創った保身主義。

森戸家の在り方も考えてみれば酷く醜く浅ましいもんだよ。

自分の知る未来へ到達して欲しい、それでいて自分を持ち上げる箱庭が欲しい。

歴史を記録するだの、表に出たくないだの、我俣と自分勝手の塊。

……なんだい、気に入らないって目をしてるね。

でも、主観と客観を持てた『僕』から『私』を見るとこんなものだよ。

君の中の杜人綿津見神の像を壊しちゃうようで気が引けるけど。

さてと、話がずれていった気がするけど、前置きはこれで良いかな。

ねえ、雉鳴女、君は今回私がやるうとしてる事をどれだけ把握してる？

ミシヤグジの力を使って、何をどうしたいのか、予想ついてるかい。

……どうやらそこに関しては辿り着けなかったか。

まあ、神霊がうようよ存在してる訳だし、無理もないと言えばそ
うだよなあ。

未来において神霊が存在できなくなる……。
それどころか、神霊だけじゃなく様々な神秘、陰陽術や法術も力
を失っていく。

かなり端折ったけれども以上が主な動機さ。

人間は凄いや。

このビル、天まで延びる塔を建てるだけじゃない。
やがては月を越え星々の世界へと飛び立っていく。

人間の英知、『科学』が『神秘』を駆逐して、ね。

信仰が失われていく。

この先、五百年は持つだろう、
しかし、更に五百年も持つだろうか、ってね。

君には実感が無いと思うけど、高い確率でそうなる。
未知を既知にしていく好奇心が不可思議を殺していくんだ。

あ、もう分かった？

となると、ミシャグジの正体も分かってるか。

生きる者がある限り決して消えない者だから基盤には丁度良かったんだよ。

君たち鳴女を生かしつつ、未来に力を残すにはね。

甘く見過ぎていたおかげでこの有様なのは知っての通りなんだけどよ。

思い上がりもあつたんだと思う。

自分は『特別』なんだっていうね。

起きたくないってのはそこに掛かるんだ。

自分じゃないと出来ない事が減っていったって、

自分にしか出来ない事に飛びついたら失敗した。

誰かを救い続けようとして、

誰かを傷つけるだけの存在になってしまった。

それは在るべき自分との矛盾。

アイデンティティ、自己同一性なんて言葉がある。

自分が自分である理由、存在価値。

杜人綿津見神は誰かを助けなければいけないんだよ。そう、望まれていると思っ込んでいる。

必要とされなければ自分を保てない。

だから、こうして眠ったまま滅ぼされたいと言っている。

別に特大の失敗をやらかしたから不貞寝してるんじゃないんだ。

もしも復活できたしても『力の大部分を失う』、これだよ。

『根』の侵蝕に喰われた僕たちも多い。

どうやったって『特別』に戻れはしない。

特別でなければ必要とされない。

だから、このまま消え去りたい。

主人格のそういう歪なところ、僕は哀れだと思うよ。

まあ、こんな感じの理由で起きたくないわけだ。

救うと言つならば、滅ぼしてくれる事が何よりの救いになる。

……そして、時間だよ雉鳴女。

どうやら僕も『私』と同じく卑怯なようだ。

そろそろ夜が明け、私は限界を迎える。

長々と付き合わせて悪かったね。

こうでもしないと君は諦めてくれなさそうだし。

僕もまた眠る。

後に残るのは祟り神……だけだ。

遠慮も……何もしなくなつて良い。

太陽が昇り始める今、天照なら大丈夫。

ミシャグジが……目を覚ますから……、

すっかり怪我を……しないように……離れて見守つて。

ああ、どうせ……最後……言つて……うかな。

……つと昔か……『私』……雉鳴……の事……」

杜人騒乱……三日目『鳥児在天空飛翔』

真経津鏡を胸に抱きながら、

天照は大樹杜人神を正面に厳しい眼差しを向けていた。

雉鳴女が鏡の中へ吸い込まれる様に消えてから、刻限がもう五つは過ぎていく。

鏡の力か雉鳴女の頑張りか、大樹の祟り化は完全に停止した。神器は救いの方法を示すでなく直接的に救う道を創った。

しかし、帰って来ない。

嵐の前を思わせる静けさに不安が燦る。

「山犬、本当に大丈夫なのでしょうね」

視界の端に映る山犬は、

地表に張り出した根の上で伏せたまま瞳を閉じている。

杜人神の内を知れるのは山犬しかない。

「そう急くな、天照。」

落ち着きが足らんぞ。

どのような姿に墮ちたとて、

あやつには雉鳴女を傷つける事なぞ出来んよ。

随分と長引いているようだが、

善きにせよ悪きにせよ何かしらの決着は付く。

それよりも、だ」

顎をクイツとしゃくり上げ、背中に居座る者を示す。

山犬の背では八咫鳥が翼を広げて凄まじい熱波を上空に放出していた。

「よりもよって仇敵に我が背を許す事になろうとはな……」

「ふん、吠えよるな山犬め。

主の命なくば一息に焼き払ってやるものを」

「それは私の台詞だ馬鹿者。

精々凡百の大神と侮るが良い。

これが終わらば雪辱果たしてくれようぞ」

この二人、仲が悪い。

お互いに自分の役割はしっかりこなしているもの、
こうして事ある毎に悪態を吐き合う。

過去の因縁を考えるとしょうがないものだったが、
天照にはそれだけでは無い事も分かっていた。

表面上は冷静を装っている山犬の、
いつもより饒舌で、無駄に攻撃的な、普段と違う山犬らしくなさ。

それは、この場の誰より事態を重く受け止め、心配しているからこ
その苛立ち。

杜人神と山犬と雉鳴女、三者に築かれた絆の大きさが故に、
内心、気が気で無いのだろうというのに天照は気が付いていた。

八咫鳥もそれを知った上であえて挑発的に振舞っている。
気が紛れるように、と。

……まあ、あの子は気位高いから半分程度は素の様な気もしますが。
そんな眩きを外に出さず心に留め置きながら、
天照は予知にも似た直感が働くのを感じていた。

頻発する小さな地震が生命の胎動を思わせる。

外を囲っている妖怪達も疲労し始め、水の法術陣も何度張り替えた

か。

山犬も問題無いとは言い張っているが繭を破った時は既に満身創痍。根から無理矢理に強奪した力での回復はどんな副作用があるか知れない。

天照本人も肉体的な怪我などは無いが一晩気を張り続ければ疲れもする。

日の出がくれば大抵の事を何とかできる自信はあるが、あと半刻は必要だろう。

膠着した、けれども隙間のある状態。

……動きそうな気がする。

根拠らしい根拠は無い、がピリピリと肌に来る感覚。

……そして、ついに始まった。

背中から八咫鳥を振り落とし、山犬がゆっくりと立ち上がる。

「まったくあの男は頭が固くていかんな、雉鳴女」

虚空への呟き。

杜人神を覚醒させるには至らなかったのだろう。

天照でも気付یکن何かの予兆を掴んだのか。

息を吐きつつの武者震い。

「来るぞ天照、鏡を放すなよッ！」

刹那、爆発的に膨張した杜人神の神力が物理的圧力として全てを吹き飛ばす。

妖気塊が生み出した黒雲どころか普通の雲も払い散らされ、日の出を待つ群青の空だけが高く澄んでいる。

山犬は咄嗟に天照を背に半ばぶつける形で載せ、離脱。

八咫鳥がそれを翼で包み全天防衛を行ない、天照は鏡から帰還した

雉鳴女を抱き締め守った。

「くうつ、山犬、もう少し優しく運んでください。

突然にこれは少々堪えましたよ。

……と、ようやく帰ってきましたか雉鳴女。

しかしどうにも状況は良くなさそうですね」

翼の囲いが外され外を窺うと、手荒な手段の正当性が良く分かる。

大樹から放射円状に揺さぶられた森は

少なくとも数里程度の面積に嵐が吹き抜けた痕が刻まれているだろう。

妖怪達も目を回している者が多く、

成長を留めていた法术陣は霧と消え去り、

大樹に残された緑光が濃紫へ塗り潰されて消えてゆく。

最早、何も縛る物は無い。

地響きと共に塞き止められていた成長力が大樹の姿を変え始めた。

広げられた枝の全てが不自然に捻じ曲がり、巨大な傘が閉じてゆく。螺旋を描きながら中心である幹に絡み付いて一体化。

内側から発生した蔦や蔓の触手がまるで血管と走り、
更には枝の隙間から零れた葉が鱗の覆うに似て樹木の身体を隠して
いる。

脇からは太い枝が触手を束ねて腕を形成し、分化しては指を象る。

声無き絶叫が放たれ山を震わすと幹の先端が引き裂かれ、

鋭利な牙がずらりと並ぶ禍々しい顎門と成り獲物を待つて歯軋りを
響かす。

辺り一帯に擦り切れた草いきれのむせ返る香り。

それでも尚成長は止まらず、

見上げてようやく長大な全容が露わになる。

「これはまた……」

天照は驚愕に言葉を失った。

「あれはミシヤグジの写し身」

俯いたまま、天照の腕の中で雉鳴女が言葉を繋ぐ。

「歴史の始まりよりも古き者。」

無関心にて全てを育む者であり、
気まぐれに身動きしては滅ぼす者。

在り続けた巨大過ぎる陰。

その背に生を受けようと誰も気に留める事はありません。

皆知るミシヤグジは貶められた断片。

虚飾に正体を隠され、

格の劣る蛇の似姿を押し付けられ……、
そうまでしてようやく我々神霊の理解できる範疇に入る」

……杜人神。

その威容、まさに龍が如く。

大地に繋がれているとは云えど、

万物遍くを平伏させる絶対的な王の姿。

轟く咆哮に天地が揺らいだ。

「天照大御神、私は『諦める』と言われました。」

杜人綿津見神に戻る気は無いから、と。

役目に固執したあまり、

誰かを傷付けるだけの存在となった今、

ここで討ち果たされる事だけが望みであり救いなのだ、と

だから、『諦める』と言われました」

雉鳴女が暗く杜人神の想いを吐露する。

最も望まない結末を託す言葉が、

最もそれを阻止したいと考えている者から紡がれてしまうのではないか。

天照はこれ以上口を開かせたくはなかったが、止める権利は無い。

赤みを増してきた東の空……。

これほどの相手となれば苦戦するだろうが、太陽が昇れば倒す事は可能だろう。

少なくとも天照本人にからみれば、万が一勝てなくとも負けは無いと踏んでいた。

杜人神を被え、そう雉鳴女が決断したなら躊躇いなく被おう。

本人自力での祟り神からの復帰が絶たれたのならば仕方ない。

既に三日目、いつまでも近隣の民草を脅えさせてはいけないのだから

漂う諦観に天照は戦支度をすべく八咫鳥へ乗り込んだ。
どの様にすれば、この荒ぶる龍を討てるのかを考えつつ。

「ですが、諦めたくはないのです」

……！

振り返るとそこには意思を決めた瞳があった。

暁の光が、美しく朝を染め上げる。

山犬に跨り、敢然と顔を上げながら雉鳴女は宣誓した。

「お願いします。

どうか時間をください！

あの人の中へ残してきた「私」が、
きっと諦めずにあの人を守ってくれている。

まだ声が届くはずなんです！

力があつたから慕ったわけじゃない。

あの人だから、皆が集まったんだって事を。

それを伝えたい、届けたい！

ただ傍に居てくれるだけで良い。

だって私の『特別』はあの人しかいないのだから！！」

御伽噺の英雄のように、

苦難を前に胸を張る勇ましさ。

「天照よ、うちの姫はやる気のようにな。

残念だが最後まで我等に付き合ってもらおうか」

くつくつと山犬が笑う。

天照の頬も自然と緩んだ。

「では、救出作戦は続行中。

私の役割は無限の時間稼ぎ……と言いたい所ですが、

日没を迎えてしまえば簡単には抑えきれなくなりましょう」

この勢いに水を差してしまうが、絶対に引いておかねばならない線がある。

「大和の神として、私が譲歩できるのはここまで。

日暮れ時には覚悟していただかなくてはなりません。

ですから……必ず成し遂げなさい」

金色の神鳥に乗って天照は飛翔する。

己が役割を果たすために。

上空では陰と陽の極みが共に派手なぶつかり合いを起こしているが、かと言って地上がまったくの安全になったというわけではない。

雉鳴女は振り落とされぬよう山犬の身体にしがみついた。

注意を引き付けてくれているおかげでかなり緩くなっていたが、無数に襲い来る植物の鞭と、圧倒的質量を持った龍の爪は無差別に攻撃してくる。

山犬は身を挺してこれらの攻撃から地上に臥せっている妖怪達を守っていた。

「いつまで寝ておるか妖怪共。

気合を入れ直せ、ここが正念場ぞ。

呼べ、祈れ、歌えッ！

『意思』を示せば何でも構わぬ。

居場所を忘れた我等の王に叫んでやれッ！」

一つたりとも声を失わせる訳にはいかなかった。

杜人に集う声を束ね合わせなければ、

ミシャグジという巨大な『意思』の前に掻き消されてしまう。

届かせるには、世界を書き換える程の『意思』を持って訴えねばならない。

此処がお前の在るべき場所、帰るべき場所なのだ。

杜人騒乱……三日目『均衡と人間』

雉鳴女と山犬を中心にどうやら纏まり始めたなと地上に一瞬意識を向けた天照は、
荒ぶる樹龍の吐き出す破壊の渦に危うく吞まれそうになり、肝を冷やした。

理性は感じられず、本能赴くままの攻撃行動は野に住む獣同然だが……。

「……よそ見の出来る相手ではありませんか」

襲いくる祟りと水の弾塊を極小の太陽で相殺しながら、
勝たず負けずの戦いをどう進めていけばよいのか、思考を加速させてゆく。

幸いな事に集まった中で最も力のある神霊を危険と取ったのか
暴龍はひたすらに天照だけを標的としていた。

大地から汲み上げられる力と、天空から照らし与えられる力。
共に無限とも思える供給源により一種の膠着状態となっている。

互いの攻撃が容易に互いを滅ぼしうるといふ緊張感の中だが……。

なるべく目に付く様に低速度で八咫鳥を旋回させているものの、

このまま自発的に攻撃を加えなければ敵ではないと判断され地上へ向く可能性がある。

致命的な損傷を与えずに、常に脅威であると示し続けなければならぬ。

「中々厄介ですねっ、と！」

朝陽受けての戦いはすぐさま多量の霧によって薄闇に包まれるのだ。

両手を大きく後ろまで薙ぎ、先程の相殺で発生した霧を高温で消し飛ばす。

流石に太陽を隠されると撃ち合いに競り負ける恐れがあった。

その間隙を縫って放たれた圧塊の初撃を今度は八咫鳥が相殺。後続は体勢を戻した天照に打ち払われる。

お返しとばかりに天照が右手から放った光の円錐が樹龍の表層に纏っている葉の鱗を炭化させながらこそぎ落とすのだが、

傷口は周りの蔦があつたという間に埋めて葉を増やし元の姿へ再生していく。

光と影が交錯し合い、また霧が生まれる。

元々が戦いの神ではない天照にはこの拮抗が堪えた。

二人掛りとはいえ迎撃と環境調整の繰り返しに集中力が削り取られる。

倒してはいけないという枷は想像よりも重く天照に押し掛かってゆく。

「烏よ、当時の貴方を馬鹿にした者もおりましたが……、これを前に引き分けと持ち込める者は、大和にもそう居ないでしょうねっ！」

天照は大火力を以って空間を焼き、強制的に攻撃を打ち切らせて距離を取った。

警戒からか龍も攻めの手が一時的に停止している。今ならば、と先の言葉を受け八咫鳥が口を開いた。

「……お言葉ですが主、私はあの戦を、戦略で勝利し、戦術で引き分けたとは思っておりますが、戦闘に於いては『モリト』に敗北していたと考えております」

千三百年ほど前、八咫鳥はモリトの国を強襲した。

霊的な守り以外は防備の薄い国。神であるモリトを屈服させ、いつも通りの勝利が待っている筈だった。

しかし、祖霊達を崩し、人によって制圧した先……。

立ちはだかった巨樹。
同じ鳥でも無く、獣ですらない、動かぬ標的との侮りを八咫鳥は後悔する。

大樹の守り。

それまで敗北を知らなかった八咫鳥は自分の力を誇りに思っていたけれども、モリトの世界では草の一片すら焦がす事も出来なかった。

モリトと、モリトを祀る人間、祖霊、精霊の類が集ったほんの僅かな空間。

たったそれだけの世界を、完全に守り抜かれたのだ。

勝利の先触れと謳われた身が何という体たらく。

これを負けと言わずして何と呼べば良いだろうか。

思い出される敗北感と敬意。

「我が誇りは回復されねばならない。

まさに今、この場を以って汚名を雪ぐべし！

必ずや主へ『引き分け』という名の勝利を届けてみせましょう」

あの時とは真逆の、弱きを守る立場。

事が成るまで自身を的に守り抜く。

それこそが勝利であり雪辱を果たす時。

八咫鳥もまた、深い『縁』に集った者。

天照が思っていた以上の土気を持って八咫鳥はこの場に居る。

決意も新たに意気軒昂と動きを止めていた龍を睨みつけると、埒の明かぬ状況を打破する為か、龍はこれまでとは異なった行動を取り始めた。

水源は地に深く伸ばされた根なのだろう。

全体を鱗状に覆う幾億の葉から蒸散する水で雲を生み出してきたのだ。

天照が霧に対して敏感に反応していた事から有効だと判断したのか。激突の副産物として排出された今までの霧とは違い、内部に力を内包した粘性の、それこそ妖気塊と似た性質を持っている。

……が、無害なそれとは異なり、力の質も量も違う所為で触れているだけなのに身体が重く感じた。焼き払うにもただの霧と同じようにはいかないようだ。

体表から湧き出す雲が辺りへ溢れ始める。

「また面妖な……」。

これからが本番といったところでしょうか」

雲の壁を閃光で叩き割り、

差し込む朝日を後光と背負う。

「なるほど、良いでしょう。」

天照らす御名の所以、魅せて差し上げますッ」

樹龍と太陽の戦いは続いてゆく。

空では予定通りとも言える時間稼ぎ。

しかしその一方で、地上は体勢の立て直しに手間取っていた。

小法師や以津真天などの比較的力のある妖は無事だったが、
元々の地力が低い付喪神、水の回廊を失った川や海の妖怪は半死半
生の有様。

半数以上が使い物にならなくなっている。

龍と化してから杜人神の強制的な神力供給も治まっていた為、
それを利用しての回復も出来ず、地霊達が創った即席霊地に押し込
むしかない。

仮ながら陣地らしい物の構築まででき、防御に余裕はできたが…。

既に太陽は中天を突いていたのだ。

山犬は焦っていた。

雉鳴女が持ち帰った方法には大きな力が必要なのだ。

ミシヤグジを弱めるのは天照と八咫鳥で足りる。

いけ好かなく思っではいるが、実力が本物であるのは認めていた。

あとは『内』に居る雉鳴女を通して覚醒させるだけ。

しかし、問題なのは覚醒させるに足る意思の力。

万全の千鬼があればいけたらうが、

これではおそらく届かないと山犬は踏んでいる。

過大でも過小でもない魂の質と量の差。

ましてや拒絶する杜人神の魂へ無理矢理に語りかけるにはそれだけの物が要るのだ。

妖怪達の回復を待つていては日没に間に合わない。

掛け合えば甘い所のある天照は待ってくれるかもしれないが、
強大な龍の力を振るえば振るうほどに中の杜人神は磨耗し果てるだ

ろう。

日没とは、無情にもそういう時間制限でもある。

この状況を覆せるだけの切り札を山犬は一つだけ手にしていた。

最も良い終わりを迎えるには、最後まで切れない手札。

だが、それを使う事によって最終的な結末が歪んでしまう、とも確信している。

「……山犬っ」

最悪の危険を孕む最善を目指すのか、

それともこの場だけ妥協し再会を果たし、後で哀しむ方が良いのか。

「山犬、ちよっと！」

どうしたものかと頭を悩ませる山犬の身体を、ポンポンと雉鳴女が叩く。

それは思考に没頭し始めた山犬には少し煩わしかった。

「何だ雉鳴女、少し黙って……ふむ？」

誰の為に悩んでやっているのか、と。

語気を強めようとした山犬はその耳である物を感じ取った。

こちらに近づいてくる。
それも、大勢の声。

河川へ水を補給しに行った妖怪かとも思ったが、どうにも気配が違
う。

太鼓や笛の楽しい祭囃子が明らかな場違いでありながら……同時
にしつくりときた。

背を見やると雉鳴女は驚きと涙混じりの表情で呆然と遠くを見てい
る。

……何だ？

首を上げ眺めたその先、視界に映ったもの。

「お前達はっ……」

山犬は不覚にも、目頭が熱くなるのを感じていた。

「山犬様、申し訳ありません、来てしまいました！」

「我ら森戸家一同、祀る者でありますから！」

「神が機嫌を損ねたとあらば、御慰め致すのは我々の仕事です！」

現われたのは人間。

避難させた筈の人間いんげんだった。

「……この馬鹿者共が。」

良く来た、よう来てくれた！

ああ、そうだとも。

お主等が居らねば奴が起きる筈も無い」

杜人騒乱……三日目『収斂する血族』

そして、森戸家ではなかった。

集まった人数は百や二百ではきかないのだ。

近隣の村からも男達が駆けつけて、
歓声と共に山神輿、海神輿の両方を担ぎ上げている。

少年や年寄り達が。

並ぶ松明と、腹まで響く太鼓で勇壮に。

鉢巻を締めた一人が先頭に立っての掛け声。

神の気苦労を『背負えや、背負えよ』と大声を張り上げて。

「どうぞでい神様、いつもありがとうございます」

「女房にどやされてよお、たまには神さん労えってな！」

「おおおお、怖えんで機嫌直してもりやせんかの」

遙か昔、合神の祭りが始まった頃。

村々を巡るには神様も大変だろう、と。

その苦勞を背負うべく、と二つの神輿が造られた。

人と神を繋ぐ助け合いと思い遣りの形。

蘇える神遊び。

後ろからは女子供が笛や鼓で着いてくる。

老いも若いも関係無く、列を組み、声を上げて。

荒ぶる神が気を晴らしてくれる様にと、ことさら楽しげに歌う。

『背負えや、背負えよ』と。

その脇に、鶉鳴女の姿。

彼女は山犬と雉鳴女に悪戯がバレた子供の様に、はにかんだ。

「すみません、連れてきたのは私の独断です。

けれどもきつと、私達が動くまでもなくこうなりましたよ」

言っ隣の女性たちへ目を移す。

いずれも杜人所縁の女たちである。

「山犬様、杜人の血はこんな時に安穩と座しておれませぬ。

遙か先祖も文応の年に九州へ立ち上がったと言っではありません

か。

それが情けない事に我が夫は震えるばかり。

男なら神を助けるくらいのお概を見せよと尻を蹴飛ばして参りました。

調子に乗りやすく、器用な男じゃございませんが身体は丈夫です。物の数にもならぬでしょうけれど、どうぞ存分に使ってくださいまし」

その目には当然、山に荒れ狂う龍の威容も見えているだろう。だが、強い瞳は一步も引かぬと言葉より雄弁に語っていた。

ああ、この地は女がしっかりしていなければな。

そんな感想に妙な納得を得た山犬は、笑みを深めた。子供達の協力が、何よりも嬉しい。

「ああ、有り難く扱き使わせてもらおう。

お主等を嫁に貰った事を後悔するくらいにな」

喜びに吠えた山犬への返しは、

苛烈なまでに艶やかな女傑達そのものだった。

「これは異な事を山犬様。

旦那が後悔する暇なぞありませんよ」

「森戸の女は炊事上手で器量良し！」

床も上手くて文句無しっ、とくるわけで」

「惚れた男を幸せにするのも、

良い男に育てるのも、女の役目ですから」

そして、援軍はこれだけではない。

「本家の森戸が気張っておるところに、

儂ら杜辺の者が居ないわけにはいかんですわなあ」

簡単な旅支度のままに、好々爺が手を上げて自身の存在を示す。

「どうもお久しぶりにございます。

この老いぼれめにも何なりと御申し付けを。

儂もまた、杜人の血を引く者ですからの」

大店となっているだけに総員とはいかなかったようだが、京、堺、伊勢から各杜辺を取り仕切る大旦那と御付が来てくれた。

そこには当然、鳴女の影がある。

「病み上がりですけれど、舞台は役者が揃ってこそですわ。
山犬様、しっかりと『縁』を集めてきました。が間に合ったかしら
？」

泣き付く真鵲を胸元にあやしなから黄鵲が微笑んでいた。
伊勢で療養しているはずの彼女が無理を押しつけてまで駆けつけてくれたのだ。

幾重にも張られた呪符でようやく保たれる、羽色のくすんだボロボロの身体。

常であれば痛々しさをを感じるものなのだろうが、
眩しさすら覚える美しい姿に思えるのは懸命を尽くした結果だから
だろう。

「大神様にあんな啖呵を切ったのです。
誰もが見惚れるような華を咲かせなさい、雉鳴女」

祭りが始まったのだ。

信仰とは思えない遣る気持ち。
人も妖も、ただ一つ事を想う。

一人一人の心が雉鳴女の元へ集い、形と成る。

純白の羽衣が生まれ、

優しく山犬と雉鳴女を包んだ。

温かく柔らかかな『ありがとう』という気持ちの結晶。

これならば杜人神の心に届くだろう。

山犬は天高く雄叫びを上げた。

機は熟せり。

空で合図を受け取った天照が沸き立つ雲の悉くを吹き払い、
熱風に標的を見失う直下の龍へ降り注ぐ二筋の閃光が両腕を斬り落
とす。

龍の怒号は痛みか、それとも怒りか。

仰け反りながら太陽へ喰らいつこうとする喉元を、神鏡が淡く照ら
し示した。

この場所こそ杜人神の魂が眠る、龍の急所であるのだと。

我々の目的地はあそこだ。

雉鳴女を乗せて山犬は聳え立つ樹龍の真っ直ぐに伸び切った胴体を
駆け登る。

見送る人々の後押しを確かに感じながら。

鳶や蔓の体表が山犬を捕捉すべく蠢くが、無駄だ。
追いつがる邪魔者を風が吹き抜ける様に振り切っていく。

太陽の援護は足場を乾かし霧雨に滑る事は無い。
不安定に傾ぐ龍の葉鱗へ爪を立て、しっかと蹴り足に力を込め、直上へ疾走。

見る見る内に大地は遠のき、空が近付く。

ほんの僅か、そこまで来た。

あとは飛び込めば……その寸での所で龍が大きく首を振るう！

ズレた軌道に山犬は空中へ放り出された。

落ちるわけにはいかない。
いかないが、蹴る物がなければ修正も利かない。

「しつかりしろ、間抜けめ」

聞こえる憎まれ口。

旋回する八咫鳥がその身を足場に山犬を龍へと弾き戻した。
山犬は樹龍の首は爪を立てて落下せぬよう必死に踏ん張る。

……危なかった。

しかし、落ち着いてはいられない。

すぐさま移動し続けなければ、脚が蔦に絡みつかれて詰みとなる。

何とか帰ってこれたが、龍の抵抗は激しくなるばかり。

傾斜と振動に気をつけながら円を描き再びの機を待つしかなかった。

先程は腕を落とした天照へ注意がいつていたからこそ真っ直ぐに飛び込めたが、

今は雉鳴女の羽衣が発する力を嫌がっているのかこちらを振り落とすべく暴れている。

常に動き回らねばならぬのに合わせ、上下左右に激しく揺さ振られ

……、
とてもじゃないが動きを止めねば喉元へ飛び込めない。

ここまで来ての、まさかの手詰まりを山犬は悟ってしまった。

残る手段は雉鳴女の単独飛行一騎駆けしかない。

だが、あまりにも危険過ぎた。

羽衣の力が標的とされている以上、
機動性に劣る雉鳴女が撃ち落されるは必至。

天照と八咫鳥は水弾迎撃と無限に沸く雲、そして腕状触手の処理。
ミシャグジの力を削ぐのに手一杯で若干の援護しか受けさせられない。
その上で正面から龍の喉を目指すなど己から喰われに行くようなもの。

手間取って防御に羽衣の力を浪費してしまえばそれだけでも終わってしまう。

やはり可動域の制限で攻撃の薄い胴体を昇るのが正攻法なのは明白だが……。

せめて安定した足場をと、山犬は足元の植物を掌握できるか試みるも効果は無い。

雉鳴女も逃走や拘束に使える簡単な陰陽術は修めていたが、こんな巨大な相手は想定外。

天照組は殺傷力が高すぎて、そも拘束などといった小器用な技を持たない。

状況はもう、好転させられない。

完全な手詰まり。

人間が、妖怪が、神霊が。

こうまでして束ねに束ねた意思が、届かない。

我等如きの意思では世界は動かんと、そういう事なのか。

世界を動かすにはまだ不足とでも言うのか。

「……………あと一手、あと一手が何故届かんッ！」

搾り出した山犬の悲痛な叫びは、
龍の咆哮に儂くもかき消されていく。

それは、心を諦めに塗り潰す大音響……………。

「山犬……もはや私が行くしか手がありません」

雉鳴女は神妙な声で告げる。

万が一にも満ため可能性に賭けるしかなかった。

一人飛び立ち、

水弾と神力の嵐を潜り抜け、

体当たりや噛み付きなどを全て回避し、

羽衣の力をまったく損耗させずに喉元へ辿り着く。

そして、それらにはただの一つも失敗が許されていない。

まず間違いなく失敗する。

当然、雉鳴女は理解していた。

しかし、行かねばならない。

集ってくれた人々の為に奇跡を起こさねばならない。

方法がそれしか無い以上、御膳立てに任せ、行く義務があるのだ。

先に待つものが『誰か』ではなく『自分』の行動によって失敗する
確定的未来であっても。

山犬は止めたかった。

悲壮な覚悟を決めた雉鳴女を。

行くな、飛ぶな、と。

自らの行動で杜人神を喪えば、彼女は壊れるだろう。

自分にしかぶつける事の出来ない恨みは、彼女を壊すだろう。

責任が、彼女を殺すのだ。

「少し遅い時期かもしれませんが、
帰ったらいつかのように、三人でお月見をしましょうね」

柔らかな微笑み。

名残惜しいとばかりに優しく山犬を撫でる手が、ソッと離れる。

そして、雉鳴女がいざ飛び出そうとした瞬間……！

高空より飛来した一振りの刀が樹龍の額に突き刺さった。

すると、突き立った場所から祟り神特有の濃い暗紫が抜け落ち
墮ちる前の、生命に溢れた美しく鮮やかな、眩しいまでの緑が帰っ
てくるではないか。

復活した緑が押し留めているのか、その箇所だけ樹龍の動きが鈍く
なっている。

これは……！

「うおおお、よっしゃあッ！

上手いもんだねアンタ、良いところにいったよー！

「ちよっ、揺らさなっ、危ないです、洩加計須神」

「ば、馬鹿、大仰に呼ぶなよ！

あたしはあんま偉くないんだからね。

此処カケスじゃあただの？なの、頼むよホントに「

「だ、だから揺らさ……」

「しかし、あんなだけしか浄化出来ないって事は、神力が出てるのに中はかなり厄い状態なわけか。

よしつ、次行こう次、さっさと構える！

「雑賀嘉平の全十五代、
十五振りの奉納刀で綺麗さっぱり浄めるんだ」

大量の刀を腰から紐で吊り下げた鳴女が、若い男抱えて天照よりも更に上空を飛行していた。

山犬と、その鳴女の視線が合う。

睨みつけていた訳ではないが、戦況の厳しさから自然と目付きが鋭くなっていたのだろう。

「……ひいつ、す、すみません山犬様ツ、
不肖ながら？^{カケス}鳴女、今しがた九州より到着しました！

その、こんな一大事に遅刻して申し訳ありません！

でもほら、挽回すべく刀持って来まし……アレ？

きよ、許可忘れてましたけど緊急時というわけで見逃してください。
いつ。

遅刻だって理由があるんですよ、ホントですって！
九州から全速で行くはずだったんですけど『縁』が見つかって……
とにかく、こっちもこっちで大事件なんですから。

ほらお前も挨拶しろっ、早く、早く挨拶してお願いっ！」

反射的にペコペコと頭を下げながら高速での弁解。

抱きかかえられた青年に山犬への挨拶を促した。

「偉大なる勇者、森戸戌彦が末孫、第十三代『今津 守人』と申します。

遙か昔、故郷今津を御守り頂いた先祖の大恩を返すべく、今ここに参りました」

遙か西で果てた子供達の忘れ形見。
けれども、確かに遺され、継がれ続けた『縁』が。

最後の『縁』が、来た！

杜人騒乱……千秋楽『あこがれとさよなら』

「ほら、聴こえますか、貴方を呼ぶ声が」

暗い薄靄が掛かったビードロの摩天楼。

無機と濃い紫色に染まった街の中心に、ぼつりと忘れられた庭園。

柔らかな声。

「外の『私』は諦めていないようですよ」

狭い空に、一点だけ美しい青空が覗いている。

少女はそれを見て嬉しそうに微笑みながら、

簡素な長椅子に横たわる少年を膝の上で優しく撫でていた。

「いつまで、寝たふりをするんです？」

聴こえているんでしょう、皆の想いが」

答えは無い。

「む、頑固ですね」

溜め息一つ。

……しばしの沈黙。

そして、静寂は震える喉に破られた。

「僕に言わせれば……皆、馬鹿だよ……」

顔を覆う少年の頬を一筋の雫が流れる。

「皆、優しすぎるんだ……」

頭上からは硝子細工の割れる音。

また一箇所、霧も靄も晴れて青い空が覗き始める。

「その優しさをくれたのは、貴方です」

次々に割れる、割れていく黒雲。

八、九、十、十一と……晴れてゆく世界。

「貴方達の殆どはもう目を覚ましているはず。

内側にいるのです、とづくに気付いていますからね。

いい加減に起きてもらわないと、後で『私』の説教が長くなりま
すよ?」

「……ああ、怖いな、それは。

君にはきつと、僕も『私』も敵わないや」

少女の冗談めかした言葉に、小さく笑う。

「『私』を起してくるよ。

それで、目一杯に叱って欲しい。

許されたと思えるまで、ね。

……分かっていると思うけども、

僕は『私』が嫌いだ、憎んでさえいる。

だから……。

お願いするよ『私』のこれからを」

空が青に満たされ……少年はゆっくりと立ち上がった。

「元よりそのつもりです。

あとは私と『私』に任せてください」

十五度目の鐘がどこまでも響いてゆき、

曇りの消えた異郷の風景は幻と霞んでいく……。

弓に矢を番えるに似て、全身の筋肉を引き絞り放たれる守護の太刀。

「太刀運びの神、断つ神の導きにて

厄を断ち祓い御慰めする事が我が役目」

西より来た青年はその背に神を降ろし、十五の刃を以って荒ぶる龍の怒りを静めた。

人ならざる者として尻込みする巨龍にただ人の身で切り結ぶ勇氣は他にあるまい。

……その見事な働きは後の世にそう記される事になる。

それは六百の歳月に連なる十五の想念。

刻まれたるは嘉平の名。

鋼の技術集団、雑賀衆を支えた鍛冶の匠。
当代一の誇りを持って名乗られる称号。

初代嘉平が遺した白刃の煌きを追い掛ける求道者達。

願わくば人を斬るのではなく、哀しみを断つ刃金であるように。
各代の嘉平はそれぞれに己の祈りを込めて神に捧げる太刀を鍛つ。

故に、鉄を鍛ち上げてゆく様に、
多くの人を鍛ち上げ……より極みに近い者が継いでいった。

殺める物を創る人間には心に留めておかねばならない事がある。
力を振るう人間の悪性と、誰かを守り慈しむ善性を。

悪意から、狂気から、絶望から、守れ。

守る為に在れ。

意思を持たぬ筈の鋼は、掌より伝わる担い手の魂に悔恨の念を思い
出す。

奇縁、かつて己を振るい、そして守り抜けなかった者の末裔かと。

……私に守らせ給え。

神刀は担い手を認め、担い手は神刀を振るう。

額より始まり、螺旋を描きながら楔は穿たれる。
崇る力を削ぎ落とされた龍は鮮やかな常緑を取り戻していく。

こうして役目は果たされたのだ。

龍はもう静かなもの。

山犬はソツと雉鳴女を龍の首筋へ降ろす。

「雉鳴女」

それ以上の言葉は必要ない。
頷いて雉鳴女は飛ぶ。

羽衣が強く輝きだした。

龍の頭部から、元となる樹木へと還ってゆく。

絡み合う枝が徐々に解かれ、首元まで開かれた先に……求めた姿。

拒絶と諦めを顕した植物の檻で、

膝を抱えたまま俯いて座る杜人綿津見神がぼつりと零す。

「……何を償えば良いんだろう」

罰に怯える子供の様に弱々しく肩を震わせる。

「計画は失敗、沢山の人に迷惑を掛けて……」

鬱々とした暗い声。

「償う為の力さえ失った私に何ができるんだらうか」

乾いた笑いは自分への嘲り。

「どう償えば良い……もう何もできないのに」

からっぽな神の姿。

「できなくたって良いんです」

雉鳴女が触れると外と内を隔てる最後の障害、
罪の監獄は崩れ去り、力を失った羽衣と共に消え去る。

全ての壁も、しがらみも失って、弱くちっぽけな二人だけ。

「私たちが必死になってまで頑張れたのは、
貴方に謝らせたとか、償わせたいとか、そんな理由ではありません」

強く抱き締めた。

「ただ、貴方に帰ってきて欲しい」

動くにはそれだけで十分だったのだ。

「……帰る場所が無いよ」

「私では『居場所』になれませんか？」

もっと甘えて欲しい。

今まで救う側に立ち続けなければいけなかった哀しい人に。

雉鳴女には返しきれない恩と想いがある。

鳴女の居場所をつくり、守ってくれた。

今度は私の番です、雉鳴女は笑う。

「役立たずでも？」

「関係ありません」

「傷付けた人達は認めてくれないと思う」

「折衝は得意ですよ、無理矢理にでも納得させます」

「だとしても……」

「ああ、もう、問題無いと言ってますっ」

譲る気一切無しとばかりの問答に既視感。

何百年か昔にも、こういう風に言い包められた気がする。

杜人神は俯かせた顔を上げて

眩しいくらいの笑顔を向ける雉鳴女へ、勝てないなあと呟いた。

彼女には勝てないようにできている。

この諦めは、たぶん許されるものだ。

胸に生まれた温かな気持ちのまま、杜人神は降参を告げた。

「……まったく強情な」

「貴方には負けませよ」

「ああ、貴女は馬鹿だ」

「ええ、そうでしょうかとも、ね」

いつかの繰り返し、
それは終わりも同じ。

和解と笑顔。

ただ一つ違ったのは初めての口付け。

互いの温もりを感じながら、優しい時間が流れる……。

「……で、話は纏まったか？」

「ひゅいッ!？」

知らぬ間に近付いていた山犬に驚いて二人は飛び跳ねた。

杜人神の制御を完全に離れた根、
それに依存し成長した王樹の力の顕現である大樹が崩壊を始めてい
る。

いつまでもものんびりしている場合ではなかった。

龍にまで成長した大樹が崩れていく。

巨大過ぎる身体を維持できず自重に歪んでゆく。

このままでは地上の人々が多大な被害を受ける事になってしまう。

焦る二人と対照的に、

山犬は落ち着いていた。

「王樹の幻想に別れを告げよ。

そして、幕を引くのだ、杜人綿津見神」

力を失った自分に何が出来るのか、杜人神が問う。

山犬は一度大きく息を吸い込むと、
胃の腑より煌く宝玉を吐き出し、これが答えだと差し出した。

「受け取るが良い。」

お前が与えるばかりで受け取るうとしなかった、

お前の中から生まれた出でた、正真正銘お前の力だ」

千年の祈りに育まれた『信仰結晶』の内にあるもの。

それは感謝の気持ち、思い遣る心、優しさ。

和を生む感情。

信仰とは人間の持つ温もりの力。

杜人神が結晶に触れると溶ける様に胸に吸い込まれる。

「祭りの音頭としようじゃないか。」

客も多い、派手にやるが風流だろう」

頷いて、杜人神は集まってくれた縁へ感謝した。

崩れゆく大樹は千々に散りながら花びらへ。

こうして異変の幕は引かれ、本格的に祭りが始まった。

酒を酌み交わし、
食を共にし、和気藹々と。

天を覆うほどの龍は青空を埋め尽くす百花繚乱の花吹雪へ生まれ変わり、

鳥達は歌声を響かせ、妖怪と人間は手を取って奇跡を踊った。

杜人神系を揺るがし、大和の最高神格まで担ぎ出した拳句、
三日の長きに渡ったこの騒乱はこれにて一先ずの終結に至る。

後日、後始末にあれやこれや苦心する杜人神と
奔走する雉鳴女のいつも通りな日常があったのだが、それはまた別の話。

それよりも重要な出来事が起こったのは、終結の夜。

おしまい……幸せについて考えてみたら

日もすっかり落ちて夜が始まったというのに
遠くの喧騒は絶えず、今もまだ賑やかに宴が続いているようだ。

天照のおかげで澄んだ秋の星空はとても綺麗で、月も煌々と存在感を示している。

そんな良い夜に私は何をしてるかと言えば……
山犬の計らいにより、神社裏手の縁側で一人静かに夜空を眺めているだけだった。

終わっちゃったか、と何処か他人事のように振り返る。

疲労感と失った力、そして得た物。

本当に事件があつたのだとそれらは証明してくれていたが、
途中から意識が混濁してたのもあって、まるで夢か幻だった。

そんなだから、頭もぼんやりとしている。
ついでに燃え尽き症候群的な心理状態でもある。

長年を掛けて進んでいた目標が無くなって、宙に浮いたままだ。

根は山犬が金輪際触るな、と嚴重に封印してしまつたし。

王樹様の力の大部分を喪失したおかげで私は自由に根へ干渉する事はできない。

できないならやらないので別に構わないのだけでも。

そういえば天照は早々に伊勢に帰っていったが、

去り際に雉鳴女へ何やら耳打ちしていたのが気になる。

相応に要求されるものがあるんだろう。

……皆に迷惑を掛けてるよなあ。

何と言うかこう、ぬけぬけと帰ってきて山犬と鳴女達に申し訳なかつたりする。

「お茶をお持ちしました」

そんな溜め息を咎める様に雉鳴女が盆を片手に現われた。湯気の見える湯呑み二つと漬物が乗っている。

「また変な事を考えていないでしょうね」

変な事、か……。

でもいつかは直面する問題でもある。

皆に消えて欲しくないというのは我儂かな？

「その代わり貴方が消えるとなれば、
今回みたいに皆で反対するに決まっています」

仮に山犬が同じ事をすれば止めるでしょうに、と不機嫌そうに左隣へ座る。

たしかにそうなんだけどね、お茶を受け取りながら言葉を濁した。

一人から二人、並んでも静かなものだった。

しかしながらこのまま沈黙を保つのも何処か気まずい。
適当に話題を出そうとした時、先に雉鳴女が口を開いた。

「人が、信じられませんか」

凜と通る声に込められたものに、
自然、月から彼女へと振り向かされた。

その真剣な瞳は私の奥まで見通している気がする。

「貴方の中で、
私は未来を垣間見ました。

人が辿り着く知恵は私に理解しえない領域までゆく。
確かにそこには神の姿が必要なくなるのかもしれない。

けれども、人は繋がって生きています。

人の力は縁を繋いでいく力。

こうして手と手を繋いで生きています」

彼女の右手から私の左手に感触が伝わってきた。

始めはひんやりとしていたが、重なりからは確かに温もりを感じられる。

言いたい事は大体分かっていた。

今日の光景はたしかにそれを感じさせてくれるものだったのだから。

時代も、距離も越えて集まった想い。

本当に私なんかには勿体無いほどありがたいものだ。

「離れる事もある、途絶える事もある。

でも、子供達は千年を越えて繋がってきた、それを忘れないで」

自分が築いてきた縁を信じよ。

継がれてゆく心はきつと消えはしないのだから、と。

とても耳に痛かった。

「どうか、自分から手を離さないでください」

キユツと二人とも指先に力が籠る。

たぶん、これは私に深く根付いた問題なのだ。

誰かに居てもらわないと怖いくせに、誰かを信頼しきれない。評価が悪ければ信じるけれども、良ければ逆に疑う。

怖がり過ぎて、自信が持てない。

だから特別でありたかった。

王樹様の代わりに成りたかった。

そして、成ったつもりでいた。

結局、思い上がりや傲慢といった弱さの所為で

大切な事も何もかもが見えなくなってしまっていたのだ。

色んな人たちに謝って、

もう一度始めから『自分』を始めようと思う。

正直なところ、怖いのに変わりはない。

変化は怖い。

本当に変わるのかも分からない。

怖いだけでも今のままでは駄目なのだ。

少しずつで良いから『自分』の力にも慣れないといけない。

忘れてしまっていた気持ちや克服しなければならぬ事も多い。

怖さと向き合って、信じる事を覚えよう。

……その時、伸ばした手は掴んでももらえますか？

「私は離す気なんてありませんよ」

思わず見惚れた。

私の少ない語彙では言い表せない程に、優しい微笑み。どんな事があっても大丈夫だと安心させてくれる笑顔。

私の好きな人。

そして、唐突に思い出してしまった。

私の子人格が勝手に告白していた事を。

身体が急に火照ってくる。

子人格のアホ、私の一部なのに何てことをやらかしてんだ。

ああもう、分かってる、私への嫌がらせってのは、でもよりにもよって本人に言う事は無いだろうよ。

視線を外そうにも、私の全神経は今更ながら左手に集中しだしてすべすべとした肌と触れ合う柔らかさが思考の殆どを奪い去っていた。

落ち着け、冷静になれ。

付き合いも長いのだ。

雉鳴女をそういう対象として見ないようになってきた。男の下卑た感情で汚してはいけなさと。

それは仕事熱心で真面目な彼女を侮辱しているんじゃないかと。

私のこの想いはソツと秘されるべきものだ。

そう、こんな時に新しい関係を求めるべきではない。事後処理に忙しくなるに決まってる、そこに問題を追加するな。ギクシャクするだろう、だから今のままでいるべきなんだ。

望むんじゃない。

いつもと同じ取ってつけた様な理論武装で心に蓋をする。
血の気が引くに似て昂ぶりは鎮まり、切なさだけが残った。

こんな風に考えてしまうのは、
からっぽになつた部分を雉鳴女で埋めようとしてるからだ。

それこそ酷い侮辱でしかない筈だと思ひ込め。
思ひ込んで諦めてしまえ。

……なのに、私の手は彼女の手を強く握り返している。

「あっ」

彼女の小さく漏れた驚きと、上気する頬の朱み。
その表情に、私は完全にやられてしまった。

少しだけ、怖い。

関係が壊れてしまうと分かっているでも感情が収まらないでいた。
落ち着いた頭の底でどうしようもなく、雉鳴女を求めているのだから。

今度は自分を正当化する自己弁護が湧き上がる。
心の底まで晒した今、彼女に何を隠すと言うのだ。

彼女とのこれからを考えるならば全て吐き出してしまった方が良い。
『居場所』になると言ってくれた彼女へ後ろめたい隠し事をするべきじゃない。

始めから『自分』をやりなおすなら、想いを告げておけ。

そんな囁きが、私を動かしていく。

「……雉鳴女」

「は、はいっ」

「その、だね……」

しかし、まるで口が回らず俯いてしまう。

必死で言葉を選ぼうにも愛しい想いで溢れ、頭の中は真っ白なのだ。

どうすれば伝えられるのだろうか。

生前、碌に恋愛なんてした事はない。

始めの村で娶った妻達も、ある種の義務であったのだから。

齡千年を越えていても私は思春期の少年と何ら変わらなかった。

知識を総動員したって恋歌は虫食いだらけになり一つも浮かばない。真っ直ぐに『好きです』と、たったの四文字を言えば良いはずなのに。

そんな私の口から出たのは……。

「月が、綺麗ですね」

……最悪だ。

我ながら最悪な告白だ。

いや、告白の体すら成してない。

俯いたまま、何も浮かばない焦りと沈黙の長さに押された自分を悔やんだ。

彼女の優しさを穏やかな月の光に掛けて言おうとしたが、そもそも混乱の最中にある頭で上手い事を言えるはずがないのに。

掌から力が抜け、雉鳴女の細い指から離れる。

彼女の顔を見る気力すらすっかり失せて、私にできる事はもう、遠い目で月を眺めるしかなかった。

想いをちゃんと伝えられなかった虚脱感に涙が零れそうだ。

しかし……。

「私もずっと見ていたと思います」

彼女は私の腕を抱いて、肩へ首を預けていた。

突然の事態に理解が追いつかない。

けれども確かなのは、緩く寄り掛かる温かさ。

ただ、この温もりが胸に沁みわたる。

氷が溶けるみたいに不安も怖さも無くなっていく。

これがおそらく、私の、私だけの幸せなのだ。

「これからずっと……」

春も、夏も、秋も、冬も。

苦しい時も哀しい時も。

何があってもこうして寄り添っていけたら。

幸せに違いない。

もっと雉鳴女を感じたくて、私も彼女へ緩く寄り掛かってみる。

明日は良い日になるだろう。

明後日も、その次の日も。

これから先がどんなに大変でも大丈夫だと思えた。

杜人綿津見神の日常はずっと続いていく。
ゆるゆると繋がっていくのである。

） 杜人記 完 ）

「斯くして人の世は戦を終え、時代は移ろう。
神もまた同じく在り方を移ろわせてゆく、か」

「めでたしめでたし、ですかね山犬」

「お主も素直になって良いのだぞ、鶉よ」

「……何を仰いますか。」

「私は娘でも十分に幸せですよ」

「ふむ、そういう事にしてお」

杜人綿津見神の日常はずっと続いていく。
ゆるゆると繋がっていくのである。

） 杜人記 今度こそ完 ）

おしまい……幸せについて考えてみたら（後書き）

本編完結後書き：活動報告にて

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/69709/blogkey/149257/>

本編完結しましたが、以降は閑話や番外などのおまけ的な物になります。

杜人閑話……教授と学生S『騒乱記の?』

「お待たせしたね、坂本君。

とても面白い内容で君らしいと思ったよ。

引用資料もこれだけ用意するのは骨だったんじゃないかな」

すっかり馴染んだ研究室のソファで筑前国風土記の解説書を読み耽っている、

教授が鼻歌でも聞こえてきそうな上機嫌で近付いてきた。

「そうだ、これ他の先生にも回しちゃっていいかい？

私だけが見るには出来が良くて勿体無い気がするよ」

どうやら俺の出した小論文は思いのほか好評だったらしい。

しかし、そこまで持ち上げられると流石に照れる。

そう言う教授は謙遜しなくて良いと言葉を継いだ。

「意外と君に期待してる人は多いんだけどな。

こないだ人が集まらないからって考古学のフィールドワークに連れてかれたろう。

……まあ、私がつっかり酒の席で推薦しちゃったからなんだけど。あれね、小嶋先生褒めてたよ、丁寧だし熱心、若いのに知識も専攻並にあるってね」

弟子が褒められたみたいで私は嬉しいよ、と教授は笑う。そうして、ますます俺は恐縮してしまうのだった。

「中でもコレを読むと物を考えるセンスがあるのも分かる。良い推察だよ、『騒乱記』は古神道系杜人信仰を伊勢が取り込むべく記されたなんて」

教授の視線が鋭くなった。

何故そこへ行き着いたのかは論文内に書いたが、俺の口からも直接聞きたいのだろう。

このように近頃の教授は俺を試そうとしてくる事が良くある。まるで成長を確かめるように。

俺は前もって用意していた文言を告げた。

著者が当時の杜人神社の神主であるにも関わらず皇祖神を持ち上げる描写が多すぎる。

東征以来、形式上は下についたとあったがこの時代はまだ対等に近い間柄のはず。

それを裏付ける様に自分に閲覧が許された資料で最も数のある民間人達の手記には

天照が殆ど出てこない事から地元民にとっては皇祖神よりも杜人神の信仰が強かったのだ。

この微妙な齟齬、不自然さ。

もしかすると近世における神道統一化への試金石だったのでは？

地震という災害にかこつけて色々取引があつた可能性が高い。

災害復興や朝廷直轄領の土地を盾に名義借りをし、権威強化を狙つたのではなからうか。

時代もまた関ヶ原を終え、新たな潮流を刻み始めた時期である事も動機として十分だろう。

だからこそ教授の解釈を聞いてみたい。

小論文はその為に書き上げたようなものだ。

何だかんだで自分には見る事が叶わない資料をこの目に出来るかも知れない

……という、知識への好奇心が占める割合もかなり大きい気もするけども。

「やっぱり君は素晴らしい。

資料も限られてるのに良く組み立ててあるよ、本当に」

教授は一度机へ戻り、ノートパソコンと缶コーヒーを手に隣へ座つた。

「私が知る限りで『騒乱記』は少なくとも二冊目が存在している。仮に『偽典・騒乱記』と。しかし中身に関しては私も殆ど読ませてもらえてない。

伊勢派に都合が悪い何かがあったのか、それは君の推察がほぼ答えなんだと思う」

パソコンの機動音と共に教授はコーヒを一口、喉を潤した。私も聴きにまわる体勢は既にできている。

さあ、講義の時間だ。

「騒乱記をちよつと振り返ってみよう。

これは関ヶ原の合戦の裏側で起こった事件となっております」

「君が調べた様に民間に沢山の文書が残ってるのと、

周りのお寺や神社でもこの日の事は良く記されていてね、

日付に関してはほぼ間違はなく西暦1600年10月21日から3日間」

「どれも局地的な地震があったと書かれている」

「そうそう、こないだニュースでやってたけど
紀伊半島南部で広域活断層が見つかったそうじゃないか」

「地下マグマによる火山性地震がそれまでの通説なんだが
今後の進展次第では覆るかもしれないのかねえ、地質は専門外だ
からうる覚えだけど」

「とにかく地震はあったらしいです。
他にも災害を思わせるものとして龍が出てくる」

「龍は竜巻や水害の暗喩が一般的なんだけでも、
こと騒乱記の龍は杜人綿津見神が化身したとあって
植物が寄り合わせり変化したという珍しい記述なんだよね」

「まあ、朱雀や白虎といった四神で青龍は木行を指すから関係が無
いわけじゃないけど」

「当の災害は地滑りなどの緑が押し寄せてくるような土砂災害が候
補かな……
……なのに、その頃の地層にそんな大規模な痕跡がまだ見つかっ
てない。」

「ま、現時点における謎だなあ、何故龍なのかってのはいずれ解明
したいもの」

「はてさて、こんな感じに様々な自然現象と合わせ
祀る人間が自分の神を高位へと押し上げようと記述するのは至極
普通」

「しかし、君が怪しいと思ったように
騒乱記はここから天照大御神が出張ってくるようになる」

「雉鳴女が大和より授かっていた役目によってね」

「この時の雉鳴女に関しては諸説あるんだけども、
君が資料とした伊勢寄りの正典だと『裏切り』が印象的かな」

「雉鳴女は大和の戦神達に送り込まれた間者であり
最後まで服従を良しとしなかった杜人神への埋伏の毒」

「杜人神を討つ大義名分を得たならばすぐさま大和へ帰還して
討ち滅ぼす為の神々を集めるのが雉鳴女に与えられた使命だった」

「長く続いた戦乱から杜人神が人間に失望し、
暴龍と化して人々を祟り始めたので雉鳴女は動かなくてはならな
い。」

共に杜人神の腹心であった山犬の信頼をも欺いていた、これが第
一の『裏切り』」

「しかし、雉鳴女は杜人神に情が移ってしまっていた」

「杜人神を討たせたくはないと苦悩の末に天照に相談しに行く。
大和の神々に与えられた役割から逃れる、第二の『裏切り』がこ
れだ」

「まあ、裏切りを許した天照の度量、そのダシにされた感が強いん
だよな」

「神が崇る事は摂理であるからと傍観する山犬に人の愛を説き、
神器の力で道を示した……、縁を集めたのは鳴女んだけど随分
な持ち上げ方」

「……気になるよねえ」

「崇り神と化した杜人神は天照でさえ退けるとバランスは取られて
いるけど、

最終的に集まった縁と絆によって杜人神が正気を取り戻せたのは
心を照らし導いた天照のおかげだという訳で杜人神は天照の下へ
付く事になった」

「やっぱり、何かがあったのは確からしい。」

杜人神を祀る森戸家は代々朝廷とは別の意味で不可侵だった。最後の神話は朝廷との融和、あるいは従属を象徴する為に生まれた」

「これはあながち間違いじゃないだろうと私も考えているよ」

「杜人綿津見神自体はマイナーメジャーな神様なのに驚くほど伊勢、ひいては皇室との関係が深いアンバランスさがあるんだよね。」

そのせいか杜人神社、伊勢神宮の資料公開が非常に少なくともどこかかしい」

「この部分に関しては私も色々と集めてるのだけでも、偽典の存在と、その中では雉鳴女の裏切り自体ないって事くらいしか分からない」

「解読途中に返還させられた偽典をもう一回調査させてくれないかなあ……」

「まあ、文句を言っても始まらないか」

「っと、熱中してたら時間が不味い。」

今日はプライベートで非常に大事な約束があるんだっ」

「すまないが、コレについては後日また語ろうじゃないか。
その代わりと言っちゃあなんだけど、私も君の欲しがりそうな資
料を用意しておこう」

「……ああ、そういえば君、助教目指してみる気あるかい？
院に進むんだったら引っ掛からないレベルで応援する用意はある
よ。」

「というかぶっちゃけると君くらいなんだよね、なれるだけの情熱
と知識があるの」

「ま、こんな時に聞く話じゃないね。
ではでは、戸締りは頼んだよ〜っと」

「たしか先週、今度女性と食事みたいな事を言ってたっけか。」

「教授はバタバタと荷物を纏め、風のように去っていった。」

「……ま、それは良いとして俺の進路か。
教授とこうやってるのが楽しいんだけど。」

それから……私と彼女の新たな関係

何だかんだで事後処理も一段落。

山犬に乗り方々を回っていたがとりあえずは今日で終わり。
ミシャグジの力を流したが故に不安定化した土地も一通りは鎮護祝
福で元通りとなった。

これは私のリハビリ的な側面も含んでいる。
変化した巨大な力の扱いを早期に心得なければならぬからだ。

……理由は少し変わったけれども、やっぱり私は守れる者で居たい。
それは昔の様に自分の居場所あんしんを確保したいから、ではなくて
好きな人の傍で私も笑っていられるように……とちよっとだけ前向
きな形に。
本当に変われているのか、そこにあまり自信は無いけれども。

新しい私の力は様々な気質を『繋げる』『和ませる』『宥める』『事
へ特化した。』

酷く抽象的ではあるけれど、他者の力へ語り掛ける力と形容すれば

いいのか。

祝福や加護を束ねたりと守りの汎用性は悪くないようだ。

植物操作に関して昔ほど大規模な事象を引き起こせなくなったが何も問題は無い。

自然と野生は王樹様を引き継ぐ山犬の領分となり、二人揃えばむしろ出来る事が増えたのだから。

こういう『協力』もまた、私が覚えるべき事か。

空を仰ぎながら今後を考える。

大和神霊、というより天照個人に中々壮大な構想があるようで助けてもらった借りはそれへの積極的参加によって返していかないといけないようだ。

皆に不利とならない様にこっちペースでコントロールしたいけれど天照も中々手強い。

この辺りの調整はこれから長く協議していく事になるだろう。

そして、傷付けてしまった多くの者への償いも続く。

特に優しい木霊たちを望まぬ暴力に狂わせてしまったのは悔恨の極み。

もう気にしてないと再生した本人から慰められたが、壊れてしまった森を癒しても私がやった事実は変わらない。

猛省しなければ？

くいつと後ろから袖を引かれた。

私と一緒に山犬に乗っている雉鳴女のご機嫌はどうにも斜め方向へ
下降中らしい。

「また良からぬ事を考えていないでしょうね」

……いえ、何も。

難しい顔で空を眺めていたからか妙な勘繰りを受けてしまった。

腰に回された手で密着を強めながら口を尖らせる彼女は私の天敵だ。
聴き慣れたこの台詞と共にあの日以来、四六時中べったりというか、
ぴったりというか。

なんだか嬉しくも困った状態である。

山犬以外の誰かが居る場所ではいつもの理知的で落ち着いた感じだが
普段と違って変わった可愛らしいギャップが容赦無く私の心を惑わ
すのだ。

曰く「一人にしておくとか何かをやらかしそう」との事。

……私からすると雉鳴女の自己犠牲精神の方が心配なのだけれどね。

昨日もらった天照からの書簡に、
彼女がどれだけの物を投げ出して私を救おうとしたのが書かれていた。

ただ単に生き死にだけでなく、仲間や娘達の信頼すら裏切る覚悟。
それこそ罵声の中で自ら死んだ方がまだマシだと思える将来を迎えても構わない、そう言ったのだという。

……過度な献身は周りを哀しませるだけだよ。

「貴方が仰いますか、それを」

ぐうの音も出やしない。

「こうして私が傍に仕えているのは、

貴方が遠くへ行つてしまわないか心配で堪らないからです。

もし、私を心配してくださるのでしたら、

私が過ちを犯さぬ様に……見守っていてください」

……ずっとお互いに、相手を変な事をしないように、か。

それはきつと素敵な話。

二人の心配は二人で補い合えば良い。

離れたくないし、離したくもない。

天にあつては比翼の鳥となり、地にあつては連理の枝とならん……
だつたかな。

そう在りたい。

故事通りの悲しみなんて無縁なまま、天地果てる時まで。

見つめ合つた瞳が潤む。

どちらともなく、自然に唇が重なつた。

初冬の肌寒さを埋めるように互いの温もりを感じあう。

雉鳴女の身体は柔らかく華奢で、ともすれば壊れてしまいそうな儂さを覚えた。

硝子細工へ触れるに似て、恐る恐る手を伸ばして頬を撫でると塞いだ口から声が漏れる。

しまったと思ひ掌をどけようとするとその手は掴まれ、再び絹の滑らかさに導かれてゆく。

すべすべした肌の感触が気持ち良すぎて、触れる事を許されたと理解するまで軽く十秒は掛かっただろう。それほどまでに、私の思考を止めてしまうほどに衝撃的だったのだ。

離れた口と口の間には銀系の橋が架かり、ぼたりとだらしなく垂れ落ちる。

赤みを増した顔、少しだけ乱れた彼女の呼気は甘い。

掴まれた腕はその重みに逆らわず徐々に位置を下げて首筋を撫で、くすぐつたいと身を擦った勢いに慎ましくも美しい女性の膨らみへ到達し……

「二人とも、続きは他でやれ」

人の背中で盛るな、と山犬の言葉で一気に現実へと返された。

嗚呼、穴があつたら入りたい。

気が付けば落葉樹の梢越しに神社が見える所まで来ていたのだ。
下手したら他の鳴女や妖怪にも見られてたかもしれない。

でも、赤面しながら恥らう雉鳴女のいじらしい仕草が見れたのは不幸中の幸い……？

無理矢理にポジティブな考えをしてみるが、
やはり恥かしさは消えてくれないようである。

山犬は無情にもそのまま神社まで私達を運んでしまった。

もうちょっと落ち着くまで止まってくれてても良いじゃないか。
何をそんなに怒って……まあ、背中であんな事してたら普通怒るか。

すっかり居心地が悪くなった（自業自得であるが）背中から飛び降りた。

続いて雉鳴女が降りるのを手伝うべくいつも通りに手を伸ばしたのだが、
繋がれた手の温もりに先ほどの情事を思い出してお互いに固まってしまった。

山犬の呆れを含んだ溜め息で再起動したものの、ギクシヤクしてしようがない。

そして、本堂の真ん中に敷かれていた一組の布団は、いったい誰の悪戯だ。

準備万端とでも言うつもりなのか。
子作りはある意味で神事だと思わなくもないけれどもこれはあんまりだろう。

絶対に何処かから見てるに決まってる。

先刻の野外でのアレは気の迷いというか、迷わされたというか、そういうものなので仕方無いが好き好んで衆人環視の中を頑張れるほど露出狂じゃあないぞ。

周囲を見渡すが姿は無い。
ええいつ、杜人神系の隠密技能をこんな事に無駄遣いしてるんじゃない。

正直に申し出れば神様、怒ったりしないから出てきなさい。

……って、あの、雉鳴女、何故に布団の中でそわそわしてるんです。

……その脇に畳まれている着物はもしやとは思ってますが。

……え、待って、あ……。

杜人閑話……騷乱裏之一『黄鷄と山男』

これは騷乱記の裏にあった話。

黄鷄が胸にしまった出逢いの思い出。

時期に鈴虫達の鳴き納める季節だったが、
まずは出逢った何者かについて語ろう。

時は天下分ける一戦より十年、二十年と遡る。

それは少年の物語。

小さな農村に居たごく普通な少年……。

しかし、少年はある異能を背負わされていた。

その両の眼は他人の欺瞞を白と黒に見分けてしまふ不思議な力を持つていたのである。

この異能が齒車となり、彼の人生は思わぬ方向へ転がっていく。

少年が『それ』に目覚めたのは
歳が五つを数えた頃だった。

何の前触れも無く、あまりにも突然に、世界は白と黒を増やした。

誰かと話していると、その人の周りに白黒の霧が掛かるのだ。

誰にも見えない霧は特に人を区別するようでこの時は何も理解でき
はしなかったが
白に対しては何故か温もりを、黒に対しては本能的に嫌悪感を覚え
た。

それから正確に意味を理解する日が来るまで、
何かに憑かれたのだと怯えながら毎日を過ごす事になる。

そして、やがて気づき、別の恐怖が生まれた。

この世に溢れた嘘と裏切り。

小さな村でさえも簡単に塗り潰す欺瞞の多さに。

……黒い霧が掛かる人は誰かを騙そうとしている！

村人の何気無いやり取りを眺めているだけで、
恨みや嫉みから生まれる些細な嘘がもくもくと黒く煙るのが分かってしまう。

それは、純真だった少年の心には耐えかねる醜さ。

もう誰と遊んでも怖ろしくてしょうがなかった。

山で一人、木々の緑や土塊の色に包まれる時間と、
どんな時であるうとも真つ白に愛情を注いでくれる両親だけにしか
安らぎを感じられずにいた。

786

暫くして少年が眼に慣れ、

世界はそういう物なのだと諦めに納得しようとしてきた頃……

今度は村人達が少年を悪霊憑きだと迫害し始めた。

山や森での一人遊びを好み、やれ誰かと遊んだかと思うと
白だ黒だと呟いては嘘や隠し事を見抜いてしまう少年を気味悪がっ
ての事だ。

少年は自分の迂闊を呪った。

こんな事態になるなんて思っても見なかった。
どうしてもっと隠しておけなかったのだろうか。

ようやく十に届いた程度の子供に己の秘密を隠し通せと言つのは無理な注文だろう。

しかし、少年は激しく悔やむ事になる。

自分だけなら良かったのだ。

石を投げ付けられようが、泥を浴びせられようが構わない。

けれど、親にまで矛先を向けられる事に少年は耐えられなかった。

お前が悪いのではないよ、怖がらなくても良いんだよ、と。
たとえどんな時であろうとも父と母は少年を庇い、信じ、真っ白に愛してくれていた。

そんな両親が不当に貶められる。

……それは我が身を裂くより辛く堪えたのだ。

ある日、思い立った少年はこっそりと村を抜け出し、
山を越えて、谷を越えて、関所を潜り抜け……
三日も掛けて噂にしか聞いた事の無い高名な寺へ押しかけた。

寺の偉い坊さんなら悪霊を祓えるに違いない。
自分の変な眼を治してくれるに違いない。

至極単純な理由だが、子供なりに必死の思いで押しかけたのだ。

お金も何も持ち合わせてはいないけれども、
被って貰えるのならば無償の奉公に自分の一生を捧げるくらいの覚悟はあった。

自分の為に親が理不尽な目にあっている現状、
これを打破してくれるのならば、命なぞいらなかった。

突然の無礼に当然の如く僧兵に阻まれたのだが、少年は諦めない。
殴られようと、突き飛ばされようと、父と母のために通してくれよ
と意地を張る。

騒ぎを聞きつけ現われた住職が寺の名に恥じぬ徳のある人物だった
のは幸いだらう。

ボロボロの服と擦り切れて血の滲む足、傷ついた身体を見て周りの
僧を一喝。

ここまでするには相応の訳があるのだらう、と。
少年を快く寺へ迎え入れ、治療を施し理由を聞いた。

すると、住職は少年の境遇に大層胸を痛め、協力を約束してくれた
のだった。

彷徨う霊が原因なのならば今この場で成仏させてやるぞと少年に微笑んで。

そうして念仏を唱え、少年の異能が何によって齎されたものなのかを調べたのだが……

……真実は過酷なものだった。

遠い遠い先祖に妖の血が混ざっている。

何故目覚めたかまでは分からぬが、その血こそが異能の原因であるのだと。

重々しく住職が告げたそれは、少年の眼に曇りない『白』で映った。

本当だ。

嘘ではない、本当なのだ。

途端、少年は爆発する感情のまま走り出していた。

住職や他の僧達が止める間もなく。

どうしようもない。

どうしようもないではないか！

悪霊憑きどころではない。

この身がすでに化け物だったのだ。

村の皆に潔白を示すどころではなかった。

頼れる父と温かな母と、一緒に笑い合っていただけなのに。共に生きるもままならない。

すみません、申し訳の無い事に化け物として生まれ落ちてしまいました。

すみません、その所為で優しい貴方達を苦しめてしまいました。すみません、自分がこんな風に生まれてきてしまってます。

……父さん、母さん、ごめんなさい。

自分を信じてくれていた両親への罪悪感から逃げるように走り、走り、走り……疲れ果てた何処とも知れぬ山の中で少年は結論に至る。

『自分さえいなければ両親が虐げられはしないだろう』

今更ながら何も言わずに飛び出して来てしまった事だけが心残りだったが、

少年はもう村へ戻ろうなどとは欠片も思わなかった。

一人で生きていこう。

全て知った今ならば己の異能を隠しながら人の世に紛れゆくのも可能だとは思う。

しかし、もしも友と呼べる者が出来てしまった時……悪い結末しか想像できなかった。

白と黒は容易に関係を破壊する。あるいは破壊の種を生んでしまうからである。

だから、一人で。

自ら命を絶とうなどという安易な逃げも頭を掠めたが、それは裏切りだ。

育ててくれた親の愛情を自分の手で終わらせる事はできない。

こんな自分を愛してくれた人が居た事実、それを無かった事にしたくないから。

できるだけ他者との関わり合いを避けながら、淋しく生きていこう。これこそが背負うべき宿命であるのだと少年は覚悟を決めた。

覚悟を決めた、はずなのに涙が父と母への感謝となってもう一度零れる。

……今まで、ありがとうございました。

思えば、親不孝な息子でした。

こんなにも立派な身体を父から授かったというのに、
こんなにも器用な手先を母から授かったというのに。

何一つ孝行できず、迷惑ばかりをかけ、
勝手に出て行ってしまつて。

……すべて忘れてください。

化け物の息子なぞ、気味の悪い息子なぞ
始めからいなかつたのだと、忘れ去ってください。

そして、幸せになつてください。

いついかなる場所に在つても祈っています。
愛しい父と母が幸せでありますように。

日が沈んでゆく西の空の下、
もう会わぬと決めた両親へ手を合わせ静かに頭を下げた。

そして、二十年の時が流れる。

頑健な身体にぼさぼさで不精な頭髪。

男の名は山彦。

山深くに居を構え、修験者とも獵人とも知れぬ
無口で無愛想な男に誰ともなく付けた名がそれだった。

ふらりと麓の村へ現われては
毛皮や蔦編みの細工物と食べ物とを交換して再び山へと帰ってゆく物
静かな大男。

腕だけは確かで、良質な商品を運んでくる山彦を村人は受け入れて
いたが

妖怪の類ではなからうかと怪しんでもいた。

必要がなければ誰とも話そうとはしない。
偏屈というにも少々違った人嫌い。

時の流れの先で、白と黒の世界を持つ少年はそんな男になっていた。

この山彦が居なければ、縁は繋がらず、
雉鳴女と杜人神の結末は悲劇的なものへと変わっていたのかもしれない。

その日、山へ帰ろうとした彼は
どす黒い瘴気にまみれた一羽の小鳥を気まぐれに捨った。
それが運命との出逢いだった。

杜人閑話……騒乱裏之二『黄鷄と山男』

「……ここは、どこ？」

パチパチと薪に火の粉が爆ぜる音。

黄鷄は見覚えの無い山小屋で黄鷄は目を覚ました。

ぼーっと霞む視界、刺すような頭痛。

ずしりと重石に似た疲労から目蓋が落ちそうになるのを堪え、
状況の把握しようと身動きしたが鈍い痛み顔に顔をしかめる。

その被せられた毛皮蓑がカサリと立てた音で気付いたのか。

「起きるな、寝てろ」

そんな言葉を掛けられた。

声の方向へ首を傾けると男が背中を向けたまま黙々と何か作業を
している。

ぶつきらぼつな口ぶりには有無を言わせぬ迫力と静かな優しさがあ
った。

ミシャグジ達の追撃から逃げて、逃げて、逃げ切った果ては何処とも知れぬ山の中。
山道に無造作に転がった岩へ崩れる様にもたれかかり、緩慢な死を覚悟して……。

この男に助けられたのか、と黄鷄は回りはじめた思考力に昨夜の出来事を思い出した。

「どなたか存じませんがありがとうございますわ」

「化け物の誼だ、気にするな」

振り向きもせずそのまま男は返す。

……化け物。

それが指す所に黄鷄は二つの疑問を覚えた。

目の前の男は一見人間にしか見えないが妖怪化生の類なのだろうか？
そして、黄鷄が人間でないと見抜けたのは何故なのか？

……。

「確かにこの身は常なるものではありませんが、どうしてお分かりに？」

妖怪など力ある者は基本的に個人主義、悪く言えば自分勝手が多い。

目の前の男がそうだった存在であるならば、

『他者を助けた』この行動には何か裏があるかもと黄鵠は警戒を強めた。

黄鵠には完遂すべき使命があるのだ。

雉鳴女に洩矢神と御左口の情報を渡さなければならぬ。

せつかく命を賭けて掴んだ一欠片、渡さずして果てるわけにはいかない。

身を強張らせた黄鵠に対して男はゆっくりと振り返った。

そして、先ほど書き上げたのだから墨の乾ききっていない呪符を黄鵠の額へ。

これは不味い、思わず彼女は目を瞑った。

貼付けられた呪符の効果が何であるか分からなかったが、

この手の物は大抵何かを封じ込める物と相場が決まっているのだ。

身体も動かない……辞世の句の一つでも用意してれば良かったなどどこかズレた事を考えていた彼女に構わず、男は言葉を紡ぐ。

「拾った時は呪いに侵された小鳥だった。

こうして厄払いしてみれば人の形を取る。

どちらが本来の姿か知らんが、普通ではなかるつよ」

そう言つて無造作に黄鵠の身を覆つていた蓑を剥ぎ取つた。

今更ながら黄鵠は自分が何も身に着けていない事を知り慌てたが、お構いなしとばかりに男は腹部へ手を伸ばすと既に貼られていた一枚の呪符を剥がす。

こびり付いていたのは暗く淀み、禍々しく紫に発光している厄の塊。それは小さな囲炉裏に放り込まれ、黒煙を少しだけ上げて消え去つた。

この男、治療してくれていたのか。

「落ち着くまで寝ている」

男は再び無愛想な口を開くと、背を向け新しく符を記し始めた。集中している様子に声をかける気にはなれない。

話はここまで、か。

しかし、ほんの僅かな会話であつたが黄鵠は男の偏屈さを凡そ理解していた。

と、同時に悪人でも無さそうであるとも。

どのような意図で男が助けてくれたのかは分からない。

分からない、が何となく疑うべきではないだろうと彼女は思った。

ついさっきまで強烈な悪意と敵意に追い回されていたのもあり、

そうだったものを一切感じない男に心がとても落ち着いていく。

頼りがいのありそうな広い背中が追憶に消えた父のように見えて、黄鶺は不思議な安心感に包まれながら、声のままに眠った。

翌日、目が覚めた頃には男の姿はなかった。

着るとばかりに男物の着物が枕元に置いてある。

衣服を構築する力すら惜しかったのでこれはありがたい。

一級祟り神の厄は流石といったもので変わらずに黄鶺の周囲に纏わりついていた。

額に付けられた呪符に幾らか集められたようだが焼け石に水かもしれない。

えいやと一声気合を入れ、挫けるものかと起き上がる。

戸口に水桶があつたので着替える前に水を浴びるべく変化を解いて鳥の姿となった。

そうして水に映る自分の姿を確認したが……気が滅入る。

自慢だった翼の鋭さはまるで萎びた菜っ葉のように元気がない。

わざわざ頼んで差した小粋な橙黄の飾り毛も数日前までは白の中に映えて洒落ていたが

今となっては見る影はなく、厄と呪いで暗褐色に暮れていた。

体調も体裁も最悪だ、美しくない。

そんな寝ぼけた事を考える頭を水楔で叩き起して
黄鶯はこれからやるべき事に取り掛かる。

……半刻。

昨夜家主であろう男が使っていた墨と筆を無断で借りて報告書をし
たためた。

勝手に筆具を借りたのは悪いと思いつつも、
決して手を休めたりはしない。

何故ならば間に合わないからだ。

杜人神の計画はずっと昔から進行している。

その到達する場所を探し始めて幾年過ぎたことか。

戦乱の終結は近く、雉鳴女に残された時間は少ない。

ようやく指に掛かった鍵のような物。

コレから答えを出す猶予もあまり残されてはいないのだから。

そして……黄鶯の魂もまた、間に合いそうになかった。

昨夜よりはずっと身体が軽くなっていたが、

動かせば全身がギシギシと軋み、気を抜けば倒れそうなほどの眠気が襲ってくる。

洩矢神が残した祟りが自分の深い部分にまで喰い込んでいるのを彼女は自覚していたのだ。

届けるべき故郷は中々に遠い。

現在位置が何処であるかを確かめる術は持たなかったけれども、どれだけの距離を逃げたのかは大体分かっている。

可能なら杜人神系の顔が利く伊勢、それが無理でも最低で鳴女衆の手が届く尾張まで意地を張らねばならない。

しかし、おそらくはもう杜人の地を踏むのは叶わないだろう。

自分の状態を冷静に分析して彼女はそう結論した。

どのみち燃え尽きる命だとするならば、ただ亡羊と惑い諦めのまま果てるのではなく、最後の最後、自分の意思行動の終わる時まで、燃やし尽くすのが粹な生き方に違いない。

ここで回復を待ってもいいけれども、見ず知らずの男に手製とはいえ高価だろう呪符をねだり続けるのは流石に悪い。

そんな図々しさは黄鶯の価値観からはあまり褒められたものではなかった。

立ち上がり、いざ外へ出ようと戸に手をかけたところで眩暈。

長く寝ていたからか足元がおぼつかない。

ふらつき倒れそうになる彼女を抱きとめたのは男だ。

「何処へ行く」

「生憎ですが、大事な届け物がありまして」

「さっきのは」

「先程のは急に立ち上がったからですわ」

「……」

「助けて頂いた恩もまだ返していませんしね。」

「どうか手をお離してください、すぐに戻りますから」

離れようとした黄鵠に「最後だけ『黒』だ」と男は呟いた。

そうして、手を離すどころか彼女を横抱きにして持ち上げると無理矢理に寢床へ横たえる。

当然、何をするのかと儂い抵抗をしたが、

碌に力の入らない彼女はたった十尺にも満たない距離を運ばれるだけで息切れ。

想像以上に弱っていた自分の姿に軽い絶望を感じていた。

悔しい、たったこれだけでこの有様とは。

どうやった所で届けるのが不可能なのだと言頭の隅で弱音が囁く。

そんな黄鷄へ男が言う。

「寝ている、俺が行く」

訳が分からなかった。

男にとってみれば黄鷄は気まぐれで助けただけの存在ではないのか。

いや、そもそも助けた理由も理由として成ってはいない。

どうしてそこまでしてくれるのか、黄鷄には理解できなかった。

何故を問うと男は静かに語る。

「お前を拾った時、一つ呻くように名前を呼んでいた。

その『雉鳴女』がお前にとって何なのか俺は知らん。

しかし、呪いの中にあつてさえ、

真っ白に想えるほど大切な人だというのは分かった。

化け物にも、俺にもいたのだ、そういう人が」

節介が過ぎるかもしれんが、とそう付け加えて更に一言。

「別離の辛さは身に沁みている。

だから、必ず会わせてやろうと俺は決めた」

伏せられていた瞳が黄鷄に向けられる。

物事を中心に射抜くように。

「答える。

戻れないだけならば良い、帰ってこいとも言わん。

恩返しも必要ない、これは俺の勝手なのだから。

しかし、『お前はその体で行けると思っているのか？』

無言は黒。

けれど、どう言い繕おうとも見透かされる、

そんな気がして黄鷄は何も答えられなかった。

「ならばここで休んでいる。俺が行く」

真っ直ぐな視線。

強い眼差しに黄鵠は目を奪われた。

そうして彼女がボンヤリしている内に、

男は目的地を聞き出して出掛ける用意を整えている。

昨夜作り置きした呪符は好きにして良いだとか、

食事は土間に干してある野菜と家の裏にある湧水でなんとかしろとか……

色々と説明をしてくれていたが、黄鵠の耳には殆ど入ってこなかった。

風のように走り出した後姿を見送りながらやっと我を取り戻す。

勢いに押されて頼んでしまった。

信用は……できると思っけれども流石に短慮が過ぎただろうか。

まあ、どのみち賽は投げられたのだ。

追いかけるだけの体力もないし、

今となってはあれだけの善意を断るのも申し訳ない。

時間は惜しいが、一週間だけここで休息を取ろう。

男が届ける事ができたならそれで良い。

無理だったなら回復してからになってしまっが、大丈夫だという予感もあった。

「そういえば、名前も聞いてませんでしたわ」

強引で、勝手に、一方的な優しさ。

表面上の冷たさに隠された熱く燃える瞳。

もっとあの男の事を知りたい。

小さな火が胸に灯るのを感じていた。

……一日。

それが男が帰ってくるまでに掛かった時間。

いづらか選択が正しかったのかと煩悶したりもしていたが、杞憂とばかりに状況は概ね好い方向へ転じている。

男はしつかりと文を届けてくれた。

きちんと到達できた証として拠点の周辺の簡単な地図まで書いて持ってきた。

黄鵠の体も大人しく静養していたのが良かったのか、

はたまた男の呪符が強い効果を持っていたのか、走る程度ならば問題ない程度に回復した。

もつとも、厄を被いきれたわけではないし祟りから完全に逃れられたわけではない。

手製符を身に着けていなければ動くのも辛い状態なのは変わっていない。

けれど、伝えるべきを果たせた事実、肩の荷が降りた気がする。

「ありがとうございます」

「礼が欲しくてやったわけではない」

「それでも、ありがとう」

勝手に動いた事を過剰に褒めたてるのは野暮だと男は感謝を受け取ってくれない。

そんなことよりも、身体の調子はどうだと面倒くさそうに気遣ってくる。

きちんと治してからではないと野垂れ死にされたら目覚めが悪い、
だそうだ。

素っ気無くぶすりとした顔で言うものだから気分を害したかと黄鷄
は思ったが、
ほんのり赤くなった耳の色に、この人は感謝に慣れていないのだな、
と直感した。

(粗野な外見とは裏腹、可愛いところもあるのね)

山彦、と名前を聞いた時も周りの人間がそう呼んでいるからそう呼
べ、
こんな風にまるで他人事のようにしか自分の名前を扱っていなかった。
た。

他者と接する時に壁のような物を作っているのだらうと黄鷄は予測
している。

『化け物』という括りにもこだわる部分があるのも何かあるに違
ない。

黄鷄の中に山彦への興味がふつつつ湧いてくる。

それに、恩に対して礼を尽くせぬようでは鳴女の恥だ。

こうなったら私が如何に恩を感じたのか分からせてやる。

生活の手伝いくらいはさせてくれと男へごり押しして認めさせた。
ただの居候として世話になるわけにはいかない。

妙な決意と共に、その日から恩返しが始まった。

家事や細工物などはお手の物。

男が狩ってきた獲物の解体、毛皮の加工。

彼女はそこから手作りのなめし液を用意したりもできる。

鳴女一の芸達者は伊達ではないのだ。

三日が経つ頃には雨漏りするという屋根、隙間風の入る壁、歪んだ戸板の修復。

干し柿を始めとする保存食の用意など勝手知ったる山彦の家となっていた。

「……」ここまでされるとは

「あら、迷惑でした？」

「迷惑ではないが、過分だ」

「いいえ、まったく足りませんわ。

下女の仕事程度が私の命と等価だと思いませんもの。

私、与えられたものはきっちり倍返しする性質ですから」

「しかしだな」

「貴方も、与えたのだから返されてくださいな。」

返し場所のない気持ちほど、残酷なものはありませんわ」

毎日こんな問答をしながらも、

山彦と黄鶺は穏やかに時を重ねていた。

こんなにも余裕を持てたのは思いのほか目的地との距離が近かった
というのがある。

鳴女衆としばらく連絡が取れないのが少々不安ではあるものの、
此処で十分に療養してから帰還し、後に山犬から残滓を被ってもら
うのが最善手だろう。

来るべき計画までに完全復活していた方が結果的に雉鳴女の為にな
る。

拠点から遠すぎるわけではないので通りすがりの鳴女が捉まる可能
性も高く、

現状報告もその時にしまつて構わない。

心配と言えば仕事の皺寄せで真鶺に負担を掛ける事くらいだが問題
無いだろう。

彼女はそうのように判断していた。

真鶇に関してだが、残念ながらただ一つ黄鶇が忘れていている事があったりする。

真鶇の元に届いた手紙は直前まで死を覚悟していた所為で悲壮感に溢れていた。

死を知らせないような偽装指示などに付け加えて厄や祟りの残り香までこびり付いている。

こんなものを受け取ってしまった後輩がどんな勘違いをするかは火を見るより明らかだ。

よもや鼻歌混じりのご機嫌で男へ手料理を振舞っているとは思えない。

全てが終わった後で真鶇と黄鶇はこの事で揉める事態になるのだが

……余談である。

杜人閑話……騒乱裏之三『黄鵠と山男』

黄鵠の治療は進んでいる。

いるのだが、構いたがりらしい女のお節介に少し戸惑う。

山彦は槍で川魚を突きながら、黄鵠について今日も一人考えていた。

山彦の異能である白黒の眼は長い年月を経て、
他者の誠実さや真贋に籠められた感情の種類まで見抜くに至っている。

それは麓の村人相手の商いで、白には白で、黒には黒で返しながら学んだ。

商売における色んな嘘との触れ合いは彼と世界との距離感を育てた。
人はどうあっても僅かながら繋がりを持っていなければ生きていけない。

若かりし頃は須らく嫌った嘘にも種類がある。

『黒』であつても温かな嘘があれば、

『白』にあつて冷たい真実もあるのだと。

黄鵠を拾った時。

可憐な小鳥に押し掛かる暗黒の塊が持つ純然たる『殺意』の凍える白。

あれには目にしただけで身の毛もよだつ恐ろしさを覚えたほどだ。事実、山彦は見捨てるしかないとその時は思っていた。

厄介の塊に手を突っ込めるだけの優しさなど持ち合わせていない。精々が哀れみを投げかけてやる程度。

しかし、氷塊の『白』に隠された、中に灯る別の微かな『白』の温もり。

それに導かれるように、気が付けば両手は黄鵠を抱きかかえていた。

呟かれたのは誰かの名前。

人語を介す小鳥の奇妙さに惹かれたわけではない。

何か得体の知れぬ妖怪化生の類にも死を前に名を呼べる者がいるという驚きが、そうさせた。

……未練なのだろう。

ずっと昔に離れてしまった大切な人達を想う。

黄鵠が誠実であるというのは、白黒に分けずともその行動で分かる。時折、体の調子の悪さを誤魔化すべく黒の顔を出しても、それは優しい嘘だ。

なんとなく母に似た雰囲気山彦は黄鵠に感じていた。

考えを巡らせていても身体は習慣に従って本日の食糧を確保している。

いつもの要領で捕らえた魚の腸を抜き、川で軽く洗って串を打つ。意識せずとも流れ作業で銚の手入れまで済ませていた。

山で生きていく上で食糧の確保は最重要でありながら最も難しい。けれども、山彦はそれを当たり前前にできるだけの経験と身体能力があった。

『化け物である』と自分を認識して以来、彼の内に流れる古い血は彼の肉体を普通の人間よりほんの少しだけ強くしている。魂に作用するような、加護に似た何かによって。

山彦が一人孤独に山で暮らしていけるのも、その恩恵によるところが大きい。

空腹にも強くなっただし、傷の治りも早い。体を鍛えれば鍛えるだけ頑健になり、衰えたりしない。もつとも、おかげでますます人里で暮らすには向かなくなったのを忌々しくも思ってもいたが。

最後に桶へ水を汲み、帰路に着いた。

「お帰りなさいませ」

「……ああ」

彼女の笑顔は山彦には些か眩しい。

きつと、一人が長かったからだろう。
帰る場所に誰かが居てくれる幸せを思い出してしまふ。

……だからこそ、自分はもう会わないと決めたけれども、こいつには果たさせたい。

山彦が黄鵠に治療を施すのはそういった利己的な感情に基づいていた。
ある種の贖罪に黄鵠を付き合わせている身勝手さ、その自覚もあった。

彼女の身の上を聞くことは思わない。

何故あんな呪いを受けたのか、眩きの先に待つ人物が何者なのかもとにかく無事に帰せさえすれば良いのだ、深入りする気は山彦になかった。

孤独にようやく慣れたのに、深入りして人恋しくなってしまうのが怖かった。

夕餉の素材になるだろう魚を渡すと黄鵪は大げさに喜んで炊事場へ向かう。

その姿を眺めながら、溜め息を吐く。

「どうしました？」

「なんでもない」

彼女はどうにも扱いにくい。

体が動くようになってから呪符の対価だとして家事を受け持つてくれているが、

こちらの要求水準以上の事をこなす能力がある。

自分の気まぐれに過剰な恩返しをされる、それに引け目を感じていた。

そもそも治療自体が偶然上手くいったに過ぎないのだから。

昔に山で助けた修験者から貰った数枚の厄除け符。

呪いに苦しむ鳥に効けば良いがと棚の奥にしまわれていた呪符を引

っ張り出しただけ。

それがこんなにも効果を持つとは思わなかった。

今、黄鷄が貼り付けているものは、使い切ってしまう前に男が素人なりに元の符を真似て書いたものだったりする。

始めの符と違って目に見えるような厄の吸着効果はないようだが、まがりなりにも成果をあげているのを見るに、元の符が凄かったに違いない。

手紙を届けたのも、些事なのだ。

少々ではあるが蓄えもあり、関を越えるのも痛くはない。

山に棲むようになってからは健脚で済まされない体力も得ている。

大した事をしたつもりはないから、感謝が逆に辛い。

人ならざる者の中でも、黄鷄は特に善性の強い者なのだろう。

この義理堅さは山彦にはこそばゆく感じられた。

返し場所のない気持ちは残酷だと彼女は言う。

たしかに、この申し訳なさを解消できないのは残酷だ。

「おいしいですか？」

「ああ、いい」

自分が無愛想なのは分かっている。
気の利いた文句が浮かばない事も。

黄鵪の期待するような問い掛けにも、
褒め言葉と言えない程度のものしか返せない。

それでも、それは良かった、と温かな白で彼女は笑う。

かつて飢えに負け食べた事のある蓼の葉。

記憶の中では渋味と妙な辛味が喉を乾かすものであったのに
彼女が一手間加えると焼き魚の薬味として食を彩る名脇役となっ
ていた。

他にも家の裏手から採ったのだという山菜たち。

山彦の目には雑草でしかなかったそれぞれが食物に変化している。

……旨い。

「いいから、お前も早く食べ」

「貴方が食べ終えてから頂きますわ」

「何度も言っているだろう。」

病人が食わずしてどうする、早く食べ」

毎度の事ながら中々箸をつけようとしない黄鵪を促す。

神霊である彼女は食事を摂る必要性が薄い。
供え物という形で力を得る他は、精神的な充足を得るくらいのも
なのだ。

その事を知らない山彦の強引な優しさ。

それを黄鶉が嬉しく思っている事を、山彦は知らない。

「では、失礼して、頂かせてもらいます」

「食ったらさっさと休め。片付けは俺がやる」

「ふふっ、はい、分かりました」

……彼女の笑顔はやっぱり眩しい。

杜人閑話……騒乱裏之四『黄鷄と山男』

黄鷄と山彦が出逢って十日目の朝。
日は昇れどもまだ朝露の乾かぬ時間。

遠吠えが黄鷄と山彦の耳に届いた。

距離の概念を無視する、物理的な空気振動に因らない『縁』を伝う声。

そして、助けの『縁』を求める声が。

「……、今のは」

脚絆の紐を締めていた山彦が思わず手を止めて振り向くと黄鷄は神妙な顔つきで南西の空に意識を集中させている。

柔らかな日常からは遠い、戦いを告げる表情。

「時が来たようですね」

気圧されるほどに美しい横顔に、山彦は言葉を失った。
どこまでも透き通った声音には多くの物が込められているように思

える。

それを覚悟、と簡単と言い表すのはあまりにも失礼だろう。

成さねばならぬ時が来た、と黄鵠はすらりと立ち上がる。

符の助けはあるが、既に彼女の体は行動に支障無い範囲まで回復していた。

本来なら一昨日にも山彦と別れ、帰還していても問題無いくらいに。

「私としたことが、久しぶりの羽休めに甘えすぎていました」

冗談混じりの軽口で微笑みながら、

今までありがとございますと頭を下げる。

居候の出立は喜ぶべきことであり山彦に止める理由など無い。

在るべき場所にお互い帰っていくだけのはずだ。

しかし、山彦の胸は妙な空白感を覚えていた。

「待て……これも持っていけ」

いざ飛び立とうとする黄鵠を呼び止めて、最後の餞別。

それは無事への祈り、書き溜めた厄除け符。

黄鵠と『他人』を維持しながら干渉できる精一杯の線はそこだった。

これ以上の行動は深入りが過ぎてしまっただろう、と。なのに、言葉を紡いでいた。

「他に手伝える事はないのか？」

山彦の口は本人を裏切って本心を晒した。

一度表に出てしまえば、始めからそうであったように思える。

彼女と自分はたった十日間を過ごした仲でしかない。

けれど、一人を選んでから、初めて十日間も他人と過ごせた。

胸の空白は、返せていない気持ちがあるからだ。

「山彦、気持ちはありがたいですがここからは……」

黄鵠はその申し出に少しだけ驚いたが、首を横に振る。

だが、言いよんだ黄鵠の姿に山彦は温かな『黒』を見た。それはつまり。

「……あるのだな。」

お前の『縁を運べ』という役目の中に、
喜ばしいことに俺が手を貸せる余地があるのだな。

ならば遠慮せずに借りておけ。

勘違いするな、これはお前の道理だ。

『与えたのだから返される』のが自然なのだろう。

俺は倍返しされた恩の、利子を返さねばならんのだから」

未来永劫、消える事の無い一言一句が、黄鵠の魂に焼き付いた。

今年の桜祭りは一段と賑やかであった。

何しろ主催する神がようやく妻を娶ったのだから。

半ば婚姻を結んでいるに等しい状態が、正式に婚姻となるまで実に三年掛かった。

騒乱の後処理や、見物したがった太陽神や、寸前で初心になる両神によって延びに延びたからだ。

その鬱憤を晴らすように杜人神に連なる者共は例年よりも騒がしく、もう夜になるというのにやんや、やんやと上から下まで春を満喫している。

「……で、黄鶉、それからどうしたのです？」

祭りの喧騒から離れた夜桜の下、静かに酒杯を交わしながら鶉鳴女は興味津々とばかりに次を促した。

微笑みながら何合目か分からない酒を煽り、黄鶉は続ける。

「そこからは貴女も知る通りですわ。

私の流儀にあんな堂々と則られたら『はい』と言うしかないもの。伊勢の杜辺を旦那様にお任せをして、私は堺と京に飛んで……。

この不思議な『縁』のおかげで、最後の最後、全てを間に合わせられたのよ」

酔いが口を軽くしているのだろう、馴れ初めを語る彼女は恍惚と
している。

親友の門出だと、珍しく酔うほど呑んでいたのが効いているようだ。
いつもならばこのように酒に呑まれたりはしないのだが、ここにも
常春の気配があった。

杜人神の裏で流れた三年の月日は

黄鵠と山彦を『互いに与え、互いに返す』関係に変えた。

恩を返し、返される幸せの連鎖によって、対等の立場で交じり合う
関係に。

そんな上機嫌の黄鵠による、色恋、思い出語り。

何かの参考にならないかな、と思いつながら

普段の彼女からは聞きだす事の叶わないあれやこれやに鵠は耳を傾
けていた。

「山彦さん、こちらに来られませんから

どういう人なのか詳しくは知りませんでしたけれど

聞けば聞くほどお似合いで、粹な男性ではないですか」

「それはもう、なにせ私が惚れた男ですから。

あの日、私は旦那様に完璧にやられてしまったのよ。

心の底から『負けた』と思ったわ。

同時に、本気で『惚れた』のもあの時ね。

だって、考えてもごらんなさいよ。

あんなに真っ直ぐ見つめられたらもう、
女なら誰だって参ってしまうに決まってるわ。

でも、本当に苦労したのはそれからかしら。

私が惚れていても旦那様がそうかは分からないでしょう。

あの人、殆ど顔や言葉に出してくださらないもの。
どうにか気に入って頂けるように、頑張ったわ。

恩返しだなんだと理由を付けては足繁く通ったものよ。

騒乱後の忙しい最中、我ながら良く時間を作れたと褒めてやりたいわね」

一瞬、黄鵠は月ではなく夜空の向こうを眺める仕草。

きつとその想いは遠い空の下にいる愛しい人へ注がれているに違いない、と鵜は思った。

黄鵠は杜人の地へ山彦を誘ったが断られている。

妖怪化生も多いので馴染むのではないか、と尋ねてみたが、

眼の性質上、お前以外の者と接するだけで精神的に疲れるので遠慮させてもらう、と。

杜人神系は『繋がり』を大事にしているのもあり、土地に合わないだろうとの事だ。

離れていて不安にならないのか鵜には不思議に思えたが、

黄鵠としては『お前以外』と特別扱いを受けているだけで幸せだった。

あの不器用な優しさを受けられるのが自分だけである、それが良いのだ。

「女はね、とことん惚れちゃうともう駄目なのよ。」

口下手なところも、不満でさえ、全部愛しく思えるわ」

私がどれだけ幸せなのか教えてやろう。

酔いによる高揚感のまま、黄鵪の惚気話が始まった。

空が白み始め、そろそろお開きにしようとようやく黄鵪が席を立った。

祭りは終わりました新しい日常がやってくる。

……というか、ようやくやってくる。

延々と続いた惚気話、良くあれだけ話せるものだ

若干うんざりしていた鶯は今更ながら山彦に対してのある疑問点に気が付いた。

「黄鶺鴒、そういえばですが解せない点が一つあります」

片付けをしていた黄鶺鴒の手が止まる。

「どうして彼は山犬の声を聴く事ができたのですか。

遙か西の九州、？にも届きましたけれど、相応の『縁』が必要なのはです。

魂という重い因果ではありますが、貴女を助けた程度のか細い『縁』で何故？」

山犬の遠吠えは『縁』を辿るものだ。

しかし、黄鶺鴒の話にはそれを可能にするだけの何かを見つけれない。

『白黒の魔眼』『半妖怪』のどちらかに原因があるのだろうか。

頭を捻れども分からない。

そんな鶺鴒を可笑しそうに眺めて、答えた。

「血から発現した異能は『先祖還り』に近い物があるわ。

そう、本当に不思議で運命的な『縁』だったのよ。

だって、旦那様は『鳴女の血』を引いているのだから」

大樹の根元にいる私達は枝葉の一つ一つまで目が届かない。
百年もあれば人間は五代重ね、遠くまで広がるに十分だ。

「あつちで寝転けてる、鳴女一の正直者がいるでしょう。」

嘘も本当も、白も黒も、何がどうなってあんな形で引継いだのやら、ね」

純白の鴉が、酒樽の上で呑気に寝息を立てていた。

杜人閑話……神刀想々『平穩の中で』

器物百年を経て魂魄を宿すと云う。

『物』ではなく『祈り』を写し取ったのならば尚更だ。
意思は力と成り世界を動かしてきた流れの源なのだから。

鉄の体に沁み込んだ数え切れぬ祈りが、我意を産んだ。

この身は一振りの刃。

幾星霜、様々な人々を通り過ぎた。

幸いにも、多くは善き担い手であったと思う。

彼、あるいは彼女らは我を手にしたその意思を貫かんとした。

それこそ我が身を振るうに足る資格。

元よりこの身は『守りの守り』であり、光輝を放つ意思に魅せられ、
惜しみなく応えてきた。

時に欲望や声望を求め、我が在り様を否定する担い手もいた。
奪う為に振るう者、それは『守護』の成し手に相応しくない。

そんな時はただの鉄塊に戻り、沈黙してやった。

道具にも意思はある、意地もある、誇りがある。
存分に振るわれ、役目を果たし、鞘に眠る我は幸せだ。

つい先日、我が記憶の中における最大の雪辱も果たしたしな。

不滅を得て永遠とも思える生を約束された我から決して消えぬ悔恨。

九州、蒙古襲来。

足りぬ戦力、惑う民衆、涙と悲しみを防ぐべく駆け巡った戦場。
絶望の戦争を生き抜いた先に待っていた裏切り、けれども抜かれな
かった刃。

あの日、抜かれていれば守れた。

しかし、だからこそ彼は抜かなかった。

まだ若く意思の弱かった我の迸る憤怒、
ともすれば勝手に鞘から解き放たれそうな殺意に、
優れた担い手たる彼は気付いていたのだ。

抜かれていれば我は怒りにまかせ風で不埒者共を吹き払い、
彼の身体を無理に動かしてでも恩知らずな輩を皆悉く斬り殺してや
つただろう。

血塗れとなろうとも彼を守れたに違いない。

だが、それは我が在り様を自分で否定するものだ。

彼は一振りの刀の、その誇りさえも尊重し守ってくれた。

『守護の刀』を『殺戮の刀』に墮とさぬよう、彼は抜く事なく戦い、果てた。

自分の本分を忘れ、凶器に墮落した心を救ってくれたのだ。

もしも『殺す意思』ではなく『守る意思』を持っていたならば彼は死なずに……。

魂に焼き付いて消えない、消してはならない後悔の灯。

力の意味と、自身に託された祈りの重さを教えてくれたもの。

最も我を理解し、振るってくれた担い手。

彼だけは、『森戸戌彦』の名だけは忘れない。

その子孫が『祈り』を果たそうと我を手に叫んでくれた事が、どれだけ嬉しかったか。

戦乱も終わりを告げた。

世が治まれば刃金が成すべき事は無くなる。

『守りの守り』が出張らずとも良い世の中は、きっと素敵だ。

ほんの少しだけ刀剣としての不満を言うならば、
本来の持ち主、杜人神がちっとも我を振るってはくれない事だけであるが……。

「世の中、一振りくらい抜かれぬ刀があっても良いと思うよ」

まあ、杜人神の言葉通りに眠るのもまた善し。

それもまた、平和平静に似て風流なりける、か。

「斬った張ったの争いはどうにも苦手だね。

いざという時は信頼してるよ、どうか皆を守る力であってくれな
いかな」

良かろう、その祈りを糧になってやろうではないか。

かの高名な至宝、敵対者を薙ぐ神器、天叢雲剣と対を為せる『守り』
の刃金に。

こうして我は眠る。

平穏の中で静かに力を蓄えながら。

おねがい……時の流れとつぐみの唄

世はすっかりと徳川色だ。

私のせいで何やかんやと混乱させたが家康は関ヶ原を征して勝者となった。

この後、正式に徳川家康が征夷大將軍を任命され、今に至る。

豊臣方は徳川の伸張に懸念を抱き、当然これに反発。

徳川も今後の統制の為に豊臣方にいちやもんをつけてまで決着を狙う……と。

最後の戦いはまだ始まっておらず、これが収まる時が戦国の終わりでだろう。

大阪夏の陣は近い。

近いのだが……、なんというか、

それと裏腹なこそばゆい状況に私はある。

当時の私は、なかなか大変な問題を抱えていた。

雉鳴女を早く娶れと周囲の圧力がとてつもない強敵となっていたのだ。

山犬、鳴女を筆頭に妖怪衆は勿論のこと近隣の神霊、太陽神に豊穰

神までがせつついてくる。

これが何ともしがたい強敵だった。

私としては、こういうのはもっとお互いに理解を深めてからという
か、

婚姻とはやっぱり破られる事のない誓約であって欲しいのできちんと
考えてからが望ましいし。

たしかに長く連れ添ってきた仲だけれども、先に結ばれてしまった
間柄だけれども。

彼女が私に飽きてしまわないだろうかとか、本当に私でいいのだろ
うかとか。

あの日、私の醜い心まで全部覗かれてしまっているわけで、とにかく
不安でならなかった。

だって雉鳴女は本当に私なんかには勿体無いぐらい素晴らしい女性
なのだから。

幸せになって欲しいし、幸せにしてあげたいけれど、

はたして私にできるのか、などとその時期の私はとても卑屈だった
のだ。

でも、その日が来て彼女の笑顔を見た時、すべてが晴れた。

結婚までの間、彼女の偵察をしてくれた鷓鳴女には感謝している。

「不安でしたら、私が調べてさしあげましょうか？」

婚姻すれば義娘になりますしね、と相談に乗ってくれて助かった。実は雉鳴女側からも同じように相談に乗っていたらしいのは最近知ったが。

そのあたりはキチンと情報管理して互いにはれないよう気を使ってたそうだ。

無理に二重スパイをやらせた形になって申し訳なかった。

けれど、けれどだな。

たしかに私は『代わりに何でもお願いを聞く』と言ったわけだが…。

あのだね、胡坐の間に納まってるのは何でなんだい？

「これがお願い事ですからね、『お父様』」

言って、私の胸板を背もたれにし体重をかけてくる。

華奢な肩は雉鳴女に良く似ていて、ほんの少しスケールダウンしただけのようだ。

彼女のお願いは『父とお呼びしてよろしいですか』というものだった。

元々、鳴女衆は雉鳴女を『母』と慕って集まった組織なので、

そういう意味で父と呼ばれるのはこちらとしても認められたようで嬉しい。

結婚に多くの祝福を貰える、それは幸せを望んでくれる人がそれだけいる証拠。

断る理由など微塵も無く私は頷いたのだ。

しかし、妻の目の前でこころ露骨に甘えられるとだな、流石に視線が厳しかったりもするんだよ。

「大丈夫です、そちらも『お願い』しています。

そも娘が父に甘えるのは至極自然なことですから問題などあろうはずがないのですが」

……どうも彼女はばつちり雉鳴女にも『お願い』をしていたらしいでも、そのお母さんの視線が隣から突き刺さっているのに気付いているのだろうか。

気付いているんだろうなあ……、気付いていてやってるんだろうなあ。

更に彼女は所在無さ気な私の手を掴むと、私に自分を抱かせるように回した。

要するにこれはすつぽりと抱きかかえる形だ。

「ああ、これは良いですね。

心がぽかぽかして……安心を感じます」

ぐぬぬ、と普段からするとらしからぬ顔の雉鳴女。

冷静沈着で流麗優美な妻も、そんな可愛い表情をするものなんだなと思わぬ役得に娘を褒めたくなつたが、後で喧嘩に発展したりしないか心配だ。

私では最早收拾がつかないと判断して

それとなく山犬に救援要請を目で送ってみたが、鼻で笑つて去つていった。

こうして甘え倒す鶴と羨ましがる雉に挟まれた私は、嬉しくも心地の悪い（いや、抱き心地は最高なのだが）妙な空間で数刻煩悶する羽目になる。

その日の夜、私は山犬に神社の裏に呼び出された。

月見の誘いだろつが山犬からとは何とも珍しい。

そんな気持ちで来たのだが、ここで隠れていると縁の下に押し込められた。

一体何をやらせたいのかまったく分からなかったが素直に従つておく。

数分待つっていると、頭上、縁側を渡る音が聞こえる。

「貴方に呼ばれるなんて珍しい」

「昼間、随分とらしくなかったからな。」

腹の内を聞いておこうと思ったのだよ」

新たな声の主は鶉鳴女らしい。

山犬は彼女の悩みを盗み聞きしろといっているのか。

気が咎めるところもあつたけれども、たしかに私も彼女らしくなさは気になっていた。

無理にはしゃいでいるみたいで、空元気のような感じがしたのだ。悪いとは思いつつ、話を聞かせてもらおう事にする。

「らしくない、ですか？」

「ああ、あやつを無理に『父』と呼ぶ。

そこまで自分を縛らずとも良かろうにな」

「……」

鶉鳴女が押し黙ったのが分かった。

それを受けて山犬がこの際だから悩みを吐き出してしまえと促す。私は息を潜めて彼女の言葉を待った。

「……そうですね、長くなりますがよろしいですか？」

始めにそう慎ましげに告げて、彼女は語り出す。

「私達がまだ大和に所属していた頃。

ちょうど東征が終わって一段落がついた頃。

誰をモリトの国へ遣わせるか、揉めた事があるんです」

「正直なところ、恐ろしかったんですよ、当時のモリトの国は」

「雉鳴女は、母さんは霸道に汚点を残した責任から真っ先に手を上げた。

獅子身中の虫、埋伏の毒、危険な任務だから私以外の鳴女も手を上げたけれども」

「みんな心配したものです、殺されたりはしないだろうかなんてね。杞憂に終わって良かったわけなんです、母さんは『杜人神は善き神だった』と。

随分と貴方達を買っているようでしたから皆が不思議に思ったものです、

そうですね、それがきつと私達鳴女がこの土地に興味を持つ様になった切欠でしょうか」

「母さんが正式に結婚したんだと思うと、そこに色々と思う所がありますね」

「……縁の深さで言えば、きっと一番は山犬、貴方です。」

「一番目は母さんで、三番目はおそらく私ではないでしょうか」

「ですが……」

「もしも、私が先にこの地へ来ていたら……。」

ひょっとして結ばれていたのは私だったのかな、なんて」

「こうして母親を妬んでる、私は悪い娘ですよね」

「勿論、母さんの幸せは願ってます。」

そして、その相手があの人以外にありえないって事も分かってます」

「母さんがどれだけ苦しい思いをしたのか、

いや、私達がさせてしまったのかも全部分かってます」

「あの人も、いつだって母さんを気にかけてた」

「村を巡る時も、田畑に祝福する時も、祭りの時も、ふと、どこか遠くを見ては誰かを想っていて、それは母さんだった」

「互いに互いを想い合って、千年の苦難を越えてきた」

「そうして、二人は結ばれるべくして結ばれた、これは祝福されるべきです」

「なのに、私は……」

「私だつてずっと傍に居たのに、とか。」

「暗い考えが浮かんでしまんですよ、時々」

「ふふっ、子供の我侭ですよ、これは。」

「私にも上手く説明できないんです、この気持ちを」

「好きっていう気持ちは、難しいです、とても」

「幸せを壊すような好きを持って余したくはありません。だから、私は『父』と呼ぶように、そう、区切ったんです」

「母も、父も、私は大好きですからっ」

「でも、やっぱり急には慣れませんね。」

いつも通りの延長でいたつもりですけど、変でしたか」

「これも難しい言葉ですよね、『らしくない』というのは。
なんだか未練がましくていけませんね、どうもすみません」

「すみません……っ」

「……ごめんなさい、少しだけ、泣いてもいいですか」

「ありがとうございます……」

鶉鳴女の涙が、頭上から聞こえる。

山犬に顔をうずめて泣いているのだろっ。
静かな嗚咽だけが、夜の音となっていた。

そして、縁の下で私は情け無い事に固まっている。

彼女の独白に大きな衝撃を受けて思考が止まってしまっていたのだ。

「……っと、すみません、もう大丈夫です」

震える喉を抑えながら鶉鳴女は山犬から離れたようだ。
もう大丈夫なのか、と気遣わしげに山犬が声を掛けている。

「しかし、母娘揃って恋に臆病で不器用だな」

「ふふっ、それはもう母娘ですから」

「まあ、その調子なら大丈夫か」

「話を聞いてくださって、ありがとうございます」

山犬との応答に、鶉鳴女が元気を取り戻したのが分かった。

「それで、大人しく娘に納まっておく事にしたのか？

雉に言えば妾でもなんでも認めてくれそうなものだがな」

この発言に、私は飛び跳ねそうになる。

突然何を言い出してくれるのだ、この相棒は。

それに対して鶉鳴女は軽快に笑いながら答えた。

「そうですねえ……。」

しばらくは娘だけの特権を楽しもうかと思っってますよ。

母さんは恥かしくしてお昼みたいに甘えたりできませんからね。

あれは私だけの特別な幸せとして大事に味わっていいこうかと」

娘は娘で妻には無いものがありますからね、背徳感とか。

そう冗談めかして楽しそうに話す彼女に……、

なるほど、夫婦仲が単調化してきたらちよっかいを出してやれ。などと洒落にならない事を言いながら山犬も笑った。

「そういうわけで、床下の誰かさんをお願いします。」

貴方の娘を大切にしてください。

奥さんの次で良いのです。

たまに抱っこしてくれれば娘は幸せです。

いつか親離れできる時まで、お願いしますねっ」

……ッ！

「なんだ、気付いておったのか」

「何百年一緒に居たと思ってるんですか

私と母さんが愛しいあの人の気配に気付かないはずがありませんから」

失礼いたします、と鶯鳴女は森に消えていった。

杜人閑話……？と守人『壇ノ浦今昔』

快晴、ようやく春の気配がし始めた衣更月の終わり。

「やいや、壇ノ浦は今日も元気だねえ」

眼下に走る荒潮は昔から何一つ変わる事なく轟いている。

おそらく何百年経とつと、この海は変わらず速く、変わらず海の難所で在り続けるだろう。

？鳴女は適当な浜に降りると静かに胡坐をかいた。

変わったのは時代。

時代が変われば礼儀も変わる。

きつと本土でこんな真似をしたら雉や黄鶺の姐さん方に叱られるだろう。

？は自分が叱られる様子を空想して苦笑いしながら……

けれども、あの時代の自分達で在るように胡坐が良い、そう思った。

そして、酒と杯、肴と小皿を取り出す。

「いつの間にか神様になっちまったもんだからよ、
こういうもんも供えられるくらいには偉くなったらしい。
ただね、どうにもあたしだけじゃ恐れ多くて飲めやしねえからさ、
アンタも付き合いな」

すっかり定型句となった飲み始めの祝詞。
潮の匂いに亡き鳩鳴女を想う。

「肴はよお、わざわざ志賀から持ってきたんだ」

干し蛸を小皿に盛って、つついと前に出しながら、

「アンタの故郷の、しかも旬の物で作った贅沢品だよ」と微笑んで。

小さなそれを一口口に放り込んで、噛みながら酒を流す。

酒精に戻され染み出した貝の旨みが頬を緩めます。

「そうそう、そういえばだね、ちよいと聞いとくれよ」

返事は別に返って来なくても良い。

親友がここに居ないのだという事も知っている。

ただ、忘れない為に、この場所で彼女を想う。

杜人神が引き起こした大騒乱の後、
鳴女の中でも古参の面々にだけ明かされた真なる龍の正体。

その背で生まれたモノは皆、気付かずとも全てが繋がっている。

それと、仏教には輪廻転生という概念があるらしい。

二つを耳にしてふと思った。

ミシャグジの名の下で生き死に、霊と成り消えた先にあるのは……？
ミシャグジに還り、そしてまた生まれ出ずるのではないだろうか。

巡る時の最果てで、彼女の魂とまた出会えるかもしれない。

どのような姿なのかも、いつになるのかも分からないが？は少しだけ希望を持っている。

もつとも、会ったからどうというわけでもなく、

彼女であって彼女でない者をきつと遠目に見守るだけなのだろうが、それでも、だ。

それは並大抵の縁では成しえない奇跡だろう。

だからこそ親友がこの場所に居るように振る舞い扱っただ。

忘れない為に、自分が彼女と深い縁を持ち得ているのだと刻む為に。

祀られて九州を任されたとはいえ、土地の神々との約束で長くは居られない。

かと言って自分しか出来ない仕事が増えたのでそちらも疎かにはできない。

本来ならば毎日のようにここへ訪れたいがしょうがないのだ。

その分、自分が体験した事や耳にした面白い出来事、仕事を土産のように話す。

こうして彼女は年に数度、近況をこの地で散った鳩の思い出に報告するのだった。

そうして、一刻も話した頃。

「……でよー、鶯の奴が露骨に仕掛けるもんだから、雉の姐御がピリピリして面白いのなんのって、っと、もうこんな時間か」

太陽が大分傾いてきたのを確認して軽く溜息を吐いた。おおよそこれぐらいで彼女は楽しい時間を切り上げる。後は残った酒と肴を海に供えるのが常だ。

？が腰を上げると背中に控えていた今津守人が声をかけた。

「もう、よろしいので？」

「ああ、後は掃除して帰らないとね」

黄昏時、それは魔と人が出逢い易いひと時。

見据える先、潮の流れに混じって不穏な気配が漂う。
夜が近づけば壇ノ浦は潮の速さだけではなく尋常ならざる海となるのだ。

そこかしこから沸き出した恐怖の顕現が武者や火の魂となり水面から浮上してきた。

積もった怨念、伝承による想像、実際に海を持つ危険。
合わさったそれらがある種の信仰として畏れを生む。

見えぬ者には水難を象った脅威となる畏れ。

「賑やかなのは嫌いじゃないが、こいつは良くない」

親友の思い出が哀しみの源となっているのが癪に障る。

何百年も昔の残滓共が関係の無い奴らを傷つける、それも？には許せない。

来る度に沸いている無形の者共とのすっかり恒例となった戦いである。

墓掃除のようなものだ。

守人に目線で合図すると彼は一振りの太刀を彼女に渡し、
自らも抜刀して海を睨み付けた。

向けられる被えの力に気がついた海の悪意達が浜へ集まってくる。
この軍勢はどうやらたった2人と見て勝てると踏んでいるらしい。

侮ってくればそれで良い。

まずは不用意に近づいてくれた尖兵の骸霊を一閃。

「ず〜っと素手喧嘩ホウケンばっかだったけど、

あたしもすっかり剣士になった気がするよ」

「？様、努々油断めされぬよう」

「分かってるよ。」

剣理に関しちゃアンタが師匠だしね」

影からの奇襲を背中を任せた守人が鮮やかな手並みで迎撃。

その実力に対する安心感と連帯感に軽口も飛び出す。

すると、それを挑発と取ったのか堰を切ったように霊群が波と押し寄せた。

「へんつ、あたしに勝ちたきゃ山犬様でも連れて来いっての」

「……？様、それは少々情けなくはないですか」

「ええい、誰しも苦手はあるもんなのっ！」

更に一閃、厄が散る。

さあ、奴らが人々を苛む前に大掃除と洒落込もう。

「……よし、疲れた」

夜空に星が輝き出してようやく海はただの海へと戻った。
隣では守人が息を整えながら刀の手入れをしている。

「毎度毎度、数だけはいんだから困ったもんだ」

「私が付いていく以前は御一人でなさっていたのですよね」

「まあね、墓参りの恒例行事だったからさ」

喧嘩は得意なんだ、と？は自慢するように二の腕をポンポンと叩いた。

「でもま、守人、アンタが来てから楽になったよ」

遠地で自由に動ける鳴女は自分一人。

九州の地で身内と呼べる相手は今までいなかった。

大騒乱の日、真つ先に帰ろうとした？を
今津と結び付けてくれた津蟹には感謝してもきれない。

『我は付いていけぬが、この地の縁として何ぞ力には為れぬのか。
玉姫の愛したこの地が大蛇に穢されんとするを防いだ恩、まだ返
せておらぬ』

蒙古襲来の折に持ち出された眼石が記憶していた森戸の者の力。
今津に遺されたその面影を見つけ出したのはその至宝だった。

世の中、何がどうなるか分からない。
情けは人の為ならずか、そう小さく呟いて数奇な縁に想いを馳せた。
それからしばし星を眺めて、いざ帰ろうかとした時に？は思う所が
あつて口を開く。

「そついや守人、アンタそれだけの腕があるなら何処ぞへも仕官で
きそつだったのに」

どうしてそうしなかったのだ、と問うた。
応えは簡潔にして彼らしいものが直ぐに返ってきた。

「何処かに仕えてしまえば、いつか来る恩返しの際に身分が邪魔に
なりましよう」

だから庄屋の跡取りというちょっとした権限を持ちながらも動き易

い絶妙な位置で

今津村の森戸の血は何代にも渡つて『その時』の為に研鑽を積んできたのだと。

「それにこうして？様と共に、

無辜の人々の為に退魔の剣を振るえる自由は悪くありません」

少しだけ照れるように頬をかいて守人ははにかんだ。

この人助け気質はきつと杜人の血なのだろうなと？はクスリ笑う。

血、血か……。

壇ノ浦に居るからだろう、自分を振り切つて海へ飛び込んだあの日の鳩が思い出される。

怨霊渦巻く海の底から彼女が引つ張り上げたのは一人の少女だった。死を覚悟して海に沈み、意識を失おうとも神器を抱えたまま離さなかつた強い少女。

鳩の死に至つた消耗がその少女を怨霊から庇つた為なのは知つている。

神器を確保した後、こっそりと落人へ引渡したのだが

あの尊い血も何処かへ繋がっていたりするんだろうか。

当時は親友が消えてしまった哀しみと、生かした方が残酷だろうと
いう恨みもあつて

落人への引渡しを勝手に行ったのだけれども、今静かに振り返れば
鳩の魂と引き換えに生を得た少女の血が何かを成しえていれば良い

なと自然に願える。

過去を乗り越えるとはこういう事なのか。

時間は哀しみも恨みも癒し、思い出が心を強くしてくれる。

どこか清々しい気分になった？は守人の手をぐいっと引つ張った。

「さうて、それじゃあ帰るかね。

今津まで飛んでいくからしつかり掴まりなよっ！」

「えっ、ちよっ、この体勢はそのっ」

横抱きの何が不満なのか、ごたごた文句を言い出した守人を無視して
晴れやかな気分のまま海面を走る風に乗って濃藍の空へ飛び立った。

一旦空に出てしまえば飛べない守人は安全の為、大人しくしがみ付
くしかない。

それが少しばかりいけなかった。

「その、この体勢だと、あの、胸がですね」

「……………」

言われて気付く己の状態。

ちなみに？は鳴女の中では女性として豊満な膨らみを有している。横抱きされた守人は落ちないように？側に身体を傾けて、言うなれば抱き合う形だ。となれば、双つの山はぐつと押し付けられるわけで。

「あの、？様、聞いてらっしゃいますか？」

「…………う、うるせー、役得だと思って静かに掴まってなっ！」

もはや羞恥心から開き直って叫ぶしかなかった。

勢いのまま守人を抱きかかえた？は自身の行いと守人の胸板の厚さに守人は？の母性とそのやわらかさに顔を赤くしながらの夜間飛行。

？鳴女の壇ノ浦参り。

こうして今回はなんとも間抜けに終わったのだった。

思い出の中の鳩に、何をやってんだか、そう笑われたような気がし

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309m/>

杜人記 - ゆるゆる土着神 -

2011年10月21日12時52分発行